



# 『花供養』 翻刻集成Ⅳ

—— 九起の時代 天保十二年～嘉永三年 ——

## 目次

凡例

翻刻本文

31	天保十二年	九起主催『花供養』	1
32	天保十三年	九起主催『花供養』	12
33	天保十四年	九起主催『花供養』	25
34	弘化元年	九起主催『花供養』	48
35	弘化二年	九起主催『花供養』	59
36	弘化三年	九起主催『花供養』	73
37	弘化四年	九起主催『花供養』	86
38	嘉永元・二年	九起主催『花供養』	99
39	嘉永三年	九起主催『花供養』	112
番号索引			120
付表一 各年本の編成			165
付表二 各年・国別奉納者数			166
四訂『花供養』所蔵翻刻一覧			167
付記			

## 凡例

一、本翻刻集成は、京都東山芭蕉堂主催の『花供養』を収録したものである。天明六年の初刊から明治三年までの現存する総てを五期に亘って翻刻する計画である。

翻刻集成Ⅰは、天明六年(1)から寛政十年(12)迄、初世蘭更主催の十二冊を翻刻している。

同Ⅱは、寛政十一年(13)から文化十三年(23)迄、二世蒼虬主催の十一冊を翻刻している。

同Ⅲは、文政十一年(24)から天保十一年(30)迄、二世蒼虬、三世千崖、四世朝陽主催の七冊を翻刻している。

本冊Ⅳは、天保十二年(31)から嘉永三年(39)迄、五世九起主催の九冊を翻刻する。二、各巻の翻刻に用いた底本、校異本の略称は次のとおりである。

- (1) 櫻井 立命館大学アート・リサーチセンター櫻井文庫
- (2) 白鹿 兵庫県西宮市笹部桜コレクション—白鹿記念酒造博物館寄託—
- (3) 愛教大 愛知教育大学附属図書館
- (4) 糸井 京都府舞鶴市郷土資料館糸井文庫
- (5) 立教大 立教大学附属図書館
- (6) 月明 石川県立図書館月明文庫
- (7) 国会 国会図書館
- (8) 九大 九州大学附属図書館
- (9) 高岡 高岡市立高岡図書館
- (10) 竹内 竹内千代子
- (11) 愛知県大 愛知県立大学附属図書館
- (12) 小林 小林孔
- (13) 奈良大 奈良大学附属図書館

三、翻刻にあたっては、次の方針に従った。

① 丁移りは、丁の最後に、柱刻によって漢数字で示し、丁の表は「オ」裏は「ウ」で略記する。柱刻が無い時は、「見返し」「序」「跋」などと適宜補う。

また、算用数字による丁数は、柱刻によらない通し番号である。柱刻と甚だずれる場合は、適宜下段に併記したことがある。

② 本文の改行は概ね原文のとおりとする。  
③ 連句における短句は、一字下げとする。

④ 漢字の字体は、概ね常用漢字体に統一する。ただし、俳号、左のものは当時の習慣を尊重して、概ね原文の表記に従う。

選・撰 野・埜 村・邨 船・舟 袋・帛 縁・椽 食・喰  
県・縣 淵・澗 峰・岑 柏・栢 糸・絲 婿・婿

また、特に左の異体字は常用漢字体に統一する。  
糸↓虎 眠↓婦 𠂔↓網 侯↓侯 艸↓中↓草 売↓穀 案↓松

なお、左のものは概ね校訂する。  
朝貞↓朝顔 貌↓顔 厂↓廌↓雁 广↓摩↓磨↓魔 太良↓太郎

衫↓衿 挑燈↓提灯 蔭↓陰 坐↓座 直↓値 蓋↓盃 雀↓鶴  
野、↓野の 暮、↓暮る 南↓なむ 敷↓しく 梟↓けり

川図↓かはづ  
⑤ 濁点・半濁点は私に付し、原文にあるものは「濁ママ」などとする。なお、濁音が繰り返されない場合の踊り字は、左のように統一する。

親こ、ろ↓親ご、ろ  
⑥ 原本にあるルビはそのまま記し、私にルビは振らない。

⑦ 踊り字については、原文の表記に従い、次のように統一する。

漢字一字(一音) ↓々  
ひらがな一字・同濁点 ↓、・ゞ

カタカナ一字・同濁点 ↓、・ゞ  
二音以上の繰り返し・同濁点 ↓く・ぐ

⑧ 音訓記号は原文の表記に従う。  
⑨ 底本の虫損などによる判読不能箇所については他本で校合するが、それが不可な場合は、□で示す。

⑩ 校異等の注記は【校異】【参考】で記し、本文の該当箇所に傍線を付す。

⑪ 蔵書印や蔵書署名については省略する。

31 天保十二年『花供養』

底本 櫻井本  
校異 白鹿本 愛教大本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

天地人心古今なく詞を

以て花をさかせ、花を以て

詞を飾る也。百華爛熳

芭蕉堂中の参会も

文あり、句あり、次韻あり、

趣焉に極むと謂む。

是風致高尚の凡ならぬを

成し、山陰九華供養

稽首の為に序。

散花やあまりのことに立さわぐ

かすみも赤うそまる日の入

海苔柴のあくたを払ふ舟さして

たゞだ、くさに親子もの喰ふ

蔵の鍵用心わるき置どころ

かぜ吹たびにまはる造作

はしる月思ひの外に明のこり

根ながら引て眞寢させる

竹杖を彼岸なかばに売切らし

雅な馴染にひたと行あふ

又がしの本のありかがやつとしれ

灸のあとの灰を掃出す

てらついで顔むけられぬ雲の峰

浮た草履に清水飲やむ

腰おしのやがて阿闍梨も休まる、

すだれのうちにこぞる君だち

簪にみな朝顔をさし込て

月を眼あてに昼の星見る

舟底を綿つむまへに焼ておき

ふとりて狐のきかぬふる猫

棚ゆれも雛すゆれば直るなり

芽ばる柳にさはやかな軒

初午も法被をぬがぬ供廻り

おとなげなくも貰ふまんぢう

針仕事地築の音に手も付ず

あはぬさきからけどらるゝ恋

ぐるりから苗植よせて踏所なし

よし原すゞめ雨に猶なく

七つにもならぬに門をメ切て

飯喰なをすいさかひのあと

手拭も袖もたばこのやにくさく

ふり出す雪にいさむ狩犬

麦の芽のまばらに生しあら畑

惣くはづす紙のひきはた

鬢の毛に風吹わたる月の影

さびしい処へ退て虫壳

踊子の迷子の札を讀で遣り

注連引なをすこね土のうへ

照たとて油断のならぬ巳刻あがり

背丈の篠をわける瀧道

尻あての蘆の破れをつゞくりて

鶴邑

来青

菊翁

文雄

花勝

鹿月

三朝

十代丸

政雄

雨翠

馬朝

吾雀

蟻州

伍員

禾明

仙歩

篤明

衆芳

倍美

杜蓼

松歌

芳英

百仙

梅價

道僕

桃園

一拍子

箬風

梅石

重泰

飾らぬ先の銚をあなどる

ぬるほどの白粉汗に落つかず

はづかしさうな馬の中乗

追々に問屋へ出す梅沢葶

雨さへふれば橋かける溝

手おさへの鯰に酒のはづむなり

しつけのまゝに帯の泥つく

月花にほつゝ藪を伐透し

黄鳥行て雲雀声澄

一順

初夢やありたけ常のねがひごと

はつ夢や覚通して気草臥

吹かへて雨にもならず臙月

早わらびやぼつゝみゆる雨の痕

黄鳥やくれるに雨戸引かず置

うめが香やかぜに明く戸の面白し

鳥の糞うたがひのつく若菜かな

露の臺見当るまでの匂ひかな

散仕舞まで苔ありうめの花

凍どけやひるから後はこちら側

このあたり小川も清し初日影

一ながれ日和さだまる柳かな

黄鳥や長閑に寝る枝うつり

芦出る風のさはるや糸ざくら

じだらくな枝に咲けりうめ二輪

はしる丈はづんで来たり風

とし玉や淡雪つもる台の上

初春や魚壳声は二日めく

出代の吸て見るなり塩かげん

麦浪

平山

黙池

樗堂

竹叟

湖月

黙我

生化

執筆

奥杉田 英泉

、郡山 一仙

二本松 埋山

梅井

邦泉

夷菊

丁酉

潮州

柳蛙

其夕

九山

松声

薩州

碧水

佳遊

梅市

几桂

冒人

馬六

虫二

軽尻のふとんも梅のにほひかな  
つみさうな雪の降来る若菜かな

雪橋  
春選

雲も足とめるや花のおよそ空  
さら／＼と蛙鳴けり雨の宵

勢州勝田  
峰種  
琴水

(七オ)

花折に行足ぬらす小河かな  
三ヶ日立や小窓の機のおと

髓柄  
春莊  
四日市  
流芳

(九オ)

門松やすれて入人いづる人

松香

降空となりて柳の青みかな

春篋

黄鳥や身をさま／＼の鳴支度  
篠をつく雨にもりんと鳴かはづ

都岐雄  
東鶴

(九オ)

ついに見ぬ枯枝がありうめの花

草佳

野の神に一つ灯もあり春の月

秋斎

出代の草鞋で鳥の餌飼かな  
降出ぬうちに仕すます接木哉

筑米府  
松代女  
笑道

(九オ)

水仙の袋も脱がで春寒し

曾夢  
霞村

雲かけにふり向池の蛙かな

花友

喰物のやうにたばふや落椿  
散立てしばらくはあるさくらかな

関芝

(九ウ)

池は皆魚のはいたるさくらかな

節之

鳥はまだ来ぬ様子なり初桜

倚松

散立てしばらくはあるさくらかな

五明

(九ウ)

草の戸に声までうつる雲雀哉

榭月

枝ぶりのかたへ座をとる花見哉

花栄

二三宿つゞく蕨の料理かな

麦映

(九ウ)

はつ花に草の穂をつむ麓かな

愿泉

下枝はかげになりけりうめの月

少年  
卜亭

(七ウ)

曲突の外は火もなし桃の花

雨凌

(九ウ)

おくれたりされども残る花に月

最之

此奥は人のしらぬ遅ざくら

狐玉

蝶逐へばおとなげないといはれけり

蘭堂

(九ウ)

裸身に枸杞の芽摘や風呂上り

来青

堀ごしに匂ひ崩て梅の月

釜泉

咲順に落るのもなき椿かな

史也

(九ウ)

人声として安堵や花の奥

俵二

雨はれて雫に落ちる椿かな

舍雀

囀る鳥の見え透る藪

可大

(九ウ)

かたげ来る花にかたよる花見かな

道平

曇り日に声はり立る蛙かな

翠斎

あたゝかさ鯉に虫の穴あけて

九起

(九ウ)

沖鳴りの樹にしみ込や隴月

霞島

行過た跡に鳴けり雉子一羽

可楽

おもやまかせの基手あきなひ

史也

(九ウ)

黄鳥や颯逐ふ間に見失ひ

捨来

春雨や乗場かへたるわたし守

朋鳥

有明に雲のかたよる宵の雨

大

(九ウ)

駕二挺夫婦と見へて春の風

古谷

うめは皆葉になり切て松の山

田丸  
花遊

(八オ)

水にうつむく巖に岩たけ

起

(九ウ)

雨はれて野は一色のつゝじかな

古溪

跡先に板屋も有や里の花

津  
梅曦

連だつて懇意を廻る祭客

也

(九ウ)

雨長し椽の下にも鳴かはづ

支鳴

見送りの花や手燭に横明り

如流

袖にさはつた浮名広がる

大

(九ウ)

小一日見まはつて来る接木哉

黄州

照り合て梅猶白し水の上

敲松

なま中に五十過ても京男

起

(九ウ)

掃たほゞ散さくらかな

蝶二

突それた羽子舞下る隣かな

素充

まだ花も残る若葉に若楓

也

(九ウ)

はれを見て内へ這入るや花曇り

千風

雨ばれや梢の見えぬ花と雲

春整

評義ばかりで矢数なきとし

大

(九ウ)

入口に路次門たて、梅ばやし

春朗

池水にうつるや岨の月とうめ

嘉笙

座敷から逃て月見る台所

起

(九ウ)

椽に出て鳥に向ふや夕がすみ

徐来

菜の花の早咲するや瘦ばたけ

永野  
不一庵

(八ウ)

きぬたにあてぬ裕ひやつく

也

(九ウ)

川原まで見に往て待や花の客

伍柳

見へ透た藪から立や雉子の声

川崎  
韜甫

何ひとつ備へず経木浪の上

起

(九ウ)

生る間に大きくなるや梅の花

一鳳

松かぜの中来るうめの匂かな

石鼎

しんと静まる昼の松風

也

(九ウ)

むぎ／＼とさかりにしたり山ざくら

樵風

冷／＼とするや宮居の朝ざくら

東宇

一声の初郭公聞そらし

起

(九ウ)

雨ばれやおくれて結句花のさへ

学时

黄鳥の越て行けり塔の先

四疋田  
宇栗

忍冬のんで尿の色づく

大

(九ウ)

もの凄き岸に出て舞胡蝶かな

耳洗

黄鳥の越て行けり塔の先

四疋田  
宇栗

忍冬のんで尿の色づく

大

(九ウ)

真下では高さのしれぬ柳哉

雲樵

黄鳥の越て行けり塔の先

四疋田  
宇栗

忍冬のんで尿の色づく

大

(九ウ)

汐吹て初空つくる鯨かな

梧庵

黄鳥の越て行けり塔の先

四疋田  
宇栗

忍冬のんで尿の色づく

大

(九ウ)

馴染なきうち日に日のたつ座敷かり

抱あげる子の涙ぼつちり

よいもの、いやしき物は銭の音

跡船までもどる追風

節気候のあたりさはりに拍子とり

釘うつ鍛冶はいつも釘打

昼さへも小ぐらき坂の小半道

おもはぬ年も貧によるかな

人の来る度にこちらから戸を明て

露のしぐる、朝／＼の月

蟬の殻蟹のはさみも打こぼれ

白川こゆる能因が秋

石のみのひとつ／＼に遠ひゞき

かき起してはもたすさかづき

ともす灯も何処やら寒き葬の跡

紙屑買もはるはよう来る

神を守夫婦が花の下歩行

麦も菜種も末かすむ空

幣たて、置ば折止む野梅かな

まだ日に／＼の雪の如月

山雀の名残も近く人馴て

垣のうちまで汐のたゝえる

十六夜の闇に茶を煮る薄煙

下冷初る土間のしきもの

草臥て祭の獅子も静なり

高雄もどりの被一連

捨られて剃た髪さへ妬まる、

葎も花のときを違へず

梅雨の井は青天ながら霽の中

也

起

大

也

起

大

也

起

大

也

起

大

也

起

大

也

起

大

鼎左

九起

平山

左

起

山

左

起

山

左

起

豆腐されては手の尽し村

敷金に後も見せず立山師

眉こそばゆく風の吹く朝

おもふ凶へ海苔桶ふはと浮上り

しごく柳のみどりこぼる、

月花もまたなき比の花の寺

鎌さげて来て貰ふねり土

人の子も我子も餓鬼と言ちらし

一つ灸のあつさこたゆる

相応に部屋付合も物の入

誰とさだめず惚て日のたつ

雪解の水に苗とる奥丹波

今衣脱し蛇光るなり

引導の間を待かねる良好

傘もこたえぬ底ぬけの雨

さま／＼と見る月多き月の秋

添水と共に疲し山住

銀杏ちり芭蕉やぶれて大明り

鑑札提て通ふ矢ひろひ

師走とて相手にならぬ馬糞搔

起たま、なる蠟舟の霜

方々にどどの跡のうす霞

花植てより松も際だつ

土器に桃の香を引祝ひ酒

椽一ぱいに長き日のかげ

吹れても又おしよるや花と雲

桃咲や着脱のたまる塗衣桁

折梅に持そへて来る刃物かな

咲ぬ樹も間にはよし花の中

山

左

起

山

左

起

山

起

山

左

起

山

左

起

山

左

起

山

左

起

山

左

起

山

左

起

山

左

起

花沙汰や聞て居るさへ胸のすく

寝た先の屏風たゝんで柳哉

咲と葉の待かけて出るさくらかな

黄鳥や今はり立の障子ごし

浪なりの残りてあるや春干湯

約もせぬ家によなく、春の猫

とも押になりて散出すさくら哉

鶏に起かつ花の小鳥かな

花を出てはじめてしるや月明り

吸よせて魚のかつぐや落つばき

場処過て手入のゆるむ柳哉

踏で行野や若草の足障り

枯草をおし分てとる蕨かな

板はしを踏上りけり花の後

さしさはりなき薄月の柳かな

山ひとつこして里ある霞かな

酒の座を跡へ廻してさくらかな

真さかりの花やあかるき夜の戸口

山水の春になりたる笈かな

鳴て行空の広さや初がらす

繁昌の昔おとらぬ柳哉

篠もまだ苜口立ずのこる雪

人の日や塀の鴉の吉事鳴

山ぶきや早散はて、岩の苔

釣がねや見て過るさへ春寒み

草履ぬげば勞れの出るや花戻り

贅はつてよい衆めきけり花のかげ

昼の気の花に残りて寝ぬ夜哉

毛氈をかぶりて雨の花もどり

青年 (二四ウ)

木屑

蔓五

指出

山本文月

史也

太六

一瓢

淡亭

桑坡

桐雨

香雨

器月

春圃

有井

帰春

池田

春琴

春涛

梅窓

晋水

蘆風

北年

涼呼

日向

正葩

梅朗

路及

積一

(二五ウ)

(二六ウ)

味噌桶といはる、伯母も花見かな

菜の花のはづれに煙る塩屋かな

戸口から瀧くむ家や赤つばき

気に向た処から打はたけかな

さくらちる外にあらしはなかりけり

花ちるや明し油も足らぬ暮

万歳のならしさせるや焚明り

吹あげた屋根の塵はく柳かな

めづらしい物の外なり初ざくら

結び文持て蝶逐ふ使かな

大松のかすみ広がる小松かな

新宅や言わけほどの種ひたし

折かけて見れば神あり藪の梅

夜の明て日の出るまでや春の月

塀の鶏下りて桃ちる小庭哉

うめが、のうつる白木の炬縁哉

古井戸と聞ばなつかしうめの花

箒目の行届けりゆふつばめ

素足にて帰るが多し花の雨

内好の言草にする余寒哉

有明を隣に置いて鳴雲雀

高みから取てかへすや春の水

接でから楽しみな樹と成にけり

春の水石おこしても流れけり

春雨や内に干せる馬合羽

切風のかゝるまでみて帰りけり

杉の葉の青むはしより初霞

折らぬ先顔をすらせる柳哉

若草の一しほ早し清水筋

霞日や松さへあれば浜気色

明之

路白

疎影

朝水

李影

楓影

南枝

亮曠

完穂

秀溪

秀然

鷺白

鷺橋

鷺水

太応

文亀

鶴朗

茂竹

馬得

雪村

一丈

支園

勢雲

一村

季蘭

松月

寄井

丘州

一葉

榎月

(一六ウ)

(一七オ)

(一七ウ)

(一八オ)

(二〇オ)

うつくしき日の出やうなり別れ霜

雀子や親より先に塀の上

あか〜と日は拝まれて春の雪

往もどり休む峠のさくらかな

家違ひしてやかましき乙鳥かな

さかさまに打た杭にも若芽かな

苗代や往来に出る水の先

あしたまで猶予もされず露の臺

花ぐもり花のもとからはれにけり

家毎にすきかけ網や日の長き

ちりかゝる花引立る入日かな

ふところ手して楽しむや風の空

室町や四日の雛の見ゆるおく

長閑さに帯ゆるまして戻りけり

われ一に飛で日暮る小鮎かな

気よきに眠りの出るや花の下

初午やしれた料理のむつかしき

霞もうとするや岩うつ浪がしら

梅が香や藪の裏行小提灯

賤が家の煙の中やうめの花

ゆり下りて花にかゝるやくれの雲

待にさへ立日の早きさくらかな

塵もうごかぬ昼のうら、か

好みより木地の炬縁の手間込て

つかひやすさに丁稚呼る、

降つもる雪の中にも月明り

かれ芦よせる舟の焚つけ

勝になる境の公事の前祝ひ

名残をしさにかくす脇差

五笛

五鶴

秋蔦

梅柳

雲月

如白

五柳

霞城

古眼

路江

陸鷹

福井

簫涛

如積

素僕

花笑

春月

可椎

中津

月弓

閑阿

実和

芳水

可大

星介

大

大

大

大

(一八ウ)

(一九オ)

(一九ウ)

(二〇オ)

夏瘦の立居も人にいたはられ

水で養ふ釣草の苔

またと来ぬ名古屋の町を見て通り

霧のある間は消ぬ朝月

瓜西瓜うれぬ頃より秋めきて

下手に釣てもあがる川沙魚

石を切あたりうるさく立廻り

長男交りになぶる狂人

よい空を花と楽しむ御正月

どんに鳴ても流石黄鳥

糞船のつゞいて下る春風に

ちからを入る三味の鉦

仕合は日のある内に宿へつき

瘤ほどあとのはれる衾まけ

ものいはぬ娘のとしを問かへし

乾かして遣る文の封じめ

鳥の来て皆喰落す梅嫌

酒初るより絶る樋の水

茶ばかりで晴行月を待負せ

唯四方なる庵に相住

借て来た梯子次から次へ借し

雨に見わたす畑もの、いろ

はやり眼も毒断せねば長う成

鬼打声に肝つぶすくれ

吹かへの銀子の値はまだしらす

骨さへをれば漁はあるなり

江戸酒も底になるまで花ざかり

地祭つゞく里々のはる

黄鳥や山の上にもこの平地

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

大

(二〇ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

小松にならぶ雪解の露  
七くさの七つ揃へば朝過て  
みながきげんに笑ふ台所  
押水も無事にのがれし月の秋  
傍示の外へ鳴子ひかゆる  
きりくす昼鳴までに細りけり  
恨もいへぬ葬のどさくさ  
よいやうに我こしらへて迷ひ出し  
うたひつ舞つ陣の酒盛  
散る花のつやにおくれぬ真白髪  
売れて雛の陸奥へ行く  
いづれ春しかも錦の御幸町  
格子にかゝる傘のふり水  
た、みなり提る羽織も流行風  
途中で舟をあがる一群  
今日の月さてもをしまぬ出やう也  
むけておく灯にあふつ蔦の葉  
焼ぐりについて蜻飛ぶ座敷中  
かなで喩のはやき法談  
娶せてみねばわからぬ縁不縁  
金につられて恋に飽く年  
こ、へ竹植よと来ては鳴雀  
雨の根ぬけて三上浮たつ  
酒買も神酒だけ多き御朔日  
牛を褒ると我をわする、  
櫓をおすはみんな巧者な鳥生れ  
砂糖箱気のきかぬ役むき  
囲ふやら大根つめる椽の下  
影ありあまる冬の三日月  
呼汐の絶て隅から浜あれて

年賀あやかる爺のさかづき  
つながずに榭へ投こむはした銭  
急にたて場のかはる川留  
ゆすつたりた、いたりして花をほめ  
干葉長閑にきざむ組板  
藪入や箱提灯で表から  
うすくこく花びらゆるる日ざし哉  
宵月や齋うつ戸の明はなし  
朝のうめ何もまじらぬ匂ひ哉  
ぼつちりと梢にしろし朝の梅  
眼にすつと来る白魚の光り哉  
ついくと北へも伸て梅の花  
凍どけや気のむく方へ杖の向  
人も来ず何もせぬ夜や臘月  
山彦にふり向かたやはな雪吹  
春雨の音聞ほどにふりしけり  
無事な顔互に見せて梅の花  
先に眼の付てふみをるわらびかな  
夕波のはれ行空や帰る雁  
鶏のそら時つくる雪解哉  
大風の澄空雨のこぼれけり  
蔓伐て通る道あり初桜  
門松やどう廻つても水たまり

うめに月怪我にも舜はなかりけり  
千鳥には寝酒の足らず初蛙  
七十の春や閏は儲けもの  
小戻りをして流れけり春の水  
持飽て首にかけるやふちの花  
宮廻りして来る声や初鳥  
門もまだ掃ぬうちから羽子遣ひ  
最一坂あるといひくかすみけり  
雲に入さうな身ぶりや畦の鳥  
春おもに造りし家や鳴雲雀  
はるの水潮境の見ゆるなり  
走り出た雉子より外にきじの声  
気の付ば木の芽ぐもりの山路かな  
持て来たやうな寒みや花のもと  
菜ばたけは今に朝く余寒哉  
藪入にあふ約束で別れけり  
中程で日の出る坂やきじの声  
同じ事聞も日永し斧の音  
一日で葉ざくらしう成にけり  
弦うちもおろさぬけふの汐干哉  
しばらくはどうとも言ぬ桜かな  
岩角に吸殻た、く汐干かな

平山 (二三オ)  
山 (二三ウ)  
那 (二四オ)  
山 (二四ウ)  
那 (二五オ)  
山 (二五ウ)  
那 (二六オ)  
山 (二六ウ)  
那 (二七オ)  
山 (二七ウ)

武州 鳳朗  
由誓  
一具  
禾木  
得蕪  
晨支  
風外  
逸測  
丁知  
洞天  
抱儀  
山外  
大梅  
素行  
英父丸  
遅流  
春香  
水谷

路兆  
起久守  
幻芝  
嵐鐘  
岱雲  
驢童  
甫旧  
素羅  
霞林  
よしを  
鷗夢  
凡鳥  
夏嶺  
淡雅  
梧井  
南兮  
巴山  
禹水  
右稲  
山月  
梅光  
未学  
白狼  
樞路  
紫友  
三鳥  
求古  
蘭雅  
雨柳

【参考】天保十三年に「門まつやどう廻りても水たまり 水谷」の句がある。

【校異】白鹿本、所書きに「、」が有る。

山田 樞路  
、ノ井 求古  
、ノ井 求古

夕雲をのせて落付さくらかな  
白魚や月にとれ、ば月の色  
葛の芽や四五寸伸てはふきざし  
眼のさめる色や弥生のかきつばた

惟草  
松竹  
五株  
護物

飛で行蝶に引る、子供かな  
どれこれといはれぬ花の盛り哉  
引鶴や明はなつ戸の真正面  
御社の円座も青しうめの花  
雨かすむ大竹原のけしきかな  
もの売の来ては春たつ言葉哉

一二丁ばかりへだて、かすみかな

鳥車

花は皆ほろりともせぬ曇かな

敏雄

(二七ウ)

黄鳥や池に出るまで笹伝ひ

大村 悠々

藪で夜は明して花に小雀かな

筑前 宇逸

降さふで暮しが花に月の出る

月平

川水に捨て目ざまし花の塵

往我

橋下りて風と別る、柳かな

一峰

せきとめる水は清水や花の陰

閑山

黄鳥やいつも静な枝うつり

雨月

巢に戻るともなし軒に雀の子

文十

山畑や二三日聴て帰る雁

芳樹

雪をれのさはる小窓や春の月

紫筭

夕かぜや松から花にむる、鳥

泥尾

川ひとつ隔てかるや花の宿

紫石

黄鳥の足代になる筈かな

桮竹

田へはまだながれ付ぬや春の水

斗丈

陽炎や塀のうしろは雪雫

淡路 梅廬

かげろふの追れてのぼる小浪かな

回風

うめが香や主の留主にもう馴て

(二八ウ)

樋の口やおちてきり、と舞椿

素悠

春の月眼からつかれて来たりけり

鷗池

旅なれて柳を見込とまりかな

秋十

朝冷のはなれぬ窓の柳かな

裁霞

つゝいては鳴ぬ夜のある蛙かな

鶴頂

さしむかふ御山をとしの恵方かな

玉梅

山なりに雲雀それけりおりにけり

暁梅

一あらしして鳴揃ふかはづかな

如朝

敷入やぬれた同士のものがたり

墨雨

散かゝる山吹白し水の月

紅蕉

是きりて鳥山おるるかすみ哉

泥中

是きりて鳥山おるるかすみ哉

半谷

うつくしう柳透日や台所

蔀池

今かけた橋をわたるや庵の花

富草

如月や曇つてすいと日の闌る

希康

夕ばれやさくらのおくの花の雲

涼水

螢火や昼はかげろふ処にて

(二九ウ)

鶺鴒舟へ撓む竹の下路

九起

買った傘間に合すらん道具市

黄州

めしくらゐではぬくもらぬ腹

平山

稲妻にはり合月の跡くらく

起

露おくものとなりし海苔柴

州

鶯鴉まだ嗅つけぬ施餓鬼棚

起

小窓をあてに酒の長呑

(三〇オ)

一夜さに女郎の訛をうつり来て

山

馬もたはけに大根踏折

起

冬の富士尋ぬる空にうち覆ひ

州

吹透されて衣さへ着ず

山

印判は済で普請の金の沙汰

起

蒼木の香も立ぬながあめ

州

月花の為にと髭も剃ぬなり

山

薺の粥の加減冷ける

(三〇ウ)

出盛の雪解の水に螺の音

起

残りた家は南朝の鍛冶

州

木のぼりの梢に真吸ちらし

山

茶を売ほどに岡の景よき

起

何もなく板間の上の初真桑

州

猫のそばゆる帷子の裾

山

際の日憎き亭主の逃てをり

起

比翼はなれて長き厄介

山

鉢蘭の葉も三尺に余りきり

州

日の出る前の露霜の月

起

世の望みあはれさ限る角力取

山

宮の涉りの又き、にくる

州

見あましの呉服二階に引広げ

起

かずも好まずよい料理くふ

山

岩ばかり潜りし水の音澄て

州

あつさも暑し星の飛空

(三一ウ)

生涯を寝転び草に書仕舞

山

昼の鼠を遊ばせて置く

州

花散ていやしくなりし残り米

起

祭のなりのやすきやすらひ

山

藤咲て毎日竹のあらしかな

豊丸

天気さだまる垣のてり鶯

(三一オ)

万歳の蚕ざかりに戻り来て

孤柳

ふり茶の泡の立なれし椀

九起

わり付の普請長引月の秋

平山

くもりつゝけて朝寒うなる

かうち

年がらのよさに斗升も売る也

丸

羽織の女眼のあかぬ酔

柳

役用も内証の用も取次で

起

碁磐引こむ衝立のかけ

山

門川に御杖のすみしあまり風

丸

ぬれなり直に戻す傘

(三二ウ)

わたり来て足もとまでに立小鳥

柳

明てかけさす上市の月

起

彼岸中手すり付おく施行橋

山

咄しのうちの涙愛想

丸

しる人にかくれて花の小商ひ

柳

かすみに鐘も聞ず日くる、

(三三オ)

老の曠桶とりの役ゆるされて	山	川ばたの倒れ柳もみどりかな	完和	見終れば城下にはひる柳かな	昇八
拍子にのれば噓つゝける	ち	飛ほどの軽みもありて落椿	卓丈	寝て起た顔を吹なり春の風	松棊
樽船の帆を八合にはしる也	丸	朝酒にせばや限りとさくらちる	梅室	万歳のひたひにあたる膳かな	晩耕
福とよばれて鼠出て来る	柳	黄鳥の往た跡はくや御簾の内	白樹	戸口から素足かぞえる汐干哉	玉枝
下女は髪丁稚は眠る除夜の雨	起	程をへて名残としるや雁の声	丹嶺	太箸に揃ふいろはのしるしかな	竹丈
鶴ばかり折妹背おとなし	山	朝の月残りかねたる柳かな	太甫	冷々とするやさくららの夕間暮	松兮
留主見舞心覚にとめて置	ち	隙にしてしみぐゝ聞や春の雨	越后 三朝	春かぜや樹々の中より松の音	恵力
ふすばる中にくらき蠟燭	丸	春の水渡た丈のにごりかな	糸魚川 曳尾	一日の和波に覚ゆる余寒哉	其水
御上使を大坂からも見にのぼり	柳	沖の鳥空やさし出てうめの花	其緘	何の樹もなくて場をもつ柳かな	美井
水音聞てをれば菊の香	起	とかくして咲ぬ果報や福寿草	新潟 有木	大川や横波立てはるのかぜ	若山 月嘯
藪高くすれゝ月の影ばかり	山	行春の波も絶るや暮の海	中条 宗三	出代の苞にして行く菊の苗	鶴飼 普泉
秋のうちより堀かゝる椿	ち	花の道柴荷の道と別れけり	幸水	【校異】白鹿本、所書は「鶺鴒」とする。	
舩に乗る魚では酒の呑足らず	丸	黄鳥のならんで出たり竹の中	亀田 応泉	黄鳥や夜のけしきの去らぬ松	佳景
又三四人よせるふれ状	柳	もり砂も小山めかすや春の月	白川 春庭	春風の吹や世話しき囲ひ船	鶴邑
花咲て犬もとがめぬ夜のけしき	起	二日ほど雪踏で来て梅の花	高田 季山	独居る気にはならぬ余寒哉	里門
車舎りにさくらかたげて	山	菜ばたけや孕み雀も春の鳥	三日市 桂五	たれ込で水に引る、柳かな	文友
春の旅銀の始末も夢うつゝ、	ち	花に寝ぬまぶた重たし昼の雨	見付 北洋	松が枝や東風に引込鶴の首	鳥島
汐干の朝におなじ遠浅	丸	番所にみきのかくるやなぎかな	水原 乙良	くもらずに咲た樹はなし山桜	生化
紙漉の去んで水すむやなぎかな	サガ 丈翠	くせ付てむく起に見る柳かな	買雪	青松葉散た小庭の余寒かな	正院 鳳兮
若草に染もはてぬや根なし水	雲州 東溟	七くさや雀も祝ふこぼれ粥	濃州 梅雅	倒れ木のとなりでありぬ初ざくら	桐芽
掃て遣る隣はしらず春の雪	伏水 岳鳳	若草やしよろゝ水の濁り川	子亭	寒いほど白うなりけり花の山	穴水 初六
まばゆさのくれても有や花雪吹	加州 立介	月にして又一しほのさくらかな	鎌倉 海市	陽炎や飛石ばかり乾く朝	所ノ口 語水
雨の日や雲をちらしに揚雲雀	花水	風のかげ生洲の魚を浮せけり	作州 真哉	蓬萊を直して行儀あらたまる	七尾 玉雄
着飾た詮なし花の道二丁	柳壺	春の月今まで鶯の舞た空	防州 素兄	戸にうつる夕日のかげや落椿	土佐 嵐夕
花雪吹高足遣ふ月夜かな	素文	親木にも見劣のせぬ柳かな	勢州 雀叟	花は散松は声もつ夜頰かな	紫空
葎戸の奥にも桜咲にけり	西洋	恋猫や闇にかたまる軒の下	能州 松波	行春や根つきにかゝる二の鳥居	梨園
人柄に花守こゝろゆるしけり	保丸	出た雲は花にさはらぬけしきかな	稲波	菓子売のつまんでのける椿かな	竹堂
田に水の増音ありて鳴蛙	作山	手笠して老のながめる雲雀哉	十越	榎の木に西日かくれてあげ雲雀	不及
踏出せば備はる花見心かな	白二	淋しさは其夜にもじれなく蛙	文毛	棒松も千鳥も霞こめにけり	化昇

防風や引ぬく跡に水たまる 予州 映門

羽遣ひもよし黄鳥の枝うつり 菊圃

はれ口を何度も見せて春の雨 郊馬

明きるや花に消入日和雲 井峨

鳥居までかくして花のさかり哉 登美女

みち汐に向て黄鳥初音哉 糸遊女

まはらねばとつくりみへぬ椿かな 在予 尾魚 (三九オ)

うめの花くもり日和もきれいな 松山 木長

浅茅生や家々ごとに椿あり 嘉扇

風鳴や人そばへする荷出し馬 其嵐

藤咲て見失ひけりあすならふ 阿州 凌岱

袖こぼるばかり降来るさくらかな 讃州 茂稚

夕陽のひとさかりある汐干哉 木長

寝て居れぬ夜のおもむきや月と梅 画声

起臥も揃はぬさとや帰る雁 紀州 宇翼 (三九ウ)

虻風のうなりや昼も月のある 若州 祇照

波濤に灯の飛々見えて春の月 遠州 末彦

松葉より外に塵なし苔の花 信州 愛像

刈草を干門先やけしの花 江州 鷺洲

うめが香に戸口のくらし住居かな 雲路

うめさくや思ひがけなき松ばやし 双山

白魚の中に動くや海老の髭 醍醐 柘谷

有明て神の灯もあり朧かけ 洛 関谷

ふつと見て待気になるや流れ袂 平山

雨の根ぬけし初蟬の空 尋尺

糶室土籠落しの石釣て 九尺

余処の門までをりくは掃 山

月かげに着物ふるふて打わらひ 尺

提灯もゆる七夕の笹 起

東寺さへかくす芋茎のぐるり畑 (四〇ウ)

酒のみあふて博労よろこぶ 尺

白粉のしのこしおかし鼻の先 起

御手はなれても衣配り来る 山

うかくと月日も早き町住居 尺

水菜の霏置処にしむ 起

梟鳴はなのあたりは明やらす 山

余寒つぶやく三輪の別当 尺

負渡す一時水の弥生川 起

ひるまで月の消さうである 山

鉢植に三つ四つ残る唐がらし 尺

節句掃除の皆煤になる 起

垣越に川へ落たる椿かな 吾雀

西になるより霞む日のいろ 九尺

春先はまゝ温泉も人のこみあふて かうち

掃た畳のすぐにざらつく 雀

夜の長さ起ては月に吞たばこ 起

鳴頻りては細るむしの音 ち

木犀の気付ぬうちにさかり過 雀

戸に鈴かけて留主を預る 起

越後じ、はじめのほどは独りにて ち

はやすみくくに雨ばれの星 雀

藪空のはつとあかるき鶉の簞 起

ほめきのさめぬ虫干の家具 ち

寝起かとはるゝばかり物思ひ 雀

先婦の不和をみせぬ扶持取 起

其儘に分量ためす樽の酒 ち

光りうすらぐ月のうらゝか 雀

鳴すゝめ笹にはあらし花に露 起

一人してうつ山際の畑 ち

灯の四方にあかし恵方棚 洛 巴蘭 (四二ウ)

藪入の賑はしかるや俵数 梅石

鳥かげの見えすく花の真昼哉 浪花 船斎

耳につく松風もなし朧月 馬勇

朝からは寝ても居られず春の雨 史友

管船のいくつもならぶ霞かな 遠州 か、し

黄鳥の去んで日の出る小藪哉 伊七開 月岡斎

寄つきのよさに囀る庭木かな 一虎

綿弓や藪の中なる梅の家 亀山 南涯

笹さわぐ早瀬や花の麓川 九尺

長閑な空にかはる雲行 松歌

蝶の影うつる障子の陽炎て 起

真ひるに丁度廻る肴屋 起

名月に大工一日遣はるゝ 歌

ゆれてはひとり落る桐の葉 起

どちらへも流れぬ堀や若菜屑 奥アサカ 如水 (四三ウ)

臆せず黄鳥なくや瀧の裏 筑前 宇甲

はし守の木屋には居らず花盛 雨笑

雪折の松其儘に春の雪 一翠

流れ来る花かき抱てなく蛙 其堂

馬柄杓で追ふ下くゝる小鮎哉 虎遊

反哺する鳥の声やゆふがすみ 不白

抱た子に見あげさせけり恵方棚 方井

雄峰にて 起

鳥に付て雲に入かとおもひけり 曲抄

都に入て 起

山こせばすみれの色もかはりけり 全

起

出るまでくもらぬ月や梅の花 祖郷  
 荒磯に人たち初るかすみかな 石外  
 散ものとおもへば寂し花ざかり 撰伊丹 紫金  
 遅ざくら散らずに風を通しけり 退歩  
 うるはしき花の使や角袂 樗太  
 花につれて人も出さかる都かな 船路  
 一朝は冷てわかる、花と雲 曲阜  
 あるじとは見えぬ小家やうめの中 三田 冬岐  
 竹を出て松に若やく雀かな 須磨 志厚  
 うめが香や気早き人の聞はなれ 容肅  
 青柳や蔵をはなれてわたるはし 武庫 董秋  
 ひと明り持や雲雀の下りたあと 有馬 卜梅  
 咲みちし花にそこらのくもり哉 柱本 都春  
 消た灯にあけほのしるや春の雨 浪花 菊亭  
 山吹やくれ静まりし垣のうち 鼎左  
 是きりでゆけぬ谷間や初ざくら 白鷗  
 うめ折や花盈す事小巻合 素屋  
 まだくれぬ星を見すかす柳かな 必山  
 盛あげて箸ほす門やちるさくら 其瓏  
 佐保ひめの通ふ小道かはつざくら 蘭秀  
 名もしらず摘そろへけりはつ若菜 其珀  
 うめが、やくれても見ゆる生駒山 不爭  
 つみ草の中にしほらし葦草 翠葉  
 乙鳥や最う暮るともしらず行 英居  
 落口のひくき小川やはるの水 桃測  
 うめに飛川幅広き二月かな 虎遊吏 巨洲  
 きじ鳴や藪木もる日の川を越 春人  
 花の香や山門しめし戻りかぜ 其山  
 切風の悠に落るや風の中 淡叟  
 (四六オ)

日あたりや筵敷る、すみれ草 祇白  
 塵ひとつこぼさぬ軒や巢の燕 梅門  
 踏草の朝く起る弥生かな 東啓  
 川添に行おふせたり藤の下 十交  
 声古き木場の蛙やくもる朝 班竹  
 夜一夜に咲そろひけりいと桜 松左  
 散花の一まひしては流れけり 若州 淡水  
 京一里出て宿かるや春の月 菘園  
 往もどり寺子の折や垣のうめ 松下  
 旅人の祭りかといふ花見かな 草蓋  
 花に似た花ある花の谷間かな 如頼  
 仏には骨肉の縁者もちたまはざれば  
 しら衣を着たるは見えずねはん像 江州 虚白  
 裏町はそれて燕のもどりけり 運汀  
 人よる丈に樹のあるさくら哉 小島在金城 漁交  
 物前と花とて多し辻通り 楓下  
 雨近き空とまで見るさくら哉 世岐  
 紅梅やかゝやきかへす蔵の壁 夜有  
 あし音に追る、朧月夜かな 雲軒  
 後にも眼一つほし、旅の花 節外  
 花ぐもり一はれ見せてくれにけり 草津 李道  
 馬市の中にした、る柳かな 玉脂  
 藪中におしき家あり梅の花 董丈  
 黄鳥や鳴度毎に枝かへて 盲人 吉一  
 寒きもは冬よりさむさ睦月哉 松月  
 うつり行春止まつてはつざくら 喜田雄  
 陽炎や瀬を行魚の背にもゆる 紫月  
 ちさい子がいつち余慶つむ若な哉 玉芝  
 人馴たさまや春野の昼狐 一化  
 宝引や主は先へ寝てしもふ 千融  
 (四七オ)

青柳や橋を渡らす壺の内 末引  
 落合てからぬるみけり谷の水 漁村吏 飛梁  
 昼だけはとけて氷るや池の水 高野 閑那  
 荷ひ来た水をうたすや花の下 鼎峰  
 葉の露も根にもどるなり落椿 昭々  
 出ぬければ海も見ゆるや花のおく 一雅  
 片隅は軒にもたすや藤の棚 荷岳  
 鶏の廻り道する雪解かな 守一  
 乗た気で風の音聞峠かな 李山  
 大川に網入初る二月かな 山城淀 鶯語  
 夏近し窓の工夫も二年越 素友  
 峠から鳴て立けり初がらす 一方  
 松からも花の散なり嵐山 青祇  
 藪入や約束のある参り処 凡池  
 掃よせて山にもならず花の塵 野村 瀧水  
 田一枚飛遅れけり雀の子 西枝  
 ふくらして十分蛙鳴にけり 如猿  
 散中に舞ふ花のある真昼哉 津田 古鏡  
 田の畦にのこる藁堆も霞哉 稲海  
 角落し鹿やかげなき朝の月 普賢寺 半山  
 ごろくくと神鳴なりて春は行 老波  
 五形田につづく山根のつ、じかな 和東 太認  
 水ためし門田の上や朧月 河内 不二門  
 ともし火のいくつもほしや蛙の夜 左栗  
 かはく間のなけれど霞む干潟哉 鳥羽 梅南  
 飛々に梅も咲けり檜原 如柳  
 酔て出て月も心もおぼろかな 信州 ノ左  
 二三軒家も見えたりはざくら 勢州二本木 池蛙  
 袖の下からも見てゐる雛かな 蛙跡  
 裏口の繻絆もかはく霞かな 津 南涯  
 (四八オ)

朝風や葉の花吹て庵に入 子遷

溝幅をこしてかけある梅のすい 照星

柿の木の中まで白し梅の花 春楼

紙雛のこけるやふいと立あふち 山田 桐一 (五〇オ)

宝引やはぐかりもなき高笑ひ 日永 文石

見すへなふ小松のこる焼野かな 追分 文松

ひそくと茶を摘家や土手継 日野 和月

狙の下まで来るやはるのみづ 五風

黄鳥に日かげちらつく木の間哉 大野 月波

春の水川相応にながれけり 大津 砺山

遊ぶにも上手下手あり日のゆとり 蕙逸

里ちかし林の中のうめの花 坂本 蕙雨 (五〇ウ)

黄鳥や子供の築た山へ来る 尾陽 沙鷗

切さうな鼻緒をかばふ花見哉 而后

養父入や雨ほろくと夜の更る 我竟

猪垣の崩れ口より朝がすみ 甫岳

料理屋の裏は川にて梅の花 蓬陽

一声や跡はほどへて初がらす 青白

瀬に付た舟のはづれて朧月 且齋 (五一オ)

あげくしてしばし風行雲雀かな 参州 卓池

東風吹やはたけの中の田一枚 丹州 九花

藪中や花の咲までふきのとう 松露

明の鐘声を交へて帰る雁 村岡 左和儀

藪かけを出るとちらく胡蝶哉 雨竹

花は皆こぼれて松のあらし山 額田 桂眉

いそがしき包丁先や花ぐもり 呉梅

草臥をはじめて思ふ二日かな 成松 青巴

見すかしもならぬ茂りや赤椿 呉秀 (五一ウ)

青柳や起よと撫る牛の背 浪花 林曹

乗ものへ引ては運ぶ小松かな 蟻兄

谷かげで無年貢らしや梅の花 梅左

内で寝ぬ夜の眼立ぬや松の内 桃室

星一つかゝやき澄や花の間 五諒

見て置た小松引けり雪の中 日州 州人

飛込だ蛙に逃るかはづかな 肥后 千千

もとの座に又居りけり春の雨 筑后 婦詠 (五二オ)

塵手水して心すむ余寒かな 越后 ちから

大空も薄くれなるや花七日 江州 白雄

黒ほこの畑や打には世話のなき 十葉

古どしの所はなすや齋つみ 素竹

野あそびや手を引子まで尻からげ 流川

山伏をつゝみかねたる霞かな 舞雪

黄鳥や笹の水を踏おとし 五朗

鳥一羽霞出ぬけてかすみけり 石禅 (五二ウ)

花と葉と山吹半分くかな 芸州 谷也

燕の来るたび煤の掃除かな 下毛 楓関

春雨や身代ふとき藁の家 雲州 欒二

部から人ののぞくや太郎月 凡和

春内の哀れなりけり猫の恋 春升

畑中に小山もありてひばりかな 蘭一

夕方になれば風あり竹の秋 乙人 (五三オ)

西の巢は燕西から這入りけり 阿島更 吾白

川舟や花のあたりは猶早し 淡州 星介

やんだ雪しらぬに梅の匂ひけり 因州 野屋

囀らぬ鳥も来て居る榎かな 与州 葵笠

早過て灯しきかぬや花ざかり 筑博多 木斎

行春やとまり鳥も浜に啼 炉睡

留主しても心のうごく桜かな 遅足

うめが香やそこらで音のきゆる風 其雪

花の中思ひの外の平地かな 飛雪 (五三ウ)

雁がねにうしろ手付てわかれけり 五雪

明はなす駕の戸近し春の海 呉竹

散たほど曇りまでへるさくらかな 飛木

白うめや舟付処の一トあかり 紀州 陶斎

猿曳の先ばしりする子供かな 石州 葛草

遊ぶ日を約してよるやうめの花 青池

山吹や戸じまりもなき家のある 武鉢形 斗六 (五四ウ)

傾に心もつかずおぼろ月 天遊

行灯にひゞく隣の齋かな 讃州 霞柳

立よせたなりの留主なり花の庵 嘯霞

永き日や出て見る空に月のある 丹ナリ松 陽照

初鶏や平生よりは声のほり 素来

栽かへた木とも見えぬや梅の花 洛 金葉

菊苗やとしく足らぬ鉢の数 里扇

夕ばれやわづかな隙をあげ雲雀 柳絲 (五四ウ)

岩角を力に折やふちの花 蛙水

結直す垣も花まつこゝろかな 見龍

愛過てひとひら盈すさくらかな 蒼虬

畑うちや氷のひまを見込さま 岱年

種店の塵吹までやはるのかぜ 箸風

よい漁の朝からあるや遠がすみ 杜蓼

ぬすまれてふりが付けりうめの月 兎月

風になる雲が切たりはつぎくら 川砂 (五五オ)

降たるみしても眠たしはるの雨 翫鳥

門口にほしがる背戸の柳かな 可大

咲までもまたで折る、野梅かな 里鏡

雪汁や麓々のうめの花 万籟

来る人の皆尻長し春の雨 倍美

黒ほこの鉄あしらひや桃の花 枝月

神の灯のぼちくはぜる余寒哉 杜鷺

花ざかり早うて月はなかりけり  
 有節  
 鴨一つ鳴て通るやおぼろ月  
 梅價 (五五ウ)  
 折あとに塵さへ見えず梅の花  
 蟻州  
 夜ざくらや暗もならず鶏がなく  
 南溪  
 水呑も花見戻りのきげんかな  
 荃涼  
 一二間瀬先を過て蛙かな  
 不染  
 一雪吹やがて日のさす野梅哉  
 菊圪  
 瀬の音も聞えぬ宵や鳴蛙  
 芳英  
 黄鳥もふすべ立けり藪の家  
 芹舎  
 鳴たて、さくらに沈むからず哉  
 梅通 (五六オ)  
 合羽屋の宿屋に近し春の雨  
 政雄  
 二荷も荷の先へ来てゐる桜哉  
 菊翁  
 あつたらな梅や深谷にかくれ咲  
 花勝  
 肩に枝もたせて生る柳かな  
 伍員  
 藪ぬけて提灯消やきじの声  
 文雄  
 明きらぬ垣を覗くや福寿草  
 木東  
 暮かけの風がぬくうておぼろ月  
 鬼丸  
 福寿草開て春のこゝろかな  
 梅枝 (五六ウ)  
 山水の何にはしるぞ花の昼  
 禾明  
 片枝に月までのせて庭の花  
 篤明  
 おしあふや風なき花の静なる  
 仙歩  
 地年貢に植しさくらや花ざかり  
 樗堂  
 行雁にすり火打けりわたし守  
 重泰  
 如月やまだつみあげる炭俵  
 富勢  
 いつまでも梅にありたき日出かな  
 此山  
 朝の間のくもり冷つくさくら哉  
 松歌 (五七オ)  
 突ぬけて花の上這ふけぶりかな  
 梅屋  
 待ながら盛おどろくさくらかな  
 黙池  
 一枝は瀧の上越すさくら哉  
 鹿月  
 菜の花や小一里ほどは寒い朝  
 鳥卵

蜂の巢の下は五尺の小笹かな  
 豊丸  
 黄鳥や筆おく音も紙一世  
 馬朝  
 市果てから匂ひけり露の臺  
 一六  
 夕ぐれにまだ人声の野うめかな  
 不席 (五七ウ)  
 けふもまた頬杖にちるさくらかな  
 馬雪  
 約束をして出間違ふ花見哉  
 明良  
 花さいて奢がましき都哉  
 好次  
 眼薬のしむや手陰の朝ざくら  
 黄令  
 立ときの物騒がしや雨の雉子  
 楚夕  
 手の墨にみきはよごれて梅の花  
 衆芳  
 酒なくば何のおれかといふ  
 古人のすさびも流石にをかし  
 花のかげ下戸らしきものなかりけり  
 多朗 (五八オ)  
 残る菌に鉄漿くろく〜と花見哉  
 平山  
 【校異】櫻井本、愛教大本は一行分空白。白鹿本に  
 よつて補った。

嵐峽にて  
 吹風花を碎て岸に立袖の蕙り哉  
 来青  
 梅が香や野仕事はせぬ一在所  
 尋尺  
 里は月海はくれるに帰る雁  
 雨翠  
 蝶つがひ交りてちるや花雪吹  
 孤柳  
 花にまた花吹付るあらしかな  
 百仙  
 真さかりらしき一木や岸の花  
 かうち  
 春の月まるうなりてもまだ寒し  
 吾雀 (五八ウ)  
 田と畑の小藪かぎりや梅の花  
 道僕  
 帆をおろす内にちかまる蛙かな 一拍子更  
 青蝦  
 すき間もる日のゆたかさやけさの春  
 麦浪  
 一さとのかすみ初るや大榎  
 霞仙  
 凍どけに一藪ぬけて帰りけり  
 聞可  
 客は皆女ばかりや夜の花  
 里遊

うめが香や木かげも見えず笹計  
 勝錦  
 道すがら雲かと思たる桜かな  
 左白 (五九オ)  
 人声や花にのこらずかくれ居る  
 九起  
 黄鳥も山水も野に出にけり  
 梅室  
 かすむ芒を柴に刈る岡  
 九起  
 白ざけの白に緋桃の花ちりて  
 やがて暮るに丸寝してゐる  
 不風雅に遊てはたす月のよさ  
 きり〜す飛浦の蛸壺  
 秋寒し戻り荷もなく帰り来る  
 燃つかぬ火に大息をつく  
 聳あれとかき起される女なり  
 やくそくにぶき上京のつれ  
 子規たて横かけて飛時節  
 茂りの中の赤門の月  
 水汲に行度々に鍵がいる  
 大々講をまつ乞食ども  
 銭出してもらふ物にもものし付て  
 花から先へうつつすか、え地  
 穴一の筋引かへる日の永さ  
 虻にさ、れてはねあがる馬  
 室起 (六〇ウ)  
 (裏表紙見返し)  
 (裏表紙)

32 天保十三年『花供養』

花供養

底本 糸井本  
校異 白鹿本

(原題籤・表紙)  
(表紙見返し)

世うつり人かはれども森羅万象の  
四海に集る花を以て、翁の像  
前に供養し奉る。わづかの言の

葉に森羅万象の成就するは、  
偏に翁のいさをしによればなり。

されば、後学の諸君子芭蕉堂を

本山とし、年々の花の会式

成就し、猶々盛になりゆくぞ

めでたかりけるにぞなむ。

天保壬寅春 西湖 山川楚蕉識

東雲や花にあらしの退ぬうち

早瀬になれし鳥の囀

千坪の地つき砂持春くれて

ほろ／＼眠き白ざけの酔

天気とて何が鳴りてもおとのよき

うつすり月の見ゆる大空

さり／＼居さうな所にかげもなし

たくさん馬に敷す青わら

ゆきにもおもはる、也温泉のはやり

なまりちらけるむすめかはゆき

行灯に休めた針の穴だらけ

作り瀧からおちる涼風

留守事に小僧寝て居るたかむしろ

剪矢に怖る鳩のやかまし

こけかゝるやうな嶺のまつ柏

草鞋くひも癒る川どめ

行越た月の名所をおしがりて

鹿の寝さうな芝生なりけり

はて前になりてすまふの猶はづみ

両杖ついた乞食いたはる

よき水に蚶の多きもふしぎ也

仏生れて出る寺／＼

人込にもまれて腹のさびしなる

はかまはいても腰にさしかね

松風のおとに猿戸の鈴もなる

寒磨は格別冴る十寸鏡

観音講にさそはれてゐる

風呂水にことの欠たる川普請

紅梅いろに夕ぐれるそら

日凶りも違はず御油の草まくら

灰ふき叩くおとも山びこ

養生にくはしけれども病ひがち

膝までとゞく髭を慢する

竹を出て竹へ這入れし宿の月

名もなき虫のよく人をさす

十あまり踏めば糠たつ今年米

臍かはらけのうれる朔日

出歩行に着がえもたすを曠にして

身じまひすれば見ちがえる顔

赤芥子は露のふかさもよくしれる

借美

馬朝

丹嶺

菊圪

蟻州

梅通

史也

如柳

禾明

芳英

衆芳

杜鶯

翫鳥

布山

菘園

重泰

篤明

仙歩

松雨

楚蕉

かうち

卓尔

百仙

梅價

雨香

寿堂

鹿月

木朗

鷗池

拾五

乾くやたてに湖を一滴

景気よくはしる魚荷を呼とゞめ

次郎が髪をおとす吉日

箒目のきつかりめだつ月夜ざし

旅中の箸も出せぬ接待

絵団の彩色さめしはつあらし

うたひに棟へあがる庭鳥

花の香に真葛が原は寒からず

茶を乞ふうちに霞はれゆく

一順

(二オ)

桃の香にふくれあがるや水の泡 沓岐勝本 檇洲

くもる間もなくてかげさす梅の月 既醉

うら／＼かやつぎ穂の梅の後れ咲 薩州加治木 虫二

松の間をいそいで花の月夜哉 申志

椿さく頃や梅さきさくらさく 松声

うぐひすの啼て出けり岩の上 雪人

膝に手を置いて居並ぶ雑煮哉 二外

はつ花やけふもふもとの朝曇 也六

竹杖の女つれだつはな見かな 佳遊

初ざくら雨のふる日を盛哉 美哉

石坂をのぼり下りて桜かな 碧水

ちる椿軒からひとつ落にけり 松香

軒に來た風や柳にゆれもどる 嘯虎

つま先のむくや彼岸の花のもと 春逕

梅さくや火は焚すて、遠歩行 几桂

やぶ入やもの、有丈出して見る 嵐翠

出合して花の恙をかたりけり 草柱

來るまでに成て手ぎれや春の雪 同鹿兎島 馬堀

万才の万歳聞や川むかひ 応門

省甫

梅石

孤柳

万籟

岱雲

有節

十代丸

砺山

卓丈

(三ウ)

(四オ)

(四ウ)

(五オ)

火繩火を付木にうつす花見哉 長州関 岑磨

寝がえりの耳にさはるや帰る雁 百合

畑うちの川をへだて、咄しかな 円二

うめさくや見なれぬ人の来ては行 薫枝

折枝にひっかけ行やさくら鯛 千ふね

行灯に川かぜの来る柳かな 風虎

はるかぜや隣歩行も下駄草履 同アツ 由陽

空寝入しても居られず春の宵 吉則 梅日

西あかり皆まで消さず春の月 伊佐 柳蛙

雀にも囀のある朝日かな 其夕

川尻や水のちらかる汐干潟 九山

朝の花追くはれる曇り哉 潮花

よそになき朝風見るや藤の花 豊前小倉 紫蛭

子を抱た片手に折や山ざくら 紫鱗

十徳に照るや土産の白椿 蘭明

一つくね松をはみ出すさくらかな 圭索

売うとはおもはぬ山の桜かな 黙居

戻りても見くらべて見るさくら哉 美明

一番に曆ひらくやあるじぶり 不白

鳴うせて又眼につくや揚ひばり 和友

若草をちからに出たりぬけ参 梅子女

不用意で来たれば花の座敷哉 兎園

提来るや人柄かはる初ざくら 苔梅

はる風や干潟に残る波の形 砂墨

鬢の毛を撫て座につく桜哉 芳村

暮きつて又来る花のもどり哉 了推

黄鳥や竹は疎遠にならぬ中 松風

夜日和もいふて別る、さくら哉 匏左

はつむまや市にもまけぬ市の裏 木父

日の脚につれて遠のく小蝶かな 同香春 鷺洲

うぐひすや山をはなれて上手めく 潮

芽柳や簀毛吹る、磯の鷺 肥前大村 眉山

案内者の来て折にくし梅の花 素月

恋猫の啼てのぼるや城の山 木二

念入て見るや接穂もうら表 霞翠

山吹のうしろ廻るや水もらひ 太素

松毬の庭にころげて沓かえる 桃雨

はる雨や一日降ても気草臥 禾堂

松の癖見おぼえにけり春の雨 麦紫

草の葉のうごけばにらむ蛙哉 素貢

水先を廻りて来たりはるの風 旭水

かげもまた見ぬ黄鳥の初音哉 日向在大村 亀候

わか菜つみなぐれて野にも出にけり 悠々

土からも起る風あり春の草 鎮西客中 青阿

黄鳥や近よればあるやぶの音 梅左

水浴てはつ日にむかふ鳥哉 初六

沙汰なしに落葉しにけり藪の梅 完和

予が父忍口の遺命あるにより、先師 (八オ)

闌更翁より有無叟伝来の蕉翁画像、 扇形文台こたび友人古由に送り侍りて祝す

のび立て日おもてに見るつぎ木かな 平戸早岐 幻我

かゝる伝笠をつたなくして請んことも 師命の重きに任せて

ゆるされて這入込だり花の中 古由

潮の本のあるじ、こたび立凡の俳雅に 我も誘れて此道の広がらんことをともにねぎて

あとになり先になりけりはるの風 春月

捨ものにした接穂から芽吹けり 陶々

下駄の齒のぬけて柳を掴みけり 春潮

汐時のもやうまだるし梅見ぶね 芦窓

夕風やしばし桜のうす明り 寸龍

若竹や足こそばゆき歩行出し 籬春

はる雨や仏を刻む木のほひ 山友

青柳や朱の雨ざれし仁王門 双樹

屋根ふきの釘目揃ひぬ春の風 洗竹

吹折れのなりに巢を組小鳥哉 大里

汐波の袖にたまるやはるの風 呂月

大ぶねに米とぐおとや夕がすみ 巴鳥

近よれば逃るやうなり野の霞 花流

日和くせつく小口なる真東風かな 日向本庄 習之

皆女木と見ゆる柳の樹ぶり哉 梅太

風さらく日和たちけり鳥帰る 文松

摘よりもはなしの多き若菜哉 和声

去かぜが立ば冷し花の中 厚薄

蠓の春庭やはなざかり 筑前福岡 不白

こゝろなく山焼下や花ざかり 雨笑

片かげに敷ても花のむしろ哉 一翠

柳鮓ちるや申齋の影法師 梅月

汐干くれて小雨降夜と也にけり 如竹

行先に来て囀るや春の鳥 祖量

さゝ波や人声ばかり夕霞 其笛

梅の月我家ばかりにある心地 字甲

ひとけぶり退て見ゆるや岡の梅 肥后隈本 千千

わら火たく家からたつや初がすみ 礫川

網引する浦もそこらや春の月 処楽

朝の山つきぬく雉子の笈哉 田崖

朝くゝの笈覗くや落つばき 雪茶

里の子が来てわかりけり仏の座 謹路

どの雁がさそひ初けり帰る雁 聴雨

和らかな波のもて来るかすみ哉 佳友

花ぐもりするやねぐらにもどる鳥 同二ノ丸 竹月

里の灯におどろきにけり花の山 左雀

ふと松に眼のつく山やおぼる月 東雲

野の色をはなれてひくし土筆 筆子

むく起の顔新し、はるの雨 竹巖

川幅は常より広し春の月 沙角

松に吹風はよはりていかのぼり 竹丸

吹れてもくよしうめの風 哉月

梅咲やこゝろ遣ひな釣瓶竿 淡石

客送る灯の先や鳴かはづ 儂生

まだ水にのぞまぬ声や初蛙 紀州高野 鼎峰

春風や出茶屋の曲突の生がはき 荷岳

雪どけのとりわけ早し車みち 一雅

数啼て静な月のかはづかな 芸州広島 谷也

留守の戸をしらで明けり春の雨 満之

鶏のあまり餌くふやすゝめの子 公羽

あたゝかや眠りつくほどゆるぐふね 写山

菜のはなのしばしとぎるゝ小坂哉 素號

下枝は心もとなき野梅かな 花言

あと追へば笈也けりきじの声 白羽

今折た枝とさし出す花屋哉 筵史

初ざくら程よう山も日の出哉 礼二

ちる花に一人棹さす小舟哉 三鱗

隅々へ霞広げる朝日かな 春牛

水のみに一坂越すやはらみ鹿 子栄

いつも此こゝろで居たし初手水 長崎 芝岩

飯蛸や網の目ぬけて高歩行 可省

長閑さのあまりに用のつかえけり 可芟

三味線を男の弾や隼月 士節

竈までも拾ひもの也汐干濁 喜昌

来る顔を半分しらぬ御慶哉

黄鳥や藪のあるじは冴ながら

月あるに提灯むけるさくら哉

はつ午や只何某の緋の、ぼり

手ざはりに節をれのする土筆哉

月あてに打のこしけり門の畑

ゆれやみて雀子くるゝ柳哉

乗そめの馬いなゝゝや角やしき

牛の子に籠ぬい付て汐干哉

うなり出す風や尾は地に有ながら

春雨や長うともりし祠の灯

やぶ入の寝るををしがる焚火かな

有明の入際光るおぼるかな 淡州 梅廬

春の夜や草木の名をもしれかゝり

墨ぬりて折あとかくすさくら哉

遅咲や梅はやつぱり寒い華

壁土の土手に咲たるすみれ哉

枯くさやよく見て居れば露の臺

鶏のなかで羽たゝゝかすみかな

一ぱいに曇かゝゝる木の実哉

夜明ると流るゝおとやはるの水

雨だれの障子にうつる雪解哉

青柳の雨や小寺の夕げしき

宿とればつい降やみぬ春の雪

梅がゝや垣はあれども藪つゞき

江の鳥の吹れに立や春の風

日よければ盛にもどるさくらかな

梅さくやくるゝ廻る藪屋敷

遠退て別に見る也梅と月

垣の背に足らねど梅に雀かな

帰芸

芦園

桂女

里樵

梅塙

志郷

李村

竹友

二石

岱雲

石狂

雨香

梅廬

秀丸

四風

秋十

芦十

風和

蔣池

孔昭

富草

泥中

梅土

鷗池

呂川

墨雨

半谷

星介

富子

希康

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

(二二ウ)

磯波や鳴しづまりてうめの空 ハリマ 最之

根元から花の付たる野梅哉 来青

啼ずとも黄鳥と見るおもしろさ 松歩

中に川ありて大きな梅やなぎ 捨来

元日の夕飯くふて遠やなぎ 愿泉

手にむすぶ水も薫るや梅ばたけ 耳洗

垣越や芹と薺とかへる声 牙睡

うぐひすや硯洗ひに來た清水 柏園

はつ午や人気を誘ふ風も出 節之

鳴かはづ互にからりころりかな 椿年

黄鳥のふと出合けり霞けり 為風

桃さくや鮎の浮たる池の水 霞村

下り坂や落て椿も七ころび 峰種更 甘水

手にむすぶ水のぬくみやけさの春 伯也

ふみ直す処にもあり春の水 季風

汐時も花にわすれてかゝり舟 伍柳

のどかさやし戻したる渡しぶね 武陵

吹ちつて筏のうへのさくらかな 古溪

分入ておちつく花の流れかな 古谷

宮めぐりの日 仝

裕着て心も清し神路山 仝

雨の日や田面まばらにはつかはづ 雲州 春升

山水の裾野に出てぬるみけり 可燕

見覚の石まで行や汐干がた 玉茗

真空から夜の明て行桜かな 鷺川

鳥啼てあたゝかめきぬ今朝の空 配十

もとの木に戻りて見るやはつ桜 器六

おなじ緒の下駄にすれあふ子日哉 乙人

葉がくれの橙赤き余寒かな 南谷

馬の口とる度東風にむかひけり 秀然

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

(二四ウ)

すゞめより今朝は待れて初がらす	敬英	城あとや古木も患む初ざくら	淡亭	(一八オ)	帯を鼠に引ずられけり	丈
漸くと草履道なり梅柳	馬得	黄鳥や玉のはつ音をやぶの中	梅室		氷る夜に <sup>(ナ)</sup> 虐の熱をあつがりて	室
篠をつく雨にもりんと鳴かはづ 筑后米府	東鶴	すゞなすゞしろにほふ日当り	翫鳥		皆が繩なふ春のこしらへ	起
愛想なく入やさくらの木の間月	麦映	年をとことんと仕舞へば供に出て	九起		汐風に衞宜も漁師も同じ顔	丈
はつ雛や悦ふてかざる譲り物	鶯朝	場のゆ釜を汲かすりけり	室		申齋さかりは魚もそはつく	也
わら屋根の飛びく町や梅の花	英布	秋もまだくれぬ先から西に月	鳥		杖のむく方へゆるくひとり旅	起
日のもれて花のまばゆき簾かな	赤鱗	すもふの跡に物拾ふ鶯	鳥		団子の形りもたくむ世の中	室
黄鳥や湯屋のけぶりも朝の内	赤鱗	置処も定めず稲をとり込で	起		名所の花は盛に月丸く	也
日表は一緒にひらく椿かな	市言	雨のせて来るうしとらの風	室	(一八ウ)	わかれの霜に雲母する篠	丈
木にかゝり竹にかゝりて藤のはな	文月	拌んだる錢かけ松に泥わらじ	鳥		うへひとつ人にも脱がす花見哉	逸淵
干ものぬれて気をつく雪解哉	三栗	酔た女の口のにくさよ	起		春の日の午時よりすゑへ猶永し	鳳朗
青む時寒い雨ふる柳かな	葵月	辻占に心も細くなりにけり	室		山の畑うつかげのさす二階かな	逸淵
最一さりちり来る花のまたれけり	市転	寒月入てうば玉のやみ	鳥		花に笹仰くしげに鳴にけり	風外
来たといふ咄しの内やはつ乙鳥	竹扨	みたらしの篋も糟もあつ水	起		黄鳥の四十の坂や花ざかり	晨支
こんもりとたれて透ある柳哉	燕蓆	とへばめでたき門番のとし	室		山を出て眼にたつ花見衣かな	永久
霞より外に火をたくけぶり哉	芳水	土器の匂ひしみたる下りもの	鳥		江を中に笑ひ合けり山とやま	山公
友はぐれして一声や帰る雁	五溪	広げる幕におもきはる風	起	(一九オ)	梅のくれ菟菟提てもどりけり	秀直
月影の小松に足らぬ焼野哉	里山	花と水外は不自由な若王寺	室		葉からして落さうもなし赤椿	李螻
雲はれて池に雨ふるやなぎ哉	芦江	木葉をのけて青みたつ芝	鳥		落つもる椿のひやす屋しき哉	松笠
うぐひすに起かつ松の月夜哉	五遊	大松もいさぶりてある子の日哉	起		ありもせぬ尾をかくしけり雀の子	茶静
入相を間に隙あり梅の花	蘊海	雪のなだれに埋る細川	室		花見るや同じ処も飽ずして	乙雄
花かげで見えぬ山家の雛哉	菊女	程もなく旅だつ雁のよく肥て	史也		幕などの入る岡でなし桃の花	英父丸
三日月やすわへの梅の二三輪	閑阿	土かむやうなものを小昼茶	卓丈		寒さうになき葉ぶり也沢山葵	此扇
茅の輪氣に雀の潜る輪注連哉 讃州丸亀	木長	触出しの月見をやめるはしり雲	梅室		初鶏に大きな夢が覚にけり	萬守
気だるみはひるから付て藤の花	画声	網すくうちも下冷の庭	九起	(一九ウ)	ゆふけぶり立や燕の入る木の間	樹村
東風むきに酔もさめたり馬の上	松子	田葉粉盆乞へば虫飛火打箱	丈		起揃ふまでを霞むや町の中	水狐
野に出て千どりも遊ぶ若菜哉	探水	そ、のかしても売らぬ檜の木	也		咲をれる間もなく枯る芒かな	祖郷
竹の根のはしる先にも露の臺	素六	おもはれて此としまでもかゝり人	起		黄鳥の音の、こりけり日一ぱい	粗文
人おとや鶯谷へく啼	史也		室		しぐる、と思はぬ色や唐がらし	素隴
むりいふて手折や梅の咲小口	卓尔		也			南枝

夕雲をのせて落つくさくらかな

惟草

川おともさすがにやさし花ざかり

桐芽

(二三ウ)

洲の松や夕黄鳥の通りかけ

さく守

芽柳の雫吹込む二階かな

下総 楚南

蒲公英や多くて鉢へ植られず  
木津川は夜ぶねもありて春の月

扇々 隣々

ついと来て雨だれかぶる燕かな

呂叟

ちる花や松は高根の古木ぶり

、押崎 為畦

ぼつちりと鼠の穴や若なはた  
こんなよい空にとまるやはるの川

、会津 宗二

畦道も一人ふたりやまつの内

由誓

明る戸に気味よく入し花の風

一成

咲ぬのも添て囃ふや福寿草

、坂の下 斗南

乙鳥やまだ四五軒の朝けぶり

一具

水もたぬ瓶にひびくやきじの声

井水

真中に澄切てあり春の水

春左

鶴引や日ながくおもふたよりに

雄嶺

鳥のたつあとやしばらく藤のはな

全

四五人になるや梅見の帰り際

懷之

霞ぞと見れば人来る野道かな

波月

夜ざくらのや灯にはさはらぬ松の風

勇之

行逢ふて上下へ飛ぶ乙鳥かな

許三

門まつやどう廻りても水たまり

水谷

接木からつぎ穂の花の盛かな

幻芝

(二四オ)

留主の戸に人の来て居る桜かな

其山

【参考】天保十二年に「門松やどう廻りても水たまり

水谷

はつ蝶や困ひをとりし蘭のうへ

奥州杉田 英泉

(二四オ)

何処までも屋根のうへ也春の月

茶三

り 水谷」の句がある。

丁知

うぐひすの来ておくる、や夕かしぎ

つや女

埋山

解かけて戦ぐをまつや笹ちまき

如葉

ふさくと木の間も陰も花ざかり

伯遠

早蕨や日あたりのよき北がまへ

一旦

(二四ウ)

かれ柴の泥はねかへす雪解かな

松前 紺山

一里を遠く見透す柳かな

遅流

黄鳥の森を離れる天気かな

蛙亭

(二四ウ)

はる風のかるみ見へけり松のうへ

而先 椿呂

雁鴨も千鳥も霞む鳥根かな

得燕

鶯のか、さずに来る茶前かな

汀鬼

(二四ウ)

めつたには戸にもよられず水祝ひ

上野 竹烟

朝明やくもりつらぬく雉子の声

可大

明てかす花につとめの座敷かな

夷菊

(二四ウ)

さつぱりと風もなき日の柳哉

甲斐 文候

元日や桐の実高きひとしづく

客中

露の臺よれば崩る、縄手かな

邦泉

(二四ウ)

梅見つ、来ればわらぢも売家哉

出羽 二丘

まかぬ菜も生て梅さく在所哉

可大

春風に砂の流る、浅瀬かな

、本宮 禿人

(二四ウ)

今打たやうすの畑や人は居ず

羽人

寝時分に成て登るや春の月

鳥谷

蝶とぶや机の見ゆる明はなし

前峰

(二四ウ)

若草やはらばふて見る畑のへり

秋田 涓橋

山かくす曇りもなくてはるの雪

宇翼

花の中客送る灯の程遠し

二九

(二四ウ)

ひつそりとしたる家あり春の月

龜遊

下り坂や二つも見ゆる木の葉小家

阿鳥

窓からの梅を見当や舟の客

素文

(二四ウ)

夜雨して今朝賑はしや市の華

撫松

虫くその吹出て青む柳かな

石外

うぐひすの付て廻るや夕日さし

米却

(二四ウ)

走り出て雉子鳴唄や雨のあと

越ツルガ 左来

原よし原の辺にて

ムサシ

春の田も波うつほどに成にけり

梅洲

(二四ウ)

木綿をるおとも河内の余寒かな

雪也

半分は海の中なり不二の山

南々

若菜野や大方雨もとゞくよし

嵐雄

(二四ウ)

口癖の念仏もやんで桜かな

二道

夜は水に成てしまひぬ春の風

竹山

燕やひくみに落ちて高うとぶ

五陵

(二四ウ)

はつ花のしるしは山のけぶりかな

一兄

八方へわかるや森のはつがらす

五渡

おきかえて日和になりぬ花の雲

、アサカ 芝英

(二四ウ)

て、ら来た爺も花見のひとり哉

如積

乗合も多し終日かすむ川

能州正院 鳳兮

谷口に練堀見ゆるやなぎ哉

、仙台 江三

(二四ウ)

夕風の山から吹てうめのはな

若州 淡水

入あひの聞える方にはるの月

舍童

柳より下にはふらずはるの雪

宗古

(二四ウ)

橋守も鯛買ふ花のさかり哉

翠桂

待て居るうち黄鳥のひかりかな

野艾

春の日の伸るだけ也何も角も

、郡山 長哉

(二四ウ)

ゆれやむ間なく風持やか、り風

幾山

紅梅やむしろの上の酒徳利 嵐朝

淋しさや酒樽こけてはなの風 美鶴

ちる花に水輪のたえず山の池 一瓢

我にのみちるかと思ふさくらかな 巴山

ふり袖の袂かたげて花の中 菘園 (二七ウ)

ひるの月見えてちら／＼春の雪 祇照

耳立たわりには寝よし鳴かはづ 草蓋

うぐひすや納処の部屋火の無心 越富山 不言

峠から見おろす麦の青みかな 可候

かげろふやまだ片屋根は雪の下 かね女

口として花の芳野を下りけり 布山

霞田にならべてあるや炭たはら 魚津 楽和

はこべらや揃はでならぬ数のうち 可春 (二八オ)

人立の塵おち付て夜の花 伏木 和鳴

鎌の刃をよけて眼をあく蛙かな 水橋 秀甫

落たのも添て貫ふや赤つばき 滑川 蚊和

かたり行春のけしきやふねと陸 越后亀田 応泉

心おきなくもふりけり春の雪 春庭

おもひ入れいさみ連なり二日灸 友徳

野遊びやかへる所は月のかど 来潮

畑中の杭も春たつけしきかな 二日市 幸水 (二八ウ)

雲雀さへいつかこゝろの地につかず 宗三

散てまた二度の詠めや池の花 亀洞

春雨に流れもやらず島ひとつ 花溪

三日月は朧も見せず入にけり 米虫

若草によけて歩行や鶴の脚 宇桃

趣向の東は川ようめのはな 高田 箒永

まつの内茶にも居並ぶ家内哉 堀ノ内 松舎

祝ひ日をかけてさかりや梅のはな 新潟 有木 (二九オ)

終日の花夜すがらのさくらかな 鼎湖

なのはなや隣在所に鶏の声 佳山

小酒屋のありてよく吹柳かな 卓洲

うめが、や一夜どまりの笠の数 高田 竹枝

ゆるみては又来てゆるむ余寒かな 梅居

ひや／＼とひるから吹や春の風 三芳

松原の内から梅のほひかな 高彦

くれる日をしみて鳴や春の鶯 大恒 (二九ウ)

折て居る人みなしらぬ野梅哉 季山

やま下りる雉子も見えて雨ぬくし 見付 茶山

うれしさやあしたの柳夜の梅 北洋

荷にかけて馬の走るやからみ風 水原 玉岱

山吹や折た処におきわすれ 西崎

空もちのよき天気なり春の水 秋帆

八九分は咲た梅也雨一日 夏桐

畑からも流れ出にけりはるの水 乙良 (三〇オ)

しまりなき花の冥加やあらし山 長岡 三朝

飛石のおさまり付し椿かな 春室

はつ花に膳だてもなき馳走哉 信州 ノ左

夜の雨さくら養ふちからかな 蘭山

水ごととうめの影ある月夜哉 藍水

大空も松風吹かあげひばり 愛象

おろしくる気ざしもみえず春の雁 三都里 (三〇ウ)

宝葉や直す手もとの薄ぐらき 栗人

ゆあがりの背中吹やる新樹哉 伊勢内宮 石斎

霧雨に風もつ梅の青さかな 夢兄

麦またぎ／＼行けり春の月 卜蝸

新家や余寒の通す一重壁 平木 不一庵

人しらぬ藪の中にもさくら哉、ハマミ 稲里

こゝまでと／＼とちる桜かな、イケベ 生水

黄鳥や大事の道を豆腐売 秋竹

おひこされ／＼けりはるのやま、四疋田 宇栗 (三一オ)

うぐひすの声にすむや一歩づ、四日市 都岐雄

引やうに見せてさす也春の汐 流芳

堪忍の二字に定めつ筆はじめ 川崎 石鼎

はつとした柿の木原や梅かほる 昌風

はや鳥の空に声ある霞かな 頼甫

足もとに梢のかげや鳴かはづ 省禾

かれ野にも姿は見えずきじの声 桂洲

帰るより行人多きはな見かな 東宇 (三一ウ)

蛙かとおもふたまでや寝人はな 遠州日坂 嵐牛

宵からの朧や顔にあたる雨 静年

時宜いふて居るうち出来る雑煮哉 牛遊

松取た宵に聞けりのおと 笠亭

落る夜はわけて静けき椿かな 嬰斎

朝夕の寒いを花の天気かな 指釜 か、し

暁の雲か、りけり遠ざくら 石岡 素石

やぶ入や粉から挽せる蕎麦支度 卓池 (三一オ)

人先に見る曙や花のやま 片瀬 竹里

何なりと売ればうれるよ花ざかり たつ女

笥から余れる水や夜のはな 天ノ宮 五岳

ちる花の中へすてけり鯛の骨 友永 栗谷

山冷の花にもどるや夜のそら 駿府 碧山

戸口から野あり川あり朝霞 井梧

かたよつて居ればひとりに散桜 尾州 沙鷗

小堤やどどの人のくれるまで 而后 (三一ウ)

春たつや窓のけぶりに鳥のよる 一清

かけ上る小坂の月や花もどり 適斎

畑みちや来るともなしに花の陰 青白

塩竈の見こしにふかし山ざくら、稲葉 甫岳

水圍ふ門田一日かすみけり 花雪

桃の酒白髪の人と呑合し 佐渡 周斎

とし玉に添ふてさし込朝日哉 蜀水

唾にむせて陽炎咽にとゞきけり 真哉 (三三オ)

山裾や添はずはなれず花一本 丹亀山 九華

見残してしめた障子や梅の月 南涯

もるおとに耳すましけり春の雨 楽遊

散る花の光りこぼすや水のうへ 香雪

もどりに月入であるどんど哉 梅琴

吹降にしばらくなりてはるの雨 雲帯

つゝまれてひまどる花や松の中 千丈

溜池の寒き臘の月夜かな 梅林 (三三ウ)

おちるほど落て椿のひとさかり 松露

たち去れば花にもどるやあらし山 額部 一葉

つもる丈杓の雫やはるのゆき 額田 桂眉

梅が、や雪踏で戻る一里二里 呉梅

澄切や散りふりもなき月と花 成松 呉秀

愛想ほど樋口にちるや朝の花 素来

梅が、や労れをはらす旅の空 陽照

廿日たつ正月をしき山の雪 青巴 (三四オ)

草臥もあら心よやはなもどり 遊夢

はる雨や寝ざめてからの二寝人 野ノ垣 観之

引汐に残る渚のやなぎかな 椿水

今出した舟みるうちに霞けり 豈雪

狐さへ心ゆるみの春日かな 宮津 朽青

家うつりの馳走のうへを燕哉 夢屋

押鳥の浮場もかへず春の月 玉彦

をれ口もはや一年や梅の花 吐翠 (三四ウ)

梅かざす池やこよひは三五の夜 本道

春の夜や奥もひとりの女客 大鈴

笹の音のみ宵過て猫のこひ 百鶏

沫ゆきの一夜に竹のしはり哉 清茂

棚の灯のひとつ明るし若菜の夜 去柳

草臥て馬はゆかぬにきじの声 夷白

宵の間や春めく門の人どほり 百之 (三五オ)

菜の花に染られて行野風哉 馬良

掃ばこそありの儘也うめの花 魚道

日のさすも障子ごしなり福寿草 景丸

散りたほど曇りもへりてさくら哉 但和田 雨竹

行人の笠ほしげ也ちるさくら 其頼

稽古場で馬おどろかす霞かな 丸味 白雲月

青柳にもたせて有や古ばしら 大屋 古川

早過て誰も出て来ぬどんど哉 不有

山よりも田の春早しはつ蛙 松翁 (三五ウ)

うぐひすや箒遣ふもひと思案 香住 其暁

東風吹や松はこの比眼に立ず 負笑

川ごしに起されて出て春の月 因州 南嶺

霞まれたしるしのこるや足の痘 雲州 亮曠

左吉兆の埃かぶるやか、りぶね 湖虬

夕ぐれや木の間くの花明り 楽道

黄鳥や小松まじりの藪の中 雲休 (三六オ)

雨の日や障子のうちに羽子のおと 沙勿

ゆに入てから思ひ出す社日かな 伯州 疎影

散り込んだ花にきゆるや酒の泡 竹賀

飛ぶあとに、ごり引けり田の蛙 朝水

花一ツ咲て折らる、椿かな 李影

足らぬ気にして去にくき花見哉 楓影

鶏からは寝られぬ花の気世話哉 花遊

白梅や羽折の裾につく埃り 桃下 (三六ウ)

佐保姫やまだ凍る気のある笥 南枝

二番子の巢に入かはる雀かな 乙美

よきことは重ねていふや松の内 有隣

青柳になる間しばらく黄色哉 加州金城 柳壺

万才の詠めてゐるや扇子店 素文

花のもとのけば小寒し松ばやし 棹江

人の世話なしにした、る柳かな 太甫

麓まで花に闇とは気も付ず 蘇鉄

門まつやいくら降てもゆきの花 佳年 (三七オ)

人込みを花やすくと通りけり 江州在金城 漁交

植足して待る、花の天気かな 石禪

降雨の脚よりはやし落ひばり 聖城 丹嶺

隣の見はらしにして茶屋の花 裡竹

羽遣ひも常と違ふやかへる雁 可考

我猫もそれとさせぬやうかれ声 豊収

畑うちや出作り小家も一世帯 義流 (三七ウ)

寝入まですみれはなさぬ子供かな 知宥

落るまで日を見ぬ藪のつばき哉 北園

黄鳥の鳴やはなしの腰を折 梅逕

荷仕舞に梅も掘けり屋敷がへ 降舎

折人と誉る人ありはつざくら 木圭

やぶ入の覗いて過ぬ水かぐみ 能州七尾 千蔭

ひらくと浮くや柳の陰の魚 文丈

行ばく花も見当る在所哉 霞暁

はつ蛙日にはまばゆきかまへ哉 語水 (三八オ)

夕月のゆかりもありぬはつ桜 淇洲

買といへば笑ふふりあり市の雛 仝

折て来た桜預けて花見かな 青臈

馬の鞍とつて遣るなり霞けり 鶯飼 生化

若草を籠にも入らずらひけり 琴柳女

蝶のかげうつりて障子開きけり 鳥島

うめによき掃除も出来て鈴の音 下野 楓関

此寒い風にも梅のほひかな 奥白河 清素 (三八ウ)

この闇にうつりの出来てはつ桜 土佐 嵐夕

提灯をさくらにかけて地突哉 不及

梅の夜のともし照こむ柱かな 化昇

仕舞まで花で有けり梅の花 竹堂

若まつに声もちかける二月哉 葵翠

さつと来る東風に浮むや池の魚 紫空

梅が枝や咲と蒼に去年ことし 予州 映門

合点した子の愛らしや二日灸 菊圃女 (三九オ)

手から手に開くや市のふく寿草 鶯居

夜に入ば兎もくるや畑のうめ 郊馬

はつ虹といふた計で消にけり 佳笑

うぐひすやまだ薄ぐらき藪の中 葛山

地蔵まで来ては廻るやはるの水 淡州 松洲

黄鳥や田舎もおなじ籠の中 露竹

白うをの月に見えすく光りかな 九淵

遣り羽子の中をわやくに通けり 如朝 (三九ウ)

折て来たさくら盈すや這入口 竹院

春の水丸太のうへを流れけり 玉梅

折ほどは伸て眼立す梅の花 備岡田 香雨

きさらぎや野心出来るひる時分 素外

山ざとは垣の柱もさくらかな 松山 松年

旅だちを送りてふさぐ巨燧哉、西大寺 布国

川上へ鵜の引て行かすみかな 涼呼

帆ばしらやたてるほどづつ添ふ霞、ツラ島 桑坡 (四〇オ)

さし波の静によるやはるの風 岡山 巴玉

どの村も風かやかすむ中 如毛

雛とてか馬士もかた手に桃の花 里恵女

からし菜や一面にさくやすめ畑 晋水

風ひとつ澄むやはら／＼走り風 豊后 霞城

嵐山にて

川涯や花に真むかふ家計 茂原

一すぢといふ枝もありうめの花 春坡

白雲につゞきてしるし梅の花 肥前 撞路 (四〇ウ)

合棒の物いひ出すや藤の花 習之

吸がらけぶる道のほる風 和声

あた、かき雨に蚕の上るらん 之

くゝるを待て遣ふ手箒 声

家／＼に月の鱈を切きざみ 之

ことしははやう築もかた付 声

常不断鳴の雫にぬれる松 (四一オ)

ねから鉄気のぬけぬ飯鍋 声

爪かきの壁にあどなき立咄し 之

飛脚の寄て呉れる約束 声

鞍置に朝の間かゝる牧の馬 之

城の裏手は水損もなし 声

月を見る愛想に遣ふ渋団 之

茸かえ屋根の光る麦わら 声

湯糲もかけず村では座にならび (四一ウ)

なんの公事でも濟口は金 声

橋からは下駄も履さぬ花なれや 之

入日のあとの長き青天 声

澄切てたぐるををしむ風 全

さむらひなれど似合ふ丸腰 之

居風呂へ加茂の川水波込で 声

家鴨としらで鶏の育てる 之

人ごとに自分の用もほつておき (四二オ)

鞆のおとに何もきこえぬ 声

風のふいてこつたる雪の雲 声

煤さへ掃ぬうちに春たつ 之

ひね米にかへてほしがる手織綿 声

もの、闇もさはる種もの 之

鐘撞たあとに鹿啼山の月 声

やとはれてさす重陽の太刀 之

顔へ色出ずに新酒の酔はさめ (四二ウ)

冷汗ながす見合なりけり 声

二人前ひとりでせまき淀の舟 声

出て来る度に家のよくなる 之

つ、まれて盛りの遅きやぶの花 声

扇ばち／＼おとのうらゝか 之

逗留も日わりのうちや旅の花 呼卯

なんでも菜に喰る摘草 竹里 (四三オ)

立ならぶ漂木に鳥の囀りて 直史

風そよ／＼と天気かたまる 卯

月前に摺おく早稲の手にかゝり 里

火もらひに行あきの夕ぐれ 史

橋守をすれば河鹿も聞覚え 卯

杉ばかりなる森の尊うとき 里

頭痛げも稚な馴染にまぎれけり 史

絵本よみてもなみだぐむ顔 (四三ウ)

ちと／＼と雨に靡すことし竹 卯

上り餌ひらふ鳩の下啼 史

役寺は僧でも事の極りよく 卯

豊屋の来てのぞく奥の間 史

提て行苞の蜆に水かけて 里

二日の空も月おぼるなり 卯

繩はりを梅から梅へぬかり道 史

射雉はづれし翦矢尋ねる (四四オ)

内証の使もよほど間に合て

一冬研がでくもる姿鏡

椽側の透吹上る水かぜ

国のはなしを供先できく

ひる登る淀川ぶねの退屈さ

声もたてずに通し鴨とぶ

軍場のあと、はいへど畑ばかり

修覆と、かぬ石の宮館

酔ざめの口そ、ぐにはよき流れ

手ばたきすれば萩のこぼる、

床近くまでもかげさす宵の月

籠をかへても鳴出さぬ虫

髪結の片手業なる小商ひ

芝居のもめの早う聞ゆる

托鉢に草子も連て廻るなり

つゞく日和に砂ほこりたつ

咲花に木戸は残らず明はなし

かけおく笠をよごすつばくら

黒ぼこにそだちて桃の盛かな

むらつく鳥に永き日の入

着よこれを春の名残に洗せて

跡で料理にまはる肴屋

月よしと往還端へたてる風呂

田ごとにむしを送るてつぼう

相生に黄菊白ぎく苔むなり

ふたり一度にかろき疱瘡

書てさへおけばとり行文使ひ

はやう仕舞ふた節季うらやむ

こがらしに真向ふ舟の骨をれて

史

卯

里

史

卯

里

史

卯

里

史

卯

里

史

卯

里

史

卯

里

潮花

柳蛙

其夕

花

蛙

夕

花

蛙

夕

花

蛙

きえてはとる雨の提灯

小男鹿の月なき頃を鳴にけり

赤き鳥居のうらがれし中

気ちがひの物哀れなる秋の風

こんにやく提て通る横町

閨ある花の三月花もなし

草の青みの届くかげろふ

うちあげて二色に干る畑哉

囀る中に静なる鶯

荷繕ふ店の愛想に葩煎買て

ぬいた小柄のあとへさ、らぬ

立待も西明りある風の月

ばせをの中へうつす玉虫

接待の水汲男とし若き

女の書た筆見事なり

糊鉢の中は鼠のあしのと

貧乏なれど多きつき合

胸の火のもゆる隙さへなかりけり

施しに焚雪のしら粥

朝の月鷹に追る、鳥の声

ひだりのかたが乳を守る神

毛氈の四隅をとつて畳まる、

遠き馬屋のほふあた、か

葉がくれに一処花の散残り

朝倉やまにながき日の雲

しほらしう松はくれけり散桜

打た畑にさしてある月

牛の背に大工道具の春めきて

夕

花

蛙

夕

花

蛙

夕

飛木

寄木

池白

炬睡

五雪

兔玉

其雪

吐雪

柳帆

飛木

寄木

池白

炬睡

五雪

兔玉

其雪

吐雪

柳帆

飛木

舍柳

木

(四六オ)

(四六ウ)

(四七オ)

(四七ウ)

(四八オ)

(四八ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

(四九オ)

(四九ウ)

草鞋のひもに紙はさむなり

崩る、も出来るも早き雲の峰

瓜のさかりと見ゆる孤家

祈祷者の尊き年になられけり

譲りの鏡くもらせもせぬ

なつかしき匂ひの残る人形箱

前髪とつて商ひもする

野あらしの八角島の町を吹ぬけて

犬さへ住ぬ寺のあきざれ

薪小家に空錠おろす月明り

干鯛だはらも桶も腰かけ

わや／＼と地震もしらぬ男共

御通り前にかけかはる橋

此花が咲ば世間の暖に

頭巾を脱で植る草苗

渦ひとつ出来て春めく流れ哉

萩の若葉にわたる日の色

雛売が来ると囲炬裏もふさがせて

ひろげてもつが傘は持よき

朝雲をしばらく月のはなれかね

まれには里へ鹿の聞ゆる

畑うちや百こといふ年の睦

けふる田葉粉も長閑なるそら

うぐひすの心まかせに鳴かれて

墨画ばかりをいつも楽しむ

雨もやみ月とてけふの人出入

舟よぶ声の耳にたつ秋

柳

木

柳

木

柳

木

柳

木

柳

木

柳

木

柳

木

柳

五雪

其雪

飛木

五雪

其雪

飛木

木父

可推

父

推

父

推

父

引鶴や漣もなき海のうへ	潮花	はつ春の花やうち寄波のひま	井眠	雨ばれや笹の葉にほふ梅の花	霞山
足袋に小砂の這入あたゝか	千ふね	武士の未練にくれぬ山ざくら	井左	うぐひすのはつ音聞けり右ひだり	方行
梅柳屋敷まはりの垣結て	花	狭間から女の顔や帰る雁	淡叟	祭祀に日の近よるやふちの花	若州遠敷 千翠
あらくなりけり樽底の酒	ね	橋だてやひと隅かゝる花の雲	松隣	咲そめておきな花や水のうへ	越丸岡 路江
廿日月よほど寝たるにまだ闇夜	花	花の夜や今明る夜の一寒み	其瓏	宝葉にさはるや風のすこしづゝ	河内 稻海
露に扇の骨ばなれする	ね	末広をふたに雑煮の辞退哉	林曹	松が根に一株づゝのつゝじ哉	古鏡
		七草や手はおろさねど惣がゝり	都春	出もどりて又出る朝や初ざくら	不二門
		花に月さはる様子の有て散る	伊丹 曲阜	苗しろの青芽踏折雀かな	茶楽
		医者を温泉へともなひに遣る二月哉	池田 慣斎	月さしておく深くちる桜かな	左栗
		曙の雲にすがるや藤のはな	有馬 柳圃	するこのまた手に付ず御忌の鐘	山城和東 叢富
		春風にふかれどまりや釣小舟	琴風	梅散て聞気になりぬまつ風	太認
		口に梅啜てわたる野川哉	乙丸	月かげは小風も有やうめのはな	慈弓
		春雨や朝はしばらく鳴雀	淡水	杭を打おとにのがれて帰る雁、普賢寺	半山
		照過て海からくもる桜かな	楓江	見るものにしてはつれなし春の雪	魚鳥
		昼の気のちらで花ふむ月夜哉	卜梅	雁かすむ中やきらりと一雫	雪屋
		露うけに出て見てゐるやふく寿草	兵庫 薫秋	松風の夜明つくるやはつぎくら	老波
		うぐひすや羽遣ひもせず枝つり	須磨 容肅	ゆるぎ出る水に添ふ也浪ひとつ	淀 鶯語
		黄鳥に廻つて居るや寺ひとつ	予州松山 木長	ちる花にもどる折なし風山	青祇
		かげろふや磯つたひ行料理舟	嘉扇	眼につかゝればふたつ鳴ひばり	素琴
		落たのと木のつろくせぬ椿哉	大淵 松涛	あふれ出る清水ふみけり花の陰	素友
		如月やまだ乗にくき駕の内	肥隈本 雉溪	竹曲て垣ゆふ頃や梅のはな	凡池
		葭垣の崩れて久し白椿	五辰	塵ひとつ巻て伸出る蕨かな	嘯窓
		ちりながら花にぬれるや花筵	筑福岡 竹里	接木して気遣はしさを歛つかひ	伏水 岳鳳
		古寺にわめき下りけりさくらがり	斗丈	わら灰の眼には入てや鳴かはづ	紅園
		居眠りを誘ふや東風の吹はじめ	宇逸	散かして山に声あり夕ざくら	呑池
		畑の土乾く齋のあたりかな	奥笹川 如水	笑ふより外なし屠蘇の酔心	鳥羽 梅南
		はつ夢や身に相応のことばかり	半両	まだ雪の降日もあるに春の風	如柳
		朝風呂のあがり端なり梅の花	如鳳	神前に一羽残りぬはるの雁	仁正馬淵 喜楽
		ほんのりとして慥なり梅の月	竹樹	かゝやきに薄雲消て初日の出	磯山 夜有
		朝は日のさゝぬ戸口のやなぎ哉	可申	箒にも軽うあたるや花の塵	雲対

かすまれて砂運びけり土手普請

乙声

遠山は曇つて風の居りけり

一居

花ひとつ筒によくのる椿哉

可松

浪ばかり有て風なしはるの池

伊庭 鳥乙

御降や二日も済で麦のうへ

町家 芋丈

七くさのうちの親子よ芹齋

夏見 舍好

心よく遣ふ手水やうめの花

和鳴

咲そろふ日も荅あり梅の花

柳青

かきためるほど足もつや蛭ぶね

一紫

よくくくの雨よ木に来て鳴雲雀

田川 寸斗

初空や雲の横たふやま昌

矢守 風雪

朽野や入口青きこぼれ麦

吉地 仙風

木も竹もゆれずくれけり春の雨

坂本 葛雨

馬は眼をほそめて通る柳かな

草津 李道

としくくに水近うなる柳哉

石嗽

釈迦ひとり泣顔はなしねはん像

石雄

恩きせて供につれけり花の旅

董丈

見て置た古巢のうへに雲雀哉

吉一

案内もなしに通るや花の庭

其翠

金屏にたゝみ込る、柳哉

楠雄

黒羽折赤服着や花の友

玉脂

永き日の油断に暮を、しみけり

大津 九齋

味も香もしらでとしくくふ齋

砺山

はつ曆御つら明きはしら哉

幻栖

起くくに鳥見る日也はつ椛

東蒼

提灯におくれてもどる花見哉

セ夕 無咎

喰足らで花に成たる水菜哉

豊浦 可陽

めつきりとくれゆとりつく椿哉

日野 素測

黄鳥にもる日もあるかやぶのおく

一嘯

花の夜や寝をしみて又起て出る

堅田 柳斐

咲いそぎ散いそぎして野の桜

ワラ園 楚讓

夜鶏も時はうとふて居にけり

一化

日永さにまけて立けり小田の鶴

千融

白うをや水際までは水の色

未引

銭もうけする人もあり花の山

竹涯

咲にけり見にけり花の散にけり

飛梁

花の香ともにもるや初瀬でら

太田 梅父

ちるけしき持たで散けり雨の梅

高島 麦村

枯芦にかかるき音あり春の風

錦水

畑のと違ふ水田の蛙かな

杜月

白魚にはるかおとるや伊万里焼

舞雪

湯の滾るおとにわする、余寒哉

節羽

泊りぶねして貰ふたる齋かな

彦根 いはほ

若水やまだ汲先はのかぬ闇

玉潤

木の俣やかけ流したる風の骨

北ノ庄 蘭兮

黄鳥にそつとおろすや銅盥

矢橋 流川

雁鴨のほかに仏のわかれかな

土山 虚白

屑すてた処おほへて芹齋

信楽 不二雄

出いそぎに尻もちつくも花見哉

楓下

こんもりと白う日ぐれる桜かな

芦岳

ぼつちりと星あらはれつ花のうへ

旭下

散はなを左右へわけてやまの水

鷺洲

山居

雨おとも苦にせず聞や時鳥

全

花なくて見飽ぬ門の柳かな

武州鉢形 斗六

連翹や散そこなふて雨になる

我蝶

東雲や一声寒き雨の雉子

小園 花染

松島を見下す寺の霞かな

雪山

京の地を二丁はなる、雲雀哉

文明

春雨にほろりと柏の落葉かな

一好

静さの雲にあるや朝ざくら

平村 都泉

いひとれぬむまみの有や山桜

、我野 梧石

花に寄老がまことはよそくし、竹沢

鳩芝

永き日の流れしてしるや筏さし

播州 春朗

人里へ流れとゞくや山ざくら

蝶二更 大瓠

渡し出て野に広がるや春の人

撰有馬 蘭朝

真直にけぶり立けりはるの山

嶺雷

ゆふぐれて雨をはなる、柳哉

重興

落止る椿や笹の下明り

雪魚

松なくばゆふべはしらじ藤の花

淡州 世栗

家にして乞食のもどる柳かな

老雀

咲せたき枝は残りてやぶの梅

予州 雲岳

盛る度に火を打かける雑煮哉

臥鷗

杵音の届てぬるむ小川かな

肥前大村 渚月

菜の花や扇をかざす丘のみち

雨笠

磯の家は後窓なし啼蛙

白禾

雀子や一夜二夜は巢に戻る

茂竹

むづかしき手品も見えぬ接木哉

之同

夜にして小一里出たり花明り

日向 一風

旅支度揃へば見たき桜かな

篤之

午時中に桜戻りはなかりけり

宇兆

藪くらくなるや梅見た眼の移り

月雄

山の雨時雨ぬおとはなかりけり

梅賀

梅を見に往た夜はづる、枕かな

蘭翠

春の夜や寝やうとしたり惜んだり

梅朗

夢にまで見ることにして花ご、ろ

竹苞

淡ゆきやまたかけかゆる小鳥かご

路及

小風呂敷提て芹摘よその人

釈一 堆

はつ花や酔も尽さず醒もせず

正葩

寄付のない山国のさくらかな

古人 明之

(五九〇)

太箸の手ざはり嬉し荒削り 長崎 甫田

鞍はらふ馬の埃りやはるの風 下ノ関 敬風

掃うちば手にも乗たしふく寿草 勢州津 梅曦

黄鳥のびか〜とするくもり哉 山田 樗山 (六一オ)

余処に鳴うくひすまうや小時 南勢時雨丘 琴水

仏事しに行やさくらの散ぬうち 月樵

梅が、や直すつものりの壁の破れ 花友

注連引てゆすつて見るや松の花 秋斎

かたよせてあれどあぶなし田螺がら 籬夕

ひと声に友の鳴出す蛙かな 筍孝

黄鳥の鳴移ふや池の面 花栄更 五葉

てら〜と波の動きや春の月 琴松 (六一ウ)

それで行鳥の羽風や花の散 春篋

追かけて吸殻ひらふ汐干哉 可楽

雉子啼や東雲すける壁の穴 雌鳳

屋根からもころげて来たり落椿 卜亭

中〜に世をのがれても桜哉 狐玉

藤咲やすれ〜になる上りぶね 困鳥

山寺の朝のけぶりや初がすみ 夢笛

無造作に松の皮はく男猫哉 洗枝 (六一オ)

あちこちに法螺の稽古や薄霞 豊後日田 雪村

春もまだ月の淋しき芹田哉 竹徒

一寸した瀬を懐のやなぎかな 一葉

鶯や日のさす枝によりもせず 寄井

とび切て一朝寒し花ざかり 秋蔦

春の日や手拭かぶる馬のあと 丘州

咲ぬ気で居れば散なり遅桜 一丈

梅咲やかつ〜乾く土細工 五笛 (六一ウ)

梅折に座敷を通す階子哉 榎月

うぐひすや藪ふかきほど声のはり 季蘭

氏神の鳥居の前やはるの風 五景

山吹や笥破れてもる、水 松月

白うめにむかふ外山の朝日哉 兎水

日ぐれから風も少しおぼる月 梅柳

開帳の済だあととなりちる桜 如的

退屈な座を出て東風に吹れけり 五柳 (六三オ)

枯枝もちからなるや梅の花 西山 如々庵

舟賃に万歳舞ふて上りけり 吾淵

子供手に飴り直すや雛の膳 漱石

若草や鶴の歩行たあともある 竹邑

斧と人かはる〜に霞みけり 高田 鶴歩

見通しの馬場筋白し梅の花 松雄

手埃りを膝に振ふや花の本 筑前上座 方井

うかついて居られぬ顔や春の雁 砂丁 (六三ウ)

川一つ前に打見るさくらかな 梅志

貫はれて折にこまるや梅の花 対山

朝起の見付て居るやか、り風 霞外

居つても聞る、ものをほとゝぎす 備岡山 孤山

雀子やはじめて下りる白のへり 越后堀ノ内 梅村

揚ひばり風に流る、機嫌哉 長丘 竹詩

有明の月やおぼろの夜が残る 能七尾 林藤

磯ふりの海松めを海士が子の日哉 越ツルガ 才甫 (六四オ)

行灯へ虫の来かけて夏近し 江州高島 楚蕉

打おとの耳に響くや瘦ばたけ 留江

むくおきに誘ひ人の来る桜かな 柘雄

藪中や黄鳥ばかり日のあたる 梅居

梅さくや少し出来たる野の心 卓屋

日の隙や今朝の荅が花になる 樗風

此中で生れたやうに花の鳥 白雄

夜に入て一楽しみや花に月 八幡 花屑 (六四ウ)

寝とまりはせねども花の出茶屋哉 松柏

梅を折間またせる渡し哉 花鳥

わたしては帯しめ直す手鞠哉 平木 李卜

さくらちる日やうす雲のはなれかね 大森 蘭丈

眼の邪魔をする燕や河岸通 勢州 桐一

日よけにもなる葉のありて散桜 夜白

咲花に垣根づたひの月夜哉 越中放生津 子送

春の雁人に見られて立にけり 梅遊 (六五オ)

気の付ぬ処に早し梅の花 昇斎

棧に似たる柳や淵のうへ 松甫

窓先に山鼻見えて春の雨 真弓

梯のかはらぬ松のみどりかな 伏木 李郷

うぐひすにともし灯一つ残しけり 所楽

君が代や自由に運ぶ花の山 吉久 其宣

立下りの日影も広し春の鶴 文水 保久亭 (六五ウ)

紅梅やつい眼にかゝる膳の塵 洛 来青

趣のある方へちるさくらかな 衆芳

水茶屋も有たあと也遅桜 春香

板に挽丸太つたふや雪雫 梅丸

咲満て雲も動かず花の山 途牛

行春をしばしためらふ湖水哉 其桃女

火縄もつ人に立よる花見かな 古入 蒼虬

駕昇の肌おしぬいで花見哉 全 万籟 (六六オ)

うつろより雨けぶらせて初ざくら 梅價

雉子追ふてはしる焼野の煙哉 岱年

野に酔て町へ這人も春ごゝろ 杜鶯

山ざとやあたら桜を垣の外 南溪

網しらぬ鳥の世界や遅ざくら 有節

いさ、かな雪間見たて、きじの声 岱美

朝風呂に入てから見る桜かな

余の島へ下りそこなふな夕ひばり

梅通

谷深うなだる、おとや笹の雪

可明

南天の青葉こぼる、余寒かな

芳英

鶯ひとつはや舞あがる霞かな

枝月

泥水にび、つくふねや春の風

菊圀

戸を叩くおとの淋しや花の中

里遊

黄鸝や町家の中の鶴の森

荃涼

買って置机の松も子の日かな

馬朝

夜はおとのさへて明るし春の雨

雨翠

樵花客屋

馬朝

古さとや梅さく頃の一どまり

梅石

やま吹や水につゞきのひさしかげ

万丈

もどりに柳わすれて初ざくら

孤柳

野のひばり聞えて寒き二階かな

巽池

よく見れば一重ばかりや散桜

寿堂

翌もある花より花の吹雪かな

風光

遠慮して二布も干さず窓の梅

文翠

ちる日から掃除やめけり庭の花

翫鳥

橋だてや浪に松ふくはるの風

若雅

誉らる、柳にくらし一つ窓

梅室

月も日も見えて桜のさかり哉

麦浪

古郷の若狭を出て再び都の

梅室

長閑さや遠山里の朝ざくら

百仙

智識に袖をならべて

如頼

ちる花の見ゆるやう也夜の舟

吾雀

加茂川の水に塩出てさくら鯛

如頼

見広げて戻る野山や春の月

重泰

つみのなきからすの声や花ざかり

九起

山ざくら見付て足のかるさかな

豊丸

草津の駄駒井氏什物活人石はそのかみ

九起

今咲た花から落す雫かな

可納

栗本郡栗のもとより出たりと聞て

九起

うぐひすに首かたむける雀哉

山里

ものいはぬ石に幾世や月とはな

九起

花に来て加減のくるふ料理哉

政雄

長閑に見ゆる朝夕のそら

砺山

門ひとつ梅百本のやしき哉

かうち

孤家は飽まで雉子の声聞て

玉脂

ひと居りして塵はくや花の宿

霞筵

酒のまぬ日は一日もなし

李道

連翹は幹のあぶなき盛かな

風阿

土器に空豆売も身過なり

董丈

降中へ子を呼出すや親燕

北鷗

地に鼻つけて犬の乞る

石雄

畑の雪きゆれば白し梅の花

大椿

夜明ても果しの付ぬ碁の勝負

石嗽

ありくくと山澄切て朝の花

此山

拝領余間に寺は貧しき

脂

馬場先の一木の花や咲ぐもり

松雨

鳴立て居れど静なみそさゝあ

山

蓬萊の山かげ遠し夜の壁

禾明

しのんだ事のかくされぬ雪

文

梅が、のあと先つよし松の風

仙歩

恋ゆえに義理のある子を里へ遣り

道

行水に朧のこしてはるの月

篤明

東海道は目にた、ぬあき

石

(裏表紙見返し)  
(裏表紙)

京四条通寺町東へ入  
御摺物細工所  
近江屋利助

ありける。

(序四ウ)

底本 立教大本  
校異 月明本

備岡山 半化堂孤山拜書

(序二ウ)

花供養 上

【校異】月明本、直書き題簽。

はせを葉の陰に家造り、その露をなめ、其花をもてあそび、大人のみづから九起とならるゝは、世にこの道の巨臂とかしづかれ給ふ。祖翁をふたゝび九原の下に起し、世の誹士を鼓舞せしめむとにや。

今茲遠忌を修し、をちこちの駭客集群すと。又山海にさへられ其思ひを得ざるもあれば、こゝにふた巻の句集をあみて国々くに送りぬ。そをひらき見ばまさしく像前に向ひ人々におもてを合すにひとしからむ。予もさはりありて至らねど香研の間に座ながら

(序五オ)

(原題簽・上巻表紙)

(上巻表紙見返し)

花をもつて供養し

詞を以て遠忌を追ふ

つとめたるかな法筵席上

二百余人、文あり句あり。

集会終りて華のかげ

月のもとにいさゝかその

趣を序し、筆を投

じて雁と共に古郷の

空に旅だちぬ。

能登正院 春藤鳳兮稽首

(序一ウ)

花に清香あり、月に陰あり、香を尋て花をもて遊び、陰によりて月を修ふ。されば翁像に供養し奉る。

菊花のほへる如く東西南北路の

くまゝまで行はれ、花の咲満る

ごとく世々に枝はり、としぐくに

さかえ行は、げに翁の恵みにして

其匂ひにひかれ、其陰により来る人

あまたなるは、又九起うしのいさほにぞ

(序二オ)

祖師世にいませし時は、花のあした月のゆふべ、東山双林に隠者をとびて柴の戸の句あり。翁世を去給ひて、其地に尊像を安置し、南無庵と号し、世々正風の道場とはなりぬ。ことし百五十回忌にあたれば

(序四オ)

諸の風土爰に集ひて、水亭に蛙を聞、月閣に花を遊び、元禄のむかし想ひいでられて、夜すがら南無阿みだ坊と供養し奉る。

(序四オ)

播陽 水音室霞村謹書

(序六ウ)

今天保の春、祖師百五十とせの遠忌を修し、其光りを万代にかゝげ、其流れは行水のたゆることなく世にひろがりゆくは、祖翁ふたゝび九原の下より起出玉ふにおなじからずや。おのれかゝる折に逢ひてうしのいさほによりて芭蕉ばの露のひと雫をなめみんことをうれしみて、この集のはしに筆をふるふことしかり。

(序三オ)

防州室積 婦岫庵閑雲謹書

(序五ウ)

吉備笠岡 塚本淡亭拜書

(序三ウ)

蕉翁者、一世偉人也。不幸而不能伸其鵬翼超然、逍遙於塵外其所吟嘯成誹歌之軌則其徒崇奉之称正風焉。海宇芳躅所及有廟有碑、香花不絶矣。嗚呼盛哉。色然誹歌春翁之余喟也。不可以語翁之平生矣。今茲癸卯歲適丁、翁百五十年之遠忌爰春三月某日洛東芭蕉堂宗匠九起開法筵、予其英靈四方来会者、二百余人、吟藁若干卷即授梓人鈴遍伝之同好梓成、九起与予言余風夙葉翁之為人是以不敢辭、謹序。

(序六オ)

大村藩 金谷福田賢撰

【校異】月明本、金谷福田賢の序文のみ無し。(序六ウ)

芭蕉翁百五十回忌法筵

於洛東円山安養寺端之

寮天保癸卯春三月十二日

正式俳諧

暫時は花のうへなる月夜かな

池のながれのひろがりしはる

どの家の巢にも燕のすみ付て

かざりてとほる馬を見に出る

気味よしと真向にうける朝嵐

葱にやつた水のほちく

縁高にいはひ残りし氷餅

返事もかけぬほどに酔けり

はやる衆をさきに立せる旅巧者

田へ行たけばかゝる細はし

冬の来て風呂屋始る浅茅生に

ものおもひなる肩の膏葉

捨られぬ文のかさ見し小引出し

鐘も太鼓も降てきこへぬ

作事場もはやすみくは草のはへ

下りかさなりし鳩の餌ひろひ

湯気のとつ茶殻をほかす朝の月

淀の祭に門はにぎはふ

不遠慮に高うほしたる仕舞蚊屋

手あらひ水のかする釣をけ

雫してよりもつかれぬ藤の棚

雫子の出這入うすき敷垣

伏見やき筵につみし雛の市

鍛冶の炭灰の風にまくれる

(序七オ)

百僧にまんぢうひとつ素湯ひとつ

借美

藍しほり出す帷子のあせ

宇逸

きのふまでよねと呼れし顔もせず

鳳兮

窓さしむかふ隣うとまし

鶯語

わびたれどいつも酒ある欠徳利

卓丈

鮎買ふとて惣くがたつ

瓢石

待かねた入舟つゞく事はじめ

夜有

爪をいためる竹のあつかひ

虚舟

かりた儘軒にわすれし臼の埃

枝月

蜻蛉の羽の風に鳴りけり

此一

月の出で足をはやめる野辺送り

有節

芒の伸てみへぬ制札

瓢翁

田も家もほりぬき井戸の養ふて

桃室

白牛はたゞ弱くおぼゆる

万丈

ひとむれは尾張道者の元気よく

松雨

跡さきばかり残る秤の目

仙歩

日ざかりに水をうたせて猶暑し

禾明

ふるさかけ香を火にあてる也

豊丸

うき夢をさます妻戸の鈴の音

文雄

聖霊棚の月に露けき

杜鶯

あらしもつかや釣草のひよろくと

蝶九

酢茎の壁に秋の蟬なく

伯也

おき土を踏ならし居るふところ手

重泰

来さうな鎗のよこ町にゆく

百仙

松ばかり見へてそこらは花の塵

九斎

説法すめどまだたぬ鶯

溪梅

にへあがる蕨を水に打あけて

拾五

普請なかばに泊りとりこむ

月坡

裡からはすぐに出来る、鳥井前

東邸

干潟になれば波のさからふ

烏都雄

(二オ)

子規なかず夜ははや明しらみ

鶴寸

喰ものもなきあばら家の内

寿堂

つき出して相場をうつす遠目鏡

梅南

ひまさへあると銭で髭ぬく

松蘿

十月も末社めぐりのちらくと

梅丸

しろき薔薇の小はる咲する

自来

縁付て久しうはめぬ琴の爪

南徳

そくひてさせばうけぬ盃

柳水

みじか夜の月は淡路へ入かゝり

惟草

ひとつ螢の消くくにゆく

露竹

臂をはることさへならぬ雨の駕

貞哉

遊びつゞけたくたぶれが出る

如柳

慳貪にいふても母はだましよき

一斧

百万遍のこゑがきこゆる

馬良

腰かけにお茶のお火のともてなされ

魚道

くちた榎の雲を産なり

省甫

沢山にとれた鯀のはかり売

其桃

湯治の留守のいとゞ日ながき

島寅

撞初に鐘のかすむをめでたがり

政雄

つりゆくはなの土こぼれけり

林曹

幕などを打て聳入待ようす

柳涯

飯をしまへばまくらほしがる

菩提

夜はながうなりてもはやき月の脚

砺山

楮をさらす水のひや、か

無右

残る蚊の格別おほき離れ家

陶年

拌みによりし浦島の笛

米友

めんみつにはけば久しき布袴

北鷗

哀ぎらひの愛想もなき

孤柳

人声のすれば寝転ぶ橋の番

乙雅

松にならびの柳かれけり

梅石

(四ウ)

みそさゝる飛日は雪のちらつひて 半山  
 とゞける状をさがすふところ 三嵩  
 うすべりでふるひ畳をかくすなり 鼎  
 ほした鯛のわるくさき風 如連  
 露の中へ鞭くれて通りぬけ 流憩  
 峰うつくしく澄のぼる月 世岐  
 あした売くろ木東ねる親子ども 不染  
 湯が沸たやら螺をふき出す 老波  
 にがりさし過た豆腐の色とみて 風光  
 ふれのわりとは遅き行列 雲萍  
 きながらにどてらの破れつゞくらせ 淡節  
 寺子かへせば小淋しうなる 木容  
 木版も上手にうてば殊勝なり 月樵  
 剃たてあたまたいたく日のさす 九花  
 高々と見えて専し花の雲 夙也  
 ひかりいやます道のわか草 執筆

冬籠り春着ひとつの針仕事 遊之  
 だまされて喰た鯉に味つく 花溪  
 朽た木をまとふて転し草かづら 玉脂  
 明寺ばかりおほき境内 草良  
 出席に十日余りの月の旅 涼呼  
 わづかな酒でしのぐ朝寒 里恵女  
 雁はまだ見ぬに小鳥の早わたり 甘水  
 紙すく家の別なたてかた 如風  
 花守といはるゝほどに年老て 孤山  
 土器ほしたむしろかげろふ 篤明  
 七曲り八峠こして日の永き 史也  
 わるくさうなる海苔の屑肥 古来  
 今の間に吹かはりたる乾風 明良  
 屋根をしまへば足代をとく 亮曠  
 さかなやはいそぎ帯やは永ばなし 初六  
 素性のよさにおく直りする 道僕  
 夜更しにたのみの蚊遣り消にけり 雨香  
 雲色ばかりみせるから入梅 楽李  
 綱引の手をくれになる舟の脚 羊我  
 時分はづれた茶漬くひけり 素六  
 丸葉のきゝめをしばし待ころ 常也  
 状では埒のあかぬそうだん 桃五  
 窓ひとつ有て亥中の月をみる 映門  
 おくふかくして鹿もきこえぬ 梅廬  
 宝寺たゞ白露の玉ちりて 半谷  
 草鞋かけて竈の下たく 墨雨  
 仮名がきに心おぼえの用は足り 其山  
 響のくせに響えらみする 杏齋  
 塩包手際にをりし重の上 月泉  
 何を買ても目利こひけり 雪映

戸をくれば沖の小鳥は鼻の先 雀村  
 さむさになるゝ山鳩の声 喜楽  
 神送り済した空にひるの月 蕙逸  
 駕をおろせば皆がつくばふ 閑嶺  
 二つ三つ茶碗うかせし水手桶 梅民  
 わつた薪をつみ立てほす 昇斎  
 ふり捨て出て行船も見えぬ花 鳳朗  
 長閑なりけり放參のかね 執筆  
 席上手向  
 読経のこだまに花のかほりかな 来青  
 皆人に影あり花の上の月 梅室  
 木の下の道明らけささくらかな 杜蓼  
 ひと雫身にしむ花の薫りかな 近江 砺山  
 はなの香にむせびて拝む会式哉 九齋  
 なく雲雀たえずあげるやけふの御忌 世岐  
 ほど遠き鐘したはれて夕がすみ 烏都雄  
 雀子を逃すもけふの供養かな 米友  
 花をみた心の恩やかざす枝 島寅  
 雲霞そへて手向む山ざくら 陶年  
 影更て清きさくらながらかな 拾五  
 備れば殊勝にみゆる桜かな 省甫  
 ゆるされて汲けり花の下流れ 千草  
 まどひなき道の広さや花の山 遊之  
 たてまつる花の香をしる雫かな 花溪  
 むかしから替らぬ花を手向かな 馬原  
 手の垢をさらしてみや滝の花 無吾  
 なつかしき真葛がはらや花の雨 玉脂  
 花もちて手向ごゝろの実生かな 旭下

翁 柴の戸の月やそのまゝあみだ坊  
 九起 露におもてをみせる葛の葉  
 虚白 出水ともいはず静に秋かれて  
 鷺洲 くひものばかり売のこりけり  
 楓下 ありくと簾にすける駕の内  
 和鳴 しばらく蟬も鳴ぬ日ざかり  
 生化 門畑は瓜とさゝげのつくりわけ  
 卓洲 とりちらしたる輪かけのあと  
 松月 本腹はしても気儘に寝転びて  
 芭青 しつぱり降た雨の中ばれ  
 山丈 裏表なき田上上の山のなり  
 馬原 白ひく歌にむかしこひしき

燃とほす竈のしたやはなの春

海外

たちばなに花の匂ひのそふ日かな

天遊

まよはぬは日の力なり花の道

宇粟

夜の明はいつでもよきに花の空

芦岳

遠浪のひかりを引や山の梅

平山

何処までも流れを汲や山ざくら

秋竹

朝けぶり横切土手の柳かな

不二雄

朧夜を声にしてなく蛙かな

鳳朗

人かはり花いく春の供養かな

文外

その儘に手向ておくや庭の花

鷺洲

何処からの手向ぞ花の閨月

武州

五渡

いつまでも絶ぬ清水や花の奥

流芳

谷々々に雲のひそみて朝の花

楓下

何処からの手向ぞ花の閨月

武州

五渡

いつまでも絶ぬ清水や花の奥

都岐雄

一筒に手向てゆかし木瓜つゝじ

柳斐

百里来ていたゞく花の雫かな

能登

鳳吟

花の香を誘ふやうなり京の鐘

筑前

古の光り何処から見ても花の露

昇斎

花びらを吹も仏のゆかりかな

林藤

心なき袖もぬらすや花供養

虚舟

けふひらく花も有けりひがし山

桃谷

秋たつとしらるゝ風や身にあたる

桐芽

梅からかはやく林やはつぎくら

飛木

当ありてをればさくらの匂ひ哉

可松

雲ひとつもらさぬ花の詠めかな

稲波

小流をしたふて行や花の道

播磨

風流の花の手向や十二日

里童

花の跡池見廻れば水輪かな

生化

見残した山のおくまでけふの花

古谷

としぐにひろがる道や花の影

蕙逸

ちらぬ間も散てもはなのほひかな

備前

瓢翁

襟かずもたゞしてあをぐ桜かな

古来

花の香のいつばひになる日の出哉

喜楽

花の香や山松風のためならず

晋水

旅のまゝ呼入られて花の中

椿年

たてまつる花に明るしひがし山

虚白

花の陰水もつきそふ匂ひかな

備中

淡亭

常たのむ椎にももるゝ夏の月

佐渡

かくあらん古へぶりやはな曇り

浪花

花の香やそのまゝに百五十年

孤山

けふ咲た花を手向のこゝろかな

越中

はつぎくら雪をみた眼のさめぬうち

桃室

前におく扇も花のほひかな

九花

としぐや心尽しも花の陰

東邸

花は皆一重に見ゆる月夜哉

淡叟

花のなき処も淋しや盛り跡

備中

淡亭

仰よる花やむかしの香をしたふ

布山

一夜もる空や都のはな明り

鼎左

くれかゝる花にもどるや峰の雲

丹波

月樵

手向おく水やちる花月のかげ

保久亭

岨にてぬれ尾ふりけり朝の雉子

其山

水音や盛り尊き花一本

丹波

蓬雨

冬の日のさすや一日かさの上

和鳴

鉤さげてさくらに祭る小笠かな

素屋

燭の灯の只薄ぐらし花の下

丹波

大年

散そむるさくらも鐘のひゞきかな

卓洲

はつ時雨ほどちる花を手向かな

井資

時雨ねど心にふるや此ゆふべ

丹波

楓処

波よけて露ひく草やけふの月

乙良

撞かねのゆれ込はなの盛りかな

伊予

草臥た処を手向や旅の花

越後

雲帯

古風なる茶摘の唄を手向かな

習之

待し日の花たゞ中でありにけり

映門

握らるゝほどは折けり草の花

丹後

千丈

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

時雨せぬ袖こそなけれひがし山

惟草

魚臥た処を手向や旅の花

丹後

松露

翁忌や粟津に運ぶ時雨空

竹之

粟津野の雪やをしへの道を行

逸測

楓臥た処を手向や旅の花

丹後

魚道

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

花の香によこたふ香の匂ひかな

英父丸

握らるゝほどは折けり草の花

丹後

魚道

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

梅丸

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

晨支

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

晨支

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

晨支

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

晨支

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

晨支

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

ゆく春をしぼるでもなし袖袂

晨支

握らるゝほどは折けり草の花

伊勢

桐一

霜雪とかさねてあつき光り哉

厚薄

はせを忌や朝から雁のなき廻る	利涉	はな散た跡や松風くれの風	山城	松杉に匂ひもたせて花静か	柳涯	(一七ウ)
手向るや百五十年の枯尾花	竹苞	手向たる花の明りに蛙かな	半山	咲てから今に曇らず花の空	乙雅	
ちりし世のこもる手向や枯尾花	正葩 (一四ウ)	手向るや人のをしまぬ山ざくら	老波	ひとくもりして落付や花盛り	溪梅	
時雨より百倍うれし花の降	周防 閑雲	花に手をひかれごゝろやひがし山	花馨	御光りのとゞく処かはつざくら	風光	
窓で見るこゝろになるや秋の月	長門 芳水	月雪の種のごはれてはるの草	月舟	日のはじめ松ほどあかぬ色もなし	重泰	
淋しくもおかしくもあり翁の日	出羽 蘿月	今も世に枝のひろがる桜かな	嘯窓	峰ごとにかさなる花の光りかな	百仙	
凧のよすがらとなふ念仏かな	陸奥 二丘	花の香のいつまで薫る袂かな	如柳	思ひ出す庭のかたみの桜かな	政雄	
持よれば花も数あり翁の日	英泉	張かへた障子もはなの手向哉	洗来	けふまでは雁もかへらず京の空	馬良	
行灯の有明さむしかへる雁	讃岐 風志	おもかげをしたふ心のさくらかな	如水	尊さにしさるや春の草の上	志外	
咲満て居るや翁の塚のはな	越前 耳洗	尊さやもう幾年の花の陰	梅南	けふの目を忘れず花の手向哉	松雨	(一七ウ)
おもかげと思ふも今や花の月	瓢石	水霜のおくに手強し山桜	文翠	うか／＼とふむも尊し花のかげ	孤柳	
四つ五器に花もるけふの手向哉	遠江 龜測 (一五オ)	年／＼や跡しのぼるゝ祖師の花	文翠	いくめぐりするや手向の花の枝	英雪	
三月を小春にしてや翁の日	伊賀 か、し	今更に散も尊とし夕ざくら	岱年	御備へのもらひ人おほし草の餅	万丈	
はる雨の中にしぐるゝ様子かな	安芸 鷺秋	幾としや花に尊き置頭巾	杜鷺	膝をればつめたくなりぬ初ざくら	自来	
春もなほ時雨るゝ音や松の下	豊後 雪頂	花すみれ御像の膝に置申	有節	みあかしの尊くうつるさくらかな	如蓮	
持よりの気やすくてよし翁の日	豊前 雪村	月に尽せぬ代々の翁かな	梅通	振向ば人の来て居る桜かな	鼎	
黄鳥の御像に向て初音かな	近江 可推	山椒に眼を覚さばや花の内	雨翠	ほめてから先手向るや花ざくら	三嵩	
花よりははるかに遠し水の音	正甫	黄鳥も常の日に似ぬ引音哉	南溪	黄鳥の銜や池の雨あがり	鯉玉	
		鐘のなき野寺の暮や雉の声	黙池	たなびくと思ひしがちる桜かな	菩提	(一八オ)
		とも／＼に通夜を勤む花の宿	不染	行雁も一夜あかして御忌の庭	禾明	
		ちるさくら塚も動くと思ゆるかな	枝月	捧るやつかねる程の花の枝	仙歩	
		像前に膳具を寄付し奉りて	芳英	御座近く鳴やうぐひす閑子鳥	篤明	
		海苔の砂御歯にあたらぬ様にして	荃涼	はしくれに居も嬉し花筵	雲萍	
		居合すや花を手向る遠忌の日	若美	遠のけど花の香さらずひがし山	山丈	
		眼を閉て春も枯野のけしきかな	若雅	錦しく花の台のかほりかな	松蘿	
		ゆかしげに衣打なり花の奥	北鶴	茶をうるや花守といふ顔もせず	道僕	
		けふ待て花さく春の草木かな	梅石	御在世もかゝるさくらの月夜かな	木容	
		黄鳥も下りてなきけり塚の前	此一	捧るや臚気ならぬ松のはな	明良	(一八ウ)
		月光の下かげまでも明りかな	卓丈	居ならんでつく手に寒し花の風	杏斎	
				花の香やつとむる事の身に余る	梅民	

花のかけ行届きけり御法筵 淡節

はなの香をいたゞく月の光り哉 閑嶺

十一日

花結て御像に遣ふ筈かな 九起

十二日

御望みのさくらにしたり汁鱈 全

(一九オ)

武藏

正月や夜ふけて明し門の音 江戸 風外

空高し囀る鳥もむかひあひ 得蕪

燕の来て葉になりし柳哉 祖郷

人すむと見て行雪の小藪かな 氷狐

松風とき、しは夢かつり干菜 遅流

聞とめて障子あくるや落椿 流芝

灯ともせば秋たつ色や植木市 起久守

ひや／＼と苔ふみ来れば牡丹かな 平山

摘しほの来しや茶園の樹の揃ひ 伯遠

卯の花をたのみに人の端居かな 溪斎

新畑や藪のなごりの梅一株 五株

雨だれの音に忘る、余寒かな 氷谷

初はなと見るも二朝三朝かな 如風

よせて来て霞となるや潮の先 露郷

竹や木に結付てある灯籠哉 余力

ちる方に足のす、むや暮の花 万古

春寒し三十石の舟あかり 東溟改 了枝

花ちるや黄昏さむき波の上 松笠改 鳥吟

名月をかくしおほせず白ひ雲 〃

うごく度露のひかるや朝桜 秋香

秋立や曆をみればきのふより 白扇

さくらには貰ふたやうな日和かな 涼川

隣りでは明りのはやし若夷 麟芝

畑とのおもふた藪に餅の音 其年

墨田川月は冴るにくれの不二 扇要

左義長や川をへだて、ふた処 千枝女 (二〇ウ)

正月や土器したむ青松葉 南枝

白魚やひまなくとれてかさのなき 波同

山中も田あり畑あり梅の花 青和

井の端にこぼす若菜や夕雀 知雪

鶯や雨に二度寝て聞はづし 一具

落か、る日受の山や花ざかり 鉢形 斗六

草の芽の早ひ処にさし木哉 南々

さめきらぬ炭竈に降時雨かな 寄之

水のうえこぼれて梅も開けり 目沼 五渡

正月も今は二月ぞ待れける 鳥吟

くれて長閑な軒の雨音 祖郷

川水にゆれる杭にも草もえて 万古

鴉の糞の孤にからびる 吟

土白を手なれて作る月明り 郷

あぶらのおほくとれる榎の実 古

半分はまだ生て居る釣の沙魚 吟

見習ひなしに本役のさた 郷

植すこし当れば紙の遣ひよく 古 (二二ウ)

もらふた前でわけの眉はけ 吟

呑真似も一座の客に顔立て 郷

水すれ／＼に初ほたるとぶ 古

店順に鳥居の内の掃除番 吟

気のつきやうの遅き茶の饌 郷

素状ならばさんで遣れる美濃便 古

雲はあれども花にさす月 吟

なぐさみといふた蚕に人雇ひ 郷

山の雪解に柴売も来ぬ (二三オ)

居たやうに咄す連歌のき、覚え 郷

おこる突眼にくらひかた向く 吟

陰膳もけふから跡がもう廿日 古

余りのわたも入る、不断着 郷

寒声にわらひの交る曲り角 吟

積だたはらに立し高張 古

満汐になると何処やら匂ふ也 郷

足弱ばかり揃ふみちづれ 吟

絶まなし湯の沸てある念仏堂 古 (二二ウ)

一枚あてに買しまくり画 郷

ひき出しのしめりて明ぬ薄月夜 吟

木犀の香もさかり過けり 古

馬の血に門の粉殻はき寄て 郷

捫るたばこのとかく粉になる 吟

人中になれねば物をうるんがり 古

はる、とはねの見ゆる駕の戸 郷

どの枝もけだかく花の咲みちて 古

両の手をおく膝のあた、か 吟 (二三オ)

陸奥

もう外は摘れる垣の木の芽哉 坂ノ下 茶三

昼降た軒の雫や天の川 〃

正月や仕かけ仕事のしまひ切 斗南

柳から一手になりて花見かな 其骨

朝雛子のほろかけうつや初霞 二本松 埋山

はせを忌や背戸の蕪の引はじめ 〃

調子よくきけば聞ものほと、ぎす 夷菊

時雨ねばちる事にせぬ木の葉哉 梅井 (二三ウ)

小障子のかげは六日の菖蒲かな 邦泉  
 岩にものかひて別る、清水かな 鼻端  
 山吹の間なしに動く流れかな 虚窓  
 萍や根のあるものとおもはれず  
 落る日の又ひと明りある尾花  
 おもしろく礫はしるや厚水り  
 初がらす明ぬ内から起てまつ 白川 山雄  
 行秋のひつそりとして暮にけり 福島 桑湖  
 盃や日は入はて、花あかり 杉田 英泉  
 逆巻しなりに氷るや滝の水 仙台大原 江三  
 ひた／＼と雨から落る清水かな 三朝  
 笠かむるやうに暮れけり翁の日 一得  
 うしろから下戸おしのける火鉢かな 琴和  
 遠のけば花に埋まる梢かな 志計里  
 花ごゝかたつかぬ間に四月かな 舟岡 逸舟  
 わかれても向ひあふてもなく蛙 一ノ関 竹人  
 余処の雛見て来て飴り直しけり 梅雫  
 今汲だ水もぬるむや梨の花 友之  
 門松もはや三日月の詠めかな 太竹  
 降ほどは木かげにもなし春の雪 赤城  
 元日や元日だけのふじの山 斗及  
 春雨に遊びぬれたる子供かな 可仙  
 黄鳥にほどよき今朝の障子哉 蘿月  
 約束の朝から降よ花の雨 天年  
 艫の声の吹かわりけり春の風 南居  
 雲くゞる風のちからや風 大桜  
 水底に動てみゆる柳かな 梅香  
 軒に手のとゞきさう也春の月 万那  
 見おろして汗を入けり水の音 宗古  
 ところ／＼雲おきそへて桜かな 浅香 芝英

山の端は降やうすなり初時雨 春月  
 仮橋の普請も出来る二月哉 若松 精雅  
 くれをしき日や山吹の花の上 三春 風志  
 松島の上に一瀬や天の川 帆中  
 青空やをり／＼ちらす樹／＼の雪 会津 宗二  
 奇麗なる道や清水の行どまり 笹川 如水  
 水口のすじは残りて水かな 郡山 一仙  
 落たまる木の葉に浅し池の水 扇々  
 桜から山ははじまる紅葉かな 館水  
 昼からは窓の際なり置巨燵 隣々  
 驚立て残る蛙や田いつぽひ 長哉  
 伸た日のかげも見られて虻の声 津軽 如萊  
 長閑さや終日動く池の水 子椿  
 春雨や使ひの先の長ばなし 孤立  
 松ありと見へて音する霞かな 雪磨  
 暮る日の静さみせつ藤の花 一雅  
 二三枚はなれた田にも春の雁 見立  
 黄鳥や笥してとる遣ひ水 以中  
 持込の客する寺や山ざくら 松月  
 とりあげる扇のさきや初日影 松前 而先  
 初空の柳に明るけしきかな 耕山  
 ささかける朝日や梅の二三輪 椿呂  
 行灯にひとすじ来たり春の風 此魚  
 乙鳥や魚の飛だる水の上 格炉  
 菊咲や藪の中なるひとつ家 玲花  
 万菊がすがたに似たり花ぐもり 田名部 希石  
 黄鳥の雫おちけり笠の上 梅溪  
 声なくばしらでやらうに帰る雁 湖光  
 黄鳥の地にもおとさぬ初音哉 草雨  
 どの鳥も黄鳥の音にかくれけり 和友

御祓から夜なく晴て天の川 南部 箕年  
 ほのかなる声のつゞきや初鳥 多代女  
 おとろへに驚かれけり更衣 箱館 草瑠  
 草臥を肘におぼえし柳かな 遊車  
 朝から風のつよきはる雨 可得  
 乙鳥のよごす板間を拭とりて 半両  
 世話しき中もすて、出歩行 如鳳  
 さむ／＼と明りひろがる竹の月 如水  
 おびたゞしくも残る蚊の声 可申  
 別荘は障子の重き露じめり 得  
 恋おもしろく馴る、温泉の里 車  
 律義なるものとして妻にとりあげて 鳳  
 ひとくべ焚て鍋のもり見る 両  
 ちり松葉たゞ年ふるき模様也 申  
 汐に踏込馬の前あし 水  
 かりそめの月影ならぬ鬼子母神 車  
 萩も芒も白う穂にでる 得  
 からころと鴉さむがる秋の暮 両  
 白を廻してこぼす味噌豆 鳳  
 一しきり花も淋しき花盛り 水  
 水とろ／＼と霞むたそがれ 申  
 存分にあげたき花の戸口かな ナベ山 八十八歳 如楽  
 たのまれて嬉しき花の案内哉 八十七才妻 多里女  
 虫なくや今さつぱりと掃た庭 七十三才男 如松  
 ころりつと世はかはりけり落葉山 七十才妻 運女  
 ちさひのも山の数なり花さかり 六十六才男 如考  
 寒さうなけしきも見ぬ紅葉哉 六十三才妻 里与女

(二四ウ)  
 (二五ウ)  
 (二六ウ)  
 (二七ウ)  
 (二八ウ)

出羽

年玉にもらひはじめや露の臺 最上 吟霞  
泊りまでわけなく提し野菊哉  
御降や芹も薺も青むほど 漆山 二丘

能登

水底に雨もつ花の曇りかな 鶴岡 生化  
窓ふたつあれば一つは月と梅 稲波  
野のおくに山をおし込さくら哉 文雄  
聞て居る笠の上行千鳥かな 飯田 花雪  
引汐に崩るゝ畑のけしの花 鱗化  
猿は木に蟹は岩這ふ月夜哉 泥尾  
手の胼もかゆし雨までぬくい春 千路 呂鳳

(二九オ)

驚て鳥たつ風の柳かな 貴存  
ちるものとおもへば寒し花の奥 七尾 林藤  
をし鳥や一潜して跡ながめ 竹塙  
咲たより蒼うつくし桃の花 淇洲  
花と葩煎よくおぼへけり池の鯉 桐芽  
高低もなき門なみや茸あやめ 花弟  
我宿はせまし団の遣ひやう 如柳  
うすぐらき杉の木立や冬の月 雪山  
五月雨にもてあましけり作り滝 鳳兮

(二九ウ)

川上や花の中なる水車 九起  
山雀ひとつ高き囀 惟草  
陽炎に茶を乞ふ程の家もなし 鳳兮  
荷になる簀も着ぬをよろこぶ 起  
じりゝと寒さに向ふ月の照 草  
稲の匂ひに噓が出る 兮  
八方に道の付たる角力小屋 起  
昼もてらゝ棚のともし灯 草

笠竹と算木の音の隙なくて

なじみの家に声かける舟

丁子湯の汗をふかるゝ浴衣がけ

月にそれたるほとゝぎすなり

つまづきて小付を落す眼くら馬

膝の埃りを払ふ紙店

積ためて般若を買ん鉢の米

分てとつてもふとき樋水

いけ大根雪かき退て堀出し

翌の茶の湯にけふの煤はき

木の雫おち尽しけり蟬の声

筵をもどす麦の手じまひ

地車の埃りおさへに水まひて

御入部あとの人の出さかり

海へまだかげはおろさず松の月

何処に居りても冷りとする

しめる戸もなくて引ける鳴子縄

雲おくあたり葛城の神

下りにも逢たき人にのり合せ

やくにたゝねどためすつじ占

うれもせぬ店も明おくる年の市

暮ぬうちからさゆる寒月

牛繫ぐまでの榎も朽にけり

たちどまりては吹立る法螺

忌詞しつた在所のかたくなに

ゐろりふさひでこつぱ片づく

けふの雨田にも花にも降てよき

一連づゝにかへる草つみ

(三〇オ)

越中

薄ぐらき内に戸明て梅の花 伏木 和鳴  
五月雨や蛙鳴出す屋根の上  
菊の香や明はなしたる青畳

間ゝへ麦蒔立る菜畑かな

万歳や旭に照らす裏通り 所楽

惣咲の花に照りあふ朝日かな 李郷

けしの花ちるを央の盛りかな 富山 無外

としゝや心尽しも花のかけ 布山

【参考】当該句は14丁表と同句形で再掲。

花ざかり折かげもなき月夜哉 放生津 子邁

猫の恋窪にうすき月よかな 春齋

見あげたる松も見下し蕨とり 芦山

草の露こぼれる夏の朝の山 東岱

朝夕の雲もはなれぬ桜かな 二山

松風の音しづまりて礎かな 里風

ちらゝと咲て淋しや山の花 東雄

せり合て露も掴まん螢狩 昇齋

黄鳥は主ともなり客となり 霞堂

時ゝに窓の曇りや降落葉 里北

心にも物のいらぬやとし忘 魚津 可春

菜の花や畑より早き土手の花 滑川 東邸

万歳や舞ぬさきにもひとわらひ 如齋

盃をうければうつる桜かな 有明雄

四つ辻のおのずと出来る野梅哉 水橋 定尔

走り出てなかな余寒の雉子かな 吉久 保久亭

ありたけが騒ぎて涼し竹の風 龜田 応泉

山里や雲さへ来れば雪の降 森下 花朝

ひとつでも舞へば立派な胡蝶哉 友徳

越後

薄ぐらき内に戸明て梅の花 伏木 和鳴

五月雨や蛙鳴出す屋根の上

菊の香や明はなしたる青畳

間ゝへ麦蒔立る菜畑かな

万歳や旭に照らす裏通り 所楽

惣咲の花に照りあふ朝日かな 李郷

けしの花ちるを央の盛りかな 富山 無外

としゝや心尽しも花のかけ 布山

【参考】当該句は14丁表と同句形で再掲。

花ざかり折かげもなき月夜哉 放生津 子邁

猫の恋窪にうすき月よかな 春齋

見あげたる松も見下し蕨とり 芦山

草の露こぼれる夏の朝の山 東岱

朝夕の雲もはなれぬ桜かな 二山

松風の音しづまりて礎かな 里風

ちらゝと咲て淋しや山の花 東雄

せり合て露も掴まん螢狩 昇齋

黄鳥は主ともなり客となり 霞堂

時ゝに窓の曇りや降落葉 里北

心にも物のいらぬやとし忘 魚津 可春

菜の花や畑より早き土手の花 滑川 東邸

万歳や舞ぬさきにもひとわらひ 如齋

盃をうければうつる桜かな 有明雄

四つ辻のおのずと出来る野梅哉 水橋 定尔

走り出てなかな余寒の雉子かな 吉久 保久亭

ありたけが騒ぎて涼し竹の風 龜田 応泉

山里や雲さへ来れば雪の降 森下 花朝

ひとつでも舞へば立派な胡蝶哉 友徳

春雨のおさへて居るやくれる空 堀ノ内 松舎

わか草や荷を付た儘牛の寝る 梅村

帆ばしらに当るな闇の子規 中条 幸水

こつそりと師走の海の月夜哉 宗三

涼風や竹田を走る肴売 桃里

戸を明ている、小春の日かげ哉 菅田 里奥

白雪の上に春たつ日影かな 十三天 友耕

降さうな空で持けりわか葉時 糸魚川 宜雨

鐘のなる方へむひたる尾花かな 連童

居ならんで見るけしきあり翁の日 宜春

鴨ひとつおいて霞の水田かな 白里

田にありし舟も客待月見かな 白乎

降かして人の傘さす春の雨 鳳吹

をりをしみしては畑踏菊の花 公水

宗家から風呂の使や菊の花 其誠

後の月ことしは済とおもひなす 曳尾

鳴やうの宵とかはりし蛙かな 西海 雪彦

おく山や老鶯とおもはれず 雪江

猫もはや余処あるきする今朝の春 潤夫

初雪や近付の竹二三本 田海 三甫

散るかたにばかり人立桜かな 水原 春室

灯籠の下に咄すや雨やどり 西疇

浮草の葉裏も見せず秋の立 梅逸

低う来て空も思はずほとゝぎす あき帆

脱捨のつたなくもなき紙衣かな 乙良

音絶てうつにもまさる碓かな 春室

ひと手にふける橋ぐの月 あき帆

組にあまる鱸を切わけて 西疇

呵られながら丁稚口きく 室

綱ぬきをくゝり付たるふる葛籠 帆

土のこぼる、壁のふすぶり 疇

蛇に卵とられて鶏の叫なり 室

坂をひかへた町のだくぼく 帆

紙入の嵩ほどもなひ夏羽織 疇

互ひに睦をいふてわかる、 室

ひやつきの何処やら残る瘡の跡 帆

建たるまゝに明てある寺 疇

月影に見ておそろしき籠渡し 室

ひとむれ雁の早うすみつく 帆

味もなくからひばかりの今年酒 疇

羽黒の札をのせるぬり盆 室

垣をして人を通らす花の内 帆

摘て間もなく枸杞のもえたつ 疇

日のさすや二重に別る雪の山 見付 茶山

嬉しげに四五尺あけて鳴雲雀 宇弘

川骨や花を抱へる葉でもなし 北洋

静さや夜かげを持てちる桜 高田 菁莪

通るだけよけて霜ある小橋哉 李潮

膝におく袖のしめるや後の月 季山

雨だれを伽に寝転ぶ春の宵 新濁 有木

牙かへりてもちとづ、の日脚かな 疇

いつも此小橋あたりの齋かな 卓冽

行ものに相違なけれど春の水 鼎湖

二軒して跨がらすや川原菽 風舎

花の山小笹に迂る処まで 姫山

田の上をひろくわたるや初鴉 佐渡

さはがしき竹の夕日や天の川 新穂 周齋

法螺吹て出る雪解の在所哉 小木湊 真哉

戸口まで霞は深し牛の声 百花

古池の水底見たし冬籠り 上野

をと年の種も咲けり鳳仙花 確氷 素来

明たれば松にもどりぬ萩の音 下野 孤角

魚はねて舟に這入やけさの秋 芦野 楓閑

おさへたる鼠ゆるしつ更衣 足利 雪堂

初秋のかけがさすなり繩すだれ 宇都宮 其翼

初空や鶯も雀もしらぬもの 松本 栗人

春雨や滝の音にも眠らる、 信濃 な、子女

風にのる雲雀の声や野いつばい 三都里

白梅をつめたく思ふ夜明かな 更科 ノ左

ぼつちりと梅の雫や笠の上 鶯巢 魁甫

子規空かきたつるおもひかな 十日市 一猪

ひとつ出た蚤のさはぎや御鈴の間 相模 建美

竹の根の朽た穴にもはるの水 花水

角の跡毛も埋らぬや春の鹿 榎堂

春雨や旅の朝寝も京泊り 遠江 片瀬 竹里

黄鳥や遠くはあれど藪つゞき たつ女

ほしいほど見当らぬ也露の臺 友永 栗谷

大津から時雨て来たり翁の日 石丘 素石

はせを葉の陰もいく世の時雨かな 米石

長閑さを鷺の見てゐる柳かな 金指 か、し

歩行間に途の啼くや春の風 各和 呼卯

終あさき山といはる、夏入かな 塩井 嵐牛

終あさき山といはる、夏入かな 塩井 嵐牛

終あさき山といはる、夏入かな 塩井 嵐牛

終あさき山といはる、夏入かな 塩井 嵐牛

終あさき山といはる、夏入かな 塩井 嵐牛

終あさき山といはる、夏入かな 塩井 嵐牛

駿河

仰山な降られじたくや雪処

薩摩

黄鳥や朝日さしこむ膳の上

盃もそなへて留守や梅の花

夕立のみえて来るや海の上

ちるまではぬくひ日もなし梅の花

わか竹に催されけり昼の雨

路の臺椿の根まで探しけり

夕立のうらがへりたる月夜かな

袂から出たやうにあり灯取虫

道添のひとつきは黒む青田かな

春の雪つむやぐるりと桶のふち

春雨の下をくぐるや春の水

大隅

咲花に憂やうき世の風が来る

僧正が谷まで杖をはるの風

手ごたへのする程風の鳴日哉

海山やどちら向ても秋のたつ

遠退てみれば雲なり桜なり

若水もくみがちにせむもやひ井戸

より過て雲透になる桜哉

むく起にうつや昨日の残り畑

一本の柳にくらし両隣り

三ヶ日たちぬ小袖の袖だ、み

日向

入る月の端から出たり鉢た、き

水鳥や力なき日の横にさす

簑虫や日あたる枝の冬籠り

露ふかく抱へて萩の夜明哉

急ぐとも見えて人行霞かな

まだ花は力もあるに落椿

一日では足らぬ様なる汐干哉

市の花塵もおちつく夜明かな

小野の炭焚は時雨の夜が急ぐ

風もたぬ間はなかりけり枯尾花

た、秋の行さへあるに遠砧

月いく夜時雨さそふて松さゆる

しぐる、とすればまづ風おとづる、

枝の烏何思ふらむはつ時雨

なに／＼と触て来にしぞはつ時雨

見送のさきに来てゐる柳かな

児と守と別に遊ぶやつ／＼し

たき立て懸敷くづす槽火かな

懐手しても師走のあゆみかな

種粉の水にすみけりはつ蛙

置土かはくすみれ蒲公英

南風雪解の山のみどりして

はしのこなたにおろす替駕

もりわたす月見の客の仕出し膳

ばせを破る、枝折戸の奥

わたり来る小鳥の中の雁の声

画絹の煤を洗ふわらばひ

退屈にしびれ紛らす長咄し

眠りこけたる丁稚おかしき

重箱も山中の温泉の木地まき絵

琴かきならす顔の瘦けり

しら菊の枯臥うへに朝の月

風が替りて氷るため桶

飢肥 素木

遅牛

亀候改 巴石

延岡 月雄

高岡 一草

茶来

雲汀

尚竹

翫二

晴雀

楓扨

厚薄

和声

画考

習之

和声

習之

和声

習之

和声

習之

和声

習之

和声

習之

和声

習之

和声

習之

裏門のきり、と舞てひとり明

永代ふちの江戸のつめ切

かけはしの出来て一際目だつ花

餌さしをいれぬ鳥の長閑さ

干海苔のかはくにつけて香の高き

手にとるやうに見ゆる筑波根

川明の拍子木なりて供揃ひ

火箸ばかりでいえた底痘

よくなれのつひたる銚を買かぶせ

細工上手な祢宜の貧乏

夕顔の棚を釣くる下女相手

腥き香をた、く前だれ

椿市の帰り賑ふ牛引て

銭を出さねばとらぬ掃溜

さしよせる汐に見へたるくれの月

ふつ／＼綿のふきしこの比

本中を祭り角力に売に来て

漁はあれどもたかひ生魚

一日で京へ出られる若狭道

火口しめりて付ぬたばこ火

畚に児のよねんなく寝る花の陰

ゆたかさ見ゆる苗代の延

しぐる、や松に日脚は見えながら

鷗まじりにさはくあぢむら

草鞋を又も馬荷の圖にして

たのまれる度二腰をさす

待宵も見勝手のよき玄関先

ちり、／＼と底冷のする

実の入て踏べりのせぬ今年米

声

之

声

之

、

声

之

声

之

声

之

声

之

声

之

声

之

声

之

声

之

声

竹苞

正葩

苞

葩

苞

葩

苞

近ひ仏の逮夜つとめる  
せつかれてやう／＼出来し紙表具  
竹植てから風かほる窓  
蚤にさへ喰さぬ娘としをとり  
よべど答へぬ利根の渡し場  
狐火のちら／＼見ゆる月の影  
更し鶉の軒ちかうなく  
銭湯へ行器持たる子も入て  
はさみ将棋を負退にさす  
盃にうけたる酒に花のちり  
山葵おろしの匂ふ夕ぐれ

肥後  
行春のゆき草臥て草の雨  
道／＼の花に日くらす花見かな  
たゞゐてもよい日に花の盛り哉  
くれかゝる日にゆとりなき花野かな  
鳥の寝た枝からちるや朝の花  
寒菊に見捨ておくや朝の露  
吹もつれして花になる芒かな  
七夕や月のあかりは山へのく  
見て置た白帆霞にながれけり  
明はやき処とみるや神の梅  
山べりの今朝から白しはつ霞  
常になき我におくれて初鳥  
黄鳥や舟漕出すうしろ藪  
頓て降やうでいく日も花曇り

あるだけの星あらはれて別霜  
小庇も葺て花まつ小家かな  
鮎釣のむすんでおきし柳かな  
黄鳥の鳴て静まる小雨かな  
ならべたる膳にかけさす柳かな  
笥から来る水早うぬるみけり  
朝雨や黄鳥の声ぬれもせず  
赤椿おちてもとの赤みかな  
こぼれ菜の花の咲けり戸口先  
わらふのもこらへ力や二日灸  
川よりもぬるむに早し池の水

奥州

苞

千干  
雪茶  
謹路  
佳友  
礫川  
処楽  
竹月  
竹古

一葉  
有田  
花村  
日田  
花卜  
梅柳  
三岳  
季蘭  
文月  
如白  
主月  
勢雲  
五柳

山のなりこゝらが月の出処かな 二本松 丁酉  
花のあるところへ付る筏かな 両美  
夕がほや面白うなる薄月夜 一旦

駿河 府中 碧山  
美濃 清須 素因  
江州 暁山

豊後  
見るだけの所務なり庵の芥子畑 平川 霞城  
昇る日や霧は凹みに押寄て  
塗蛙に柳さしたし苗代田 簾甫  
まだ寒き夜空や鮎の一瀬こす 芦舟  
雉子鳴や夜かづら残る水の面 古桐  
風なるやけふも一日下り風 芝崎 鶴歩  
年礼をいふて去けり渡し舟 松雄  
拍子なき碓の音や花ざかり 日田 雪村  
すみれ見て居ながらひねる煙草哉 支園  
春風や砂に残りし波の泡 秋蔦  
元日はもう日の永う覚へけり 柳所  
七草やたゝみの上のぬれ仕事 方山  
鳴初て榎木に並ぶ鴉かな 榎月  
天龍の水ますころや桜さく 竹徒

暮ちかく手並の揃ふ田植かな 小倉 紫鱗  
日の出れば捨る色なき紅葉哉 鷺洲  
春の行すがたや瘦る鹿の腹 松風  
手にふれぬ土を翻や福寿草 嵐和  
家ありや煙のくゞる夏木立 梅子女  
まだ深き夜にも紛れず梅の花 黙居  
浮み出る夕山かげや春の水 芳村  
待て居る客もさがすや露の臺 梧堂  
根もなくて流れ出にけり春の水 可推  
嵐山に遊びて  
水底の影も匂ふか花ざかり  
打しらが闇のはし／＼時雨けり  
にぎやかな旭や藤の花雫  
箒の塵のかすみこむ窓  
あたゝかに焙炉の匂ひ時めきて  
かぶりながらに手拭のひる  
宿立て一里そこらは朝の月

有明の心うきたつ花見かな 府中 碧山  
旅人に名処めかすや遠桜 美濃 清須 素因  
つながれて声をからしぬ猫の妻 江州 暁山  
遠慮して鉢のさくらを見る日哉 高島 舞雪  
髪剃て煤はく世話もなかりけり 湖村  
子規てう子のよさや小一時 白雄  
とりあげる箸のゆとりや初鶉 雲州 芋丈  
吸物の蓋に露もつ花袖哉 松江 秋宣  
備中 大井 白鳥

（四三ウ）  
（四四オ）  
（四五オ）  
（四六オ）  
（四七ウ）

（四四ウ）  
（四五オ）  
（四六オ）  
（四七ウ）

淵におとある鮎のおちぐち  
父 蛭

よく招く薄は早う穂にいづる  
父 蛭

留守居ばかりでいつもすむ寺  
父 蛭

百文でかけた連歌のかり袴  
父 蛭 (四八オ)

多葉粉暫時に不二の十景  
父 蛭

小姑のさゝやく鼻をおごめかし  
父 蛭

団扇の紋もひよくなりけり  
父 蛭

車井戸月に涼しく汲立て  
父 蛭

虫をおさへにかけまはる犬  
父 蛭

新蕎麦に熱爛このむ徳利酒  
父 蛭

凶にかきあげて質に出す家  
父 蛭

道すがらたゞ見て通る藪の花  
父 蛭

二の午すぎて鈴のすゞしさ  
父 蛭 (四八ウ)

筑後

地にはやうつひたは折ず雪の竹  
久留米 赤鱗

青空や蝶とも見ゆる揚雲雀  
芋川

月と日やたゞ春風と春の水  
文老

末枯や鳥の吹る、白の上  
山本 文月

桃一枝のせて送るや鉢肴  
本郷 喜永

文月をゆすり出しけり今年竹  
和十

ひと夜さに際立雨のわか葉哉  
遊松

笹山や寒がりさうな月一分  
吐雲 (四九オ)

田の縁のかはく天気や梅の花  
、

子規二階明れば夜明かな  
、

朝起をして秋風にふかれけり  
、

や、暫し見て戸をさすや夕時雨  
、

薪付た馬の霞むや軒の下  
猪ノ口 東湖

石見

供つれた人を見初る袷かな  
川本 志玉

積立て春待門の薪かな  
竹扨

山茶花や二本となくて処々  
浅利 青池 (四九ウ)

吹殻に陽炎もゆる戸口かな  
周防 榑浜 五溪

夕川に余る暑さを流しけり  
小郡 龜享

水茶やの客も名残の夏越かな  
龜遊

出る月の凄さはなれて梅の花  
室積 大富

春の水泡おしやつて汲にけり  
可振

万歳の跡にむらつく雀かな  
梅乙

空高う鷗の飛や春の風  
花兆

裏門をひそかに敲く柳かな  
蕙吹 (五〇オ)

塔ばかり見えるや花の朝ぼらけ  
芳水

初花の牡丹を朝のきほひかな  
龜白

行つめておそろしうなる汐干哉  
菊女

宵月やひらく花の冷ぞよき  
瞻峨

車へもひと筋とるや春の水  
淇園

朝の雪昼の小雨やわか菜の野  
閑雲

名月やみられに來たる池の鴛  
、 (五〇ウ)

妻や子もなき身をこがす螢哉  
風阿

朝がほやいつまで赤き葉鶏頭  
徳島 雨香

夕がほや留守と聞ては這入られず  
梅守

早乙女や京で見馴し顔もあり  
顧什

追風のむかふへまはる枯野かな  
陶居

蝸の山路をすぐに月夜かな  
橘茶

飛ぼたる呼立られて迷ふさま  
友樵

ひと本の芥子の上にも立日かな  
向栄 (上丁・51オ)

【注記】 上段に柱刻・下段に実丁数を算用数字で示す。以下同。

野になくは鶯のまつすり餌かな  
葎冽

玉なえもはやたばふ気か露の玉  
鸞石

夜に入て麦もうごかす春の風  
肥前 天草 正焉

尾のなひが可愛らしいぞ雀の子  
山城 城南 魚鳥

うちとけし咄にもゆる蚊遣り哉  
友斎

照る月の木の間を出る螢かな  
可大

花供養 下 (上丁・51ウ)

【校異】 月明本、直書き、題簽跡有り。

才子の動かすまでや昼の水  
九花

よりさへすれば柱すゞしき  
九起

引ぬひた半紙に藁のちらかりて  
九起

ちからいつぱひ任す猷立  
九起

明である野分の空の月の照  
九起

綿より露のうるはしき畑  
九起

こぼれ穂を拾ふ遍路の荷を下し  
九起

すこし通るがつまな響  
九起

しんくくと泌れど釜のはじまらず  
九起

二階も幕でくらき鉦町  
九起

(原題簽・下巻表紙)

(下巻表紙見返し)

(上巻裏表紙見返し)

(上巻裏表紙)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

(上丁・51ウ)

鼻ばかりかんで紛らすはづかしさ

花 起

入相のひゞきわたるやしける中

蓬雨

但馬

村岡 左和義

櫛もたした腰元をよぶ

花 起

茂る葉のすき間もあるか池に星

千丈

青ひ空七部も持て時雨けり

和田 雨竹(五四ウ・55ウ)

零する榎のうへのひるの月

花 起

鳥立て清水としるや山の道

雲帯

敷砂にすれく梅の匂ひかな

丸味 白雲月

墮して立し鴟の食もの

花 起

晒布干真昼を風のほとゝぎす

南涯

戦く葉の月に静な柳かな

其頼

冬近く一文字笠のうつりかね

花 起

子規なくや淋しき花の跡

松露

花の雨もてはやされて降にけり

丸味 白雲月

ぬれたる銭を手際よくつぐ

花 起

川音や蚊もめづらしき一泊り

九花(五三オ・54オ)

灯のみつともせば夜も霞みけり

大藪 松翁

咲花に椿は落る盛りにて

花 起

届くまで手の伸されず池の梅

成松 呉秀

梅ちりて草もまばらにはへた庭

楽季

古尼独りいつも茶をつむ

花 起

青柳やわたりなれたる丸太橋

青巴

今朝越た野とも思はず秋の暮

西温泉 芋溪

春の日はひるから末も二日がけ

花 起

はるらしき風が吹なりあらし山

遊夢

朔日や不断着なれどはつ裕

標梅

しめる油のよい嗅がする

花 起

一声で戸を明さすや子規

額田 桂眉

くらがりを吹れて歩行涼みかな

魯洲

はらくくと浄瑠璃本をまくり風

花 起

蝶々や花盗人を追てゆく

呉梅

盗まるくせによく咲野梅かな

石恋

枕をさせる天窓おもたき

花 起

黄鳥の鳴崩しけり峰の雲

野々垣 椿水

涼しさの大方みちて汐のさす

弓月(五五オ・56オ)

冬かけて春着をきたる色好

花 起

一曇り持や蛙の声の上

梅隣

黄鳥や夜は雀の中へ寝る

福岡 往我

くれゆとりある雪のちらく

花 起

水筋にあらはれそめし霞哉

観之(五三ウ・54ウ)

春三月絶間なく咲椿かな

和風

覚へよき積穀の馬場のきこく垣

花 起

藪入や傍輩らしき人にあひ

黒井 白燕

切風の律にしめるゆふべかな

閑山

ふとこりかねる文箱の絵

花 起

松引てまだ不足なき力かな

牛河内 野卵

山へ入雲しづかなり暮の花

文十

これこそ呑だ様なる二日酔

花 起

うごめひて土の中より初蛙

園部 一葉

藪入の翌日といふ夜や晴る雨

白仙

とつくりつかぬ舟をとび出る

花 起

子規なくやかくる、朝の月

其流

朝月を松をはなれて霞けり

江上

残る暑さがあつひ最中

花 起

徳したふ机の上や春の雨

其流

くれ切た後もしばらく花明り

柳志(五五ウ・56ウ)

土器にちよつぱり祝ふ生身魂

花 起

青空や雲雀の声か雲の塵

笹山 其通

立居する度に匂ふや雨の梅

午潮

啞としらずに無口ほめけり

花 起

うしろから想ひがけなし花の鐘

保津 半山

潜りくぐり登るや花の山

其叟

遅う宿とつて早立せつかる、

花 起

蝶くの人につつすや朝きげん

耕雪

きのふまで踏れてけふの若菜哉

疎雨

別に聞える瀬鳴沖鳴

花 起

日傘さして日陰を通りけり

湧瀧(五四オ・55オ)

鷹部屋の囲炉裏いぶるや春の雨

芦翠

輪かざりの残る枝から花咲て

花 起

出なれたる処に出るや朝の雉子

官津 吐翠

わがかげを見て水につく胡蝶かな

野水

ひるから遊ぶ種のまき初

花 起

明ぼのや水からはへて花の山

本道

留守番の人を花見のこゝろ哉

志下

丹波

山(五二ウ・53ウ)

扇だけそへてとゞかす柳かな

景丸

人声のやめば日くる、汐干かな

行川

山の形しつかり見せて五月雨

龜山 月樵

散てある花もひとつに吹雪かな

夷白

水音の静な夜なり朧月

夷舟

待てゐた蜚や橋の下をゆく

大年

黄鳥の何か落して水輪かな

魚道

この花もちるかと思ふさくらかな

雨月(五六オ・57オ)

初午や楠の榮る古やしき

未染

秋とてもすくなう思ふ月夜かな

須磨女

松茸ごろの山に入札

木

行ぬけのある庭さきや夜の花

樗田

茶の花の夜寒に匂ふ小雨かな

泉智

経堂も彼岸をかけて出来にけり

柳

藪かげや梅のみゆれば人の家

天外

ひとつやみ二つやみけり遠きぬた

泉歩

帰る車にことづてのある

木

まだ春も浅し垣根になく蛙

芳樹

雁の声きくやこゝろの休まらず

松琴

西風に眼のあけられぬ土埃り

柳(五九ウ・60ウ)

降うち竹の雫や春の雪

梧山

小筵のしめるにはやし後の月

真都雄

引ばる袖をふりはなすなり

木

初東風や提灯けした顔にふく

寸馬

草中にみだれて居ても芒かな

嵐松(五八ウ・59ウ)

湖を前に揚屋の青すだれ

柳

春の雨降やみさうにしては降

野竹

早稲の香や朝は火持のよい苺

若拙

荒神棚にひゞく鈴おと

木

鋤かけし田のさき光る余寒哉

雨柳

山の井の花汲上る日和かな

博多素鶴

はやうから音信て行月の友

柳

万歳の草鞋しめるや舞支度

方井(五六ウ・57ウ)

雉子なくや簀の緒める小笹原

寄木

稲の匂ひに腹のふくる、

木

行灯を消す気もつかず初がらす

角二

借て来た提灯くらしなく蛙

池白

昨日今日底のぬけたる秋の雨

柳

花のかげ日比の望みかなひけり

宇逸

行ちがふ袴の音やはつがらす

炉睡

鳩に喰ものわける関守

木

偶居歳旦对東山

斗丈

春風の吹ひろげたる野水かな

兔玉

ねむたさに桜を折てかざしけり

柳

人顔の見へて来る間や峰の春

石外

一口の屠蘇に酔けり朝ぼらけ

舍柳

きりく舞て這入春の日

木

新井戸も花のもうけや藪屋敷

不白

二三軒見あげる花のすまゐかな

柳似

左義長や小ぐらき空に鶴の声

飛木

旦那寺和尚導く花見かな

花夕

ちらぬ日と散日とあるや梅の花

一步(五八ウ・59ウ)

藪かげばかり消のこる雪

兔玉

鳥は皆寝に行跡や小田の鳴

其笛(五七ウ・58ウ)

長閑さや浅かりさうな海の色

喜泉

前髪を出代りまへにおろさせて

木

裏向ひ川を挟で蜻蛉かな

雨哭

降ものはつけく降に梅の月

其雪

かりた羽織のよく似合けり

玉

日に力なくても枯る尾花かな

一翠

あきかたの初鶏はやく謡ひけり

蝶飛

はたをり一つ根つよくなく

玉

草に身を摺て雉子たつ卯月かな

宇甲

松原をぬけて雉子なく畑かな

呉竹

祭り前木幡の里へ引移り

木

水仙や伐手に登る蟻ひとつ

飯塚

延過て路次に似合ぬ柳かな

木斎

仕立おろしの帯のしやら解

玉

菜の花や小藪切ぬく水通し

三志

夜は町の真中にある柳かな

飛木

血すじから貫ふ娘の氣にいらす

木(六〇ウ・61ウ)

白魚の重き錢ほどなかりけり

梅朝

水に月ありて飛込蛙かな

、

立派にかざる馬の乗下

玉

揚ながら一村越る雲雀かな

雨琴

いく処も煙り立なり花のおく

舎柳

門徒衆の刀さゝる、丸あたま

木

誘はれて小道通るや春の人

嬰糸改

くもりて瀧ののどかなる音

飛木

書肆の丁稚金をよく見る

玉

夕空や鐘の外ふく春の風

可成(五七ウ・58ウ)

雲雀なく家に羽織を脱すて、

柳

透もなく楓茂りて暑ひ月

木

名月にぬれてもどるや畦つたひ

泉砂

手本の藍をにじる手の平

木

蜘蛛のさはぎに膳持て退く

玉

朝寒にほちく落る樹のしづく

左跡

水桶の尻かはかせる昼の月

柳

目に見えて左官の仕事埒の明

木

小階子のかげ捨てあり藪の梅

葛山

水桶の尻かはかせる昼の月

柳

ほつと火を焚石のかげろふ

玉

真向に朝まだ寒き花盛り  
雲雀の声に勇ましき旅

木 玉

あたらしき丸行灯のまはり兼  
隣国から大宮司の縁

一步(六二ウ・63ウ)  
玄里

客事に鮮のかほりけり菊の花  
台所ばかり残る蚊の声

初六  
若拙

かたまりて落るもやさし春の雪

素鶴

千坪の杉の木谷をかたみわけ  
蛍のふへる水のしたゝり

其雪

月のなき野分の空のすみ切て  
坂をぼくく下る提灯

六  
拙

海苔包旅荷の中に用意して

飛木

下駄かけてつひ門口に涼む月  
おさへてもらふ腹のこはばり

雨柳

鱸舟に親子の出るとれ盛り  
丸雪のころぶ門の砂よけ

六  
拙

重ね着物のあひかねるなり

木 鶴

つくくくと阿弥陀が縁を拝まる、  
としに一度はあくる宝蔵

呉竹

朝風呂の入捨てある朔日に  
木履ながらに荷ふ糞桶

六  
、

この度の月見はかたき人揃ひ

木 齋

鈴つけて鷹はなしたる花の陰  
霜のわかれに瀬がはりの音

角二

つくくくと物思ひる齒の痛  
蟬のなく木をゆさぶりに出る

六  
拙

神垣の内は野分の静かにて

木 鶴

見わたしに水田は見えず雉の声  
芽ばる柳のゆれる朝晴

角二

宮守のひとりぐらしに物さびて  
細工のうちに得手な裏打

六  
拙

屋根かけ歩行猿の淋しき

木 齋

普請場の筵も海苔の匂ひして  
揚た荷物はみな呉服なり

素鶴

月によき宿を見立にふらつひて  
はつ松茸をはり込で買ふ

六  
拙

沢山な肴も喰へぬ温泉養生

木 齋

雲ばなれすると風持月の影  
鳴しこりては休むすゞむし

二

洗濯の袷をうへにうちほをり  
しぶくくながら庄屋勤る

六  
拙

娘より親連衆の不得心

木 齋

遠乗の木槿をちらす長縄手  
屋根葺かへの宮うつしする

齋

ちる花に箒を入ぬ苔の色  
ぬるみかねたるとくくの水

六  
、

ぼろつく雨に紅の花つむ

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

いく日して早瀬に出るぞ春の水  
行逢てつれにもならぬ乙鳥哉

六  
、

青すだれ釣たばかりの夏祭

木 齋

はじめ降た雪の三日月  
遠きほど鉦のあはれな寒念仏

齋

廻り道なれど柳の縄手かな  
ものかげに掃目の残る余寒哉

六  
、

箭のうへにほととぎすなく

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

日をかけて手にとるやうや峰の花  
人声にばらつく花の雫かな

六  
、

とり際の大盃をまはすなり

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

山ふたつ三つも重なる霞かな  
今落ちてどれかわからぬ椿かな

六  
、

しつかりと昼も月ある花の中

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

万歳を一吹もむや山嵐

六  
、

降りて来るともみへぬ黄鳥

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

万歳を一吹もむや山嵐

六  
、

降雪の途中で消る柳かな

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

万歳を一吹もむや山嵐

六  
、

爆竹のけぶり明のこる空

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

万歳を一吹もむや山嵐

六  
、

生海鼠うる子供の声も春めきて

木 齋

言伝の端もうれしき宿下り  
ちからを入れて結ぶ帯じめ

二

万歳を一吹もむや山嵐

六  
、

天保十四年

いぶり火を吹て揃るわか葉哉

孤明

長閑さやどれも消たる煙草の火

梧井

夢とさめたる我身あさまし

行脚 禾郷

黙礼の目さきに殖る柳かな

旭水

入口は植た桜や料理茶屋

平戸僧 陶々

竹の雨こちらへはねる風の向

雨笠

柳まで出て橋銭の無心かな

麦紫

笹の葉のはねた先にも氷かな

春潮

けふはしげく夏の鐘つく

素休

半分は花にかくる、鳥居哉

桃雨

田と畑へぬける小道や梅の花

梅左

のして着皺帷子にうつる月

寸龍(六九〇・70オ)

長閑さや行へ見なくす蟹小舟

渚月

寒月やさりともせず汐の引

升仙(六七七・68ウ)

医者は四十も不足なるとし

悠

近道のいくすじもある汐干かな

苔路

初雪や町さして出る小鳥売

山友

船といふ噂さに旅の連かへる

由

眼をうつす松さへなくて揚雲雀

雀巢(六六〇・67オ)

朝風や梢のけふる冬木立

大利

漆くわする鉢のひゝわれ

陶

菜の花や連におくれる一渡し

遅明

大風の糸潜りゆく小鳥かな

洗竹

咲花に手をかけさせぬ注連張て

潮

何処までも松毬ひろふ汐干哉

己省

夜ふれば音も持ちけり藪の雪

梅寿

親のあはれはあさる雀子

月

黄鳥や漸くさむる舟の酔

奇石

氷るまでひゞく夜もあり白の音

双樹

此すじは染屋のごす春の水

我

飛やうの不調法さよはつ蛙

禾堂

夕日にも崩れさうなる牡丹かな

雲峰

なりでもわかる富山商人

同

色くの花も持けり鳥の家

樗山

顔みせて子に落つかす頭巾哉

奈加彦

ものいはぬ中にお西の寺蟲履

筥

存分に御像にかほれ草の花

在京 金谷

雪の戸を入れればゆたかな咄しかな

花吼

手がるく鏡をつかふ上ぬり

笠(六九ウ・70ウ)

瀬がしらで泡もくだけず春の水

豊後竹田在大村 梅後

鶴の来て立て見せけり今朝の雪

寸龍(六八〇・69オ)

日のさせばむさひ香のする醤油桶

郷

戸一枚くるや青田を枕もと

長崎 岱雲

浮雲の山を廻りて時雨けり

素休

おどける口をよける娘気

龍

来る虻の用ありげなり物の陰

二石(六六ウ・67ウ)

折た手をもどしかねけり藪の梅

春月

仕付苧の指にもからむ冬の様

陶

飛く家にあり桃はそこら中

子栄

足跡のなき処まで雪見かな

幻我

曲突けぶらして打豆を煎

由

日埃の目さきはなれぬ桜かな

李邑

汐風のこもる木の間やはつ霞

古由

一先は戻す大工の道具箱

休

持はこぶ馳走も花の明り哉

閑古

蕉翁百五十回忌の法筵を

企ける折から左の真蹟を得たれば

横町ばかりぬかり干あがる

潮

居眠れば蝶のとまるや笠の上

竹友

雪ちるや穂屋の芒の刈残し

古由

て、ら着がへて靱挽にゆく

同(七〇オ・71オ)

黄鳥や一棹跡にさす筏

竹友

水なき小田を鳴まはる鴨

悠々

遅う届ひて値切る状賃

筥

夜歩行や梅ちる道の薄明り

甫旧

畚の緒のゆるみをしめるよりかけて

悠々

目かゝりに古猷立をはりかへて

笠

三月月の広野に続く尾花哉

皿山 橘斎

ほつほと振ふ庭帳の埃

春潮(六八ウ・69ウ)

割た当座のかさ高な薪

郷

青柳にありたき井戸のなかりけり

鳥原 鷺雪

垣越の隣は月をまつやうす

陶々

雨を干花の筵のしきあまし

悠

水祝ひおのれは結句ぬれにけり

石稻(六七オ・68オ)

ころげて露のふゆる脚元

幻我

春の名残をはなすより合

執筆

余寒とて雨にも意地のみえにけり

神代 素羅

ながるゝ飴を袂から出す

行脚 雪筥

黄鳥の跡にはねたる小笹かな

勝本 櫛洲

背戸ばかり見ゆる家並や春の雨

尾蠅

とまらねば佐屋の契も是限り

之同

此声が別れか雁の低うゆく

凡鳥

土かづきながら開きぬ福寿草

鷗夢

とまらねば佐屋の契も是限り

之同

黄鳥の跡にはねたる小笹かな

勝本 櫛洲

ふはくと花に障らぬ曇り哉

長門

淇水(七〇ウ・71ウ)

寝にあがる二階も花の明りかな

南兄

伊佐 玉川

空にやむ風の下るや藤の花

六外

高う吹け糸ありたけは風

鉢の子も秋とはなりぬ麦五升

九虹

泉桂

讃岐

月の出ぬ内にもしろし稲の花

梅にぬぎ柳に着るや月の暈

丸亀 木長

三日月の出てある春の海辺哉

波音もた、ず暮けり春の海

画声

降雪に焚火のうつる戸口かな

あら壁に見事な影や梅の花

探水(七二ウ・73ウ)

汐のさすやうに廻るや春の水

川越は旅のおもひや春の空

松子

石投て溝とびこすや梅の花

田に水の押こむ藪やなく水鶏

、

春もまだ夕陽のなき寒さかな

居残りて骨端見たり梅の花

芳三

をりくは汐もとくや春の草

更るまで大門あけて春の月

海庵

月かけや団扇の音の処く

くれ切て木の間持けり春の月

化友

涼しさや人ひとり居ぬ磯の家

ちる花にまけて着添る羽織哉

大野原 葵園

陽炎や真昼の鶏の声高き

余の木より柳のおほき新地かな

霞柳

紅梅の花に名を呼小家かな

雉子鳴や山一つづ、明て行

雪峰

ひと息をつひて事足清水哉

ほろくと眠たき空や風の音

安戸 塩屋(七三ウ・74ウ)

折かけて匂ひのますや野路の梅

八朔やいつより多き田の雀

白鳥 峨月

白壁のきらめく浦の暑かな

野鼠の巣はあれてあり花萼

高松 砂月

売あしの何より早きわかな哉

涼風やそこにもひとつ帆立貝

朴端

黄鳥や笹に嵐の越ぬさき

加茂川の匂ひをすぐに籠枕

素六

寒菊や葉の色までもうるはしき

稲馬におしもどさる、径かな

阿波

伊予

零して松のやしなふ葦かな

徳島 万像

軽さうに裕着てゐる茶摘かな

万歳やけぶる戸口にさし向ひ

伯耆

接分の一色はやし梅の花

声なかば残して走る雉子哉

須本 魚楽

うちこぼす灯の美しき清水哉

落付て見れば舞ふる雲雀かな

淡路

青空のすけてぬるむや藪の水

苔の雨清水となりて流れけり

涼水

黄鳥の樹うつり軽し淵の上

庭鳥や人よりさきにわかな屑

季雪

みじか夜の戸に吹当る簾哉

お坊主も出てはく射場の落葉哉

露頂

見て置し山みな花に忘れけり

お坊主も出てはく射場の落葉哉

味齋

一ひらも翻さず花に月明り

お坊主も出てはく射場の落葉哉

味齋

富草

芦角

孔照

墨雨(七四ウ・75ウ)

希康

入田 月窓

机浦 禾軒

竹雨

鳥 鷗池

榎士

子昌

松帆 松洲

富子(七四ウ・75ウ)

榎並 如朝

曉梅

広石 楓処

儲香

下堺 梅廬

安芸

廣島 雪頂

鶴居

蘭凌(七五ウ・76ウ)

月昇

たまき女

ひとへ女

紅雨

松声

等才

味齋

露頂

寝工面を付て明たるこたつかな  
折さうな枝をつたふていちごころ

瓜仙(七五ウ76ウ)  
其芳

居ならんだ中にも鴨の眠り哉  
俎にこぼれつゞきし齋かな  
曇りても水いさぎよし花の影

卓尔  
羽林

万歳の舞はじめけり袖に月  
蠟売も雨をふせぐか屋根の上  
霜の夜や浮て静な鳥の音

三蝶  
含光

御影供にはくや白緒の藁草履  
広海にさはるものなし初霞

雪荷  
湖舟

木がらしの跡や出て行松葉かき  
雉子鳴た処に見当る蕨かな

瀬尾  
九峰

蓬葉をむけ直したる朝日かな

何述  
龜卜

習ふたる儘を子供の御慶哉  
遠けれどあしも勞れぬ恵方かな

和友女  
楊里

黄鳥やよく島山になれし声  
藪入の心にくらし行灯の灯

惣社  
素外

ひとなでに寺も樹もなし雪の塔  
寝に行鳩のさゆる大空

九起  
(七九オ80オ)

編かけの飯籬はちけて秋の風  
はつ空や御城下りのかざり馬

其亭  
午中

苗代の水をはなれて翻れ種  
樹の中に伸おくれたる柳かな

連鳥  
桑坡

おち付に紙硯こふ客とめて  
道具畳に水さしの跡

史也

春風や遣ひながしの船の椀  
風立て声のそれ行雲雀哉

公羽  
礼二(七六オ77オ)

辻井戸に朝起見ゆる暑かな  
菜の花や梅の花ほど寒からず

岡田  
不泳

朝顔に露をくばりて消る月  
砂に鳴入る浦のこうろぎ

起也

不二を見る初の駅や雉子の声  
立て間のなき旅人も霞けり

白羽  
写山

時雨るや数のわからぬひるの鐘  
何処となく風香のある弥生哉

箕月  
他石

駒曳が持あふ杓に酒うけて  
たしなき金をかして淋しき

起也

夏山やこぐらき方を人のゆく  
昼寝にも蚊屋へ這入か山の家

呉柳  
春山

冨れども花にさはらず花の雲  
菜の花やさきく(麦の)ぼれ生

香雨  
器月

桐は枝ひろがり安し夏木立  
底ぬけて降月のよの雨

起也

春の日や打広げたる屋敷跡  
人にとふて茄子つくるや蔵の間

撫山  
雪汀

菜の花やさきく(麦の)ぼれ生  
冨のおさまり見ゆる木の間哉

九阜  
白醉

鹿の声あまり近くて戸にひゞき  
武器の番して肌寒うなる

起也

蟬なくや煙草やすみの大工小家  
夜北風吹ころとなりけり綿の花

其友  
老圃(七六ウ77ウ)

ゆふべ見し夢に遠ず帰り花  
昼がほや降ほどの雨地にすはれ

雪楚  
可調

源八と呼ばこたへるわたし守  
着がへばかりの荷に小拳とる

起也

歙したて開く畑の小はるかな  
山吹やあまり馴染のなひ山家

尾道  
萊尺  
風外

出がけから炭売の手のわらはる、  
あはれさは遠音に聞や寒念仏

宮内  
心拙  
柯女

散花の空に消行うら、かさ  
蛙はき出す柴部屋の塵

起也

花の中出てからくらき在所かな  
駒鳥や何をかみわる籠の中

露菽  
如水

水仙や内外につく一重垣  
ぬれ釜の間を合せけり蠟の汁

飯倉  
舜田  
如邦(七八ウ79ウ)

柳には目ざす葉もなし弓始  
風涼しくと何もせざりけり

起也

鳥雲に入や眼さきの時くらみ  
折そへて咲たを覗くつゝじかな

扶桑  
備前

蠟売のすくひ込けり升の水  
風や梢に残る柿ひとつ

庭瀬  
兔水  
菊女

ちぎれ行雲の白さや秋の月  
時雨ても芒の中は月夜かな

起也

鴛の来て住場ともせず町の池  
初空にちよつとひとすじ霞かな

笠岡  
史也(七七オ78オ)

足跡の二段に白し橋の霜  
おく霜や朝日の伝ふ板庇

春暁  
春芳

時雨ても芒の中は月夜かな  
雲へ手の届くやうなり早苗取

起也

鳴千鳥海か山かもしれぬ夜に

五嶺

はつ雪を見れば来にけり今朝の色

暁雲

雲へ手の届くやうなり早苗取

起也

備後

(八〇オ81オ)

釣そめた夜は物足らぬ蚊帳哉

柏葉

水鳥のや、水叩く夜明かな

霞汀

播磨

つもる夜や戸口ではたく下駄の音

花遊

苗代や水折あへばあしの跡

草吟

跡の雁さきに立たり帰るそら

今市 霞村

はなちやる方をよけたるぬくめ鳥

時合(八〇ウ・81ウ)

日のほめき届くや菊の雨障子

蘿石

五六尺のびた儘なり桐の花

阿菊

卯の花のしろさや月のかけた時

青芝

穂に成て葉立の軽き芒かな

甲長

消て来て目さきに光る螢哉

魚崎 曲於

花ざかりけふ来ぬ人の噂かな

如毛

仰山にことしもかる、尾花かな

馬仏

木下闇ぬくき水にも踏あたる

南陽

舟つなく岸や尾花に立煙り

鷺雪

朝顔やたゞの日のさす藪の陰

布国

五月雨や鶉の羽根重き水離

榊月

ちり残る紅葉さそふて時雨哉

蒼蠅

波間よりあらはれて出て雁の竿

北年

二月や田の中までが道になる

美囊 雲樵

眼のとゞくだけや枯野の夕げしき

莊蝶

かくすれば藁も尊き飴かな

芦風

春風を羽先に見せぬ杭の鳶

小坂 芦国

行雁や梢に残る朝の月

飛鳩

連翹やうつろふ外のこぼれ花

涼呼

四つ過や遠眼鏡出す桃の中

志野部 愿泉(八四ウ・85ウ)

掃さしにしては待る、落葉哉

若馳

人待に日のかたむきて閑子鳥

布国

提て来る花にもいさむころかな

高砂 伯也

夜の明て居るや戸際のきりくす

満寿女

裕とり出す瀧のとばしる

史也

湯上りや日の有たけをちる桜

月泉

手向する心ばかりや五形花

里恵女(八ウ・82ウ)

杉皮の束に胡粉の文字書て

涼呼

引てゆく跡に残すや赤大根

雀村 雪英

月寒し椎の落葉のあるあたり

晋水

居ればなほる飯前の腹

国

草種の春を忘れず崩れ岸

宇佐崎 南楠

海へ出る流の末や枯尾花

交水

海苔擣てと皆を追やる月筵

也

松風の音そひ安き袵かな

赤穂 春琴

行水の濁れど白き野梅かな

公木

東風に煙のひくき芥火

呼

夕かげの地にはふ蔦の錦哉

秋峰

手枕もはづして見るや散さくら

万枝

本陣は夏をまたる、浅黄幕

国

朝顔や露をか、へる花の外

拉鬼改 一簣

薫り出す銚子の口や菊の花

田鼠

琵琶なつかしき古郷の声

也

棕櫚植し夜や幸に初しぐれ

市隠(八四ウ・85ウ)

みじか夜や夢にも道のはかどらず

計中

産の後髪はおどろに瘦ほそり

呼

おく露を丈夫に櫛の葉組かな

龍野 牙睡

千鳥なく比や沖にも火のみゆる

乳虎

つひ往てもどる旅の日えらみ

国

松原や夕日に鶉のゆき戻り

楓雨

朝月にみなぬれてある落葉哉

呉風

十月になると畑ほる神の鹿

也

住なれて背戸も枯野の日暮哉

守一

菜の花の中を一すじ流れ哉

瓢翁(八一ウ・82ウ)

米搗車音のさびしき

呼

水仙や隣ながらの一重垣

嵐止

片籠は外におろしてわかな売

一瓢

酒はよく呑るに愚知な人遣ひ

国

水中にわく水みへて冬ちかし

映水

梅が香にそへて朝日の匂ひかな

柳雫

菜を刻む月の夜仕事

也

行水のもどるやうなる枯野かな

壺仙

売たほどこぼれてもあり若菜屑

葦芝

虫籠の中も露けき比なれや

呼

照中をかさなる浪や後の月

言雪

梅が、や軒にやはらぐ風の音

雪集

借た扇を又わすれけり

国

大霜や提ておどろく海老の髭

水月

折ふしは袖にかけさす揚雲雀

月呼

宿札にそへてやらる、花時候

也

出る月を抱へて高し杉一本

花兄(八五ウ・86ウ)

和らかに風の吹けり梅の花

泥蓮

眠り催す風の遠なり

呼

際立てはれ行霧や小松原

梅窓

降中に雨も交りて春の雪

秀峰

呼

山寺は聞てもしらずなく川鹿

寒江

枯枝もかくれて花のさかり哉

麦里

呼

呼

蛙夕

花の香の落つく朝や雨の音

之扇(八二ウ・83ウ)

呼

呼

寒江

どちらへも明手のほしや稲と菊

古蕨

踊り子を出すにもあける大戸かな

凡和

尾張

いさゝかな柳にとゞく霞かな

曾根 為風

陽炎や船の暈のあたゝまり

雲厓

眼はなせばとりかへされず暮の花名古屋

雨はれて鳥も霞にとりまかれ

中尾 捨来

中までも吟味して買ふわかな哉

六厓 (八七〇・88オ)

均もなき背戸から月の浜辺哉

空とのみ見る脚元になく雲雀

日延 甘水

菜の花の黄ばむ夕日や野一ぱい

雲鷲 梅忤

雀麦や道ではなくて水のすじ

永き秋も寝たらぬ老の労かな

伍柳

山吹やよほどおくある水の音

猪ノ目 北水

行春や巻ぐせ残る蔭の端

蕪干す枝から咲や梅の花

蕪丸 (八五ウ・86ウ)

谷ひとつへだて、結ぶ霞かな

其月

山道に車の跡や萩の花

飛やうな音して落る椿かな

大瓠

中高に海の見ゆるや春の月

杼蕪

一声を井に響かせて子規

寒き夜や月もる庵の枕もと

稻磨

もてなしで所望もならず菊の花

田義 馬得

朝ばれや董ちらつく上り坂

花守りの子は人なれて遊びけり

春朗

若狭

参河

寒月にさはる物なし不二の山

ながき夜にみじかき夜着の寒哉

梅睡

黄鳥もうしも鳴けり山大路

小浜 微箏

竹の子や一処にはへて長みじか

二番手に流れ誉けり花の本

季風

露の葉にしばらく雨の車軸哉

幾山

岡崎 卓池

欄干へ廻れば低し藤の花

素涼

雉子なくや山からつゞく小松原

兎月 (八七ウ・88ウ)

連翹や折すくめたる木のふとり

折たればだまつてもどる野梅哉

春朝

黄鳥のかくるゝ処か金が崎

菘園

二夜三夜鴨の付けり春の水

黄鳥や駄荷の通りにひとり霞けり

古溪改 北梅

加茂川の水汲込ではつがらす

梅堤

たがへしの出来て殖けりなく蛙

のら狐見る間にひとり霞けり

古谷 (八六オ・87オ)

声にその地はなれて帰る雁

嵐朝

武蔵

出雲

雪踏でおりに麓の時雨かな

母里 亮曠

雨すこしあしろふ花の風情かな

淡水

行灯に向ふてさびし春の宵

余処へ降雨見て並ぶ日傘哉

安来 秀然

花売の根じめそへたる小菊哉

府中 東升

人たけに余る枝折さくらかな

骨折て咲せたはなや福寿草

松江 茶匆

夏の月山の端遠く明にけり

素坡

江煙りのしてほのかなり朝桜

産捨し鶏の玉子や桃の花

九江

立まではしらずに居たり雪の鷺

英峨 (八八オ・89オ)

菜の花の散と葉につくあした哉

花提て逐く来るや雨舎り

花遊

加賀

菅谷

花のなき山から花の曇りかな

ちる程は散て椿のさかりかな

深水

御手洗に汲れ残るや桜の実

金沢 大夢

雨ひとよくに雁の帰りけり

まだ明ぬ夜を花に鳴からず哉

辰風 (八六ウ・87ウ)

ふと畑を立たる雁の名残哉

柳壺

花のなき山から花の曇りかな

鈴虫のひとつつ冴るや虫の中

竹台

いざよふ間なくて鴉の騒かな

石禪

散花に風ふかぬ日もなかりけり

行灯まで曇りを持や鳴水鶏

湖帆

黄鳥をさくや手をつく庭の石

二葉

居た下を野風の通る桜かな

一枚に浮て解けり田の水り

龍尾

今朝の春寒さ忘れて一眠り

素吾

庭掃ば蝶ぬけて行垣根かな

いかめしくもの喰さまや松の内

大社 川苔

黄鳥に足とめらるゝ礼者かな

左白

愛想に埃り掃ふや雛の店

日のさゝぬ内見て廻る椿かな

五跡

残る灯の愛度数や明の春

大聖寺 丹嶺 (八八ウ・89ウ)

出代の夜をわがまゝに更しけり

梅持て無沙汰の門に寄にけり

荷文

大聖寺 丹嶺 (八八ウ・89ウ)

左白

蝶飛や薄着の沙汰も五六日

梅持て無沙汰の門に寄にけり

荷文

大聖寺 丹嶺 (八八ウ・89ウ)

左白

船からも弁利の地なり梅の花

梅持て無沙汰の門に寄にけり

荷文

大聖寺 丹嶺 (八八ウ・89ウ)

左白

日和過て花にもめあふ筵かな

梅持て無沙汰の門に寄にけり

荷文

大聖寺 丹嶺 (八八ウ・89ウ)

左白

池上 完車

梅持て無沙汰の門に寄にけり

荷文

大聖寺 丹嶺 (八八ウ・89ウ)

左白

形義 (九〇オ・91オ)

黄鳥にうしろ歩行や藪のへり  
塗箸のにくき臭なり梅の花

原島 葆光  
石原 柏峰

咲満て瀧に横たふ桜かな  
二日降雨に濁らず秋の川

雲軒改 耘乾  
凹峰

宵しばしはなれかねけり月と梅  
稲を喰ふ雀みながらゆく燕

萬雨(九三ウ・94ウ)  
一嘯

長閑さや思はず寝たる柴の上  
画にかひた如くなりけり咀の梅

孝沢  
松親

くれる野や花の明りをなく鴉  
闇の夜をか、へて花の明り哉

常楽寺 宝水  
田川 寸斗

薄羽織ぬがしたがるや亭主振  
晴たのは糠悦びか五月空

郡山 毘雄  
三輪 南海

切風に追つめ際や風の風  
長閑さや何やらくさき町逃レ

梅香  
思静(九〇ウ・91ウ)

山水の音や黄鳥あそばせる  
ながき日脚に休む畑小家

龜亭  
可柳

うかされて夜の面白き新茶哉  
荊残す鎌に音あり百合の花

河内  
南郡 墨居  
金葩

蝶くくの盥を舞や朝日和  
いとなく花になりけり山の雲

玉香  
秋翠

さし捨てしたる柳の芽を吹て  
言伝たのむ人をおはゆる

寸斗  
柳亭

木に毬をのこして落る小栗かな  
陽炎の立や干川の杭の上

古鏡  
稲海(九四ウ・95ウ)

気まかせに動く水田の田螺かな  
浮蛙中に鳴ぬも居たりけり

不逸  
月笑

雁より早うわたり来る鴨  
雁より早うわたり来る鴨

斗  
柳

霞まれて餌もむさばらぬ鴉かな  
沈むまでおちて間のある椿かな

自來  
松眉  
不二門

鶴の子と共にうつくし春の草  
出がけから力みゆるや風の蝶

一英  
不分

ふひと来た人の長居や春の雨  
蚕桑つく窓のあた、か

蘭兮  
如梅

初ものといふけしきある裕かな  
木末とはいはれぬ萩の砂まぶれ

伊丹 太乙  
曲阜

髪結てよき子になりぬ今朝の春  
さし際もみへて汐干の嵐かな

田翠  
伊勢

藁まひたばかりに麦のよく肥て  
笠の埃りをうち叩きけり

兮  
梅

ものいふて去る鳴子の仕舞哉  
衣裳して焚火にむれる柳哉

兵庫 董秋  
須磨 容尔

けふの日もくれるばかりや閑子鳥  
見さだめて居れば卯の花ちる夜哉

山田 桐一  
梅西

市の跡月出るまでの西明り  
新酒の酔にそこら眼にちる

兮  
梅

手あたりのよささうに引小松哉  
わき立て清水ともせず花のおく

柱本 都春(九四ウ・95ウ)  
浪花 松笠

障子越絹さく音や今朝の秋  
朝雉子の洲ざきを走る日和哉

川崎 東宇  
平木 不一庵

川幅のひろがるかげや春の月  
永き日や堤に出張るその日茶屋

北庄 蘭兮  
小幡 正甫(九三ウ・94ウ)

散花の方へ漕ゆく小舟かな  
もひと雨まつや桜のちりおし

藤丸  
梅里

着たといふだけのはれなりはつ裕  
春風の色にさはるかさ、濁り

津 梅曦  
四日市 探齋

吹矢鳥吹そこなふて霞みけり  
満汐や舟からあがる高灯笼

高島 麦村  
松月

春風や波も力の入らぬおと  
黄鳥や雪交り降朝の雨

米老  
蘭秀

まくるほど風は吹ともあさ霞  
朝ばれの瀧にうつるやはつ桜

岐蝶  
霞汀(九二ウ・92ウ)

月の出の風にもちりし一葉哉  
夏近うなるやむさくさ江のぐるり

節外  
楚蕉

うぐひすの声にもわかる都かな  
連翹やはふ子に届く枝のさき

其珀  
荷涼(九五ウ・96ウ)

老たやら黄鳥軒を伝ひけり  
雨遠き空と、のひや秋の月

関 月岡  
近江

日の埃り薬にさ、へて福寿草  
かすまれて峰だけ白し比良の山

宮川 松巢  
草津 石雄

山吹や笠脱でおく椽の上  
飛うつる枝のしなへや花に鳥

李曉  
井竹女

盛りまで一日も降らず花の雨  
吸がらに芝煙らしてはつ桜

夜有  
一居

山路にてやすく出たり後の月  
山路にてやすく出たり後の月

長浜 五朗

飛うつる枝のしなへや花に鳥

井竹女

傾くにまた人の行月見かな

花鳥

山路にてやすく出たり後の月

長浜 五朗

飛うつる枝のしなへや花に鳥

井竹女

枝先の花空向やいとざくら

其山

己が影見て畑打の休みけり

停雲

水音のわづかひききて夜の花

霞外

鎗の柄につく花片や雨の跡

春風

斧あてる音や隴の花のおく

樵雨

春雨や小窓にもる、茶の薫り

知堂

たのしみのある滞留や春の雨

鷹拳(九五ウ・96ウ)

嵐山春を底意に紅葉かな

玉堂

けふも又花に意地持くもり哉

東塘

つらしたる駕にもならず春の旅

北雄

春雨や草垢のつく地のくぼみ

観松

出代や常にありたき辞義作法

時人

畑打や堤に立しわらけぶり

桜哉

ひとおしに曇をみせて花吹雪

紫筵

花浮や今汲あげし水の中

松室

手かはりて恋を打出す礎かな

豊雪(九六オ・97オ)

とも明りするや若葉の川向ひ

白雀女

垣越に提灯みせて露の臺

三余

梅さくや晴行雲の隙のいる

古遊

みる人の顔も花なり夕日かげ

楓亭

夜は雲に似てちる花の匂ひかな

草乙

春雨や晴際をつく木の匂ひ

月鳳

近道へ来てとりあへず桜かな

盆中

月の出と共に玉とくばせをかな

林曹

牛の子のふとり見えけり桃の花

四日市 桃室

【参考】月明本、所書きの「市」を「町」に上から

墨書き訂正。

をれ口のちるまでしれぬ桜かな 野尻 梅素

畑打や鎌の柄にしむ手のあぶら 杉本 巨測

【参考】月明本、所書きの「本」を「木」に上から

墨書き訂正。

月のもる膝元におく蚊遣り哉 福光 幹口

みじか夜におさへて居るや升落 福野 半白

山城

夕雁やむら雨はれてひとときほひ 城南 雪屋

谷二つ越てき、けり引板の音 龍月

人住ぬ古井や木瓜の咲入し 一翠(九七オ・98オ)

花に飽てもどる様子や雨の人 可雪

苗代や祖父が時から同じ処 可調

さのみ用きめてもおかぬ陸月哉 慈弓

沓をうつ間に霞けり馬士と馬 叢菊

野の広さつゝめて一つ飛胡蝶 鶯語

戸明れば梅の月夜や山の家 護芳

水音を聞や根笹に残る雪 洛 麦浪

黄鳥の鳴ば戸のあく庵かな 淇悠

土ながらまづならべおく齋かな 鶴鳥(九七ウ・98ウ)

帷子やひとりづ、立わたし船 南徳

名月や舟のけぶりの丘へ来る 柳水

藪裏を廻りて出るや春の水 一斧

山吹や春の礎のこゆかしき 兎月

更衣走つても出ぬ子供かな 可納

荷ひ来て清き水さす蓮かな 勢良

おく底もなき黄鳥の初音哉 羊我

年毎に枝ぶり多し松の花 晶山

山笹の青み残して春の雪

さくら折響に谷の曇かな 呉公

駕下りる膝からこぼす桜哉 都柳

引て出て牛つなぎけり梅の花 可明

十足ほど出て畠あり梅屋敷 不醒

陽炎をわけく、行や磯伝ひ かうち

不馳走に匂ひ過たる花袖哉 聞可

気草臥するや藤さく暮さかひ 芹舎(九八ウ・99ウ)

灸すんだ眼に静かなり夏の月 完和

ちよろくとぬるむ流れや草隠れ 烏谷

明際もおとらぬ月の光りかな 雨香

寝処にあやめさ、れし雀哉 初六

衣かへて歩行ば重し古草履 越前 府中 白牛

骨柴のした、り水や青む草 己青

横雲におされて伸る柳かな 素山

春の雪往来の鳥のみへてふる 一成(九九オ・100オ)

白梅とばかり見て行月夜かな 因幡 南嶺

見わたしや月のいざよふ草の上 浣江 野屋

伯耆

持たまふ傍に置けりかへ扇 祖師廟捧扇会

九起

秋虫鳴ニ 刺繡縷、則懐ニ冷気之

将ニ至ニ 春鳥鳴ニ 嚶々、則懐ニ呼ニ其

友ニ酔ニ 花ニ触レ物而有感。因レ感而

有レ懐自レ古然。于レ爰芭蕉堂九

起宗匠懐ニ翁之越簀掃ニ宮城

(九九ウ・100ウ)

野之露ノ、松笠戴ニ岐岨之雪ニ、踏ミ  
關ヒラキモシ 此道ノ之昔時ムカシヲ即開テ翁ノ百五十  
(一〇〇オ・101オ)

回忌之法筵ヲ、慰ム其靈魂ヲ。余今  
懷フ二谷ノ、膝ニ于レ此筵ノ之幸ニ、即頓リ首  
于像前ニ高歌曰、

此翁元是人耶カ仙嘲リ尽ス

花鳥風月天ヲ、枯野秋風

破ル夢ヲ後星霜ヲ一百五十年

吉備笠岡 片家史也跋

(一〇〇ウ・101ウ)

○ 京東洞院仏光寺上ル  
御摺物所菊屋平兵衛

(下卷裏表紙見返し)

(下卷裏表紙)

双林寺
花供養集
芭蕉堂

【校異】月明本の袋、左の如くあり。

芭蕉翁百五十回忌
花供養集
双林寺芭蕉堂

(袋)

34 弘化元年『花供養』

底本 月明本  
校異 国会本

花供養

端書せよとあるに任せ、筆をとりて  
都の空に飛し合掌敬白す。

天保十五年甲辰春

越那古 松清堂子遺識

天保十五年甲辰三月十二日花供養會

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

散花を手足につけて筏さし

雑木くくにみゆる鳥の巢

丘の家そとほど内も霞むらん

何の餅やら日がな一日

ひとり子の遊びほうけて帰り来る

かぜに吹れてさます湯上り

目じるしの笠に月さす店ばしら

芒の馬ぐさ喰のこしけり

櫛の木の端山は早う紅葉して

かけたる頭陀に歌のたまらぬ

漕出した船にゆかしき薄けぶり

なまめく袖に酒のしたゝる

見えずけるもの、涼しき青簾

雲の峰から崩れこむ雨

あちこちで不漁の沙汰を聞あきし

わづかな金もかゝる御領地

名にひゞく名古屋はふるき月処

虫の音さへて世間しづまる

火を焚ぬばかりに秋も寒うなる

つかひはたして腰のさびしき

雪どけにつらりと並ぶ物もらひ

みやげの破魔矢くだく人ごみ

春めきた拵へながら紙衣きて

筑波ながめて一座筆とる

釣たての鯛に青笹敷せけり

呼ねば傍に居らぬこし元

つくねたる袴懐るわかれはに

閨のあるに何処も煤はく

炭売の小付の小豆うれ残り

御堂かた側上もの、札

長咄し杖に頤乗せらるゝ

仲仙道で富士を又見る

その日茶屋松に茶釜をぶらさげて

萩のあひだは月の有たき

下冷に足をひねらす奥座敷

夏書の反古かたづかぬ秋

洗たくに飯たく隙もしまれて

巳の刻ばれに少し日のさす

藪原を通り過れば櫻木はら

供ぞろえして螺をふき出す

二番鶏なけばちらかる朝がらす

寝て居て人にまたがるゝ犬

瓜はふてみなまであかぬ裏戸口

天窓まろめて夏も露けき

汲で遣る清水を運ぶ月あかり

けつく遠音のさゝぬ大鐘

薬籠の中の甘草虫はみて

障子あくればあたゝかなこと

西からも北からも来る花供養

真葛が原にをしまるゝ春

五十韻下略

豊見

雲萍

断鳥

巴江

鶯語

重泰

寛嶺

朗風

化遊

素卜

烏谷

淡節

尺木

九蒼

己青

松宣

柳鶴

百仙

荷了

木容

卓丈

杜蓼

風光

伍員

閑令

梅室

拾五

執筆

虚白

越中

南無月夜としくふえし花明り放生津 子邁

楊弓の音も聞ゆる余寒かな 里北

咲花に梢も見えぬけしきかな 萊洲

案内者の指さすかたや花の雲 東岱

月に戸を明はなしたる桜かな 里風

さいくもあはれぬ空や朝の花 昇斎

腰かける処もなく花ざかり 東雄

散ものとはじめ思はぬさくら哉 真弓

雨の夜もさくらに明し東山 旭草

ちる花の都へ出る小川かな 玉木

水無月十二日東山に至りて 水無

あらためて扇ひらくや像の前 伏木 和鳴

はつ花や雪でをれたか松の側 水橋 定尔

腰きめて肩でおしゆく雪吹かな 魚津 可春

東武にて

乙鳥や右と左に安芸黒田 孤山

柳より下にありけり春の月 乙雄

まめな身を温泉に誘はる二月哉 高丘 買雪

提灯で送る馳走や朧月 万数美

真火のぐるりへわたる花見哉 万千雄

ばせを忌や雲の底より月さゆる 魯山

さらく夕日に登る小鮎かな 螢車

能登

空に見る桜に海の明りかな 鸚飼 生化

夕ぐれて寒いほど散る桜かな 文友

立かけてあるや野梅に忘れ杖 鳥島

わたし場にひとりおくれ柳哉 嵐居

ちよつぱりと霞かゝるや池の島 松波 稲波

夜に入て雲もさくらの色のある 若山 月嘯

ゆく人は松にかくれてきじの声 蜻鳥 百糸

一つ家も人里とてや来る乙鳥 正院 鳳兮

すたる温泉の利めか柳地にとゞく 野艾

飛ごとに飛猶予する蛙かな 如柳

ひとつとの花にせわしき渡しかな 花弟

涅槃会詣惠日山

寝て居ても拜まれ給ふ仏かな 桐芽

雪霜も養ひけるか初ざくら 飯田 勒泥

柳とはみたれど凄し夜のかげ 千路 呂鳳

花に来て覗かるのも愛想かな 七尾 淇洲

あらおかし花に念仏申けり 竹塙

黄鳥の羽かぜに来たる匂ひ哉 林藤

みやこまで来て砂を吐く蜆かな 中居 奇鼎

唄づたひ見あげ見おろす桜かな 潤松

加賀

背の土を鳴はらひけり初かはづ 金沢 大夢

花の山火鉢かゝえし奢かな 柳壺

遠雷にちるやさくら二三ひら 悠平

折たがる人の未だ来ぬ野梅哉 北山

蔭は香に日南は咲て野梅哉 克亭

おちるのは落て久しき椿かな 石禅

移り気も月に出来たり夕桜 素行

土器を投げなすむ手やきじの声 晴江

はれ口の霞ながるゝ野川かな 如山

曇るほど春めく山のすがた哉 松波

一日は花ちる中をはなみかな ツバタ 鶯呼

一人に盛りもちけり雨の花 在京 素玉

越後

歩行間に咲うつりけりつぼ董 亀田 応泉

見た程の人の只来ぬ野うめかな 森下 花朝

台雛に立雛風情つくしけり 友徳

けしの花きのふ咲しはなかりけり 梅茶

空癖になりて若葉の雫かな 新潟 有木

降て居る雪を雫や露の臺 水原 乙良

地にはまだおき得ぬかげや春の月 西畴

蓬菜にとばしりかゝる切火哉 梧葉

日がさせば月は消けり花の上 鷺眠

ひそやかに来て一日のしぐれかな 春室

黄鳥や朝寝の窓へかげのさす 中条 幸水

咲立る花にも恥ず鳩の声 中条 幸水

星も出て初三日月の長閑也 長岡 一毛

入相の鐘浅々し山ざくら 堀ノ内 松舎

餅つきに雇はれもせで網代守 糸魚川 曳尾

藪入の下駄はきたがる子供哉 其誠

枯込て藪のあかるき芒かな 見付 茶山

越前

よい中の露さへかれし芒かな 府中 素坡

問ひぢからあるや都の花ぐもり 素山

呼声の届いて遠し山ざくら 白牛

あし伐を歩行はじめや雀の子 一成

夜ざくらの持こし酒や朝ざくら 烏明

皆人の心の乗りて散る桜 化遊

露のひる時か一ひらちる桜 己青

今下りた山のかげさす清水かな 英峨

宿引の何処まで行ぞ夏の月 三国 可笑

親船へ焚もてはこぶ蚊遣り哉 敦賀 瓢石

手の中へ来るや付木の灯取虫 丸岡 路江

肥前

撫もしてみるやあまりに散桜 大村 悠々

下りる空見かへりもせぬ雲雀哉 素月

鶯や庭廻りした跡へなく  
うぐひすの片足上て鳴音哉

木二  
太素

戸をしめて又摘みに出る若菜哉  
散かけて夜に入れしの一重かな

休月  
梧井

巢だち時舞て見せけり親乙鳥  
枝をりてかぶる椿の雫かな

松波  
染露

(一三ウ)

掃き起す苔踏付て庵の花

郷彦

黄鳥の声の居りや鳥の中

よし雄

出代もせぬ供ぶりの丁稚哉

井月女

付てある蒼算えてつぎ、かな

禾堂

川かぜにすくはれ行や蝶ひとつ

琪風

夜あらしのつくや鳴子の耳障り

桃月

散さうにしてたもちけり夜の花

麦紫

何もない処をさして初がすみ

素羅

出しかけた仕事もうとき陸月哉

馬丁

宵の、もそふてありしか初かはづ

之同

田一枚柳かげから出水かな

右稲

二度行て二度雨にあふ桜哉

奈鶴

舟引の并でかすむ堤かな

雨笠

日の出れば日を持つ声や遠蛙

梅宇

奥の花乗せて通るや筏さし

眠鶴

汐の引芥の中や落つばき

桃雨

万才の舞ふに風持袂かな

榎園

活屑によき花のある椿かな

謹路

鳥居から心定まるさくら哉

可考

今朝みればうれし日頃の門柳

肥後 千干

夜の山さくらばかりでなかりけり

鬼白

春かぜや幾まがりして谷を出る

其青

遊ぶだけあそんだ跡を若なつみ

隈本 千干

鳥の鳴枝さだまらぬさくら哉

竹古

豎横に川筋見えて春の風

旭水

雨の雲抱へて雁の帰りけり

礫川

逃て行先も花なり花の雨

左雀

わたし場に煮売もあるや春の風

孤明

居風呂の背に雫する柳かな

処楽

人の来て煙らす庵のさくら哉

桃雲

うめが、や手綱ゆるめる曲り道

茂竹

乗かへた馬に春たつわたしかな

雪茶

二日ほど曇の出来て春の雨

柳士

案内者も小門潜りて梅の花

素暁

染汁の流れて長し春の水

雉溪

鐘撞た跡までうごく柳かな

露生

花明りほかりとさすや雨の暮

渚月

一夜さは雪のうへにも春の月

素綾

たちよれば住たくなりぬ桃の奥

懸瓢

庭掃に付て胡蝶の廻りけり

苔路

静さを見する灯や梅のおく

千奈

花守りを酔せて花に宿りけり

雪兔

蝶々のもつれて馬に並びけり

沙明

日を受けて赤し椿の水明り

千嶂

麗や船すぢばかりうごく汐

如柳

如在なき家とは見えて桃の花

其栄

立をしみするや桜の夕がらす

涼波

鐘聞ぬうちに明るよ花の山

紫山

咲てから主のしれるさくら花

平戸 几一

草の根をわけて通るや春の水

芦舟

それだけに子も揃へたる若菜哉

右城

花見るが渡世のやくやわすかけ

長崎 甫旧

山の名も覚えて来たりはつ桜

恕雲

この声も聞て置たし帰る雁

楽之

山吹や垣に見るより生し苗

岱雲

癖のない日のくれか、る桜かな

千春

晴日の雲を根にして霞けり

東波

はる雨や昼からともす石灯籠

二石

去年の木を今に覚えて初桜

雨遊

若鮎の出るや日に／＼かはる風

錦雪

雲板の遠ひゞきする若菜哉

子栄

雪は皆谷にながれて初ざくら

友之

日を受けて起る小笹の雪解哉

筆山

虚空から下りる日もあり春の風

驢童

鶯や釣瓶ひかえて聞直す

鶴尾

さゝ波に影うつ松や隼月

越月

幾筋も道の付けりはるのさと

諫早 時習

春雨の寒さ持て来る桮かな

井左

深山木にしては置れぬ桜かな

柳霞

柴枯る音して霜の別れ哉

仙雅

隼月水もおぼろに見えにけり

花静

しばらくは暮ても花のあかりかな

鴛士

場処かへて焚もの拾ふ花見哉

不及

泉水に去年の蜩のふえにけり

烏雪

草に寝る鳥とも見えぬ雲雀哉

砂角

うめちるや隣あるきも御慶から

糸江

野仕事も手に付ぬ日や揚雲雀

染思

声たて、鳥もたちけり初がすみ

竹丸

影もみな花となりけりかきつばた

方居

残る蚊の一つ来にけり机さき

静水

片足は犬にもたせて門すゞみ

神代 尾蠅

(一一ウ)

(一三オ)

(一二ウ)

(一二オ)

(一四オ)

(一四ウ)

(一五オ)

薩摩

葉がくれに黄鳥鳴や朝曇り 都ノ城 一早

家かげや余処におくれてうめの花 松鶴

立かけた傘にも戦ぐ柳かな 省三 (二五ウ)

豊後

早起や藪入前の小買もの 日田 雪村

池からの落水早うぬるみけり 方山

拭立て花に光らす柱かな 花村

松杉の中おし分てさくら哉 一文

春の夜やとまり習ひし隣の子 支測

飛込だ蛙に逃るかはずかな 五笛

はるかぜや洞に打込浪のおと 秋蔦 (二六オ)

青鷺の涼かぜ起す日ぐれかな 未学

貧しさを包む小家の柳かな 季蘭

春雨や舟から捨る料理屑 生月

ぬれ心よき門松の雫かな 梅柳

枯草の中もながれて春の水 雲月

江たりこけたり花の下り坂 三岳

黄鳥や海へさし出た山の端 如白 (二六ウ)

まだそれといはれぬほどの霞かな 五柳

気の方たかたから吹や春の風 横灘 玉骨

撓むほどたはめて柳折にけり 平川 孤松

笠の緒のひとり解るや花の陰 芦舟

ゆつたりと影もつ花や薄月夜 松屋

暈めした月を真上の柳かな 古桐

行春の名残こぼすや木の雫 散残る花をたづねて

遊び人の癖や弥生の山えらみ 霞城 (二七オ)

塩がまに焚る、松や若みどり 芝崎 鶴歩

黄鳥の樋を伝ひ来て初音哉 春星

ゆり止むと直に氷るや桶の水 朱唇

田の榎風かけながら青みけり 異声

明切て月あり花のあらし山 芦山

長閑さや思はぬかたの神参り 加治木 嵐翠

夕虹のあかり洩けり花あかり 太素 (二七ウ)

草臥てゆくや朧の月明り 卓響

こ、かしこ土の乾くや露の臺 可嘯

御降や七草によい設けもの 雪人

夜降た雨かもしらず花の露 其流

煙ほど雲のかゝるや雨蛙 松声

花守や留主かと思れば咳ばらひ 矣哉

夕ざくら松吹かぜの青い中 也六

花ちるやあぶらしめ木の音くる、 松香 (二八オ)

海山も桜と見るや遠めがね 几桂

黄鳥にあきれて杖を忘れけり 春選

鳴揚る雲雀の上や鳴雲雀 瓢浮

花と我間に一ひら花のちる 草佳

有明となるやさくらの散やらず 虫二

日向

耳すめて聞ば鐘也遠がすみ 飢肥 遅牛

名月に森をはなる、鳥かな 素木 (二八ウ)

空をよく枝に養ふ柳かな 富高 月雄

麦秋になりあふせけりこぼれ種 其石

夜のかね火鉢た、いて算へけり 獨水

十月の味の乗けり塩ざかな 本庄 習之

青きもの置て夏めくざしき哉 厚薄

蚊にむせて出ればぼろつく雨夜哉 赤江 正葩

日和見に出たは忘れて梨の花 小倉 紫鱗

豊前

黄鳥や草紙干たる山の家 松風

しら／＼と登るや花の雲の中 黙居

川越せば弦ほど近し山の花 芳村

風かはる度あたらしき霞かな 瓢亞

枝ぶりのよくも思はず小松引 梅子

あれていとおもふすがたや小松引 梧堂

手の皺の伸たこ、ろや花のかけ 可推

道通りいらさる潜る柳哉 木父 (二九ウ)

筑前

門さきの風呂賑ひぬ芦の雪 福岡 斗丈

枯初る木賊の音や霜の庭 宇逸

散ほどもなき静さや雨の花 月平

遠近の花に日くらす峠かな 肱睡

朝風の帆にこたゆるや雉子の声 博多 南礎

月の出てもとの天気や花の雲 五雪

どの花の散ともしれず水の上 李睡 (二〇オ)

出代や母に土産は針仕事 松塙

傘た、む鳥居の内や松の花 呉竹

黄鳥や出舟日和も久しぶり 木斎

翦て来る君もく、らぬや梅の花 飛木

雪にまでさびの付く也かれ尾花 飯塚 樵三

麦畑のはづれ／＼やうめのはな 武丸 泉歩

燕の腹すりゆくや浪がしら 紅梅

散かたへこ、ろのす、む花見哉 左路

一つ家をとる巻風の柳かな 里女

三日月のさすまで花に遊びけり 泉智

黄鳥や藪迄は来て引かへす 葛山

昇る日の水に散かる柳哉 泉砂

筑後

一束ね野萩もらふて魂祭り 本郷 和十

ときの来て桜の茶やと成にけり

猪口 東湖 (二二オ)

関とりの一入はやき袷かな

山本 文月 (二二オ)

花を葉のさゝえたもある椿かな

久留米 赤鱗

下闇や遅朝立のひとり客

蔓五

黄鳥の気にも入べし小柴垣

葎川

見はらしのあつて蝶来る戸口哉

本郷 遊松

水ばなれして顔なでる蛙かな

吐雲

沓岐

咲捨て草ともならずかきつばた

对州藩 吾水

しら藤の水に垂たる匂ひかな

平戸藩 柳風 (二二ウ)

雉子なくや日も棹尺の小松原

勝本 梅窓

うめ咲や隣歩行も隙のいる

青也

口明る貝や干潟の汐溜り

淇水

山水もふえて汐干にとゞきけり

如柳

海までもしらげて吹や春の風

甫行

降雪の途中に消る柳かな

葵白

於医王山祖翁百五十回法筵

櫛洲 (二二オ)

石見

みじか夜や舟の寢覚を満る汐

浅利 青池

脱でおく草鞋の氷る戸口かな

矢上 雨洗

四五人の仲間へくれる火鉢哉

因原 風笠

埋火やせまき座敷の寄処

川本 美言

日暮るや一羽づゝ減る小田の鴨

素筠

武蔵

川ぎしによき家のある新樹かな

江戸 一具 (二二ウ)

鐘撞てくらがり戻る団かな

金令

先づ春の心うごきぬ衣くばり

連流

三月月と川との間や露あかり

惟草

神垣や花の下にも掃松葉

伯遠

つくづく窓に見らるゝしぐれ哉

杜有

起々の春や手のなる肴町

見外

人揚し舟の掃除や朝ざくら

祖郷

宵闇をたしかにしたりほとゝぎす

流芝 (二三オ)

降がしといと静なりはるの雨

鳥吟

さくらから桜へうつる夜明かな

大松

さし汐を杭に見てゐる乙鳥かな

山外

こゝらから町の名をいふ柳哉

呉城

同じかげ二朝おかぬやなぎ哉

三草

とくくくの雫となるやさゝの霜

梅笠

かれたれば光りのわたる尾花哉

呂叟

鳥の音も蛙もひゞくしげり哉

溪齋 (二三ウ)

月の出や木なり草也露々し

壺天

うへ込やひと木はなれて帰り花

為山

ぼつちりと明かゝりけりうめの上

風外

遠かれと見し青柳のくもりかな

越谷 太良彦

地の乾くけぶりを誘ふ霞かな

池上 完車

草つみの稲荷おがんで笑ひけり

平戸 車泉

江の波や東風吹てから打初る

大塚 林圃

乞食の曲突へ落込雪解哉

犬塚 問水 (二四オ)

ながれ出す雪解けふるや岩の端

江袋 杜英

里ひとつ山にかゝえてうめのはな

李井

下り込だ山の駅路のかすみかな

柳二

松を出て直路くゞの霞哉

マミ塚 孝鳥

存分な枝のくばりの野うめかな

ナリ田 楚江

初東風や見たすかもの水の上

保元

雨ばれの道の香深し松のはな

ヒナタ 輝雄

一寸した事にも笑ふ陸月かな

ナラ 小涛 (二四ウ)

薄雪のやんで月夜や梅の花

越鳥

折べりのして見よくなる椿かなハラ鳥

葆光

合羽干す雲の切途や舞雲雀

ヒロセ 梅香

若くさを見に出る雨の夕あかり

秋翠

油手もふかず見てゐる初荷哉

玉香

夜もまだたゝみの上や屠蘇のかさ

二高

黄鳥やかたかげはまだぬかり道

松玉

長閑さや野はよいほどにかぜの吹

思静 (二五オ)

古庭の見まさりするやうめの花

不兮

おちたのを見てから上のつばきかな

月笑

夜の桜はれる風情は持ぬなり

中爪 南瓜

散さまもこゝいさぎよきさくらかな

熊谷 形義

日に遠きところむらなき霞かな

卜僊

見て居れば夜の明安し春の海

賀白

黄鳥やおき場かへてもしらぬ声

糸有

鹿の寝た跡の若草露々し

丈よし (二五ウ)

藪山や出しな入しな雉子の声

五八九

甲辰五月東山に至り、去年の遠忌に

よみおける一句を祖前に奉る

細道の古き跡みる枯野かな

神奈川 潮月

眼につくや待日の外の花ぐもり

足利 嵐斎

永日や雀のはこぶ庭の塵

寺井 三考

出がけから小坂にかゝる雪見かな

西馬 (二六オ)

雪解する山の松かぜ聞えけり

岩水 素来

引捨て蕪花もつはたけかな

上野 孤角

植かへて客待花のさかりかな

横壁 芝丸

花に月雲の上行つき夜かな

熊月

待たほど遊ぶでもなし松のうち

氷沼 立志

乗合の中や袷はたゞ一人

下総 野巢

七日にもあはで花さく齋かな 巢笠 (二六ウ)

陸奥

坂口や雪車引捨て真の火 二本松 虚窓

黄鳥に夕日の残る堤かな 邦泉

しりぞかぬ寒さ見かけて梅の花 梅井

松葉ちる水上山の雪解かな 埋山

入相のあとやひとときり鳴雉子 郡山 一仙

祢宜町や二処三処梅の花 三春 風志

今霜のとけし若菜や曲突の上 杉田 英泉 (二七オ)

はりつめて渦高うなる氷かな 仙台 江三

闇なればやみにもうれし梅の花 一止

飯時の門を過行鶴匠哉 五岳

盛りとてゆけばこぼる、萩の花 万那

黄鳥に立草臥ぬ小一時 松前 而先

たつぷりと春のけしきや筏さし 耕山

黄鳥や箒とる手のまだ寒し 青々

土産神の松より出るや初がらす 桃林 (二七ウ)

黄鳥の鳴やしほしの足よども 南鶴

煙までおし込窓のかすみかな 斗明

白うめに夜はほんのりと明にけり 耕友

春雨の音をしづかに昼寝かな 一帆

松かぜにつゝいて聞やきじの声 小聖

うめさきて見なれぬ家を見出しけり 後明

雁下りて跡まつふりや渴のへり 箱館 椿呂

はつ雪や朝茶す、める弱法師 ゆい女 (二八オ)

梅散てもとの朝寝と成りにけり 十羅

箒目の雪静かさや明のはる 三千丸

ものかげや吹しづまりしうめの花 一甫

我庵も見えかくれする霞かな 岡虎

おのずから花の道なり九折 雨声

ひつそりと月夜にしたる柳かな 延寿

下戸の来る道筋みえて花すみれ エサシ 菱々

鳩の声長閑けき腹のみゆる也 田名部 希石 (二八ウ)

蔓草のうごくちからやけさの秋 津軽 如菜

はきかへて草鞋なげ込椿かな 漆山 二丘

茶に酔て黄鳥聞にしたりけり 秋田 三知

春の水水おしわけて流れけり 月嘯

折られたる不足も見えぬ柳哉 九交

賑やかに成て散出すさくら哉 梅之

うめが、をいたはる風かすこしづ、二葉 (二九オ)

晴際の鳶舞ふ中や風 新穂 周齋

木を負た人もめづらし春の山 晋山

鼻息に薄霜消る秣かな 小木 真哉

かぎりあるべきを花見の月夜哉 百花

山水の気をふくみけり初ざくら 栗人

のつとりと柳けぶるや雪の上 藁上 (二九ウ)

掃除して気の清む朝の桜かな 佳瓢

又ひらくやうに朝がほしほみけり 更科 ノ左

山吹に味の付たる出水かな 松月

山間に鳥居見えけり花す、き 鶯巢 魁甫

月の雁かげから先にわたりけり 山田 桐一

春かぜの中に小さむし野の嵐 篤之

木がらしや見えすく森の浅うなる 梅西

鶏頭のしみぐく赤し雨の朝 樗山 (三〇オ)

今度めは義理に花見の留主居哉 関 月岡

女とも思えぬ声やはなのかげ 雲深

我花を見て置てから花見かな 旭子

尾張

片角はまだ伸したらず蝸牛 名古屋 而后

藪際や溝掘たしてとしの暮 一清

出る月に野は引揚てうめの花 適斎 (三〇ウ)

松かぜをきくにも遠き枯野哉 一色 思文

釣瓶まつうちに見にけり二つ星 李曠

青柳の向ふに澄や筑波山 高井 甫岳

水音は垣の外ゆくさくら哉 暁鳥

黄鳥に心ゆだねてもどりけり 一松

黄鳥のなくや小藪の川向ひ 下津 穂咲

さびしさを忘る、色や唐がらし 岡崎 卓池 (三一オ)

大根のふとる夜雨や神無月 石菜

明るしと見れば花あり松の中 土山 虚白

来るよりもゆくけしきあり子規 月坡

散花の吹よせてある窪みかな 信樂 鷺洲

棚もとは止んで齋のはやしかな 楓下

隙らしき旅や茶籠に花の枝 彦根 玉潤

一鞭は乗おくれたる清水かな 蘭峨 (三一ウ)

隣から延出てうれし花の枝 皎月

はつ雷のおとや皆箸下におく 十葉

掃よりも拾ふにはやし落椿 巖山

待て居たさまや早瀬にちる桜 高島 舞雪

気づかひのなき長閑さや松の山 節外

屋根にまで物干日也五月晴 松月

今買った瓶こゝろみる清水かな 白雄

鳩吹て来た風すゝし松繩手 豊浦 可陽 (三一オ)

大雪となつて静な今宵哉 日野 一嘯

うつ／＼と花にわかれて夢心 東雄

起にくき朝となりけり初ざくら 凹峰

家出来てけつく折る、野梅哉 大津 砺山

魚しまといふけしきなり子規 来々

散花に眼のちる谷の広さかな 拾五

けさ咲たのもあるに散さくら哉 勢多 草骨

松見ても時の移るや花の中 仙巢 (三三ウ)

杉箸も見ゆる流れや花の中 鷹山

をり／＼は日も拜まれてしぐれけり 馬淵 喜楽

黄昏や蚊遣の中にある小家 和田 九光

垣外は雪車引音や朧月 町家 芋丈

斧入ぬ庵のさくらの咲にけり 石部 其閑

手をくれの掃除とゞいて梅の花 播山 花屑

片隅に客もてなして土用干 可松

蝙蝠の月にも飛や本国寺 桃谷 (三三オ)

丹波

松かげの青みうつるや土用干 亀山 九花

いかめしき構のうちや芥子ばたけ 月樵

旭のさすやぬれながら散一重げし 松露

売声に気はそゞろ也初松魚 保津 耕雪

おこたらぬ声也雪の朝がらす 福知山 子享

窓へさすまでの明りや初日出 成松 遊夢

梅雨の山却て夜は晴にけり 呉秀 (三三ウ)

黄鳥の日和うかゞふ冬至かな 黒井 木碓

有ふれた手ぶりも見せず衣がへ 羽人

日の岡や笠にすれ行雁の腹 額田 桂眉

雉子なくや十歩に過ぬ山の畑 笹山 其通

青梅や吹こぼさる、葉のさはぎ 風処

但馬

黄鳥の来ぬ日を庵の朝寝哉 村岡 左和義

遠退けば早松にそふ霞かな 一橋 (三四オ)

京の人ばかりになりぬ遅ざくら 大藪 松翁

ひま入た跡一ときや赤つばき 西温泉 標梅

足代もとらず盛のかきつばた 弓月

黄鳥のかるふあつかふ嵐かな 石燕

用のある障子もあけず蝶の影 閑月

宮守の眠た顔也ふぢの花 土山 桂秋

帆に風の足らぬやうすの日永哉 香住 蟻洞

田にすれば田になる畑や梅の花 菅籟 (三四ウ)

酔醒や障子にかほる梅の花 宮内 三枝

美作

蚊の居ぬが馳走の外の馳走哉 野村 耕雨

落さらぬひるの雫やうめの花 今津 乙美

出雲

野は水になりて軒端の水鶏哉 松江 茶匆

わたしよぶ声にうち止む礎かな 九江 (三五オ)

みんな手のとゞかぬ木なり山ざくら 草悦

藪入の来てうるさがるむしろかな 万台

鳴きじをほめておしやる筏かな 嵐外

一間づ、掃よせてあり注連の塵 梅逸

余処の見て形り直しけり草の餅 仙峰

黄鳥や日南になりし水たまり 凡和 (三五ウ)

黄鳥の鳴や鴉も春の声 鷺川

黄鳥や松葉散こむ庵の水 倍有

わか水やつかひあまりは只の水 文雅

鶴の声聞て出たれば引にけり 右谷

藪入の灸すゑにゆく隣かな 乙雅

鶯や藪の裏にも人の立 南向

御明しもひと世話あるや松の内 葎戸

明日なき今としとなりぬはき掃除 南谷 (三六オ)

手のうちで水のとける若な哉 安来 秀然

山ひとつ見えて今としの明りかな 坂田 鷺白

長門

ひとぐもりつくや桜の真さかり 下関 千船

川筋はかはれど残る柳かな 円二

食て吞で筆持ひまや花の春 岑磨

赤々と日の出をおがむ冬至かな 萩 蘿月

蚊屋ぬけて消る真のけぶりかな 伊佐 文朝 (三六ウ)

安芸

遠くから来て友になる胡蝶哉 広島 雪頂

あふつ音寒し障子のまくれ紙 素君

黒い葉のかくる、櫻の若葉かな 写山

周防

寒ぎくにまぎれて久し垣の菊 宮市 素兄

冬の蠅掃れて羽根を直しけり 柳浜 五溪

吹つめて雨になりけり春の風 室積 芳水 (三七オ)

雨の戸にくれかねて居る乙鳥哉 淇園

道々の地藏に配るつ、じかな 可賑

背戸川や筏にのれば月と梅 好醉

道々や董こぼれて人通り 閑雲

備前

白魚もあらへば水のにごりけり 岡山 孤山

是ほどは何処を摘だか五形花 里恵女

松ばかりたしかに見えて朧月 満寿女 (三七ウ)

尼寺やみじかき夜を起いそぐ 西大寺 涼呼

乙鳥に雁はかはれど春寒し 芦風

備中

船に灯を入れて家毎の寒さ哉 笠岡 一亭  
塩がまやけぶりは消てけさの霜 淡亭

照込で風に消るや雲の峰

九陌

風の日のしばしつゝくや梅の花

卓尔

おく底を投出して降あられかな

都羅島 桑坡

みじか夜や起して廻る豆腐売

宮内 心拙

麻刈て海見る門のはたけかな

岡田 香雨

笠の紐しめて又吞清水哉

瓢仙

播磨

早乙女の親子しれけり休みどき

今市 霞村

重荷より小付の嵩のさくらかな

魚崎 南陽

田に一つ下りて淋しき雲雀かな

曾根 為風

咲日までうつむいて居てけしの花

志野部 愿泉

ゆるやかに散を見飽ぬさくら哉

比延 古谷

下りてよい山を登りぬ花の頃

北梅

蔵建る明地もありて梅の花

春朗

朝の間やうめのあたりを這ふ煙

支鳴

畑菜や花のさきたるこぼれ種

大瓠

巨燧までとれて二百の旅籠哉

甘水

卯の花のこらへ力やさむい雨

小坂 芦国

若草や飽まで喰て眠る牛

北条 伍柳

伊予

四五輪の跡咲にくし冬の梅

小松 映門

こしらへたやうに揃ふや笹の露

菊圃

夜は雲のつゝみ廻して岨の花

西条 卯角

うるはしき庭の梢や春の月

樋口 井峨

日の入を風の盛りや町離

佳笑

讃岐

木の雪花にたくはふばたんかな

丸亀 木長

槌に入日から散けり藪つばき

松子

紙手立し舟の出る日や初乙鳥

画声

阿波

わき落る小口のしろき清水哉

得雅

月さへて螢は星に入にけり

万像

淡路

雨ながら日關る春の戸口哉

広石 樵雨

香に酔ふて寝転ぶ花の筵哉

楓処

背ざはりのすれば涼しき柱かな

榎並 南園

休みても眼は休まぬや藤の花

イガ野 梅曲

花に日のくはつと当るや雨の跡

松帆 松洲

鶯や羽音もなしに枝うつり

下堺 世栗

おしつゝむやうに月持柳かな

儲香

ころ／＼と椿ながるゝ浅瀬かな

梅廬

紀伊

軽うなる寝覚心やはつ袷

若山 世外

摂津

雷止んで昼の蚊遣りに軒哉

浪花 林曹

宵に来て馳走にならず鉢敲

素屋

木に這ふてひかり休める螢かな

其山

清水わく音の木ぶかし花の中

米老

花の雨むし養ひのひと徳利

松笠

ぐるりから雲のつゝむや花に雨

素日

月に出て雪に戻るや猫の恋

鼎左

一つ来て牛光らかすほたるかな

伊丹 曲阜

水深し浮巢の下の草の花

太乙

内の灯とむかふて涼し夏の月

兵庫 董秋

やさしさの蚤に喰れし子の寝顔

直道

越前

燕やいつから来ての合住居

敦賀 平沙

隣のも匂ひの来るや軒あやめ

葛塚 奥野

佐渡

俎にけふの若菜の匂ひかな

大崎 思道

野袴に雫のみゆる暑哉

北古

伊賀

おもしろみ付や雪解の門の川

上野 鷺秋

漁火もみえて浜辺の春の月

養瓜

筑前

存分にさくらを持って山の家

武丸 梅居

沢山な若菜といふや梅の宿

初道

鶴はみな空に声ある雪解哉

桐旭

梅咲やしつかり付る朝日記

竹呂

山城

二筋に道のなりけり梅柳

普賢寺 半山

朝風のけぶりのやうに霞けり

老波

鶯に雫のおつる軒端かな

雪也

雨の梅見ながら心遠きかな

友斎

山吹のうすらぐ色や夕月夜

一翠

日の出れば黄鳥東向にけり

魚鳥

風あぐる子にまどくれる堤かな

和東 慈弓

みちがへる山の青みや五月晴

淀 軽舟

人あればあるでたしなき睦月哉

素友

海道や畑うちさして駕に行

一帆

絶ずなくものは蛙よ子規

伏水 鶯語

花の塵扇で掃ば立もどる

岳鳳

夕かぜや牆きりさけて窓の花

洛 来青

案内者のみな花にいふ若葉哉

梅通

たえかねて逃行蝶や滝しぶき

芳英

秋かぜやひる寝をやめて日の長き

荃涼

蓼の葉の辛みもぬけず五月雨

黙池

黄鳥やさす日も遅き音羽山

雨翠

うす墨の手紙書けり雪の朝

不染

驚のたつ跡へ植込早苗かな

霞仙

高からぬ山相応や雲の峰

一花

待中のゆだんや低う飛ほたる

鳥谷

木枯や峰の際だつ闇の中

雲萍

入相のかねにかすむや一つ家

露消更 其鶴

卯の花や預けて帰る釣道具

岱年

山中や誰汲もせて春の水

重泰

天の河をりく星のながれけり

松花更 晁采

はつ花といふ日もあるや嵐山

杜鷺

ちる花や何の願ひもなきやうす

寛嶺

床几出す丈の奢りや畑の月

淇悠 麦浪

雨ひと日人をしづめる花ざかり

有節

昼過や水まで花に売れされる

在京 荷了

筆あらふ明りや花のひとつ流れ

五梅

炬にわかれて月のほとゝぎす

杜蓼

泣人は是にもなくや花御堂

風阿

花に虻朝来た儘で暮るまで

在江戸 勝錦

をりかへす人あり花の夕雪吹

風光

草取たあとや青田のさゝにぎり

完和

何よりも雑煮に箸の匂ひ哉

尺木

板にした桐干上や桐の花

祭魚

はつ日さす野は野に麦の一みどり

初六

夕だちの夜を心よう寝たりけり

茗水

落付て花の座に入くもりかな

路夕

花ちりて山猶ゆかしけふのそら

馬良

さくらへも既に日のさす谷間哉

閑令

散のこる花にしたしきこゝろ哉

富勢

陽炎の中にちらつく埃かな

桃五

ことしの花供養には

東升

雲雀より上に鶯舞日和かな

松雨

顔撫る風をりくや夏の月

石外

さくらは散つくしたれど

梅室

人の来て花に空うつ木魚かな

若雅

ぬれ色の儘をさゝげん朝の花

淡節

奉ることばの花は盛かな

九起

田の道は水で行れぬかすみかな

寿堂

日和にも根水の引ぬ柳かな

木容

人去りて花守の灯のみえにけり

九起

釣竿の先やいつしかはるの月

三瓢

売歩行ゆれに開てかきつばた

雨江

行先を笠からてらす虫かな

九起

散て来たやうにざしきの団かな

溪梅

ひと口に散花誉て通りけり

旭子

まだ咲のこる垣の卵の花

可松

たちかはり鳥も来て行御慶かな

枝月

雨の雉子一鳴づゝにほろゝかな

素峰

水車水の出さかり休ませて

桃谷

蛇籠あむ人歩もひけて子規

孤柳

谷川にかたまつてちる桜かな

帛美

手ならひ冊子もて来てはほす

起

清らかや一葉ながるゝ御溝水

丈翠

美う親子見て行灯籠哉

松籟

山雀のよく籠なれし月の秋

松

何となく衣かゆるや旅の空

如柳

茶たばこは口のほだしや朝桜

延年

薜々もらふ大根地の雨

谷

大雨のはれて健気や初ざくら

禾明

草の戸にむしらぬ花袖匂ひけり

呉明

汁吸ぬ腹のつい減る肌寒み

起

梅ははや藪木となりて初桜

篤明

紫陽花や折たかげまで雫する

米斎

あし音をしる猿沢の魚

松

松かぜの花をいさめる木の問哉

仙歩

来た人を去さぬ音や露の雨

九蒼

雲板がなると世間が起る也

谷

しづかさをとへば人あり雅地の花

明鶴

散花に催されたりはるの色

葵足

雪にすつぱり埋る憂宿

起

朝月や花に親しき水の音

朗風

日の光り花にこもりし真昼かな

百仙

柀をさす手ひく手に眼をくばり

松

余心のうつらで澄ぬ月と花

豊見

牛つなぐ度にことほる柳哉

春朝

大原に買った階子ぐさつく

谷

散音のなくて寝がたし花の庵

巴江

内外も花にまばゆき供養哉

一斧

出る月に残暑をはらふ一嵐

起

はや月は朧になりぬはつ蛙

素白

弁当の明て丁稚も花見かな

伍員

をりに芒のはさむ草ずり

松

白梅の真中になる二月哉

十代丸

酒の座もかはりて梅の月夜哉

月桂

追て来た早瀬の鮭を見失ひ

谷

去年よりも匂ひのまして梅の花

巴蘭

秣喰せて戻り荷をまつ

起

人呼で戸を明させるたをやかさ

起

夕だちや風先ほどに根ももたず

桐塙

どんみりと虹もわからぬ花曇

松

たばこにあきて畑見廻る

明

入際もろき夏の宵月

桑坡

門一ぱいに狗背をほす

谷

石灰を焼て着物の真白け

明

舟上りおのゝ行季を手に提て

東升

泥足で汐干の客が火をとり

起

月を氷らす梟の声

起

あぶらこぼれを拭ふ板じき

塙

背中た、けば大い声する

松

はりかへる障子に冬もおしつまり

明

札付て配りて仕舞苞納豆

塙

宿引の昼も出て居る坂の下

谷

飯くふなかば机はなれぬ

明

足袋を脱ねばぬげぬ股引

升

二人がぬれる傘の相合

起

質種をながめ廻せど何もなし

起

降出しも忘るゝほどの長雨に

塙

単着になればぼとつく古裕

松

くれおそれれど二度出来ぬ道

明

続きを置いて去るかし本

坡

かり込黄楊に五月芽の吹

谷

藤棚の下にいつもの屋台店

升

帷子を縫も果さず横になり

升

何をして皆がくらし切通し

起

ぬるんだ水の桶に泡だつ

起

まだ子規きかぬ気が、り

塙

鶏も家鴨もごたゝに居る

松

羽もつれをしてはちらかる衛哉

桑坡

風鈴のかつちりおちた音がする

坡

しばらくは子供も入ぬ宮うつし

谷

霜にけぶりをたつる舳舟

起

稲の穂なみの皆西へむく

升

もてなし逃て扇忘るゝ

起

市に出す牛房の丈を結交て

坡

月の有うちに送り荷片付て

塙

ぼろ／＼と月に降出すおもしろさ

松

ひとりぐらしの寝間は敷捨

起

ちさき祭の多い浜町

塙

馬も上手に寝たる良寒

谷

降つめたあげくは月の照過る

起

表がへ古き畳をメ直し

升

肉桂のほひにむせる風はらひ

起

蚊をつれて来る七夕の笹

坡

咲花あてに仕込こんにやく

塙

つかみ喰する丁稚うろつく

松

不斷にも踊上手は品のよき

起

横雲の下から雉子の声立て

坡

咲花に尾上／＼の鐘がなる

谷

簞笥の銃の引ちぎれけり

起

東風に着がへの風呂敷をとく

升

焼た野づらのついは青まぬ

起

屋敷から鶴の料理に矢の使ひ

坡

はけば掃ほど夏ぶるや祇園町

鳳朗

蚊屋舶を春の仕事に買集め

松

うはき男の厳重ふんどし

起

買った手にさくあやめ一もと

九起

鶴の一のしに鳩のおくるゝ

谷

無給でも廓の内がつとめたき

起

黄鳥の付子のきげん見に行て

梅室

初花や路にも芽つく苦み

呉明

橘ふんとかほるうち水

起

あちらのおくの咳が聞ゆる

朗

かき根を直す繩の陽炎

東升

蝙蝠の出繕ひするくれの月

起

綿の入たるしきせまつ秋

起

砂そゝぐ汐干の貝を打明て

九起

何神います石の宝殿

起

舟よりは萩に弁利な牛便り

朗

舟のもの等が来ると寝転ぶ

明

唐紙の落書みれば国の者

坡

蔀おろしてともす一つ灯

朗

宵月に酒をはじめる棚さがし

明

飯の湯あつく腹わたにしむ

起

よりさはる人の空事占にとり

朗

初白ひくに家うち追るゝ

起

花のとき棟上すれば花の寺

坡

勝手しるまで住つかぬ縁

朗

いろ鳥のさそふてわたるや、寒み

明

雉子のほろゝに霞広がる

起

歳暮やるばかりに雪車の支度して

朗

念仏もいはで初瀬の夜籠

升

花のとき棟上すれば花の寺

起

歳暮やるばかりに雪車の支度して

朗

念仏もいはで初瀬の夜籠

明

雉子のほろゝに霞広がる

起

歳暮やるばかりに雪車の支度して

朗

念仏もいはで初瀬の夜籠

升

雉子のほろゝに霞広がる

起

歳暮やるばかりに雪車の支度して

朗

針に成てもさゆる有明

室朗

塔二重のこして外はさくらかな

大津 月鴻 (五七オ)

青蘂を松の幹まで干のぼり

室朗

伊予

御難の餅をもつた旅びと

室朗

はるの夜や草履と下駄の踏ちがへ

松山 六外 漁翁

秋のくれ庄野の犬がまた吼る

室朗

三日たつ春や表はものゝ音

功能書を風の飛せし

室朗

風上て見たき空也子は居らず

下柏 其嵐

花折につかくと来てついと行

室朗

山城

巢の嵩あげて蜂のしづまる

室朗

降たかとおもふ雫や今朝の花

八幡 鳩里

出代た今度の祖父も奇麗好

室朗

唄かげや隈どるやうに花の散

古好

灸箱抱て起る朝々

室朗

客かへて別るゝ駕やふぢの花

逸百 (五七ウ)

鳥羽沖であれをかついだ船の左右

室朗

隣の家は他国なりけり

室朗

簾干ば聞たかと問ふ子規

室朗

小僧の鉢に養はれ居て

室朗

色ふかき岡崎もん匂御油なまり

室朗

たはれがすぎて風呂にはづるゝ

室朗

(五六オ)

七夕に三年桐を棒にする

室朗

(裏表紙見返し)

鳳朗旅だ、れければ爰にてとむ

室朗

(裏表紙)

肥前

長閑さに乗人もさすやわたし棹 早岐 古由

かりて来た駕にもならず春の風 春日

紀伊

雲のちる風しばらくやけさの秋 高野 鼎峰

(五六ウ)

筑前

雨の、ち見直しに行さくら哉 博多 角二

履かへた草履しめすや春の風 雨柳改 如笑

近江

川越に宿をとるなり藤の花 田井 素竹

大やうに山をはなれてはるの月 大森 蘭丈

咲みちてくもりもちたる桜かな 常浜 宝水

京四条寺町東へ入  
御すり物師 近江屋  
利助

35 弘化二年『花供養』

底本 櫻井本

校異 白鹿本、九大本、高岡本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

今年の花、去年の

雨ざれて、去年の人

今年いかに、今年も

夫身花ちりぬれど、

人なほ別し。花か人か

天地の有物尽る

時なし。これこの供養

の期とはなれり。

伯耆 田中乙美 [乙美]

弘化二年乙巳三月十二日花供養会

莫火の花に立添ふ煙かな

打た田ごとへぬるみ行水

雁は皆帰るに鶴のおちつきて

かたい天氣に雲もうごかぬ

店しめて門の廻りを掃に出る

顔の揃ふて飯のこんざつ

金山ははや霜をおく月の頃

枝折て来て見せる簀むし

不断きく紙碓さへ秋さびし

橋場今戸はよい酒もある

国者の供を旦那が案内して

た、む小袖をにくむうつり香

夏瘦も冬瘦もする物おもひ

洗ふ大根にさす日みじかき

地車に社のゆれる道祖神

鉦のみなりて葬の出かねる

剃捨し毛うけに月のさしか、り

肌のこそつく秋のかたびら

待合の馳走に放す虫の声

負荷の帳に判おして遣る

四ツ辻に霞見て居て眼のだるき

松の高さにとれぬ切風

初午の土器のこる穴のくち

横乗をして呵らる、馬士

戻りにと文庫投込ふしのこや

砂のほこりにむせる炎天

二番草けふで大方仕舞なり

椀のほひに茶の味じもなし

母親にかくしてうける御かみそり

あきもあかれもせねど遠のく

酔たま、つい間はづす除夜の鐘

買って間もなく足袋のよごる、

淀川の細々見ゆる端の寮

魚てんにすると喰へるさび鮎

木枕に寝かねる月の夜もすがら

骨牌の音の冷々とする

線香を立て居かはる見付番

小便担桶のどれもあふれる

子規腹光らして飛でゆく

入梅のうちでも湖のあかるき

伍員

其雀

月樵

芦岬

松笠

完和

梅通

素波

石亭

禾明

必山

柳鶺

梅石

薫坊

松雨

伴橘

素兄

晁采

巴江

孤柳

祭魚

尺木

雲萍

東升

杜鷺

寛嶺

来章

仙菓

其夕

乙也

坂越すを苦にも思はぬ忍びあひ

はれのつぶりをつぶすくらがり

ぐさぐさと縄のゆるみし糟俵

草臥あしで風呂を焚なり

家買て這入名所に月のよく

舌うちをして袖みそよろこぶ

鹿時は嶮咀くも人の見え

帯にはさんだ財布重たき

薄もやもか、らぬけふの花催ひ

畦も小径ももえ出る草

五十韻下略

武蔵

はつ空のまれに人行野道かな

梅香にはや不足なき夜頃かな

羽子の音かけに聞さへ長閑なり

六七分稲刈りの祭りかな

船頭を伽に梅見の一人かな

蚊遣火に焚へらしても草の庵

朝がほや水にとゞきて片びらき

田も畑も刈れて庵の夜寒哉

海かせぐ人も正月ご、ろかな

匂ひある垣根の草や霜の朝

月になる雪も春めく木の間哉

顔に来る日は暑けれど秋のかぜ

雲たつと見ればはつ花咲にけり

青柳の家や日和にうつ碓

人も居ず花はみしほの朝暉

長閑さの眼先はなれぬ宵寝かな

闇の梅匂ひの満てこほれけり

凡来

仙歩

篤明

豊丸

有節

豊見

風光

朗風

岱年

執筆

拾五

江戸

由誓

伯遠

杜有

金令

松什

抱儀

流芝

山外

一具

祖郷

万頃

五株

冬李

英父丸

得蕪

遅流

鳥吟

かけ鯛の口からたまる埃り哉

光るので小鮎としれる濁りかな

はかの行拍子ではなし茶摘唄

はつ空や神の灯一ツ杉の奥

散梅に蕾の残る余寒かな

勝角力はなれて一人居りけり

何もせで日ぐれの早し松のうち

軒ちかく成て地をする乙鳥かな

イば雲の出て来る清水かな

西うけや梅の家かげのおこし畑

門松や町も雀のよく籠る

露草の上なり月の有明る

河島やひねた小まつに花すみれ

なか／＼に香はかくれぬぞ雨の菊

暑日をまぎらかしけり水の音

木の鳥は驚きやすし浮寝鳥

立直す屏風めくるや春のかぜ

松かぜを慕ふ浪間の衝かな

明る頃江に落付やけふの月

連にした子に分て遣る根芹哉

もや／＼と崩れさう也雲の峰

さからはず流るゝさまや春の水

海見ゆるまで登りけり花の山

霰降音や伏家の夕けぶり

潮先や引残されてとける雪

山ざとや冬へ持こすおとし水

行春や雨のけしきも捨られず

長き夜を更して眠き陸月かな

はつきりと晴て柳の雫かな

枯柴の上にもおくや春の霜

喰つみや俄にせまき置どころ

三日月を見て打仕舞畑哉

黄鳥の枕に響く初音かな

寒みある風に声よき雲雀かな

朝掃除して黄鳥を聞日かな

寝て見たき山の移りぞ春の水

先うれし春もしばらく海苔の味

織おろす機の手もとや夕柳

旅人のよき日に合や鶏合せ

まだ土地の人のみ通る柳かな

鳥の羽かる／＼つかふ柳哉

浦の子の人を見て居る汐干哉

節季候や万歳下る箱根山

花のかげさして夜に入座敷哉

ちら／＼と眼にさへぎるや夜の花

更るほど人声若し除夜の門

摘で来た足で配るや初若菜

藪寺や仏の膝に残る雪

活たれば散どまりけり萩の花

陸奥

引鶴やとりしまりたる朝の雲

秋の蚤おさへ力のなかりけり

春雨に降られながらや鉄づかひ

分別もなく三月の禁酒かな

明切て余ほど間のある初日かな

氷る夜は犬の声まで振りけり

二階から見おろす海や春の月

煙みて人家尋る紅葉かな

乗出してみたき海なりはつ霞

花咲て毎日来るや樽ひろひ

春寒し鴉ばかりが野に糞

はるたちて春待年の境哉

あしらふて柳をのばす小雨かな

ながらへていつを限りぞ蟋蟀

汲で行水にも浮や落つばき

鷹ひとつみかけし花の吹雪哉

雨ばれやこれから吹は秋のかぜ

物売の中にまぎれて磨りり

俎に水かけ流す寒さかな

野酒屋が勝手かくしの柳かな

雲雀見て立草臥に居りけり

うちかへす波にも秋の立日哉

たれる丈上へもそだつ柳哉

七くさやどの草にたつ此匂ひ

陽炎や草鞋も解かず一寝入

芦の芽やわづかに残る川かたち

摘つくすほど人の出る若菜哉

宿とりて見直しに出るさくら哉

散際の重みや花に雨雫

朧月頓て花さく木の間かな

鳥籠をあらひに出たり春の川

肥過てをれ葉の多し杜若

はる風や削て捨る畑のくさ

かざしたる扇の上や花の雲

日帰りの証拠に提て梅の花

花ちるとおもふ矢先や雉の声

はつ空によきつり合の鴉かな

青空をわづかに花の透間哉

可政

福島 桑湖

風外

喜良久

(九オ)

助宣

左右

(九ウ)

南枝

本牧 惠珠

耕山

見外

熊谷 五八九

猪俣

梅笠

越谷 太良彦

美水

逸測

上野

網女

太乙

孤角

操女

如風

禹鼎

国女

呉城

熊月

芭々

夷則

芝丸

千丈

卓朗

兔木

可正

溪斎

井流

翠雨

為山

慶鳥

北龍

雄嶺

可申

湖鳳

北賀

其友

北眠

梅笠

琴堂

其水

玄子

立志

青々

三草

陸奥

嵐台

仁宝

而先

素峰

青和

亀口

五戸 文来

万古

一帆

福岡 月桂

余力

計明

月扇

勝錦

一旭

松岬

鳳朗

椿呂

如菜

潮月

桃林

鷹阿

桃郷

交友

和友

月雄

可厚

希石

米賀

南鶴

田名部

杉廬

市考

仙台 江三

執中

可政

三朝

(七オ)

(七ウ)

(八ウ)

(七オ)

(七ウ)

(八ウ)

裏門の柳静なゆふ日かな 郡山 扇々

鐘の音もつゝまる山の霞かな 露英

跡ひとつ喰に骨折雑煮哉 一仙 (一一〇)

降崩す竹の音して夜の雪 杉田 英泉

藪入を見に出る土堤の小家かな 二本松 一旦

蓬萊を別間にかこふ屏風哉 梅井

ちりやすき芥子に雨もつ日暮哉 邦泉

夏瘦の腕をさする寝起かな 虚窓

高からぬ山を出て来て春の水 埋山

風の糸草臥足にかゝりけり スカ川 静夫

七くさやならべてみるも念のため たみ女 (一一ウ)

大川に落ても岸はぬるみけり 笹川 如水

敷て待筵に花の吹雪かな 方芳

まだ明ぬ野に火のみゆる子日哉 福原 閑月

山里や春たつ雲のうつくしき 三春 風志

出羽

黄鳥や二朝三あさ小くらがり 秋田 二葉

行列の過たほこりや心太 其仙

はちくゝと音をしさうに露の玉 御風 (一二〇)

なく蛙声にひかるゝ手足かな 二丘

肥後

ちるさくら袂に入て戻りけり 二丸 竹月

わた雲とひとつに成て昼の花 竹古

よき声の一ツ離るゝ蛙かな 柳霞

雨ごとに物かげの減るさくら哉 左雀

手にとれば崩るゝ水の椿かな 桃雲

一人出て水汲船やけさの春 琥山 (一二ウ)

つれて来た駕にも乗らず花戻り 楽之

夕栄えの花にさし向く小船かな 蘭谷

湧て出る処もなく春の水 鶉石

暮るとはしりつゝ、花の明りかな 霞樵

静さのはなれぬ朝の桜かな 雪兔

降て来る雨にも揚る雲雀哉 鉄山

温水の客の耳なれにけり雉の声 班雪

遠山に見添る朝の霞かな 如柳 (一三〇)

風のなき空とも見えぬ柳哉 旭水

雑山に一本はなれて夕ざくら 紫山

水ばなれするや蛙に草の雨 東波

黄鳥や日和にふえる谷の水 寒松

当なしに行あたりけり初桜 哉月

草つめば草から出るや春の水 鶯士

吹止で水にかけひく柳かな 笹磨 (一三ウ)

余の木まで聞おちつかぬ桜哉 柳士

降ものもなく曇りぬ花七日 沙角

山里はさくらから夜の明にけり 竹丸

豊後

咲みちて闇夜もあさし梅所 日田 五柳

さし潮に向ふて吹や初あらし 三岳

梅が香の高うなりけり日照雨 如白

秋風や夜のあけてから戻る雲 諷月 (一四〇)

はつ花や根ざゝの中に残る雪 兎水

高々と水をはなれて氷かな 季蘭

蟬なくや飽の来てたつ写しもの 木兆

戸は明てあれど留主なり若楓 生月

散にさへ盛りのみゆるさくら哉 砂彦

蝶飛や着ものへらしに子の戻る 秋蔦

尻重うなるや寒さの居ろりばた 李岡

雨雲も出て梅白し向ひ鳥 半路 (一四ウ)

笹の葉の埋た下やはるの水 名山

春の夜に脱ちらしたる着がへ哉 方山

雲払ふ空や弥生の朝明 榎卜

しほらしき清水の音や梅の花 梅月

揚て居る帆に風たらぬ霞かな 五笛

黄鳥や山へつゞきの寺の庭 支測

紅梅やたつた一本うめの中 雪村

七夕や人静まりて水の音 春谷 (一五〇)

松壳をよけて通すや年の市 錦谷

宿とりてうれしき中のきぬたかな 二子 花六

梅の葉も少し残りてしぐれけり 春星

日向

黄鳥のかはつて来たり声の跡 富高 月雄

眼覚れば暮てありけり春の雨 飢肥 遅牛

さびしさをはなれて降や春の雨 明考

眼ざはりの柳もはるの詠かな 一峰

牡丹みて戻ればくらき戸口哉 素木 (一五ウ)

春立や只黄鳥の高う飛 本庄 習之

飛込だ蛙にかはづ騒ぎけり 和声

うめがゝや一文菓子も味をもつ 大戸磨

しばらくは暮ても花の明りかな 赤江川 竹苞

朝風のうちは小高き柳かな 宇兆

黄鳥は鳴ずともよきすがたかな 路及

子を腹の上に遊ばす日永哉 正葩

水見ゆる丈すかし置く茂り哉 其石 (一六〇)

但馬

かすむ野や心やしなふ廻りみち 村岡 一橋

銭ざしに指て戻るや落椿 左和義

田舎にもよい子持けり雛祭 金野 夜舒

水音のけはしくなりぬ夕霞 篠垣 潤葉

蕨とり赤瓦山にみえにけり 粟山 一樵

掃中に消て行けり春の雪 梢声

朝がほや軒下廻る蔓の先  
芝村 柳里 (一六ウ)

酔覚の顔にちりけり春の雪  
荒川 花友

五月雨のはれて柳の煙かな  
一燕

屋根の塵おちて目立や苔の花  
豊岡 月春

店先や髭は動て氷る海老  
網場 忠雄

おこたらず歩行抹るや蝸牛  
香住 蟻洞

泥はいた瘦の見ゆるや五月鮒  
稚笑

朝月の移るや萩の露しづく  
五堂

住なれて居るや枯野の一つ家  
菰藪更 轅雪 (一七オ)

浮雲をかゝえて沈む蛙かな  
上山 桂秋

舞て来た落葉たゝまる垣根哉  
秋孝

江のへりに鴨のならびて花ぐもり  
十戸 仙遊

旅籠屋の羽織上張る余寒哉  
殿村 似略

長閑さや山をながめる船の中  
森山 古林

万歳の親子ならぶや小盃  
関宮 誠甫

棚なりの田なり畑なり雉の声  
閑月

逢に来て扇くれけり京の宿  
西温泉 弓月 (一七ウ)

金山衆になき味ひや冬籠  
大藪 松翁

水あてゝ田葉粉してゐる青田哉  
田辺 半月

田一枚五形ばかりの山路哉  
宮津 東柯

左義長や舞込雪も一けぶり  
馬良

丹波  
上びとへ跡はこまかし炭俵  
龜山 九花

照月やうき雲かゝる隙もなき  
松露 (一八オ)

眼の先へ人あらはるゝ青田かな  
月樵

凄き眼の峰さへ花にうかれけり  
成松 呉秀

人声も嵐も退て暮の花  
青巴

開田や穂先揃はぬ稲の花  
遊夢

咲花のおくに建けり供養塚  
額田 桂眉

白雲の根なしに出ては冴かへる  
水上 羽人

黄鳥の鳴ずに居るや朝曇り  
悟道

上る間を草につなぐや早苗舟  
保津 耕雪 (一八ウ)

うつくしい日の跡逐ふて春の月  
笹山 其通

品川や海苔に遣ふた柴らしき  
西津 淡水

笹の葉にあしらふほどの小鮎哉  
淡流

黄鳥の鶯ぬぐひけり啼にけり  
嵐朝

うぐひすや雪をちらして松に入る  
寄休

霞たつ下に水飲からすかな  
波常 (一九オ)

けさ花を出た風もどる夕部哉  
微角

伽をして気の沈む夜を子規  
、

行先でよい明月の泊りかな  
、

松の声降つゝみけり夜の雪  
、

遊ぶ日もなく正月はたちにつけり  
松泉 葛山

董野や子供付たまがひみち  
市場 千稚

越中  
里なみに寺も昼寝や蟬の声  
伏木 和鳴

行秋にみなひらきたる水戸哉  
、 (一九ウ)

月さしてもの静也枯柳  
、

加賀の国俱利迦羅にて  
、

くりからや松に染こむ蔦紅葉  
李郷

霜となる露を持ちけり菊の花  
東条郷 冬英

居眠りて見ぬ人もあり落椿  
水杉 奈民

麓からくれて登るや花の山  
勢斎

花の夜は早しらみけり東山  
放生津 里北

鳴ほどの蛙朝日のうしろかな  
霞堂 (二〇オ)

住なれし庭の桜も盛かな  
玉木

風の日はこゝろ配りや雛の店  
古游

遠山に白浪たつやはなぶゞき  
里風

方角は子をさして出てわかなつみ  
昇斎

しらずして植たる菊の白さかな  
東雄

ことし三月十二日松陰堂南軒に  
香をさゝげ遙拝す

奉る供養の花や月の前  
子邁 (二〇ウ)

竹に吹風や左右へ飛ばたる  
高丘 半遊

眠たがる子を居らせて謡初  
盈科

夜るは灯の影も有けり梅の奥  
龜石

一本は無事で開けり福寿草  
龍子

苗代や旅して見たき出来心  
桂々

里の灯に一位つく青田かな  
岱上

おし分て庵を覗く柳哉  
胡文

馬ありてうるさき昼の蚊遣り哉  
花精 (二一オ)

売ものにして縁遠し紙雛  
逸江

初蝶やわづかな風に羽の弱り  
戸出 五柳

岩組を根にして高き柳かな  
山沢

降捨て行雨雲や子規  
水橋 完尔

御降やうすゝみゆる大鳥居  
魚津 乙雄

紫陽花や降込雨に折るゝ音  
砺波 松兮

越後  
山水の夜るは冷すや花の宿  
水原 春室 (二二ウ)

日永しとおもへど旅のいそぎ哉  
堀内 松舎

黄鳥の踏下げにけり松の注連  
川口 吏川

正月の男となりて朝寝かな  
中条 幸水

花ちりて眼ぶたの重き夕部哉  
龜洞

木がらしに吹も消されず峰の月  
宗三

黄鳥のさし足したり裏の山  
長丘 一毛

みだれてはおくれつなぐや天津雁  
竹司

雉の鳴あたりに鳥も居ざりけり  
石亭

白梅やつめたさうにて夜の明る  
高田 菁菘 (二二オ)

居る先におくも蚊遣りの馳走哉 李潮  
 見た人に逢ふや二度めの梅ばやし 五全  
 乙鳥の橋を境にもどりけり 高彦  
 袖揚て万歳の越す浅瀬哉 皆好  
 石竹の花も乱るゝ暑かな 九余  
 こつそりと客の来て居る礎かな 奥野  
 露萩の中をめぐりて高台寺 新濁 有木 (二三ウ)  
 歙音について春日は廻りけり 糸魚川 曳尾  
 行水に声は流さずほとゝぎす 大迎 鷺眠  
 夕ざくら心あまりて手折けり 茶三  
 船の出るまでは見て居る雲雀哉 蘇山  
 手折るゝうちは野梅のさかり哉 北山 応化  
 長き日も人にまぎれて船の中 文龍  
 春雨の中のぬくみや麦一畝 森下 友徳  
 買ったまゝ、人にからるゝ曆かな 花朝 (二三オ)  
 黄鳥やはり合て鳴谷むかひ 亀田 月鴻  
 下萌や何処まで通ふ土籠 芳岱  
 したしみの月がさすなり梅の花 紫琴女  
 奇麗なる座敷を春の寒かな 大可  
 霞まれて奥底もなし山の家 ちから  
 永日や人の眠りを見て眠し 弘山  
 あしもとの霞むまで往て戻りけり 川丁  
 黄鳥のはづんで鳴や野の小藪 木公女 (二三ウ)  
 黄鳥やいつも出初は竹の中 なを女  
 鳴雉の跡や小鳥の羽づくろひ そへ女  
 山水やうかれ登れば春の山 みた女  
 あの山はさくらばかりか月もさす 一双  
 うめが香の夜にみちたれば曇りけり 吾来  
 買ったのは光りもうすき若菜哉 応泉

米よりも頼みや庵の炭俵 ツラ島 桑坡 (二四オ)  
 雪解や日ぐれて高き水の音 芦洲  
 夕ぐれや戦もやみて散る木の葉 柳外  
 山かげの湖に薄らぐ木の葉哉 桐塙  
 梅手折力似気なし角力取 宮内 心拙  
 粥杖をいたゞいて来た咄しかな 惣社 素外  
 寝ころんで居れば客ある牡丹哉 笠丘 淡亭  
 山かげに釣船居るや秋のかぜ 九陌  
 川水にうつせば深し天の川 史也 (二四ウ)  
 一ぺんに暮ぬ曇りや花の中 備前 八浜 射風  
 夕月のもれて冷つくさくらかな 花翁  
 雉鳴たあたりからたつ埃り哉 黎快  
 霧巻て音なく海は暮にけり 露台  
 さげて立枕重たしはるの雨 浮葉  
 よき桜あれど貧しゝ孤家 順風  
 春かぜや気のいさましき人心 児島 巴竹 (二五オ)  
 近う来て鳴けど木深し子規 岡山 孤山  
 掃立の庭に木の葉の時雨哉 竹亭  
 つながれた船ばかりなり冬の月 里恵女  
 新薬の色まださめず初しぐれ 九怡  
 ちるまでは曇りの退ぬ桜かな 九逸  
 白雨のはれるや松に下り蜘蛛 素卜  
 うめの花畑に灰ふる男かな 馬仏  
 もうあれでよいにせわしや揚雲雀 西大寺 芦風 (二五ウ)  
 散しきて地に光りもつさくらかな 野村 耕雨  
 一里来て東雲をひく柳哉 九溪  
 備中  
 伯耆  
 今津 乙美  
 周防  
 宝積 芳水  
 閑雲 (二六オ)  
 可賑  
 好酔  
 淇園  
 五溪  
 出雲  
 大社 草悦  
 嵐外  
 甫尺 (二六ウ)  
 狭野女  
 平田 花雷  
 王居  
 花好  
 梅逸  
 凡和  
 六厓  
 雲厓 (二七オ)

小筵に湯あがりさます柳哉 今津 乙美  
 巻揚て月夜にするや青すだれ 宝積 芳水  
 てらくとてる日の寒し柳影 閑雲 (二六オ)  
 うつくしき慾や小松の引ゑらみ 可賑  
 ゆさぶつてみたし桜のたもち露 好酔  
 どの木にもおもむきのあり梅の花 淇園  
 居るより立世話多し冬ごもり 榊浜 五溪  
 出雲  
 あかつきは船にもあるや山ざくら 大社 草悦  
 行あまる音のありけり春の水 嵐外  
 つぎ木しに出て上着ほど脱にけり 甫尺 (二六ウ)  
 ひとすぢに子規まつ雨夜かな 狭野女  
 見定めもつかぬさくらの盛り哉 平田 花雷  
 竹の雪風呂の煙りにこぼれけり 王居  
 月涼し団扇おとして眠りけり 花好  
 ちるさくらひと明りもつ麓かな 鷺浜 梅逸  
 はつ空のはや常になる雀かな 大社 凡和  
 一処へよせて覆する木のはかな 六厓  
 松杉の中までぬるむ流かな 雲厓 (二七オ)  
 【校異】九大本、二七丁表・裏が落丁。  
 肥前  
 平戸 馬窓  
 子羊  
 梅寿  
 李朝  
 秋甫  
 中彦  
 春月 (二七ウ)

まだ雨の槓木にしまぬ余寒哉

古由

山の井に時しり顔やなく蛙

帰雲

はる風にさそふて来るや鳩一羽

一恵

川裾や霞にそふて汐の来る

籬薦

昼一度寺の飯くふ茶摘哉

几一

庭からが春の山なり麓寺

島原 素羅

朧夜でなほけしき有柳哉

天草 正焉

雪の山笈しさうに思はれず

大村 悠々

寝かねるが不断になりぬ花明り

長崎 甫旧

春寒し荒田耕す通り筋

芦笛

満汐のゆれしづまりて初がらす

素峰

春かぜや少しは音のほしき浪

士桂

早う来てめでたがらるゝ燕かな

籬月

ちる花や転び寝しても花の夢

里英

おろし羽になりては早き雲雀哉

椶園

さくらにも一筋ほしや御手の糸

玉甫

見て居れば猶予してちるさくら哉

筑前在崎 圃柳

近年の御朔日なりほとゝぎす

驢童

花に花おさるゝほどの盛かな

勝本 櫛洲

潮の引ほどは引けり江の霞

淇水

行かたへ角うごかすや蝸牛

薩摩 都城 省三

巢を持って人にも馴るゝ燕かな

一卓

稲妻の跡やぼるゝ雨の来る

松鶴

浪がしら引つひかれつ花の照り

近江

黄鳥や朝の声にて日暮まで

鷺洲

陽炎や麦の葉よれのもどる朝

旭下

夏草や喰せる牛につけて来る

不二雄 楓下

こがらしや夜もすがらなる組天井

和田 九光

桐一葉おのが力におちにけり

土山 虚白

はつ声といふ間にふえる雀かな

八幡 桃谷

葉に花のいそがれて咲くらかな

可松

かゞやきに薄雲消て初日の出

夜有

風垣をとればどの帆も霞けり

豊浦 可陽

山吹の下に遊ぶや池の魚

梅枝

注連かけて折さぬ神の桜哉

二笑

気をおとしつけて眠るや春の雨

田井 素竹

三日月のみゆる頃まで行々子

日野 東雄

戻る丈鳥はもどりにてなくかはず

多賀 四峰

雪ながらかすむや野辺の小松引

大塚 玉山

黄鳥や笠も音せぬ朝ほらけ

青鶴

春をしむすがた見えけり遅くら

石部 春草

聞たびにはつ音心ぞ郭公

其棠

牽牛の空や夜を待雲の峰

田川 寸斗

清らかな水もながるゝかれ野かな

草津 石雄

山茶花や葉よりも多き花の枝

玉映

福寿草よき色どりや銀屏風

玉脂

盃へちり込花の雪吹かな

能登川 拾翠

拝殿に畚の子置て田植哉

、

動き出るやうや木の間の山ざくら

高島 節外

月寒し若葉に付て夕ぐれる

、

門の声月は朧としられけり

舞雪

野山見る戸口に花の盛り哉

麦村

自然枯をそしらぬふりや藪の梅

大津 蕙逸

宿の衆に巢はまかせてや野の乙鳥

砺山

雪解の水田に浮や藁袴

拾五

竹ばかり我植ものや仮り住居

乙也

箕笠や花には着よと思はぬに

鷹山

時雨や西もひがしも青い空

伊勢 山田 桐一

うしろ向むき雪の藁屋哉

石鼎

朝がほやつる先までも花の露

篤之

日南ほこして居た音の紙衣哉

津一幽

はたらいて飲茶は味し麦の秋

穴賢

冥加さや今としも花にひがし山

関 旭子

掃跡に詠て居るや花の雪

花朧

精進の日はわすれねど花七日

みど里

花の夜や翌日のたくみを夢心

雲僊

野は寒し彼岸ざくらの咲ながら

月岡

遣り羽子にさ程さはらず松の風

四日市 流芳

曲るとき一風来るや梅はやし

伊賀 養瓜

簀虫の音よりも細し初しぐれ

鷺秋

尾張

明た夜のもつと明るや花の上

名古屋 而后

寒ければさむい声也木挽小屋

一清

むれあふて鳥の寝にくる若葉かな

有橘

黄鳥をこまかに聞や障子ごし

月底

よし野に遊びて

(三三ウ)

花ちるや山のけしきのかはる中

高井 甫岳

月見ても松見ても須磨の夕哉

、

ちかづきの顔見合て梅の花

一松

夕虹の水にうつりて蓮の花

暁鳥

月光の暮となりけりあらし山

五髪 青雨

三日月の光入りけり恵方棚

外崎 田水

そこらから出た風情あり花に月

下津 穂咲

参河

おくれ蚕もつぎ出しけり朝あかり

岡崎 卓池

果もなき海に響くや雉の声  
聞ゆるといふてうち出す齋かな  
波文

惟一  
浪花 鼎左

着ればきて正月寒き心かな  
飛こゆる溝も名所や若なつみ  
素屋

其山

はつ空になりきる窓の明りかな  
つみくゝて若葉淋しや桑畑  
松隣

米老

鴉逐ふ鳴子もかけて畑の梅  
枝つき飛鷺のきげん哉  
松笠

磯遊

井戸傍に一日あるや若な屑  
明る戸にかた頬はぬくし初日影  
井柳

耕水

野の梅や捻たまゝの折小口  
湯に入て出る草臥や花の旅  
井柴

井左

蠟そくの火気に動く牡丹かな  
松かぜを気味よく聞ぬ更衣  
笙山

南湖

時ならぬ雨にぬれけり花の中  
朝山や花にすれ行一重雲  
幸雄

素日

日にかはる月の朧や須磨のうら  
青竹の垣うつくしき余寒哉  
封龍

林曹

はつ春やもの申受るこゑ二人  
遠山は霞むに雪のこぼれけり  
柱本 都春

原田 梅雄

寝思案や木の接味を考へる  
責られた蚊を責かへす蚊遣哉  
三田 冬岐

伊丹 太乙

買人からまけぬ氣出して初鯉  
舟引の吹分て来る霞かな  
曲阜

芦引

供の来て又見ふやすや帰り花  
時鳥なくやだぶつく桶の水  
藤涯

播磨

麦蒔て戻る夕飯や膳の酒  
大雪や馬屋まで往た下駄の跡  
志野部 愿泉  
今市 霞村

(三五オ)

東山にむかひて

春の水手向る道の仏哉  
はつ袷着たひと連や淀堤  
きりかけて舟まつ川の柳哉  
陽炎や踏はづしたるはたけ道  
人声に動くばかりや花の雲  
黄鳥の啼間は客も居りけり  
何気なく登りかけけり春の山  
亭主ぶりする客もあり花の宿  
戻つてもちらかる花のすがた哉  
ひるの月澄葉桜の梢かな

伍柳  
季風  
素涼  
鶴眉

大瓠  
寿輔  
北梅  
古谷

小坂 芦国  
赤穂 一簣

安芸

万歳の只も通らず宮の前  
水はたゝながれ行なり花のもと  
瀬に向ふ筏のあとの霞哉

白羽  
写山

長門

名月や作り立たる茶筌まつ  
夜の田のけしき見に出る団哉  
日の入にくろき出雲の寒かな

菽 蘿月  
伊佐 文朝  
九山

筑前

ほうろくといふ名もぬくき頭巾哉  
飛かげのみゆる迄なり初がらす  
うたゝ寝の友も出来けり草の蝶  
春めくやこけるほどつむ客ぶとん  
ちり口の立て桜といふ日かな  
水の来る程にはへらず峰の雪  
鳥の翳当たもひらく椿かな  
一雨に葉の伸かつや桃の花  
春雨や只も居られず藁細工  
松かぜのあたりに寄らず揚雲雀

福岳 宇逸  
石外  
斗丈  
赤間 若拙  
泉砂

博多 五雪  
其雪

呉竹

兎玉

木芥

(三六オ)

塵あくた捨場にさせぬ柳哉  
飛木

筑後

人の来る日和となりて梅の花  
ちる花をうしろ手突て詠けり  
【参考】弘化三年36丁裏に同句形で入集する。

久留米 芋川  
吐雲

和十

二三羽は帰らぬ事か小田の雁  
ちる塵のしばらく浮や春の水  
静さや雪つむ竹の走る音  
咲間寒さの退ぬつばきかな  
松竹に交りて梅の匂かな

竹波  
遊松

猪口 東湖

山本 文月

越前

黄鳥の腹光るかとおもひけり  
植仕舞苗をそだてる嵐かな  
草鞋売家もたしなし郭公  
十六夜の闇ほど照るや二日月  
散といふけしきはみえず夜の花  
配るには数の揃はず初茄子  
干網に鴉の群るかすみかな  
松山や雑木交りて八重霞  
寝心のよさや枕もかすむ朝

敦賀 如積  
平沙  
一兄  
瓢石

三国 可笑

府中 素坡

東升

加賀

戦では蚊を騒がさす葎哉  
四つのうち番ひ見分る胡蝶哉  
葉のつよみ花には持たずちる椿  
水におくやうに手早き田植哉  
遠道のわすれ草なり花重  
灯はある甲斐もなし花明り  
永日や軽尻馬に乗づかれ  
黄鳥と来合せにけり一里塚  
竹子やへし折て行下りぶね

金沢 悠平  
風和  
車休  
柳壺  
松波

江州 素行

大夢

素玉

(三八オ)

夕ぐれや数の蚊遣りにくもる村

鶯呼

脱かへて案山子に譲る小簀哉

松ほ 松洲

散止で花夕ぐれをつくりけり

薰坊

月を待外に用なし夕ざくら

伊予

小松 映門

枯柴にはらりとつくや雨桜

津幡 我柳

長居して犬に追れつ畑の雉

菊圃

若水の花や光りの添ぬうち

鶴来 梅嶺

旅籠屋の灯ともし頃を時雨けり

松山 宗雪

舞ふ盛吹飛さるゝ胡蝶かな

棋樵

中々に風にはちらず梅の花

葵笠

黄鳥の籠も苦にせぬ高音哉

大聖寺 北園

田処の月かげふかき二月かな

春蟻

瀧音の調子の揃ふ日永かな

豊収

火も呉ぬ軒端に旅の雪吹かな

漁翁

永日の旅やうみ過山も過

東雅

橋こえるあひだ明るき茂りかな

鳥岬

泊る木に風かけられて鳴鳥

蜷洲

つくろふた障子のすきの寒さ哉

柏 臥鷗

風ばかり照て手元は日暮かな

可道

暮かけて池の真上や鳴雲雀

其嵐

山なれど折をしみけりはつぎくら

斗和

山の雲花にしたしく明にけり

高松 化友

縁黒うなりて落けり玉つばき

木圭

ふけ行や巨燵の上のひとり酒

白鳥 峨月

黄鳥や耳に五六度眼に一度

丹嶺

満る丈みちて音なし春の潮

丸亀 画声

拾るゝ様をかくして飛虫

能登

花の香に旅草臥もわすれけり

松子

雉鳴や夕照のある小松原

鶺鴒 生化

花ちるや酒のこぼるゝ膝の上

上野 涼笠

野がすみのながれ先から日暮けり

文友

かすまれて帆裏へ廻る嵐かな

高知 古鳳

雨などの趣でなし雉の声

七尾 千蔭

曳人より見人の暑がる車哉

化昇

今さした柳と見えぬ戦ぎ哉

歩丈

最う植る田かや泥までうるはしき

嵐夕

暮たかと顔出す花の木の問哉

淇洲

赤々と手もなく咲や山椿

小倉 可推

旭さす障子の煤も二月かな

、

雪の人今往た道を戻りけり

森山 鸚晨

春雨の音を長閑といふ夜かな

林藤

暮寒し桜も雪とちり立る

霞城

峰つくる雲の真下やかゝり舟

高富 荷月

丸窓はまるう明けり今朝の春

簾甫

朝夕の春をみするや遠柳

飯田 勒泥

馬の道よけても咲すすみれぐさ

孤松

灌ぎおく葉の起かへる若な哉

正院 鳳兮

せめかけて鳴や夜明の時鳥

石露

淡路

、

雨雲のかゝる梢や遅ざくら

松屋

つねに聞松のあらしも春の風

広石 樵雨

豊前

豊後

明る夜と窺ふ空や初がらす

楓所

かすまれて帆裏へ廻る嵐かな

古嵐

簀虫の枝うつりする若葉哉

柏堂

虫さくや障子明るも気扱ひ

田籠 梅可

、

、

水際に来て重なりぬちる桜

和泉 堺 此方

、

、

ゆれやむと直に雨降柳かな

若山 世外

、

、

鮎釣の腰に手ごろの瓢かな

其泊

、

、

蚊ばしらの崩では立あらしかな

孤楓

、

、

降しめて雨となりけり春の雪

梅鈴

、

、

若水やかるとおもふ新水桶

英月

、

、

一曇り持て夜に入るさくらかな

月下

、

、

梅香に片へりのする箒哉

春山

、

、

大松も吹止である余寒かな

湯浅 一敬

、

、

昨日のと掃分てありおちつばき

閑牛

内へ来て払ふどんどの埃かな  
往もどり眼のかひだるし花の山  
大和 錦丈

滴の末幅殖てはるの水  
丹波市 桑夫 (四四ウ)

聊の名の井覆てはつぎくら  
、

柳にも先くれ初るながめかな  
ワシカロ 喜扇

隣から吹込うめのにほひかな  
少年 為三良

手行灯を提歩行なり春の宵  
貞少女

三日月の光りに消る霞かな  
都宜女

暖な日や遠山に鳩の声  
繁女

春かぜにもたれ合たる堤かな  
春山

松かぜのめで度音やはつ子日  
杉郷 (四五オ)

梢まで折れて仕舞野梅哉  
蟻正

黄鳥の声の細りや小笹原  
羽石

二人とも調子揃ふや畑うち  
里水

黄鳥に鳴かはりたる小鳥哉  
一勝

黄鳥の今朝まだみえぬ姿かな  
京女

陽炎の薄々たつや瓦屋根  
魚一

梅潜りくゝて出る小みちかな  
柳青

捨俵とればちよつぼり露の臺  
竹青 (四五ウ)

一めで風情なくする霞かな  
上市 芹洲

月の夜は猶哀れなり猫の恋  
芦曉

長閑さに有たけ伸す風の糸  
鳳喬

皿駕に乗たながらやつくゝし  
里桃

折うちもまどひの付やうめの花  
樵月

長日や隣にも火は消てあり  
山草

春雨のはれた山家や夕けぶり  
臥石

出代の戸明るおとを名残かな  
葛花 (四六オ)

けぶりさへ横にはしりて余寒哉  
虎丈

杉山や只ふらゝとはるの雨  
露翠

一にぎり丈も揃はぬ土筆哉  
可陶

白酒に酔て見に出る野梅哉  
下市 可樵

初午に買てあげたし風の糸  
里江女

はつ花の朝を臚に匂ひけり  
五条 南岳

潜り戸を無事にくぐるや梅の花  
増口 如雷

荷にまける笹葉売や春の風  
上市 宗眠 (四六ウ)

春かぜや一人歩行もよき時分  
先鳴

明行や花に定まる峰の雲  
十日市 竹人

雁なくや月はそゞろに曇る時  
内山 幹蔭

花になる音や折々降小雨  
信貴山 虹朗

夕立にながれて清し川の塵  
奈良 観松

人声は花のあたりや臚月  
穂谷 寿山

蝙蝠や池にも魚の飛最中  
星田 梅塵 (四七オ)

男振継穂の桃や花の艶  
五島 寸松

散花に眼も草臥の付にけり  
磯山 橘斎

花を見る人見に出るや祢宜が妻  
山畝

出る日の直にさしけり鴛鴦の上  
諫早 方居

寝ては居ぬ様子や霜の窓明り  
糸口

習ふより馴て手早き田植かな  
長崎 貞士

菜島や踏あらしたるみだれ咲  
加治木 草佳

よいほどに酔て出たりはるのかぜ  
嵐翠

鳶鳥鳴や真ひるの花の上  
也六

葉に花の落はさまりし椿かな  
泰蘇

春の雪夕晴もちて積りけり  
阜響

汐焚のけぶり立るや花の春  
雪人

さゝ浪の臚となりし月夜哉  
関市

一めに涼風もつや青野原  
碧水 (四八オ)

白雲のちぎれにみるや帰雁  
矣哉

春かぜの軒端に出たり雀の子  
留春

一通り摘だ跡から若菜哉  
可嘯

月に雲一しきりづゝ蛙かな  
春朗

長閑さの分に過たる桜かな  
二外

白筆にさすや小窓の初日影  
春逕

陽炎の立や草鞋の土埃り  
几桂

戸ざはりの枝先咲や軒の梅  
虫二更 竹哉 (四八ウ)

開たるはづみに伐やかきつばた  
耕山

立行鶴に靄のはれ行  
而先

宿引の早うから来てふらついで  
、

うそく喰の腹にもたれる  
山

商ひも月見かぎりに荷を仕舞  
、

浜は鯛のひけてにぎあふ  
先 (四九オ)

氏神の祭り近よる角力小屋  
先

ねたみ持たる咄し聞居る  
山

霰にも雪にも通ふ忍びあひ  
先

巨燧はあれどいつも火のなき  
山

住つきて不自由樂しむ柴の庵  
先

根ざゝをつたふ水のちよろゝ  
山

茸狩の客戻り来る暮の月  
先

野分がやんでつみ直す薪  
山 (四九ウ)

新蕎麦に腹をへらして待て居り  
先

すこしは経をよめる墓守  
山

らちもなき藪に初花見出しけり  
先

長閑にかはく道のおき土  
山

蝶々の日がな一日おなじ所

氣長うせねば魚の釣れぬ

一束に刀脇ざし投出し

白川の里は最中田植どき

子のうまれたる内のどさつき

男手に女の返事書て遣り

神楽の前の庭燎たきけり

冬船につみ込米を持出して

むかしの気性今によはらぬ

竹原を月のもる丈伐すかし

鴆なくかたの明き夕空

どびろくの細い基手に取かり

寢覚くゝに申念仏

地震から崩れたまゝ、の室の町

南向だけはやき凍どけ

唄づたひ枯木くゝの花曇

からげて仕舞蔵せんまい

松前社

閑子どりなくやかみ切筆の先

水音たかき軒の下闇

四五升の麦を搗せる臼かりて

かるはづみなるものゝいひやう

月の雲ほどよく晴る、宵のうち

葎の中にあかき鬼灯

往来の人も通らぬ彼岸過

諏訪の湯治を来てはす、める

とり出した火桶の灰をかゆる也

さつくとはしる冬の空の雲

休むたび酒手を頼む夜の駕

可政

亀口

政

政

政

政

政

政

政

政

素峰

其水

北龍

龜口

嵐台

北眠

千丈

翠雨

青々

龍

口

戸の口に寝て犬のふまる、

菊の香の月にますく匂ふ也

風にころがる後の紙雛

座敷まで廊下を歩行うそ寒さ

僧をもてなす膳のこしらへ

花に灯のぼつちりともる玉津島

いつも番ひの引のこる鶴

切風の糸に足引道のはた

螺ふきたて、何も聞えぬ

朝しばし汲がれのするもやひ井戸

ばらくゝ雨に曇りはれけり

笠寺へこ、ろを運ぶ笠提て

夜寒のさとの夏も夜寒き

母親にかくして縫し単物

鉄漿つけて虫歯忘る、

預かた状を尋るよき便り

まだ眼の覚ぬどびろくの酔

鹿処の何も作らぬ畑の月

柿の照り葉の早うからちる

神主の供を雇ふて出られけり

雪になるやら北の真くろ

箕を投ておけば雀のむれて来る

風呂焚たつるけぶりいぶせき

咲花に三衣袋の旅すゞり

くれぬうちから春のぬか星

越放生津社

たのもしや月は朧夜初ざくら

蛙時めく里の家立

蚕種売に親子のうちつれて

湖風

眠

峰

水

丈

雨

台

龍

口

鳳

眠

丈

雨

嵐

水

眠

口

峰

丈

水

峰

口

龍

青

眠

寝草臥たる膝のがくつく

筈はねて御城をみせる船の中

風はなけれど松の音する

往来の人は大かた袷着て

加茂の祭りも四五日になる

賑やかな廓も朝はものさびし

逢たら咄す夢をわする、

鷹すえて橋を一ぺん越てくる

畑もすこし見ゆる宇治山

満月に戸ざした家もなかりけり

はなした虫の声はまぎれぬ

連置て新酒の酔に深寝入

立かけてあるよし簣倒る、

さそひ出る風まだ寒き花の雲

昼しばらくは聞ぬ黄鳥

春ふかく近江のかたへ杖をひき

足つまづいて噓をさまる

洗濯に水汲込ば雨の降

飼葉をあます馬のわづらひ

若い時はやつた歌を唄ひ行

枕にひゞく荒磯の波

冬がまへ手元に飭る物もなし

しなよくいふて鰻を断る

かへて来た一步の銭も又とられ

眠りて起て鐘を聞居る

月かげに笹の葉ごとのすれる音

北へ直りた風の身にしむ

袖嗅でものほしげなる鹿のつら

おがむ眼先のくらむ大仏

今結た髪のはらつく笠つづぶれ

可政

亀口

政

政

政

政

政

政

政

素峰

其水

北龍

龜口

嵐台

北眠

千丈

翠雨

青々

龍

口

布子重たき暖になる 邁

よき程に松のまくばる花の中 雄

水を尋ねて蜂にさゝれる 邁

(五六オ)

長崎社

朝起も自分ではなし花ざかり 驢童

水音までも長閑なる月 喚古

帰る雁鶴の大つれ追こして 童

市の魚荷にふさぐ門先 古

煤はきもけふはくと終延し 童

さかやきしてもさはるがらし 古

飯橋ですます遊行の通り筋 童

気転の利た射場の見隠 古

袖どもが白にもくろむ倒れ松 童

顔ほめられてはじる早乙女 古

見残したよんべの夢に薫る風 童

よき茶囉ふて水のせんさく 古

菊も最ふ半過れば気がゆるみ 童

隣近所のきぬたやかまし 古

としぐにはづむ祭の鬼をどり 童

莫ぎらひに辛子すらすら 古

蝶鳥にそゝなかされて月と梅 童

【校異】白鹿本、高岡本の下五「月と花」。九大本は

底本に同じ。

かすみこめたるおくの斧音 古

近江社

春の山皆黄鳥の日南かな 節外

雪解の水のこすむ瀧壺 薫坊

かたげても引ずる柳輪に曲て、

長くはなしすれど尻がる 外

こんやくを月に大方売捌 坊

砂吹たつる風のすさまじ 坊

牛の子をつれたる旅の草枕 外

念仏講のもどりざはつく 外

転さうな家ばかりなる町はづれ 坊

霜置たほど降り初雪 坊

歌仙下略

みの虫もぶらりと明て花の春 高シマ 白雄

加茂川のはては蚊の鳴ところ哉 日ノ 其業

黄鳥の障子に響く初音かな 更科ノ左 信濃

ちるけしのあらはに見えて暮にけり 高シマ 梅有

歙洗ひながら長閑な咄しかな 金沢 晴江

白魚や水にひたせば眼にみへず 蘭圃 梅時

人も期人に惜まれちるさくら 梅時 淇六

歙さはりながら全き田にし哉 淇六 淇六

桑つみの下に畚の子眠りけり 滑川 東邸

立ながら御慶すすや舟の中 有明雄 (五九オ)

家みゆるかたへながる、清水哉 江戸 舍用

とり足らで楽しみふかし土筆 柳篋 繁茂

春かぜにうごき初けり須磨すだれ 繁茂 相駿二州

手紙より先へ出しけり初松魚 曾我 春雅

くれぬうち田にかけさすや月と梅 府中 碧山

寝支度に成て夜更す睦月哉 沼津 漣山

筑前

真上から見て来て谷の花見かな 博多 窓夢

藪がきに咲たへのせぬ椿哉 江山 瓦金

走り出る雉子に行逢ふ山根哉 瓦跡 瓦跡

水際に蝶の吹る、卯月哉 乙国 乙国

遊びても日かげの余る卯月哉 音かへて来るや木の葉の一時雨 月平 月平

音かへて来るや木の葉の一時雨 音かへて来るや木の葉の一時雨 月平 月平

雛なくやわたしへ出る道づくり ちるかげの雲より早し柳鯨 野竹 野竹

野仕事の慰みらしき霞かな 唐津 芦山

朝がほにしばらくさすや峰の月 曙山 有隣

湖の上も霜夜のひかりかな 松かげの日脚くぼるやはるのうみ 傳 傳

黄鳥や二つになれば気草臥 雇はれて海士の出て行汐干哉 奥羽 蛙吹

はるかぜや苦にはならねど戸の透間 福島 真樹

木鋏の音ばかりするしげりかな 秋田 丘斎

刈あとを根分て囉ふ菖蒲哉 温泉 標梅

すゝみぶね漕登りては流しけり 肥后 素名

畑かへる様で其まゝ帰る雁 隈本 千千

来た道の戻りに見出すわらび哉 鬼白 鬼白

玉卷た徳をひろげるばせを哉 川尻 意翠

一雫落てうごくや花の雲 綴喜 半山

桶の水雀のあびて暮遅し 老波 老波

空にまで朝焼持や桃の花 雪也 雪也

空にまで朝焼持や桃の花 雪也 雪也

山城

一雫落てうごくや花の雲 綴喜 半山

桶の水雀のあびて暮遅し 老波 老波

空にまで朝焼持や桃の花 雪也 雪也

青柳やまねき合たる江の曲り 魚鳥  
 猶予てかげも踏れず月とうめ 長池 玉好 (六一ウ)  
 寝がへりもせぬに今としと成にけり 伏見 岳鳳

【校異】白鹿本、高岡本、右の一句無く空白にする。  
 九大本は底本に同じ。

一休みして又見るや花ざかり 洛 来青

野から来て山吹の根になく蛙 梅室

うち水や葉でふさぎおく蟻の穴 荃涼

うめが香やわづかに残る八日月 芳英

灯を入れて見草臥する桜哉 乙雅

鳴わたる鴉の声や月と梅 雨翠

道ぶしん出来て垣根の清水哉 伍員 (六二オ)

入相のかねにかすむや一ツ家 其雀

朝かげや椿のおつる鞠か、り 梅通

砂山へ江りに行やはるのかぜ 禾明

帷子や旅は男もた、み馴れ 柳鶴

眼の行けば匂ひのくるや丘の梅 梅石

長閑さをついに広げて雲もなし 松雨

手づくりの味噌口あけるさくらかな 素兄

かゝやきの松にうつりて初日かな 晁采 (六二ウ)

呵られてまた覗きけり花の幕 巴江

すえて行鷹の眼通ふ胡蝶哉 孤柳

焚火から癖つく浜のかすみ哉 祭魚

結たての髪にちり来るさくら哉 尺木

麦刈や二番芽茂る茶の木畑 雲萍

黄鳥も鳴や亭主の愛想よき 杜鷺

蓬もち商ひながら花見哉 寛嶺

はつ秋や日の出るまでの田の曇 梢蘿 (六三オ)

一木とは見えぬ盛りや奥の花 其夕

風起て夜の明安き湊かな 凡来

棚の灯の丁子頭や明の春 仙歩

飛と見し蛙鳴けり箒先 篤明

藤咲て毎日竹のあらしかな 豊丸

松かげに人のこぼせし薺かな 有節

雫して小寒き花の旦那 豊見

嘯にいよゝのろし地乗馬 風光 (六三ウ)

涼しさのこらへられぬや戸なせ川 一花

酒の座もかはりて梅の月夜哉 委水

帆ばしらにすれゝ行や五月雲 梅融

花をまつ心かすみにとられけり 在京 風阿

土器の香ものどけしや花の春 完和

大沼やたゞ一りんのかきつばた 必山

ぬるむより麗におたてる流かな 北鶴

花つみや廻りゝてもとの道 桃五 (六四オ)

みえて来ぬ浪のうねりや月の海 可大

奉公して居る孫かりて御忌詣 碩水

稲づまや胸中みゆる山の塔 木容

黄鳥や川はつかへてよき天気 雨江

薄水や鶴の踏行音のする 閑令

蒼でもけさは花也福寿草 淡節

花寒し花の雫の板びさし 九起

関も塩屋も絶て只須磨の浦 梅室 (六四ウ)

日の出にまでは星のある空 九起

口さらに色よく染た葉を敷て 室

あつき綿子を着ぶくれにけり 室

鶯に乗あぐみたる暮の月 室

わたつた雁の余念なく寝る 起 (六五オ)

葛はふて一字も見えぬ傍示杭 室

寺はむかしのまゝの象潟 起

袖乞のかさも帽子も新らしき 室

扇の箔にうつるわがかほ 起

はりもせぬ肩をもます恋草に 室

窓のあかきをほめる小ざしき 起

名月に蓬かざるも武蔵ぶり 室

米囉ふ友芋くれる弟子 起 (六五ウ)

頤の瘤をか、ゆる露霜に 室

やがて鶴なくうみの色合 起

花植て人宿までも出来にけり 室

たもと立派につゞく峰入 起

棧を空足踏やほと、ぎす 梅室

かさなりかゝる峰の梅雨雲 起

下座筵掃てひかゆる朔日に 吳秀 (六六オ)

鱧する音のちかき台所 室

行灯を吹消す月の明り先 起

紋ぶね出して隙な荷問屋 室

捨た子が小角力取に成てくる 起

近いころから魚市がたつ 秀

糞かけて鳥居を汚すつなぎ牛 室

雪に草履をひたすきぬゝ 起

川あらし忍ぶたよりの綿ばうし 室 (六六ウ)

よし簀かこるに上爛の声 起

月もなき廿八夜の不動講 室

虫なきしきる風呂のさめぐち 秀

服部に刻みませたる若蓑 起

寝て居てもすむ裏関の番 室

聞はず鐘に日永き花曇り 起

水のぬるみに青む苗代 秀

起

ほこりともならで雪ちるかすみかな 鷺洲 (六七〇)  
 雉のかくる、草もなき岡 九起  
 花筵こ、かしこより持よりて 洲  
 こしてはつかふ桶きりの水 起  
 豆の出来誉く月に備へけり 洲  
 風冷そめる北うけの家 起 (六七ウ)  
 さを鹿の首かたむけて鳴もせず 洲  
 米かし一人こゆるもの好 起  
 ばらくと降て晴たる走り雲 洲  
 酒のざしきに枕いやしき 起  
 待てゐる娘は来ずに文ばかり 洲  
 松の青葉をちらす木がらし 起  
 かけ鳥のいく度も氷る奈良祭 洲  
 眠りころびし馬の口とり 起 (六八オ)  
 材木の間へ出る夏の月 洲  
 植あまりやら苗の流る、 起  
 弁当の茶入につかふ古ふくべ 洲  
 袖にすれ行く乞食うるさき 起  
 【校異】白鹿本、高岡本の本文はここ迄了。  
 刊記は底本に同じ。  
 越後  
 青海苔や手がなるな物に味のある 水原 乙良  
 屋根うらへかけのさしけり春の水 西畴  
 【校異】九大本の本文はここ迄了。  
 刊記は底本に同じ。  
 (六八ウ)

馬かへて別る、道や藤の花 一得  
 灯ともして人待花のわたし哉 茶烟  
 旅人もまじりてゐるや花の山 芳玩  
 川ぶねに蝶く付て下りけり 一流 (六九オ)  
 豊前  
 撰分る反古をともや春の雨 小倉 紫鱗  
 朝晴や雉なく声を道案内 蘭明  
 草の虫鳴ほこる夜や聞ほこる 清高  
 行当るさまや乙鳥の空がへり 瓢亞  
 長閑さや草に広げる旅日記 梅子  
 さみだれや日並はしらず月肥る 木父 (六九ウ)  
 畑うちや力をはづすかげ法師 日田川 木亭  
 吸殻をふけば又来る蜚かな 桑亀  
 庭掃や月はとくより山の上 松寅  
 帷子ややさしみのつく相撲取 吉野 樺齋  
 長門  
 桃さくやもろ肌ぬいで鉄遣ひ 船木 磨山  
 肥後  
 見おろせば一木なりけり森の花 隈本 五辰  
 肩をおし袖をつらねて花見哉 五嬰 (七〇オ)  
 遠のりの跡の埃りや春の月 五柏  
 正月の心になりぬ十日ごろ 五羊  
 塩籠のけぶりのまとふさくら哉 五東  
 菜の花に眼のこそばゆき日和哉 五恭  
 見るうちに煙は山のかすみかな 五鐔  
 ふくるほど静なりけり花の月 五駭  
 遠退けば葉も白妙の桜哉 五魏  
 樹造りもすんで先着る裕かな 雪茶 (七〇ウ)  
 行脚 梅左  
 黄鳥や竹の落葉の処々

限本社  
 ものかげの露を相手や初蛙 千干  
 梅の芽だちの早き日あたり 梅左  
 出代に隣合せの風呂かりて  
 遣はぬさきに鏝る庖丁 干 (七一オ)  
 一撮み石に塩もる宵の月 干  
 地子のつもりにおこす新綿 左  
 野末から色付て来る草の秋 干  
 足軽町へ施薬はり出す 干  
 後ぞひは仏せ、りを大義がり 左  
 呑込かねる際の借錢 左  
 水揚の噂になると風も止み 干 (七一ウ)  
 なぞりの笛の近う聞ゆる 干  
 月よほど上に清みきる高津台 干  
 丸ごしにてはむしも買れぬ 左  
 踊子を仕立るうちのいそがしく 左  
 かこみ酢なれど悪嗅き也 干  
 花のさく頃は寝に行掛屋敷 干  
 鼠おどしの牙かへる音 左 (七二オ)  
 みじか夜や一二の石の水溜り 梅左  
 わか葉のむきに闇き丸窓 雪茶  
 鴉よぶ笛を似合にこしらへて 左  
 あしもとも見ず飛す吸がら 茶  
 急がする駕になんにも入れぬ月 左  
 つゆの落つく黒ぼこの道 茶  
 穂屋仕舞祭り程には人もなし 左 (七二ウ)  
 やつと一荷に荷ふ塩もの 茶  
 折々はさしかけになる釣障子 左  
 さめて痒き湯上りの肌 茶

黒小袖綿の吹のをいやがりて

積直させる下じきの米

木づくりの階子其儘月の前

狸しかりにまはる南畠

ひがん過卒都婆も横に打倒

生駒の峰も最う笑ふ也

葩煎をもる甕土器に花散て

日永にこまる典葉の供

五六丁軒をならべる古手店

そういふ振に樽拾ひ来る

つきまとふ犬をこはがる若座頭

雲ぎれもなき昼の青空

おし汐に立網舟を漕つらね

瞬もせぬかりの手まくら

思ふ事清本節に諷ふなり

ぬかりみすかすぶらり提灯

翌日出す小拳の入夫請合て

塚の土台を修羅にのせけり

檜柞ぐるりを月の冴わたり

荇蓆塵も冬はふけいき

物とひに這入ば茶筌作居る

盆にいたゞく麻と陀羅助

砂の中家鴨の卵ほつかりと

茂架うれのひつくととなる

咲花に浅黄暖簾のとろ、汁

ぬれてほのめく春の置芝

○ 京東洞院仏光寺上ル  
御摺物所 菊屋平兵衛

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶 左 茶

(七三オ)

(七三ウ)

(七四オ)

(七四ウ)

底本 竹内本  
校異 愛知県大本 白鹿本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

叙

東やまの花供養は、八重一重となく、四方の佳詠を得て、春ある桜木にのすといへども、聊名利をねらひ勝地を需むとはあらず。唯偏に祖翁の恩を報じて、流の末をも広くなさばやの外、余念なければ、所謂心水を清らにして花月の影を舍すといへるも、是等の事をやいふなるべしと、あるじにかはりて一言をしるす。

丙午春 加州我柳 我柳

弘化三歳丙午三月十二日花供養俳諧

花守の掃除とゞくや東山  
笹の中来るはるの水音  
暮遅きつがひの鶯の居眠りて

竹月  
九起  
砺山

穢家やすみの軒端静けき

焚つけにさらへては入輪の屑

雲行寒くつぼむ朝がほ

出ぬさきに何所とも月のけしき也

さらした味のわかる新そば

すゝめてもかぶり振るゝ馬ぎらひ

裾のほつれにみゆる紅綿

似顔画の出る度売る長局

手なべでひと日くらす煤とり

香久山は雪になりしか風あらく

自然枯藪の中に道つく

紙すきの板しろぐと干ならべ

しかれば党をむすぶ村の子

まく丈は月うつりてもうすぐらく

ぬたもなますも桐の葉をしく

水損の早稲田くるく見せ歩行

火繩のかさに鳥はみなたつ

はるも未だどんみりとせぬ鐘の声

いけた柳のさきへ芽をはる

雪洞をとれば湯気にもかすむなり

羽おりきがへて国人に逢ふ

上覧の関寺すんで四座がしら

風もふかぬに名札ちらかる

くらはせば走りて牛の又のろし

女は居ねどかけ香にほへる

脱すての紋なつかしき湯屋の棚

菓子は喰ずに茶ばかりを飲

草鞋のこほりを槽に和らげて

みやこで歳をいはふ日づもり

手ざしさをすれば儲る狐ふく

手ざしさをすれば儲る狐ふく

荃涼

来青

素玉

鶴叟

呉明

微笛

風光

倍美

一斧

涼花

雨谷

杜蓼

桃五

乙雅

豊丸

勝錦

北洋

百古

尺木

白燕

秀香女

柳鶻

松南

梅仙

野半

吾雀

梅四

百仙

松雨

成祇

成祇

きはめのつきし丈山の文

しめきつて常は通さぬ御間の月

ひとりしてうつ秋の代々

やゝ寒うなりても肌には蚤の跡

舟に酔たか苦かぶり寝る

冷めしに魚荷の口をむしり出し

小雨ぐらゐはもらぬ傘松

野辺帖にはたりと落る鳥の糞

あくびに曇る脇ざしのさや

しらぬ碁も見れば見捨にならぬ也

四人づゝすむ普茶の御料理

あかぎれのいたみて月にさぐり足

霜おきわたす川ぞひの土手

立場には思ひもよらぬ伊丹酒

城下ついでに頼むかへ金

隙のなき最中花のさかりにて

青みたつたる芝のうらゝか

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

一順下略

露光

有節

露大

呉嶽

月井

閑令

素峰

枝月

有柳

黙池

伍員

岳鳳

白雄

明良

九蒼

梅室

拾五

拾五

拾五

願泉

古谷

北梅

寿輔

芦国

聴洋

一簣

秋峰

青水

青水

青水

(序一ウ)

(二オ)

播磨

執筆

(四オ)

(四ウ)

折てから持あぐみするつゝ、じ哉

寿山

白雲の筑波過行五月かな

香雨

伊予

そこらから起たやうなりはつ鳥

鴉雛

水底へ鵜は沈みけりほとゝぎす

九陌

映門

あがるさに風のさはるや竹の月

霞村

焼菌のけぶりをまくや後の月

淡亭

菊圃

朝の間は牛も氣がるし鳴雲雀

牙睡

薪うりや年頭かねて小ざつぱり

史也

坡堂

美作

草もえの中にふえ出る野水哉

龜田

畑うちの通る柳の小道かな

貞丸

(七オ)

宗雪

筵帆もまじりて行や春の海

千鳥

安芸

白羽

(七オ)

少鸞女

雨ばれやはつがすみたつ海の上

成之

聞つけた所は雲よあげ雲雀

写山

(七オ)

春蟻

はじかれて咲やうす也雨の花

耕雨

たゝむ間もなき万歳の扇かな

周防

(七オ)

佳笑

備前

若草や枯葉の多い処より

一洞

行灯に本さしつけて巨燧哉

閑雲

(七オ)

烏丁

霞まれて居るともしらず舟の人

柏葉

はつ花や汲で出る茶の素湯臭き

芳水

(七ウ)

左笠

水ばしる笹や梅の薄あかり

玖宇

蝶々や吹飛されて牛の角

五溪

(七ウ)

里耕

唄かけてうめの上道通りけり

酒芳

京らしき空となりけり春の月

百古

(七ウ)

花仙

龜を釣る子のさかゝし更衣

楚珀

一つく年の名残や除夜の鐘

長門

(七ウ)

菊洲

遠浅に驚の眠るやはつがすみ

立石

よい柳持て朝寝をする家哉

磨山

(七ウ)

蟾居

枯豆に袖する道や草紅葉

馬仏

三日月の明りや鳴のこゆる山

文朝

(七ウ)

臥鷗

月代や山根にうごく根なし雲

辺竹

涼しさのみゆるや月の上りぐち

宇夕

(七ウ)

野雄

鶯きくや干たり濡たり旅の簀

北峯

呉たものつむ蓬萊となりけり

春鷗

(七ウ)

其嵐

早乙女や中にはなれぬ声のある

射風

くれなるの露や朝日の花も見し

五隣

(七ウ)

烏岬

夜のさくらあまり匂ふて静なり

孤山

白雲の花にかさなる日和かな

李隣

(七ウ)

古風

水無月や川の中ほる造り井戸

、

畑うちの昼と見えけり土ぼこり

石堂

(七ウ)

化昇

桐の葉のみなにもならぬ野分かな

、

おのづから持たた雫やはるの草

竹苗

(七ウ)

花仏

戎講まだ菊の香もあるなます

、

おなじ事山は白いに雪解水

里鷄

(七ウ)

(二〇オ)

備中

地の乾くわりにはへらず春の水

桑坡

讃岐

鸞石

(七ウ)

樵雨

みじか夜や夢かとおもふ豆腐完

春紅

塩浜へ牛も出にけり春がすみ

画声

(七ウ)

楓所

曳鶴につれて明けりとまり川

桐塙

山を出て山をうつすや春の水

松子

(七ウ)

柏堂

川水に濁りのさして帰る雁

柳外

浪際にのぞむ鳥や雲の峰

五椎

(七ウ)

米洞

雨はれる空にもあるや花曇

紀伊

南園

(一〇ウ)

よい日ほど底の曇りや春の水  
黄鳥や余り近うてのぞかれず  
散花も料理草なり桜鯛

花籠  
美登り

町中や螢ひとつに賑はしき

月下

(二〇ウ)

おさまりの暮て付けり遠柳  
動かねどかたちかはるや雲の峰  
玉川の埋れて咲茨かな  
鶯は空蝶は眼先を舞にけり  
屋根ふきの持て下りるや雀の子  
鎌かけて見直すけしの戦ぎ哉  
ころぶべき垣につる草しげりけり  
ひと処へ帆はしらよりてけさの春  
継分の椿もあるや塀のうち  
裏坂は通られぬほど茂りかな  
昼がほや瀬の跡もなき砂川原  
誰かけし息や霞のかみ山  
溝川をまたげて散やうめの花  
初花に眼の草臥はなかりけり  
眼さまして雁は立けり芦の角  
そこらから出ては霞むや鳩の舟  
水あれば山にもそだつやなぎ哉  
踊場へ送りむかひの入る子かな  
朧夜の更て音せぬ舟場かな  
雨はれてまばゆき花の光りかな  
元山にゆつたり出たり春の月  
提て行人に追付牡丹かな  
巻揚し翠簾に挟むや夕桜  
旅人のほつゝかすむ山路かな  
今度めは何処で聞すぞ子規  
行逢ふは連なり花の山めぐり

旭子

(二二ウ)

嘯りを聞て嘯りかへしけり  
桃桜柳もそなへ十二日  
用水の青み柳にうつりけり  
曇りても色のさへけり梅の花  
花の香や花をはなれて三足ほど  
しぐる、や袖に巻込小提灯  
牛飼に追ひ行野なり子規  
花落ちて折捨てある椿かな  
濁り来る川の流れや花最中  
小渡しに二人出てゐる雪解哉  
あき家に朝顔咲や石の上  
人込の透をひろげる日傘哉  
苗一把貰てもどる月夜かな

虚粟  
素竹  
拾五  
芦岳  
砺山

梅柳どちら向てもよき月夜

世外

(二〇ウ)

近江

鶯洲

(二二ウ)

(二四ウ)

黄鳥の初音に延む水の皴

其保

(二〇ウ)

可松

桃谷

(二二ウ)

正吟

水音のたしかななりぬ隴月

孤楓

(二〇ウ)

夜有

水谷

(二二ウ)

凍衣

葉ざくらにはや草深き庵かな

俊山

(二〇ウ)

太朗

麦村

(二三ウ)

一守

松の脂ふく日和なり虻の声

淇青

(二〇ウ)

凹峰

葭荃

(二三ウ)

蘭夫

蝙蝠や潜り分行橋の杭

素雪

(二一ウ)

雪洞

玉映

(二三ウ)

若狭

揚うとて子も飛上る雲雀かな

養瓜

(二一ウ)

玉映

雪山

(二三ウ)

月坡

滝くみに行や新酒の酔きげん

玉舟

(二一ウ)

節外

志文

(二三ウ)

外面

藪入や襟元に似ぬ提げ足駄

一幽

(二一ウ)

舞雪

松月

(二三ウ)

佳鳳

朝雨やきつと余寒の一ゆるみ

子遷

(二一ウ)

玉映

雪山

(二三ウ)

笑預

雨やどりして仕合やほとゝぎす

春麦

(二一ウ)

節外

志文

(二三ウ)

梅夢

散花もとゞめず清し谷の花

雅琴

(二一ウ)

舞雪

松月

(二三ウ)

外面

簗笠とかはりて軽し夏羽織

一溪

(二一ウ)

舞雪

松月

(二三ウ)

佳鳳

よく見れば風の動かす若葉哉

穴賢

(二一ウ)

舞雪

松月

(二三ウ)

貫丈

住安うみゆる里なり鹿の声

恒月

(二一ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

淡水

松一木いよゝ高き野分哉

嵐翠

(二一ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

聞なれぬ声の交るや門すゞみ

鶏山

(二一ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

潔き色なり菊の朝ぼらけ

巴菱

(二一ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

雪竹やまはり道して行く隣

野翠

(二一ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

どちへ足向て寝ようぞ君が春

李堂

(二二ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

ちる露に下よりすがる蛙かな

一睡

(二二ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

踏ぬ地へみな散せたき桜かな

藤露

(二二ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

去年の卯月八日愛子を失ふて

月岡

(二二ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

御仏は産れ給ふに泣日かな

月岡

(二二ウ)

可陽

嵐朝

(二五ウ)

寄休

越前

沙のひく洲先の音や朧月

閑子鳥鳴や雀の居らぬ処

馬の背に拾ふてはさむ落穂哉

指さしたやうに接穂の日かげ哉

畔ぬりの鍬はつゝや花すみれ

退けば雲よればまばゆきさくらかな

月は山ふもとは花のひと明り

加賀

散に眼のとゞかで疎し夜の桜

水に居て雨まつ沢の蛙かな

迎ひ人に迎ひの入るも花見哉

散た木に恥る花見の遅出かな

夜ざくらや含みあまりてちる雫

ひるがへる胡蝶や風のいれぢから

雁行やよい日もあるに雨の中

畑うちの跡やからすの入かはり

霞日は退屈もなし七曲り

羽子板に落あふ松の雫かな

若草のよこれや雨の叩き合

筆先に鶯のかげさす花見かな

畑うちの明手を待や乳もらひ

おしなべた庭の明りや朧月

下駄ぬいだ庭のはしまで雪解哉

ながれ行蚕のあとや水の雲母

それる羽子とり直しけり風替り

きれ風や跡とゞけする屋根づたひ

草道の兀て見えけり草のもえ

片屋根ははげしき雪の雫かな

夜ざくらの灯のかゞやきや絵馬の箔

如積

平沙

英峨

樗

如醉

夏庭

可笑

北園

我笑

北水

呼亭

蜺洲

可道

貝山

溪鶯

蜂舎

木圭

東雅

斗和

桃下

圭処

一芳

臥石

加計

何笠

呂邦

梧井

丹嶺

道ばたへもえてあがるや池の芦

おもくして舞興もなしちる椿

好て行身がまへはなし網代守

山子規海に来てなく夜かな

飛付て雫はしらす螢かな

旅支度して見に出るや朝ざくら

藁打は一鳥やるや春の雪

子規なくや鞍馬はうす明り

枯たりとおもふ牡丹にはるの雨

草ふめば草へす、むや春の水

黄鳥の声まだ暮ぬ麓かな

明るさをうめに残して月の入

眼休めに一日寝たり春のあめ

行春のゆくふりもなき不二の山

竹をみる心になりてはるは行

一日和して野へくばる小鳥哉

灯の見えるておくある花の中

朝月の消すにありて春の雪

磯守や膳にも茶にも海苔和布

菜の花や湖を出る川はいる川

鐘の音の跡をふ春の行彗哉

見えつゝも一瀬に遠し岸の花

黄鳥のはやり切たり風の中

月の澄うちはゆるまぬ余寒かな

長閑なる鶴の羽音やうめの花

龜茶ながらいつより匂ふ今朝の春

鶯や小枝にみせる鳴ちから

背戸へまで鶯のきてあり田植時

風の跡かさなりかはる蚕かな

呑ほされさうな峠の清水哉

梅嶺

茂園

春渚

榎里

柳溪

梅堂

芦船

棋樵

大夢

玉礎

梅巖

芦甫

南翠

龜齡

賀水

素玉

林坡

立芳

三枝

淇六

三千畝

葦阜

一岱

唐扇

花川

鎌江

雄巴

梅時

雪中

(二八オ)

かげろふて障子にうつる鉢木かな

花と水日暮る際のひかり哉

人よけの茨花もつ垣根かな

ぬれ色を見よと小雨の杜若

晴たれば此満月や花の雨

素もどりをして寝た空や子規

明際や海原に月山に雲

身捌の鈍な家鴨や雪の上

川音に肌冷る夜の梅白し

捨舟の垢に蚊ばしらたちけり

はやす手に青みの移る薺かな

気づかはぬ花の塵なり膳の上

ちり残るさくらもあるや水の音

往た跡で名の思ひ出る礼者哉

神の灯で月と照りあふ木の問哉

朝かぜを相手にあげる雲雀哉

ながれ来て筏につくやちる桜

翁忌

山住や黄鳥聞日うめ薫る

みじか夜や却て多き草の露

黄鳥や我軒ながら隣むき

舞蝶の木の間はなれぬ桜哉

明月やすこし置たき峰の雲

ぬれ柴のしばらく干て小春哉

吹立るけぶり涼しきゆふべかな

まだ外にかをる物なし露の臺

咲みちて少しこぼる、桜かな

此上もない静かさや池の月

素行

晴江

、

雅居

我柳

、

、

北山

能登

鳳兮

泥尾

橋父

北柳

芸郎

麟兮

喜偕

月舟

梅史

生化

稲波

烏鳥

龍巢

九化

李睡

其友

光明

林藤

鯉桃

(二二ウ)

吹かはる松かぜも早ことしかな	淇成	曇る日に声もくもるか閑子鳥	松吟	花よりも外に念なし旅日記	和夕
雨のつや見せて日のさす柳かな	歌夕	松の中秀て青き柳かな	完尔	花ぐもりはなれて暮る禁かな	桂司 (二五ウ)
ひる顔や草のしげりの上にさく	花好	鶴よりも落付ふりや田植笠	東邸	古溝のあげ土にほふ春日かな	吏川
白萩のひつそり月の夜かけ哉	鯉口	黄鳥に居合ぬく手のためみけり	冬英	月のよき夜に盗まれて梅の花	春洲
夜あかりもあるやさくららのよしの山	常積	山深う鐘は静に花ぐもり	井里	神の灯を照らしてみるや初曆	花泉
花の雨降や御幸の朱傘	荷月 (二三オ)	花戻り傘かたげるも風情哉	有交	人先に引て見てゐる小松かな	梅村
越中		雨雲のかぜに追るゝ花のうへ	和風	花遠く覚ゆる帯のゆるみかな	竹司
朝市に出て眼の覚る四月かな	和鳴	如月や門もにぎほふ児の声	李郷 (二四オ)	書初や明て居る夜に灯もひかず	石亭
荷の番に一人残してさくらかな	西畝	雨はれていよゝゝ花の雫かな	里北	稲の香ものこるあつさの一つかな	九余
旅なれて船場としるや遠柳	勢齐	門掃は乙鳥の通る西東	西厓	花明りみえて長閑しひがし山	北洋 (二六オ)
雪どけにしらぬ木の葉の流れけり	如静	朝がほや竹より延て帰るつる	古游	一あらし来るや芝生の走り焼	乙良
町中の更たさまなりおぼろづき	文秋	有明て月の残るや花の空	昇齐	雪かけて開くや梅の日かげから	西疇
月のもる家にもかふて鳴水鶏	有曹	ほそゝと夜に入音や花の中	東雄	花にのみ消て仕舞や山の雲	花朝
朝起て聞たあるじや炭の音	芝生 (二三ウ)	打ずとも琵琶は置たし花の宿	里風	如月のゆるみを空のくもりかな	友徳
煤はきの間おくりにする畳かな	馬年	めぐり来て月夜になるや花七日	子邁 (二四ウ)	落たれば一倍あかきつばきかな	応化
初雪や立たところの見ゆる鷺	晴涯	遊女にも風のかをりや浦の月	、	積置て見あきのせぬや炭俵	月鴻
行灯の低い小庭や桃の花	二丘	浅からぬ底美しき天の月	、	黄鳥の来ぬ内さわげうめの鳥	吾来 (二六ウ)
花を出た蝶のちからや雨の中	花亭	降は時雨夜は更行や犬の声	、	貝よせや花の散たもこんなもの	応泉 (二六ウ)
茸かへた屋根の落付茂りかな	六葉	越後		松かげをすくひあげけり初手水	周斉
蚊柱の根となりにけり水たまり	都山	ほのゝとさびしみ消る柳かな	春室	雪あられ中にかんばし梅の花	晋山
雲焼を鳴けしに出る水鶏哉	山沢	元日も黄昏にけり水の音	李年	うめが、や牛つなぎおく尼が家	一溪
うめちるや上ぬり壁の上乾き	五柳 (二三オ)	寒ぎくや枯てもくらき鳶の窓	令我	さし竿のとゝきかねけり五月雨	其楽
竹子やふとりざかりを堀ざかり	逸江	露踏に出て朝の蚊に喰れけり	曹村	あしらひの葉も美しや遅ざくら	一牛
悠々と薬を見せけり雨の花	花精	足もとへさす日を年の名残哉	春成 (二五オ)	黄鳥に筆投捨る初音かな	北古
陰膳や所得がほに蠅の声	桂々	心あての木でなかりけり帰り花	青湖	麻まくや鶏余所へあつらへる	思道 (二七オ)
借て居る家も煤はく騒ぎかな	兎石	持重りする傘やはるのゆき	有木	雨の日は空に手をおく桜かな	仏丸
雨もりの跡も尊とやねはんごう	馬雪	春の月里遠からず出にけり	奥野	名月や水けぶりたつ川の面	一亀
雪をれの跡幸に接穂かな	友雪	長日も夕ぐれてありかねの声	幸水	乙鳥や上手に通ふ松の上	文留
夜に入ば花も冷たしあらし山	半遊	鳶一羽風をはなれずなぶられつ	一雨	ぬれるほどなほ新しき柳かな	喜声
藪人や庭木なぶりも腹すかし	依山 (二三ウ)	つれづれに夜はおはすか雛のかほ	松舎		

名月や虫の声さへ曇りなき

竹輪

但馬

秋孝 (三二〇)

聞ぬ夜は蚊にもくはれて子規

古山

横ざまに鳥のつかむやかれ柳  
昼からも崩れずあるや花曇

松翁

行もどり門かる家やうめの花  
遅うてもおなじ声也初がらす

景風

丹波

春寒や月は昼から松の上

蕉夢

(二七ウ)

起々の工夫や菊のうへどころ  
雉子なくや打かけてある嵯峨島

稲月

飯たくも豆腐かこふも清水哉  
潜り出て犬の顔ふる野萩かな

池蛙

もてはやす声しばらくの蛙哉

九花

なまぬるき湯も永日の曲突かな  
冬までは窓明りなき柳かな

左和義

秋の夜の音やはせをの戦ぐ軒

忠雄

た、まずにおけば一日も雪の傘

松露

うきたつて駒いな、くや春の風  
立雉子のさかしき声や岩の鼻

標梅

二三四青袖ひとつに走らする  
連ありて花野に嬉し苙の火

因幡  
采真

から池や処々にはるの水

呉秀

山里や風雅にあらぬ冬がまへ  
咲日からかたい天気や梅の花

弓月

年がらのよき黄鳥の初音哉  
人声の跡に明るき柳哉

燕月

乗物の中で着添る紙衣哉

野卵

山吹も結添てあり藪の垣  
若なつみ来るく、畦に迂りけり

夜舒

福引や人に引せて引あたり  
町ばなれして覚えたる二月哉

志猿

若くさや去年の土のか、り埃

羽人

若な野や夕暮るまで人の声  
山吹も結添てあり藪の垣

梢声

黄鳥の居た跡鳥のひかへけり  
折うかと撓てはなす柳かな

一楽

居かはるもつとめぶり也花の席

二泉

潤葉  
不絶着のま、の客也桃の花

桃谷

規楽  
規楽

規楽

茶と苙はなさぬ婆々の茶摘哉

桂眉

一樵  
年がらのよき黄鳥の初音哉

梅甫

人声の跡に明るき柳哉

芳笠

麗や水輪のうつる塀の壁

白燕

(二八オ)

山吹も結添てあり藪の垣

花友

福引や人に引せて引あたり

守中

菜の花や田なり畑なりみる峠

湖舟

和来 (三〇オ)

花友

黄鳥の居た跡鳥のひかへけり

春眠

散花の景気そゆるや筏さし

其通

折うかと撓てはなす柳かな

文雄

折うかと撓てはなす柳かな

桜里

湖の夜のはたらきやほと、ぎす

、

只一羽かすみに入りぬ夕がらす

古林

黄鳥の居た跡鳥のひかへけり

宗納

菊はそのかたち似たる匂ひかな

、

牛の鼻のがれて咲や草の花

文雄

折うかと撓てはなす柳かな

春眠

夕かぜにさかり見するや枯尾花

、

おなじ事いふて別る、御慶かな

月春

隴夜や履馴したる下駄の音

鶯前

丹後

黄鳥や暮わたるまで鳴日和

梅月

雨はれて黄鳥なきに又出たり

花川

春雨や小亀を負て眠る亀

和楽

流る、となくて澄けりはるの水

万良

(二八ウ)

水仙のつほみゆるみし日の出かな

美乃女

木も草も葉びろ向るや初日の出

吹笛

車ふむ水もはづして田うへかな

半月

鳥の来て起る枝あり雨の萩

仙遊

元日の暮て二日のまたれけり

風玉

夕ぐれに成てはづむや田うへ歌

吟桜

竹子や竹には添はで垣の外

品女

鳴て行雁是切の余波かな

東溟

菜の花や日ぐれてうすき月明り

笑鳥

練土にまぶれながらやなく蛙

秋川

(三〇ウ)

一声ははなれて高し初がらす

西溟

牧方は鶏のうたふや郭公

保右

長閑さにおさへられけり波の音

楳晨

水かぶる草に風もつ春日かな

蛸月

花人におのづとなるやあらし山

東柯

よき水のながれて遅し杜若

雅笑

馬の上からも高いに御慶かな

有中

鎌入し野のつやくと春の月

耕雨

てりつけて池はうるさしきつばた

蟻洞

藪入を気の毒がるや川づかへ

西晴

畑中にけぶりたちけり春の雨

花丈

ゆるされてつかふ扇やうしろ向

轡雪

順立て落ならべたる椿かな

南嶺

散花や月の出しほの一ゆるみ

十無

(二九オ)

万才や振て舞来る袖の雪

本有

植て退く竹に三日月かくれけり

伯耆  
乙美

もう咲といふくらみや福寿草

黄雲

何となふ思ひもますやけふの月

雲休

松かぜはふけどもさずが蟬の声

桂秋  
龍窠

出雲

泉の籠相に鳴て花の月

秀然

小松野にながれ入り春の水

野竹

炬の火を寄れば匂ふ野梅かな

紫鱗

蔵びらき一つの蔵は用も有

凡和

(三三オ)

稲妻ののこりてあるや出た処

飛木

炬の火を寄れば匂ふ野梅かな

紫鱗

うめ咲やさかぬ桜も見て廻る

画竹

池見ても日の出をみても梅の花

呉竹

降り重る下行水や春の雨

清高

おもしろき山のすがたやきじの声

池白

飛込だ音まだ軽しはつ蛙

池白

稲づまに行当りけり戸口先

蘭明

足もとの寒いしめりや露の臺

紫尺

穴に水廻りて出るやはつ蛙

炬睡

葵にはまだうけて居る入日かな

亀陸

山水のはしりかゝるやうめの花

秀芳

浮て寝る声に紛れず飛小鴨

五雪

試てわたる橋なりかきつばた

寄木

垣をして間もなくちるやけしの花

甲年

気もはれて見渡す山や初霞

柳圃

葉うらから花の顔する椿かな

対輅

みじか夜や月伐かけてなく鳥

月泉

かきたて、若菜撰るなり行灯の灯

華興

花深し人ある迄があらし山

可由

町中のくろうなるほど蚊遣かな

喜月

初子日京なつかしくなりにけり

不三

露じめりしる静さや市の塵

黙居

日のうちに露を持たる芒かな

梅路

(三三ウ)

三日月ををりかくす柳哉

盧白

連翹やならぶ柳と筒井筒

梧堂

くれ竹の節の間守やかたつぶり

月橋

聞つけてたちもどりけりほとゝぎす

完之

礼いふたほどは囃はぬ若な哉

可推

蓬萊やかすむけしきに隙の入

雲厓

入相の鐘押つゝむ霞かな

裙山

朝起や只一時の夏の味

棠菓

鮮店のある所へつく茶舟哉

、

朝の間にはかどる道や雉子の声

霞睡

提灯もあるや花見の一世帯

梅年

鬼灯や花のゆかりもなき赤み

、

しばらくは行儀にならぶ田植哉

風虎

寒い目にあふた色なき椿かな

木父

はし守の外に灯のなき霜夜哉

、

長過て梅にかけるや注連の端

竹呂

草鞋のしめりかげんや春の雨

瓢亞

筑前

手のひらでとける根芹の水かな

宇逸

(三四オ)

たしなみの鞍置馬やうめの門

初道

永日や十里歩行てひぢ枕

桑龜

細々としてちからあり三日の月

斗丈

筵戸をのぞく人ありうめの花

桐旭

藪尻に鳥の出て鳴く小春哉

、

初秋や舟と二階のかけ咄し

尺歩

下りて来てふたつになりし雲雀哉

若水

苗代の溝を崩すや土籠もち

花向

から堀の底走り行水鶏かな

窓夢

雨ふくむ雲を抱へて夕ざくら

梅居

素人の花のみ切るやかきつばた

十邑

鵜の火見や果は淋しき芒原

可笑

山に日は入りてさくらの一げしき

葛山

老の齒にさぐりあたるや粥ばしら

霞城

雪汁に穴あく雪や軒の下

蘭溪

鎌入る手にもつる、やかきつばた

左跡

降込で垢に汲る、しぐれかな

、

冬がれやからげて直す鯛あみ

江山

水あげてふりのかはるや杜若

泉砂

眼ばゆさに梅の後にまはりけり

廉甫

つみ直す櫓の小口のしめりかな

其雪

山吹のうつぶく庭や寒い雨

公果

棒はなに釣せる梅の白さかな

孤松

竹棚の葛ほつる、雪解哉

椿歳

松かけをたのむや花の散さかり

若拙

むしの音は草にもどりにて朝あらし

芦舟

十六夜や木の間潜つて膝の上

一器

(三四ウ)

散花をうしろ手つきて詠めけり

若拙

雨気つく空やほと／＼おちつばき

松屋

黄鳥の鳴や日のさす椽ばしら

乙成

【参考】弘化二年37丁裏に同句形で入集する。

吐雲

沫雪の降てみせけり御忌の空

古桐

黄鳥の来る藪もちて朝寝哉

垣外

しめ直す筵づゝみや春のかぜ

東湖

城に日のさしてまばゆし朝がすみ

敬夫

鶏おふて又掃なほすぼたんかな  
さげた子の送られて来るぼたんかな  
明待た声や初日の朝すゞめ  
撰捨といふてもらふや菊の苗  
もの音もしばし聞えぬ暑哉  
水音のはげしき処にきじの声  
一羽からどれも今年の鳥かな  
咳や箔のこぼるゝかざり弓  
咲みちてくもりはなれず花の上  
木枯の中にも山の眠りけり  
うちつれてぬれ門出たる頭巾哉  
鞠沓のまゝで歩行や菊の庭  
提灯に露はねつける芒かな  
夕かぜや草葉にすがる秋の蝶  
大降のあとや四五日冴かへり  
鳥一羽鳴て過けり朧月  
野も山も静に明て花の春  
降つゝく雨の中より笑ふ山  
うめ咲や箒にかける塵もなし  
小松引うめ折そえて戻りけり  
かすむ野の小口を降や春の雨  
短いに宵も夜中も有にけり  
節句とはしらぬ盛りの野菊哉  
雨はれた跡に咲出る芒かな  
うなり込鐘の中なりほとゝぎす  
植かへた木のしほらしやかへり花  
馬かへて手を打空や春の月  
つき流す筏の上やおち椿  
芝原や出口も見えず春の水  
水汲に壺人はしるや田草取

春谷

錦谷

鳳井

梅料

竹秋

春星

一丈

史測

砂彦

秋蔦

李岡

五橋

方山

五笛

名山

奇柳

亀友

其鳳

花村

円方

桃園

雪村

如快

巡月

諷月

榎卜

梅月

季蘭

呉江

雪山

(三八ウ)

(三九オ)

(三九ウ)

(四〇オ)

おち鮎やてらくと日の冴る朝  
遠くから見かけて来たる柳哉  
昨日見し出代に逢ふ染屋哉

肥前

朝日まつ風情や花のたもち雨  
御留主とておこたりはせず神詣  
旅籠屋の生もの遣ふ四月哉  
槽たんと積だ日南のぬくみかな  
飲水は此井戸でなし梨子花  
此声も大連でなし雨の雁  
かすむ日や掃て乾かす水たまり  
家出来てきたのふなりし清水哉  
砂一荷道に持たる彼岸哉  
草臥た足を伸してさくらかな  
ほろ酔の顔に気味よし花の雪  
家毎に煙持けりけさのゆき  
東雲に潮さす川や子規  
掃よせたなりや余寒の塵芥  
海苔干た処にさす日の匂ひかな  
御手洗や手に汲上るさくらの実  
陽炎や足定まらぬ舟あがり  
駕昇の糊強着たる花見哉  
三日月も薄し余寒の空の色  
若草やよいあしらひに雨の降  
出る処を見さだめて汲む清水哉  
陽炎の輪にも立けり白の上  
何所とまだ聞定めぬに鐘霞む  
はなやかに朝日のさして春の雪

二石

子榮

甫田

凡鳥

尾蠅

梧井

休月

素羅

巴山

几一

帰雲

慶之

一恵

馬窓

子羊

春潮

三余

李朝

其山

梅寿

樗月

春月

古由

史敬

竹月

肥後

散中に赤らむ花の一木かな

散中に赤らむ花の一木かな

三岳

如白

五柳

(四〇ウ)

降雪は四方にわかれて花の雲  
魚桶に雫ふり込む柳かな  
朝月の入てそのまゝかすみけり  
暮切て音ある小田や春の水  
散花に眼の草臥はなかりけり  
まだ朝の雨は小寒しはつ蛙  
夕暮をうけてたしかや遠ざくら  
暮かけて小松に残す霞かな  
里はまだくらし湖水の花明り  
風細工して雨ばれを待にけり  
筈はたく音やかすみのかゝりぶね  
宵やみの窓明りして梅の花  
山吹を根にして水の出たりけり  
田の畦へもる程はなし春の水  
船までは遠し汐干のぬかり道  
寝にもどる鴉の遅し花の山  
吹ぬ日も掃跡にちるさくら哉  
としぐに違ふて花の曇かな  
木にとまる羽ぶりはみえぬ乙鳥哉  
花守に若い男はなかりけり  
ちり口の立は隙なき桜かな  
日は別にくるゝや花の隣山  
早明て行やさくらにしらむ窓  
陽炎の消た跡ふむ汐干かな  
馬にももの言て出代る男かな  
吹止で見れば式本の柳哉  
子雀のこぼれて鳴や雨の軒  
一日は禁酒も破る花見かな  
陽炎となるやはれきる草の雨  
川越て見ればわが家も霞けり

竹古

柳霞

左雀

楽之

寒松

鶉石

松年

琴月

霞樵

雪兎

洞石

芦鶴

露生

鉄山

斑雪

旭水

如柳

東波

桃山

栽月

笹麻呂

柳士

沙角

竹丸

鬼白

馬丁

染思

竹泉

楚暁

染露

染露

竹古

柳霞

左雀

楽之

寒松

鶉石

松年

琴月

霞樵

雪兎

洞石

芦鶴

露生

鉄山

斑雪

旭水

如柳

東波

桃山

栽月

笹麻呂

柳士

沙角

竹丸

鬼白

馬丁

染思

竹泉

楚暁

染露

染露

(四三ウ)

(四三ウ)

(四三ウ)

(四三ウ)

かへり咲した木覚えて初ざくら  
日ぐもりの雨にもならで冴かへる  
日向

松波  
眠鶴

ぬれ色の付て来るなり後の月  
ぼつちりと薄色梅の苔みけり  
地にはまだ影なき梅の月夜哉  
山吹のうつるや水の灯の明り  
有明や曇りはなれて梅の花  
長閑さや歩行余して芝の上  
片枝は枯て小寒し梅の花  
薄緑（薄）る色や春たつ薩摩不二  
冷りとよき元日の着がへかな

雪人  
也六  
泰蘇  
阜響  
関市  
春朗  
可嘯  
几桂  
嵐翠  
碧水  
矣哉  
水玉  
二外  
竹哉

遠山の雪にくれ込む春日哉  
山ひとつ後にもてり冬の梅  
売はづにしてある家や蝸牛  
藪透て灯の澄にけり落し水  
網代木のかげも動かぬ小春哉  
黄鳥の一声鳴ぬ小六月  
遠山を不二に見流んけさの春  
水蜘蛛の目先まで来る暑さかな  
足もとの塵からたつや春の風  
植るより苔にしたしや竹の陰  
五位鳴や早いざよひの月明り  
夜あくれば木の音もなし花の空  
涅槃とは説草臥の姿かな  
刈株の根からも生る田芹哉  
川水に味みの付て花ざかり  
黄鳥や一日ためて遣ふ水  
寝過しに笑はれてさへ永日哉  
我宿は木の名もしれぬ若葉哉  
植込や冴かへる夜の星明り  
しぐれかと見上る花の雫かな  
草の戸やともしいそがぬ花の春  
灯明の八重あかりして春の宵  
松竹に行はるもなし東山  
一畔を人広うつむ齋かな  
狩人の初獵いはふ玄猪かな  
はつ夢を咄さぬ内に買れけり

鶴叟  
居風  
雨夕  
穂咲  
暁鳥  
一松  
甫岳  
卓池  
石声  
茶岡  
完伍  
旦松  
潮月  
米賀  
茶暁  
月太  
在竹  
惠珠  
月雄  
流芝  
祖郷  
得蕪  
逸淵  
伯遠  
遲流  
繁茂

雷に逃て田植の煙草かな  
夜寒まで移るや花の咲日和  
美しき年貢畑ぞきくの花  
月かげの添て夜深し宵の梅  
又別に茶も入させて春の雪  
三月の中の二日や花ぐもり  
間ぢかふで黄鳥聞かぬあした哉  
折て来て水にもつけぬつばき哉  
しみぐと花にもよらず秋の蝶  
櫓の火のぬくみ持込寝所かな  
黍刈て小寒き門の鳴子かな  
昼寝したけしき直るや隴月  
青柳や十日照りてもぬかり道  
人の気の揃ふた村やうめの花  
川越しの日増しにふえて時鳥  
谷川やひと濁りして遅ざくら  
散滅のいさゝか見えぬ椿かな  
噂した所に見ゆる柳かな  
抱た子も舌打するや花の陰  
聞や否直に出にけり若葉つみ  
花嫁のあり付ふりや田植唄  
蝶ひとつ初て空の静なり  
翠もよい日和ぞ風の動きぶり  
追付て先へも行ず春の人

月雄  
茶来  
雲汀  
梅朗  
路及  
竹苞  
正葩  
素木  
一峰  
遅牛  
桃筵  
明考  
花霖  
其流  
野鳥  
五川  
三卮  
朱唇  
大戸丸  
紫嶺  
一庭  
文鳳  
花遊  
文水

ぬれ色の付て来るなり後の月  
ぼつちりと薄色梅の苔みけり  
地にはまだ影なき梅の月夜哉  
山吹のうつるや水の灯の明り  
有明や曇りはなれて梅の花  
長閑さや歩行余して芝の上  
片枝は枯て小寒し梅の花  
薄緑（薄）る色や春たつ薩摩不二  
冷りとよき元日の着がへかな  
歛先をよけてめでたき蛙かな  
眼上なる人は桜のあるじかな  
雉子鳴て障子のゆる、戸口哉  
居温めた畳居直る春の雨  
動かずに波も青むや初日かげ

雪人  
也六  
泰蘇  
阜響  
関市  
春朗  
可嘯  
几桂  
嵐翠  
碧水  
矣哉  
水玉  
二外  
竹哉

遠山の雪にくれ込む春日哉  
山ひとつ後にもてり冬の梅  
売はづにしてある家や蝸牛  
藪透て灯の澄にけり落し水  
網代木のかげも動かぬ小春哉  
黄鳥の一声鳴ぬ小六月  
遠山を不二に見流んけさの春  
水蜘蛛の目先まで来る暑さかな  
足もとの塵からたつや春の風  
植るより苔にしたしや竹の陰  
五位鳴や早いざよひの月明り  
夜あくれば木の音もなし花の空  
涅槃とは説草臥の姿かな  
刈株の根からも生る田芹哉  
川水に味みの付て花ざかり  
黄鳥や一日ためて遣ふ水  
寝過しに笑はれてさへ永日哉  
我宿は木の名もしれぬ若葉哉  
植込や冴かへる夜の星明り  
しぐれかと見上る花の雫かな  
草の戸やともしいそがぬ花の春  
灯明の八重あかりして春の宵  
松竹に行はるもなし東山  
一畔を人広うつむ齋かな  
狩人の初獵いはふ玄猪かな  
はつ夢を咄さぬ内に買れけり

鶴叟  
居風  
雨夕  
穂咲  
暁鳥  
一松  
甫岳  
卓池  
石声  
茶岡  
完伍  
旦松  
潮月  
米賀  
茶暁  
月太  
在竹  
惠珠  
月雄  
流芝  
祖郷  
得蕪  
逸淵  
伯遠  
遲流  
繁茂

大隅  
草佳  
二峰

草佳  
二峰

呉に来る子供あくどし露の臺  
近すぎて藪入らしうなかりけり  
鶉一羽雨にあちこち焼野哉

而后  
一清  
李曠

祖翁廟前  
松竹に行はるもなし東山  
一畔を人広うつむ齋かな  
狩人の初獵いはふ玄猪かな  
はつ夢を咄さぬ内に買れけり

伯遠  
遲流  
繁茂

大隅  
草佳  
二峰

草佳  
二峰

呉に来る子供あくどし露の臺  
近すぎて藪入らしうなかりけり  
鶉一羽雨にあちこち焼野哉

而后  
一清  
李曠

祖翁廟前  
松竹に行はるもなし東山  
一畔を人広うつむ齋かな  
狩人の初獵いはふ玄猪かな  
はつ夢を咄さぬ内に買れけり

伯遠  
遲流  
繁茂

昨日よりけふのかけあり庭の蝶

月人

はつ花の去年からある椿かな

桃仙

我人や雑煮過ての花心

一具

夕ばへや咲ともなしに松の花

風外

藤棚の茂りにくらき床几かな

抱儀

雉子なくや此道行し人ゆかし

由誓

長閑さもしらるゝ宵の往来哉

為山

埃りさへ舞ふゆとりあり松のうち

永壺

はる雨にさかるふ浦のけぶりかな

青和

旅ごゝろせかるゝ花の日和かな

涼花

日は八つになりぬ一ひら梅のちる

太良彦

下総

菜の花の上やかすかに山青し

蕉月

陸奥

鳥啼や春の寒さも限りあり

英泉

長閑さや扇へのせし下り蜘蛛

埋山

雪どけの根にたゝえたる柳哉

一旦

梢には未だ残る日やうす氷

少也

汗入に米つき歩行柳かな

邦泉

初春某の内へ鷹飛入しを祝て

梅井

夢にさへをよばぬ鷹や花の春

一仙

伸くゝてすがた失ふやなぎ哉

(五一オ)

よせるにもあやなす風や帆たて貝

五陵

東雲や柳の上のひとくもり

蒼丘

人通り尽て灯籠の消にけり

素文

蟬なくや当分休む水車

梅州

若鮎の光る浅瀬や夕月夜

一枝

まだ風もうけぬ蒼や福寿草

前峰

煙草のむ火も消る夜や初蛙

泉里女

しき砂に柳のかけや薄月夜

児川

(五一ウ)

長閑さや敷もの入らぬ芝の上

桑湖

幹丈はどの木もみえて霞けり

一簑

三里行道も旅なり二日灸

寛夫

隣でも起してみよか春の月

扇々

いつ来ても忘れぬ宿や花の友

入山

逢坂や往来にはるゝ春の月

風志

雨の梅花明りして暮にけり

松橋

田の上におのがかけ追ふ胡蝶哉

一旦

花に風吹ぬけしきもなかりけり

如楽

鳴声の色々染みぬ花の鳥

多里女

真の闇うめはありくゝにほひけり

如松

うれしげに何轉りぬ花の鳥

運女

花の香のよしや笥の水の味

如考

下りるより登るに安し花の山

里与女

蠅追ふて膳にかけたる一葉哉

月扇

二番草すんだ在所や不二詣

月桂

降たほど照り付音や竹の皮

一止

若くさや笠ぬいである鳥居際

三朝

遠里やかすみの中に立けぶり

江山

七十二の春もや、暮んとする頃、道祖神の招

きにや逢けん、ふた、び松島の好風佛にたち

そゝろに杖をたづさひ誓て笠に書付はべる

一仙

松しまを名残のはるや老の旅

多与女

見かへるかたもおなじうらゝか

清民

瓦場に近く鶉の巢作りて

抱儀

かたがる塀にといはりをかふ

楓関

常よりも月のよくさす風の跡

英泉

黄葉うつらふ池静なり

(五三オ)

ふくめんになかご買出す下屋敷

東里

縁の見合にすだれ捲せる

丁酉

市占は十に七つも根なし言

士由

さらく雪の急に降やむ

守三

今つきし鯨鯨舟に人つどひ

尊阿

何処のなまりか声のかんばる

兼女

寝まちとは月に念なき名付やう

江三

こゝろをすます露のむぐら家

一止

焼米をみやげにせよと盆にのせ

心阿

かへる子供にたのむ傘

禾月

花一木鳥居見添に咲すみれ

南幽

目白おしあふ春の日あたり

任阿

手にあまるほどに蚕の起揃ひ

二丘

きゝめの早き葉ほどこす

羽人

搗かけし白かたづけけるはいりぐち

吟霞

おろかにしては早き胸算

稲州

淀河岸の薪を上手に積こなし

李桃

入院のすみてひまな板前

左琴

来てあそぶ鳩もすげなき入梅の内

古翠

とり散してはおかぬ櫛箱

美濃子

酒の座をちよつくとほづす女子共

乙良

裁そこなひをやつとまぎらす

西晴

一夜さも温泉に居うちは月をみず

春室

待てばあくびのうつる鹿聞

応泉

捜出す皿の蝨を熬直し

鼎湖

けふは朝からみえぬ碁敵

茶山

紺屋ばかりで町の賑はひ

茶三

花ざかり千島の波の翻り

斗南

老をわするゝはるの明ぼの

一仙

(五五オ)

松前

正月やしらぬ家にもは入よき

而先

長日や花には花の遊び慾  
梅さくや山家を廻る鏡とき

禹鼎

七草も雪に揃はぬ山家かな  
江り合ひする砂山や春遊

山溪

(五九オ)

藤棚や笥にあまる水の音

北尹

近過て霞にくらき裾野かな  
汐木焚家から夜寒募りけり

慶鳥

蜻蛉や石の窪みの溜り水  
墨摺も心よき日やころもがへ

樵月

(五九オ)

乙鳥やまだ明きらぬ空に飛

松雲

御降や雪であるはと思ふうち  
折角と下りて木裏や谷の花

井流

蝶々や花とも見ゆる水移り  
行たがり春はいなして裕かな

虎丈

宗眠

けふくれしや、咲かゝる福寿草

小鯤

凍落のする壁叩く柳かな  
輪に成て暮るや花の一筵

芝丸

世わたりの裸参りも二月哉  
大かぜの止でから散る椿哉

涼台

(五九ウ)

書初や思ひ込たる手のしまり

交友

豆の葉をふくらす道や鳴雲雀  
花咲や酒も醋も売山の家

松隣

こしらへた人はきらひや納豆汁  
花になるやうにふくる、木芽哉

千蔭

能登

傘さしてわたしを越すや春の雨

一旭

卯の花の雪に巻おく簾かな  
手はなせば松風もどる小松哉

米山

あらし山にて  
大かぜの止でから散る椿哉

文濃

(五九ウ)

霞まれた儘で暮るや岨の家

斗明

客あるじわかるけしきや梅柳  
暮かねて色のさかりや桃の花

幸雄

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

文濃

(五九ウ)

あたゝかに草の下水流れけり

素峰

呼返事して羽子つくやそれるまで  
時とへばさればとばかり花の中

如慶

便船に乗るや日暮の行々子  
不斷なく竹に雀もあきの暮

榎月

豊後

雛子の鳴山から出たり宵の月

一帆

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

都春

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

一葉

道丸

かたはらに囲基始るや年忘

出羽

近よれば白さも別や雪と梅  
客あるじわかるけしきや梅柳

素日

空に尻居へて日ぐる、雲雀哉  
人の往た跡からたつや雪の鷺

道丸

万里

声ほどに毛も逆立す猫の恋

二葉

暮かねて色のさかりや桃の花  
鶯も籠て来にけり京の町

佳峰

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

東湖

梅花

見ごろほど根笹とりまく野梅かな

其仙

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

白雀

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

すき通るほどに涼しや加茂の水

汶水

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

清女

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

三月も過てこれから四月かな

蕪畔

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

太乙

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

春雨もあがるけしきや鶏の声

魁甫

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

芦引

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

佐保姫の空あしろふや鷺一羽

ノ左

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

藤涯

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

若水をもらひに来るやかゝり船

上野

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

桃室

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

神垣に小鳥養るや千代の春

立志

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

林曹

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇オ)

釘を打音や霞の船大工

兎木

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

古鏡

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇ウ)

松植てもらふや畑の打序

熊月

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

河内

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇ウ)

白雲に朝からぬれてふぢの花

可申

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

大和

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇ウ)

鶯の老を鳴けり雨の暮

琴堂

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

観松

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇ウ)

鶯の老を鳴けり雨の暮

谷朗

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

里桃

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇ウ)

蝶々やたよはき影の地を走る

素来

草臥て見つめる空や風  
松からむ蔦のゆるむや春のかぜ

葛花

鳥から休みに下りる汐干哉  
鳥から休みに下りる汐干哉

梅花

(六〇ウ)

肥前

舟やめて若草の中歩行けり  
長閑さや寝てゐる鹿の毛の光り  
藤咲や塵ひとつなき棚の下

橘斎  
雷耕  
正焉  
(六一オ)

涼かぜを入ねばさ、ぬ戸口哉  
盆の灯が見ゆるぞ小野の小家にも  
見えてある城の遠さや稲の花  
おろしたる稲にかくる、車かな  
朝がほの根をゆすり行土龍かな  
地車に敷れな嵯峨のきりくす  
押かゝる水もさはらぬ浮巢哉

黙池  
草陽  
芳英  
杜蓼  
梅石  
石外  
友石  
(六三オ)

朝ばれの圃や散芥子開けし  
枯草も夜は露をもつほたるかな  
闇ありてたしかにしろや花あかり  
一りんで見ごたへのするぼたん哉  
月に人絶ぬ夜をちれ山の花  
留主守て寝られぬ儘の寒かな  
蚊屋ごしや夜は静に海の音  
四五日の残りを老人田うゑ哉  
追れたは逃てかはるや行々子  
みじか夜も夜明につきぬ伏見舟  
門掃たまでの事なりけさの秋  
水よさにつみく、あらふ若菜かな  
いなづまや浦触声の西東  
実のおちて間のなき枝や桐の花  
酔さめて値切なほすやとしの市  
朧月静に行や山どまり  
人の出る最中降や春の雪  
海苔の香や両掛おきし枕元  
朝顔やもう種見せる花なかば  
暮うちし中をながれて春の水  
研水の外に汲おく清水哉  
ちりかゝる花や日和になる小口

松朗  
鶯琴  
和石  
梅仙  
微箭  
尺木  
岱美  
吾雀  
(六五オ)

遊歴

人の向くかたへむかへば恵方かな  
炭づくも梅見に出る支度かな  
黄鳥の初かげ入る座しきかな  
歙さげてもどる戸口の蚊遣哉  
団もつうつ、らしさや手の動き  
見る間小雨にぬれて鶏合  
一番に空の雲雀や五月晴

桃五  
玄子  
宗古  
竹交  
梅左  
硯水  
可大  
(六一ウ)

黄鳥にかりた二階を覗きけり  
もらひ子もけなげや竹の皮拾ひ  
夕だちや白き菖蒲のおくれ咲  
雨二日ちらぬさくらの重さかな  
春雨や乾くも早きたまり砂  
山間や桜にあかき夜の色  
桜から先へ明行谷間哉  
月と花山水ばかり聞えけり  
沢山にさ、葉も呉る小鮎哉  
雪どけや昨日にまして来る筏  
ちる花ををしむか空の一曇り  
上明り下ぐもりするさくら哉  
花の夜も殊勝に嵯峨の念仏哉  
都にも小藪のありて遅桜

露大  
専阿  
豊丸  
仙歩  
篤明  
禾明  
風光  
友石  
(六三ウ)

朝ばれの圃や散芥子開けし  
枯草も夜は露をもつほたるかな  
闇ありてたしかにしろや花あかり  
一りんで見ごたへのするぼたん哉  
月に人絶ぬ夜をちれ山の花  
留主守て寝られぬ儘の寒かな  
蚊屋ごしや夜は静に海の音  
四五日の残りを老人田うゑ哉  
追れたは逃てかはるや行々子  
みじか夜も夜明につきぬ伏見舟  
門掃たまでの事なりけさの秋  
水よさにつみく、あらふ若菜かな  
いなづまや浦触声の西東  
実のおちて間のなき枝や桐の花  
酔さめて値切なほすやとしの市  
朧月静に行や山どまり  
人の出る最中降や春の雪  
海苔の香や両掛おきし枕元  
朝顔やもう種見せる花なかば  
暮うちし中をながれて春の水  
研水の外に汲おく清水哉  
ちりかゝる花や日和になる小口

道祐  
淡節  
雪衡  
麦浪  
虚白  
吾雀  
(六五オ)

山城

や、松にけしきとゞめる春の月  
風に又けぶるや芝の焼しさり  
山里も雪踏ならずや花の春  
着汚すも早し袷の袖だ、み  
としふるき雛や箱から出た計り  
裸木の中からも立つ霞かな  
客となりあるじとなりぬ花手前  
名をしらぬ木もふりありて山の花

半山  
老波  
如柳  
輕舟  
素友  
鶯語  
岳鳳  
来青  
(六二オ)

上明り下ぐもりするさくら哉  
花の夜も殊勝に嵯峨の念仏哉  
都にも小藪のありて遅桜  
寝上戸になみだこぼさす山葵哉  
水もまだ田ごとにはなしはつ蛙  
膝なで、身にしむ鐘や夜半の霜  
夕暮や掴み売する唐がらし  
川へうつ礫も花にひびきけり

松雨  
一斧  
百仙  
其雀  
成祇  
雲萍  
芦光  
桃原  
乙雅  
(六四オ)

花に焚飯の淋しや一人前  
手枕に灯もともさずや散さくら  
籠ながらにかげのさす月  
貝よせの風和らかに汐の来て  
蹴あげの砂の埃り静まる

若雅  
吳明  
伍員  
柳鶯  
九蒼  
閑令  
勝錦  
(六六オ)

高台寺

古堀は木の葉に埋て散さくら  
鎌鎌のさはらぬ草やつくくし  
扇ほど笹折かざす花見かな  
永き日の上に花待長さかな  
明行や花にきえ込谷の露  
花に来てはやよくほるや居り処  
松山や咲はさくらも二三本  
塩焚の朝寝もみたり忘れ霜

芥堂  
岱年  
有節  
杜鷺  
祭魚  
梅室  
芹舎  
梅通

花に焚飯の淋しや一人前  
手枕に灯もともさずや散さくら  
籠ながらにかげのさす月  
貝よせの風和らかに汐の来て  
蹴あげの砂の埃り静まる

秀香女  
松南  
雨谷  
雨江  
枝月  
柏翠  
文翠  
(六四ウ)

花に焚飯の淋しや一人前  
手枕に灯もともさずや散さくら  
籠ながらにかげのさす月  
貝よせの風和らかに汐の来て  
蹴あげの砂の埃り静まる

九起  
九起  
竹月  
千干  
竹古

(六六オ)

音を入る鶯籠を釣直し

柳霞

徳利をかくす上下の袖

起

夜の花ひとりになりて跡じさり

木斎

冷した麦に何の香もせぬ

寒松

(六六ウ)

月よりも花のまばゆき真最中

雅

寝よの鐘起よとつくか亥中月

九起

はやそこへ神輿の先の神もち

東波

青きふかみに若鮎の飛ぶ

南

杖をして汗ふく程のあた、かさ

起

袴のひだを二人して延す

鶴石

敷石なりてた、ぬ絵馬堂

起

海羸廻しあまりはづみて邪魔が入

雅

文よりは早うおもひの届きけり

左雀

大原女の売る餅のしぐる、

南

切株の杉にも人の願をかけ

起

夢うらなひの双紙ひろげる

桃山

日は暮いでもあしのとぼつく

南

おちぶれて見違ひられる揚屋町

起

研すます刀玉ちる左り利き

洞石

泪につれて出るくつさめ

雅

秋の末国のたよりも遠ざかり

南

新酒の酔に天窓か、ゆる

霞樵

菊を掃たる塵とりの月

起

ひかえめに新酒はいつも呑でおき

雅

棟上げの筵を月に敷ならし

沙角

腕をかためる鉄炮のおと

南

糞波のくつ付てゐる牛荷つけ

起

か、しの笠の空に吹飛ぶ

琴月

どつさり雪を降らす雲行

雅

さがつたと声倍にいふ米間屋

南

橋守に呼戻されしつかれ足

露生

寺侍は派がきかぬなり

起

花七日跡仕舞にも七日ほど

雅

詠歌の息をつなく念仏

楽之

ぬれた筵のかはく陽炎

南

十五日まではよこれぬ裕かな

起

境内の花に札たつ掟書

柳士

漕出すほどづ、霞む小舟哉

南

瘦腕もおき所なき暑かな

起

巢だち前やらさわぐ親蜂

竹丸

山ばなれする久しきや春の月

南

春かぜや柔和に成し鹿の顔

起

精進に旅籠たのめば新茶哉

九起

一汗を拭て見上るさくらかな

南

ぬれながら鳴や朝から花の鳥

起

夏は簾の隙をもる月

乙雅

筑前

南交

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

塵芥たまると流す川持て

松南

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

山ばなれする久しきや春の月

起

弓の稽古に円座並べる

起

寺侍は派がきかぬなり

雅

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

一連に百羽ほどづ、わたる雁

雅

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

空晴きつてすこし冷やか

南

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

出代て嫁に行間のいせ参り

起

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

仇に文句をうたふ舟歌

雅

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

もちはこぶ膳みて昼も過てある

南

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

乞食うろつく野送りの門

起

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

ましぐらに丹波太郎のむらがりて

雅

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

毛むしわく木にはらぬ蜘蛛の巣

南

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

鐘つきに長坂のぼるひだる腹

起

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

黄著蒸香のたらぬ風筋

雅

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

札付てり、しく見ゆる御飼犬

南

ぬれたながら鳴や朝から花の鳥

南

花七日跡仕舞にも七日ほど

起

京四条寺町東へ入  
御すり物師 近江屋  
利助

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

37 弘化四年『花供養』

底本 小林本  
校異 愛知県大本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

歳々あらたにおこなはれし  
花供養は、四方国のもろ人  
より手向まつれる花鳥風  
月の吟を供養会の後、桜木  
にのせて、国々へわかち  
祖翁の徳をあふぎたまふは  
めでたきとぢふみにぞ  
ありける。

城南時少庵老波 老翁

弘化四歳丁未三月十二日花供養俳諧

立塵もなくて静や朝の花  
蛙の声の清き山の井  
一人旅気ま、歩行に春暮て  
齒にあふ豆腐喰あきにけり  
札張て無用は入れぬ居間の内  
土佐の屏風も雨もりの跡  
梢までとゞかぬ月の薄あかり  
節句かけても角力はづまぬ  
肌寒に単羽織のひるがへり

守りに入る国からの文

軒行灯売れぬ女郎のかた付て

起て居るやら光る猫の目

掛乞に断りだての酒支度

ぬくい冬にてはやにほふ梅

杓ふつて子供あがりの抜参り

常は橋なき出水川なり

露消るころまで見ゆるけさの月

内は綿くり軒は粗すり

須磨さして帰りつれだつ鳥燕

杉とは松がよほど風もつ

茶つみ衆の煙草休みに枸杞摘て

夏を隣に照ながら降

とりもちの竿にながる、あた、かさ

職人ばかりくらす裏町

取たての鯔に酔の味利かぬなり

袴た、むにいかい隙入

駕昇のしのびあくびのつれなくて

犬も陽気に吠る島原

夕かげに木の葉はらつく高榎

架にかけると嵩のなき蕎麦

案内者に一ぱいのます途中酒

いつもか、さずはやり風邪引

見料は出しても本はよまぬなり

夏台所は板敷がよき

竹うゑて日雇かへれば登る月

めでたき葬に伽羅の香がする

踏あれて網のやうになる車筋

こぼれた米に鶏のちらかる

雪空の暮さうにして又あがり

道祐

和石

松朗

素行

枝月

草陽

嬰齊

波同

雨翠

孤柳

柳鶻

百古

梅溪

秀何

梅仙

大莫

山丈

始風

鶯琴

石鼎

湖月

要女

秀香

麦浪

湖雲

有節

重泰

黙池

九蒼

禾明

来るより天窓うちし節季候

くる鉄の火をとり巻て長休み

聞人がありてはづむいさかひ

起て居る顔のくるしき二日酔

道者をあてにかざる売もの

此やうに照ても淋し盆の月

芋焚ませた飯の高盛

鮭ぶねは馴て居てさへ乗にくき

日和に鳶の追々に出る

供奉すればことさら花の薫る也

うつむく膝にもゆる陽炎

一順下略

肥後

本寺から仕舞に来るや花の暮

島の根の兀尻みえる汐干哉

手洗ふて落着く花の木陰哉

休むとき扇にのせる小松かな

菜の花や二日みたれば気草臥

明がたの空には退かず花の雲

小一時出て汐待や春の月

ちんまりと雑木のかげや初桜

山冷のもどるや花の夕明り

盃にうけて見にけり散さくら

気のかぬ風も気をつく花見哉

瀧坪(たき)に下りて連呼ぶ花見哉

船唄の拍子揃ふや春の月

麓からたちまちくるし花もどり

しばらくは暮残りけり花の山

下戸一人手をいたづらに花見哉

篤明

梅通

呉明

芹舎

微箭

虚白

馬秀

岱美

閑令

杜鷲

松南

執筆

千干

雪茶

素綾

千嶂

一掉

素鶴

千奈

雛溪

処楽

五櫻

五罈

五柏

五羊

五東

五倉

五泰

腰かけた人も客なり花の家 五 五 五 五 五  
 解のくる小家のうしろや遅ざくら 五 魏  
 水音に心すますやはなの山 五 辰  
 風折の弱みも見せず梅の花 恕 雲  
 飼付た声聞わくる雲雀哉 鷺 洲  
 踏分る草にもあるやはるの水 芦 春  
 山くも静になりて朧月 白 羽  
 瀧音も暮て聞けり春の水 友 之  
 山ばなれして曇りけり春の月 池 苔  
 よき雨や眼を休ませる十六夜 九 起  
 しめやかに鳴飼立のむし 五 辰  
 鶏頭の捨て処に赤らみて 千 干  
 ころげた儘に消る吸殻 竹 月  
 はれぐと汐干のみゆる山の間 鬼 白  
 春の旅にはさし合もなし 雉 溪  
 土踏ぬかほで雲雀の囀りて 雪 茶  
 樽から直にはづむ酒盛 一 掉  
 御国入済でどさつく台所 染 水  
 はづかしがりて灯の傍をたつ 易 遊  
 箕輪へのたより次第の届け状 処 楽  
 松吹かけに休む晒布荷 素 綾  
 汲たての水に涼しき昼の月 千 奈  
 餌を遣る鳥の籠を釣なり 馬 丁  
 二つ三つすゑた身柱に肩かるし 千 嶂  
 あそび半分楽な堂守 五 柏  
 はつ花をちらさぬ迄の通り雨 五 魏  
 舟の中にも群る蛙子 五 東  
 庵の、は峰にはやすか齋音 雪 茶

小立の駕を居る春かせ 雉 溪  
 居残りた雁の一群れ人馴て 茶  
 火繩の嗅に嚏の出る 溪  
 月よさに門へ持出す竹細工 茶  
 棚の瓢の形はいろく 溪  
 生肴さつぱり切れし彼岸過 茶  
 湯治見舞に宿状が来る 溪  
 吃らるゝなりに平家をよく語り 茶  
 すだれに顔の見えぬわりなさ 溪  
 わやくと女がちにてあやめ引 茶  
 野に居る蠅の人をさしけり 溪  
 笠を着て月見歩行も旅らしき 茶  
 漬ものを店を仕舞や、寒 茶  
 値あがりを買込綿の二番吹 溪  
 築地の守りにたちし小社 茶  
 花前に御扶持の下りる下屋しき 溪  
 種おろす日に暦ひろげる 溪  
 松前  
 蝶々や高う飛でも見ゆるまで 一 帆  
 次く曇りのぬけるさくら哉 己 有  
 二冊までかさねてあるや初暦 素 峰  
 蜻蛉やまだ日の暑き草の色 小 鯤  
 駒鳥や朝の心を引たてる 可 厚  
 道すがらむしつて行や春の草 交 友  
 露に水の減るとおもふや手水鉢 其 水  
 春の月まだ宵ながら窓の上 嵐 台  
 雨ばれや梢にのぼる駒鳥の声 北 尹  
 からかさにつてはなれず春の雪 耕 雪  
 人柄を崩さず摘む若菜哉 而 先

あらいに暮残りたる小蝶かな 一 旭  
 植た竹風も貫ふた心地かな 榻 雪  
 苗代に鱈の浮ける天気哉 斗 明  
 祖母一七日追善  
 露白くなるまでうつる夜比かな 一 帆  
 身にしむ風にかへり見る月 念 々  
 献上のすまぬ熟柿に網はつて 而 先  
 不断に違ふ薪の割処 小 鯤  
 脇におく火桶を人の前に遣り 可 厚  
 みぞれくつてつゞく空合 帆  
 雑談に労れまぎらす道者連 交 友  
 白粉ぬれどしれる雀子斑 耕 雪  
 妹が子は乙見るまでに愛ざかり 念  
 処がらとて馴るゝ朝おき 斗 明  
 透のなき畑にちよつぱり蓼植て 鯤  
 夏も良風のさはくと来る 厚  
 三日月に市の余りを負戻り 帆  
 手ぶとい難もいはぬ新そば 念  
 相だんの上で冬待住居かへ 先  
 寝るにも顔のしかむ足よわ 鯤  
 咲つゞく花にこゝろのまとまらず 明  
 地水になれど澄まぬ雪汁 帆  
 誘引れたばかりで来たる蜆とり 厚  
 気のどくなれどかりる賽銭 光  
 弁慶にしてはうさんな長刀 念  
 くた臥場処を高に割あふ 明  
 炎天にはりつく笠を水に入 鯤  
 くだらぬことをいふも氣ばらし 厚  
 鞍替ときくより駕のあと逐ふて 帆

へた打浪のつらき子しらず

群く何処へめあての雁の声

きぬた直していそぐ夕飯

うす雲の月の光りに消るなり

皮のめくれる蘇鉄さわがし

内職がなければたらぬ隠居料

不義理なこともさからふはむだ

こつそりとぬけて別温泉につぶと入

忘れの霜に一寒み来る

似た人のあれやと覗く花のかげ

遅き日あしも過安きはる

傘さして涉しをこすや春の雨

居眠る顔の長閑なる驚

籠朶杭のいつの間にやら芽を吹て

狭ふはあれど向のよき家

月さして膝のよこれの目立けり

露の小萩の友もたれする

二処にはり合てなく虫とむし

おなじ山から温泉も水もわく

なまぬるき女馬士等が高ばなし

約束か、ぬ銭の貸借

あてにせし雨降かねし暑き夜に

赤みのとれぬ六月の月

骨折もとるけて仕舞鉛細工

からすのかげに怖る鶏の子

軽けれど内福々しき御蔵番

貸たる先のしれぬ風呂敷

どさくさと船と鐘との花の客

念

先 (二一オ)

鯉

明

友

厚

先

念

帆

北尹 (二二ウ)

其水

一旭

一入

旭

旭 (二二オ)

入

旭

入

旭

入

旭

入

旭 (二二ウ)

入

旭

入

旭

入

柗の古葉こぼる、小春かな

朝市の声賑はしや春のかぜ

初雁の声に草木も黄ばみけり

木の間もる月もすゞしき詠め哉

夕浪に落付音や秋のかぜ

川留の明た朝なり初ざくら

長町に曲る道なし秋のかぜ

花咲て小寒うなりぬ庵の内

一やうにひらくや梅に朝の月

七草や叩きのこりに日のあたる

虫啼やしきりに湿る台処

居直る膝に影の乗る月

誰かれの司召る、日もすぎて

車時計の工合よくなる

波音に跡なき雪の降つもり

日記の末をつぎたしておく

おろかさをとりにえに連る召使

醫も邪魔にならぬ年頃

風の来て鳴らす葎に気をかねて

洪みのとれぬ夏梨子を切る

葎崎へたよりはあれど片だより

川半分は負さうな公事

空低う鴉のわたる朝の月

椎の実おちて良寒うなる

葎山も守るとおもへば楽しめず

無理な処から呼入る水

咲花に弥陀も街の仮住居

可正 (二三オ)

顧言

田原

千丈

操女

李朝

可卜

一兵

一葉 (二三ウ)

猪炉

猪炉

念々

北魚

如竹 (二四オ)

素峰

李朝

念

朝

朝

朝

朝

朝 (二四ウ)

朝

朝

朝

朝

中り箭を霞の中にほめるなり

休で居れば買に来る鮎

やみぬいて臙のはらぬひと安堵

客から助けて囉ふ喰扶持

身仕舞に簾をおろす夏ざしき

湖のむかふの田植はじめる

もやくと雲のはなる、伊吹山

不似合ながら丸腰もよし

神木になれと小松の手入して

目録かきし紙で鼻かむ

月今宵遠くはなれて馬の声

干せども嵩のへらぬ刈安

鍋ぶたの上にも夜の霜下りて

畑へ出る人の火を借る

行にして拝む仏の日をかぞへ

きれいに芝をはやす切岸

庭鳥の寝癖みつける花ざかり

晴る、と直に乾く春雨

箱館

木のもとによれば音ある霞哉

寝転で蛤よぶや雨の軒

松かぜや夕ぐれさそふ花のおく 在松前

筑前

肱につく筵のなりやはなのかけ

遠みえに藪木色もつ木の芽哉

よせ接や浮雲き鉢の置どころ

めづらしうなりけり春の天津雁

苧麻などひたす流れやちる柳

可卜

千丈 (二五オ)

可正

猪炉

念

竹

竹

竹 (二五ウ)

正

正

正

正

正

正

正

正 (二六オ)

正

正

正

正

正

正

正

正 (二六ウ)

正

正

正

縁あて、垣に成りけり枯芒

丈梧

ころげ出て口明く音や苞蜩

二外

元日は男ばかりの往来かな

草居

(二〇ウ)

鶯の鶯ほど伸し木の芽哉

鳳尾

手をひらくやうに伸けり若楓

几桂

塩担桶にちり込みにけり松の花

其猷

うめさくやひと畝にたらぬ門島

江山

すひ筒の梅に開くや睦月空

草佳

笠かけし柱に吹や春のかぜ

石堂

木の本は花のあかりや宵月夜

一器

羽に足を添て延すや春の雁

竹哉

ぶりくや昔を捨ぬ志賀の里

梅林

隙にして見る目すくなき桜かな

可染

豊後

竹哉

虫などの来て鬱陶しき灯笼哉

李溪

踏よごす清水のへりの小石かな

垣外

春の鳥朝来た藪にくれにけり

春谷

安房

李溪

名も聞かず囉ふて来たり菊の苗

一策

大霜やありく見ゆる朝の月

敬夫

陽炎に追る、浪のひかりかな

如是

紐のなき羽おり出すなり別れ霜

紗翠

逗留トウリに来て風邪ひくや梅の花

石友

空高く降て居るなり春の雨

翫玉

一人づ、別る、道や秋のかぜ

一瓢

わか水に白髪うつしてみたりけり

戸柏

肥後

翫玉

啼あかす恋のあはれや船の猫

吞白

桐の木にかけたる井戸のかざり哉

映門

筵は雨にた、み舟は風に繋ぐとかや

竹月

動かせばみじかくなるや笊の馬刀

斜丸

ふくませた墨のかをりや筆はじめ

菊圃

花ぐもりしてた、ゆるや昼の汐

竹古

薄着して来たを手がらや春の山

素石

打仕舞畑に萁の味さかな

素橋

習ふにも手心のある接木かな

柳霞

淡路

(一七ウ)

菜の花の果や小船にたつけぶり

蘇澄

有明をはつく鳴や谷の雉子

楽之

花の香に押る、宵の嵐かな

樵雨

後の月さゆるけしきのして寒し

月人

隙な夜になりおふせたり隼月

桃雲

見おとしの花に引ずる筵かな

楓所

残雪の中から伊予のさくら哉

起旭

花の雲どちら向ても花の中

寒松

覆とつた庭木につよし春の月

柏堂

はや水のぬるみ廻るや苔の色

半窓

乙鳥の糞して立や水の文や

和風

二三げんあけて声なき雲雀哉

才蟻

井戸なしに一在所すむ柳かな

橘甫

涉し場も花見る顔のそろひけり

稲波

正月の心ゆきたる雨夜かな

鷗池

簞かさをかけて人居ぬ柳哉

井政

春の風吹ほど吹て曇りけり

洞石

花の夜や見勞れよりは吞づかれ

南園

白妙の山から出たりはつがらす

里夕

一本の花に持よる筵かな

澄月

大隅

(一八オ)

不断汲水に艶あり花のはる

二蝶

どちら吹風とも見えず梅のちる

如柳

長閑さの眼をふさいでも長閑なり

嵐翠

氏よりも育ちの見えて梅もらひ

旭子

鳥の来る度に落けり赤つばき

石火

鶯のゆうに鳴音や松の中

突哉

湯に入てなれ工合よし雀鮓

坡堂

一日は寝るを覚語サマやはるの雨

護石

無事に夜は明すましけり花の春

雪橋

日永しと思ふて居るか眠る牛

佳笑

長閑さの江に押もどす芥かな

鉄山

雨霽たもてよ花のひらくほど

雪人

山かけを海へおし出す四月かな

青巴

白雲にたちそふ峰のさくら哉

湖石

若水やもつたい過てゆりこぼし

也六

窓先に皮はぐ竹の戦ぎかな

其嵐

延たつた草から山のわらひけり

不及

門先に待供同士の御慶かな

二峰

阿波

其嵐

行雲のはなれ切たるさくらかな

露生

恵方見に行や隣のはつ曆

静遊

藪入や勝手覚えし畑みち

布石

静さを鳴く夜ざくらの鳥かな

露樵

初東風の常になりけり日和空

春朗

鶯の鳴ぶりうつるながれかな

百壺

はなれ家も町の内なり桃の花

太素

葉がくれに咲てあつたかおちつばき

耕雲

露樵

咲花に其日くくもりかな

うめが、に引れてこすや橋一つ

雫にもならで止みけり花の雨

顔に散花を撫く通りけり

ちるかとして手叩て見るさくら哉

花ちりて空の曇りとなりけり

陸奥

秋の来てうごかす笹の葉かな

すみぐはまた雪空や梅の花

田へかよふ道もこれから草のもえ

咲てなほ葉先するどしかきつばた

棚田よりそよぎ飛すや青あらし

星合や秋の夜とても明安き

雫まで青山杵のほひかな

閑古鳥日の照る空をしながら

いさ、かの雨をさかひに余寒哉

蒲公英や朝日うけよき藪の岸

出支度のうちにはや来る礼者哉

船に灯の見えてもしばし風の音

かすみ汲舟より人のかすみけり

吹たつる風にはりあふ蛙かな

花に名につりあふ色や福寿草

黄鳥の下りるや水にちかき枝

山はみなくろみのみつくや夕がすみ

名もしらぬ虫のおちたる鳥巢哉

風もなくちるや月夜の梨の花

笠の蝶町へ這入ば失にけり

稽古などして齋うつ男かな

眼うつりのするや広野の小松引

子の日野や舟にもどりて一ながめ

奴風

哉月

丞山

柳士

沙角

竹丸

希石

和友

湖月

江三

和好

月扇

月桂

松岬

少也

酒翠

夢楽

児川

埋山

子明

有儀

半両

二九

玉令

蒼丘

梅洲

扇々

入山

東暁

若草の草鞋さはりや舟あがり

因幡

茶の世話に一日くれて花見哉

蚊遣り火のけぶりとくや松の丈

一日づ、一嵩づ、の落葉かな

周防

丁度よき茶の座明りや若葉かげ

播磨

初はなといふたばかりや瓜の花

御降や続て降れば春の雨

山吹や水まさ立て暮遅し

明た窓直に柳の叩きけり

盛りでも散る木のあるや山桜

かすまれて魚荷の行や山の間

鶯の鳴を其ま、松葉かき

花に行人ぞとしるや歩行振

あた、かになるや雨さへたまる音

売のとも見るおき処や鉢のうめ

耳につく音までもなくおちつばき

ゆつたりと潮のみちけりかすみけり

乾くのも早き桃さくはたけかな

提て行松魚に光る雫かな

寝るときにた、むや裕二三日

何風と箸下におく柳哉

大和

宿とつて見直す花の夕げしき

月花は後のながめぞ初あかり

ちるも雪ちらぬも雪や花の峰

黒谷や根なし花にも一明り

声ばかりきくや霞の初がらす

英泉

蕪月

舟子

南嶺

閑雲

市外

仙羽

秋峰

一雛

十山

布雛

三笑

青水

樗屋

鴉雛

芦国

古谷

北梅

聴洋

一簣

愿泉

南岳

南翁

南遊

南明

南保

初花や松の雫のかをる朝

帆に風のきくたび花の散にけり

紅梅の梢に夕日止めけり

花の宿夜はよざくらや朝ざくら

似た花と似た花あるや秋の草

おとし水翌日なき音と成にけり

底までも日の照る川やのほり鮎

年を経て木も拝まる、清水哉

丸うても欠ても月の朧かな

うめが、や埃りの障るぬり柱

手の固くはえてしめる戸口哉

うぐひすのふりして梅のすゝめ哉

糖に垂る油澄ぎる社日かな

蝶飛や風つよりを受る涯

早わらびや捻れる丈を一把

越中

物申に帷子のうら着て出たり

袖ぬれて思ひ出しけり虎が雨

初雁や旅寝にくらき有明し

雫した草から舞や朝の蝶

持直す袖に開くやかきつばた

切風や波のかしらに翻る

おろすにも風をちからや風

むつき廿日あまりの文に和鳴、病に

臥と聞て快復をいのる

時得たり力を得たりあげ雲雀

今朝の花見分てきるや杜若

さくら茂りにくらき雨降

茶の湯会掃除ばかりも草臥て

南嶺

南嶺

南嶺

芳屋

芳吾

西坡

可樵

木谷

清之

寸松

桃斐

佳交

古岳

田水

桑夫

逸江

桂々

曾洲

洗車

鴨洲

静章

温然

九起

九起

和鳴

起

つかひなれたる筆はしりよき  
月の風そゞろに寒うなりにけり

鳴 起 (二八オ)

笥の水も秋ふけた音  
籠の中どつかり茸の嵩がへり

雄 邁 (二九ウ)

夜は夜とて箸をとりけり松の内  
水源は遠き様子やはるの水

水壺 抱儀 流芝 一具 為山 (三一ウ)

虫売やめば小鳥あきなふ  
細道の稲に埋まる実入どき

鳴 起

あし弱馬のもどるゆふぐれ  
被らして苦払ひしたる娘ども

風 雄

見かへりて雛待雉子や上り坂  
くれ淋し片山里のいかのぼり

一具 為山 (三一ウ)

太鼓ならしてすます御神事  
旧家には竈風呂のある八瀬の里

鳴 起

連をまたして直す寝みだれ  
なみ松に赤穂の城のかけ澄て

風 雄

こがれ鳴声の似合ず猫の恋  
咲花にあらき音也藪掃除

卓郎 遠江 (三一ウ)

和鳴朝夕愛せし木をもて造れる

雄 邁

螢火の闇になるほどふゆるなり

雄 邁

道普請行とゞきたるさくらかな

巨松 出羽

扇文のついでなれる歌仙のしかけを

風 雄

辻絵書やら辻のにぎやか

風 雄

早立の都合もよしや若葉時

御風

おくりて、二月十二日古人の数に入り  
ぬると告来たる

風 邁

貧乏はしても氣立のおもしろき  
春は着がへもよごれぬはなき

風 邁

ほと、ぎすゆかしき夜の木間かな  
櫛焚て年貢の済だはなし哉

可慎 幽雅

行鳥や南無きさらぎの十二日

子 邁

たのもしき朧月夜の花の雲

雄 邁

顔に来る闇のあらしや時鳥

其仙 (三一ウ)

普門品をとなへ奉りて

(二八ウ)

膳こしらえて蛙きく軒

雄 邁

鶯の声たしかなり竹の奥

泉長 (三一ウ)

観音の導く日なりはなの雲

全

どんどにも顔黒くする寺子かな

能登 鳳兮

晴たれば夜明に近し月の雨

一養 雲涯

以芳忌

全

風ばかり松にもどるやほと、ぎす

九五 一川

どの雲に紛れて来しぞほと、ぎす

湖東 詠之

雲はみな紫色やはなの窓

全

地けぶりにくもる木の間や蟬時雨

東嶠 (三〇ウ)

あり明た月は見えつ、五月雨

梅之 詠之

大歛忌

全

待雨をうるさがりつ、田うゑ哉

武蔵 東嶠

鶯に起た朝なり川手水

良和 洗耳 (三一ウ)

月代も剃りぬ供養の更衣

東雄

霞まれてこのかたかるし松がさ

繁茂 月人

飛先も暮てありけり閑子鳥

二葉 千児

帷子の色と競ふや水の色

里北

草がくれしてはぬるむや里の水

月人 桃仙

鶉の道にぬれて枯たる芒かな

其友 其得

春の夜や貰ひ笑ひの壁隣

昇齋

ひとつづ、眼のうつり行ばたんかな

潮月

蓬菜に夜ははなれけり鳴雀

其友 其得

水上は何所らに出て霞けり

西厓

若者に酒もおごらで雑煮哉

江戸 潮月

春の雪小枝に見えて有明ぬ

其友 其得

野の末やこぼれ菜種の花咲り

里風

人ごゑをつ、んで曇る桜かな

墨河

樹の闇の松からもれてはつ鴉

其友 其得

(二九オ)

江戸

降そふな空はこらえて朧月

其得

市中の人にならひて冬ごもり

子邁

蚊屋釣てうた、ねしたり蚊帳の外

墨河

揚雲雀風におされて海の上

其友 其得

をさまる風にはしる炭の香

里風

まばゆさや海苔の簀垣の日の光

筈吏 遅流

すぐなるは杖にもほしや梅の枝

二丘 越後

鳶からす翌日の天気を鳴やらん

東雄

御降や幽な夜を雪まじり

伯遠

植たま、草の中なり唐がらし

宗三 (三三オ)

植木の鉢の掃除してゐる

邁

門かざり氷柱も町の家並かな

荷少

夕月のちらりくとひろがりぬ

風

訪へかしに明し小門や月の梅 はり合になるゆふ鐘や雉子の声 夕山や月にならびていかのぼり 右左黄鳥きくや淀のふね 掃除してちらせる花の名残哉 おくけしき空にはなくて春の霜 うすぐらき宿の二階や夕柳 きじ鳴やふらぬに山の皆かくれ 青々とせし空合や春の水 風かへし風かへし来る柳哉 山水の出る朝かぜやきじの声 きじ鳴やおのれとあがる劔釣瓶 芽になりて水も柳のみどり哉 かけて待葵しほらしかざり馬 通う筋あるや夜毎に鳴水鶏 またことし育囉はん初日かけ 白い花咲て小寒き律かな よい水は汲ても軽し夏の月 更衣して座へ出るや給仕人 昼からはしらみ落つく野梅哉 乗初や帆までかけても沖へ出ず 捨毘もあるや萌たつ草の中 木は西におち葉は川の東かな どこやらに底曇りして春の水	春室 一花 曹村 碩宇 花朝 友徳 清水 青湖 越彦 令我 李年 以逸 六樹 西畴 乙良 応泉 応化 露川 召人 双泉 五具 里作 其山 和夕	(三三四ウ)	なき止んで落る雲雀のけしき哉 日も麦も伸や余寒のゆるむ雨 水際はまだ枯のこる芒かな 松かげはまだ明切らずきじの声	日向	有文 鹿木 二流 梅可	(三五オ)	川明の翌日待空や揚雲雀 楽さうに寝て居る牛や春の雨 暖を覚えて今朝の起ごゝろ 山里の箕さきにたつや天の河	橘斉 康哉 山畝 春月	(三七オ)	
谷の家やけぶりにくもる梅の月 初東風や松の葉先もゆるむ音 万歳のつゞみのうつるはしら哉 氷る夜につきそえておく油かな 鳴出せば雨もはれけりほとゝぎす	仙駕 芦村 成篁 吐雲 遊松	(三四ウ)	黄鳥のけさ荒ましの初音かな 羽子つくやまだ振袖のそれ者同士 散事も一さかりなるさくらかな 草踏ばひよろ／＼出たり春の水 海山と別／＼になる霞かな 蚊の声のはつと散けり火のうつり 落つる椿に埋る小道かな さかおとす川にもぬるみ聞えけり 春かぜに一日歩行はたけかな 炭がまのけぶりは消て初がすみ 蚊柱や香のある水のおよむ処 雨の気を持って手づよき暑かな 草の名もそれ／＼分て春の雨 散たほど掃かさのなき桜かな	肥前	正葩 竹苞 一草 雲汀 茶采 桃筵	(三五ウ)	ちり行やちよつとも待たぬ花と水 降雪とみたはわりなし散さくら 飛込だ浪はながれて蛙かな 七草に我は硯をならしけり ちら／＼として蝶遠くなりけり 見処をかへて凄まじ藤の浪 絵にもこのけしきは書けずはな曇 織の音折／＼やんで日永哉 灰ふきの掃除もすんで時鳥 竹の雪溢しに来たる鴉かな 綿売の来て誉そやす楳火哉 雁鳴のかげも残さず臙月 さく花に朝のこゝろのはやりけり 花に月もてあましたるけしき哉 遅ざくら考過て散にけり 花廻りして遠く敷く筵かな 咲満て空にゆれあふさくら哉 散花のみえて本意なき月夜哉	肥後	梅士 雪童 梅林 梅映 山来 桑榎 聴雨 秋湖 可南 梅堂 芝酔 鶴扇 礎暁 川龍 淡石 四眺 笹磨 蘇丘	(三七ウ)
筑後		(三四ウ)	霞日にかすみそえるや舟けぶり 狙もけづり清めて齋かな 春をしむこゝろでみたる入日哉 とまる蝶飛てふかはる／＼かな 家中衆の不動まいりや手に若葉 かげ日南見えて蝶とぶ浅瀬かな	筑前	一恵 帰雲 榎園 枝考 驢童 喚古	(三六ウ)	草臥の足に紙衣の重さかな 初蒔や隣の田にもこぼれ種 山越る鶴をかすみのはじめかな 春の雨なみだ呼出す欠びかな 青柳の風にとりつく雀かな	正焉 公某 若拙 不三 竹交	(三八ウ)	

しらぬ人も又面白し春の山

里松

丹波

素屋

松に日のさすや蛙の跡じさり

蕙潮

鶯の声はしらずや閑子鳥

九花

箕虫の雫に晴て初ざくら  
手にあはであらき言葉や小松引

松隣

(四二ウ)

ゆれ止むと灯しのみゆる柳哉

池白

手の届く処ばかりや花に鳥  
ゆれる花山門の額てらしけり

蓬雨

下枝に雪はたもちて梅の花

庵女

行水や花は流れぬ散処

五雪

是非潮の乗場へ下りてきじの声

千丈

美作  
梅が、の来てはゆるなり行灯の火

飛龍

藪入の皆しる人や土手の家

其雪

さかりにも人なき花や鳩の声

雲帯

出雲  
春の夜や転寝するも花ごゝろ

飛龍

日本に生れ甲斐あり不二の山

飛木

水音も花も真昼を眠りけり

大年

凡和  
みじか夜の降あまりかな今朝の雨

飛龍

長門

雲も足とめるけしきや初日の出

九山

黄鳥の寝覚や嵯峨の朝日かけ

桂眉

画竹  
日のうちにゆふ飯すんでうめの月

梅逸

よく見ればもの凄ふなる桜哉

梅調

戸ざ、ぬも七日あまりよ花の庵

倨遊

豊後  
のし上る鶴に初日のひかり哉

秀然

備前

みち潮に草潤ふてかすみかな

九怡

香にむせて盃おくや花に月

雅琴

霞城  
山水に味をもたせてほとゝぎす

霞城

岨のうめ一木くゝの力みかな

立石

船へ樹の雫ふりけり青あらし

畚麦

西川  
春の山朧に染て暮かねる

西川

立聞の琴おしまるゝしぐれ哉

里恵女

田鼠の出てもどりけり秋のかぜ

春魚

芦舟  
雁の跡大きう歩行からすかな

芦舟

道じるしありて胡蝶の右ひだり

射風

山一つ裏に扣へてはる三月

旭子

孤松  
屋根に咲南瓜の花の暑かな

孤松

晴る日ははれる色なる若葉かな

北洞

火に酔てふらつく程の寒かな

、

、  
しら浪や漉上て来る夕千鳥

松屋

但馬

朝かぜや寝がほあらふて初裕

一橋

接木した跡にほどよき雨気哉

栗雄

うめが、をよそくしくも鳴蛙

古桐

石灯籠雨の伝ふて苔の花

左和義

菊植の塵捨て行すゝめかな

節外

花底を一々のぞく牡丹かな

沙鷗

日のさしてきらくつ花の雫かな

稲月

欽杖に詠める空や揚雲雀

白成

晴るもやすきみじか夜の雨

霞城

夕がらす花の吹雪に追れけり

桂秋

高ふ来て蝶も遊ぶや初ざくら

志文

浜町のごたく中に牛吼て

而后

古川も清てながるゝ若葉かな

秋孝

夕雨や水田はなれて鳴かはづ

素仙

あつらへられた水引を買ふ

而后

手まくらの眠りさますや時鳥

蘭渚

白梅とにらみ合けり赤椿

虚栗

有合のもので月見の間を合せ

而后

泉水の掃除目だつや杜若

余滴

植し田に彦芽もそふて青風

凹峰

たちかはり来る藪のひよ鳥

而后

散る中に苔もあるや梅の花

山彦

扇折音や夜明の樹の雫

砺山

背の延たやうな彼岸の肌気持

而后

山里や紅葉の中へ雪あらし

九菓

裸身になりてもつかふ扇かな

鶴鳴

織屋女子の日さへ拝まず

而后

浜松のかぜにもまれて若みどり

野鳥

ぬれたまゝ、西瓜貫ふやまくら元

白雀

憎まれて徳はた、ねど生れつき

而后

春の日や風に吹れて山のぼり

栄梅

芹薺その外の名はわすれ草

鼎左

若狭小鯛にかける生醬油

而后

垣越や梅のかをりをよそにせぬ

貪楽

梅の日の月呼出して入にけり

卦龍

にふくゝと紙でもたせた障子骨

城

薺や垣にも付ず花ふたつ

松玉

うめが香のいやしからざる小家かな

起山

城

うめが香のいやしからざる小家かな

起山

(四〇ウ)

城

うたれてもどる瀧の草臥

后

菜の花にひと畝白き大根哉

禾堂

すつぱりと着がへて鍛冶の団かな

轆雪

澄く〜月より外の空くらし

鷗

そよぐ木のありとも見えず初霞

麦路

いつも留主つかふて庵のさくら哉

伊賀

西瓜ばたけの番の拍子木

城

きじ鳴やどちら向ても野は果す

固年

いつも留主つかふて庵のさくら哉

養瓜

盆限に寺をゆづりて若ふなり

后

都便のくれにつゝいて春の行

柳左

紀伊

長持唄を聞に出らるゝ

鷗

初空や海にもうつる山の形

五桑

鶯拍子のゆとりや唄のほとゝぎす

巴勢

花に売駄菓子は犬も悦ばず

城

鳴出せば寒くてもなく蛙かな

麦紫

枝先に出来る青みや冬の梅

巴水

枸杞の芽をはる癖の腰板

后

黄鳥の鶯にちらりと朝日かな

達夫

湯上りや梅に長居をして戻る

淇青

咲順の見えて待るゝ牡丹かな

尾張

誰も来ぬ門持てちる椿かな

寄柳

雲かゝる若葉を出たる鴉かな

素雪

山荘大夫旧地

蓬陽

日ぐれても心に残る雲雀かな

梅歩

うしろ向人も花見の一座かな

清高

むかしとは欲も劣りぬ種卸

河内

引かねた手のうつくしき小松かな

千可也女

宵闇をふとり時なり今年竹

蘭明

染あげの乾かぬ色やかきつばた

孤杉

さはりなき空にかくるゝ雲雀哉

柳台

提灯の火のとぼつくやうめの花

可明

青く〜と苔までそへて福寿草

古鏡

あし元の埃りから立かすみかな

素静

灯ともせば二重明りや白ぼたん

兎園

人ごとに春の別るゝ山家かな

山城

閑居鳥外には鳥の声もなし

古由

夢になれさくらに憎き風の音

洗耳

まだ家のあるかけぶりし花の奥

半山

遠近の鐘も臍に月夜かな

夜舒

若な野や寒さこらえて高笑ひ

柳止

菜の花の曇りにみえず遠眼がね

魚鳥

牛借りにゆくや奥田の植仕舞

萩里

はなしける亀に物いふすゝみかな

梅士

瓜畑や身にもうれしき通り雨

岳鳳

あだに皆おちて有けり柿の花

玉蕪

草しばし小雨にぬれて蜚かな

芙水

冴かへる池や浮たる塵もなし

鬼白

松かげを出る時もなき暑かな

梅葉

今塗た壁から落る田にし哉

可由

雨ばれや蟻に崩るゝ落椿

山鳥

藪入に来てとく百度まゐりかな

花川

光陰の関ともなれよけふの雪

默居

宿引の出かゝるをりや更衣

悠々

散花に山一ぱいの入日かな

梢声

うの花のかけやよき水田三反

梧堂

眼ざむるや椿として落る音

素月

はる雨やゆり起されし飯時分

花友

かつとした笑ひ声なり雨の花

可推

黄鳥や棚の茶台をおろす時

木二

瀧の音も細うばかりの茂りかな

竹林

転寝の癖となりけりほとゝぎす

、

菜の花や幾里こえて日は高し

渚月

涼風や新道つけし切通し

和来

初雪にちからそへるか海の青

、

菜の花やはいればくらき簀家

苔路

餌を蒔て小鳥とまれと鉢の梅

棟辰

家にあるものをはるゝ山ざくら

棠巢

暖やつかひとうなる庭箒

奇石

風暮てます〜月の朧かな

雅笑

馬かりてさほごに乗らぬ霞かな

梅年

肥前

肥後

但馬

豊前

八十二翁

木父

肥前

肥後

但馬

豊前

八十二翁

木父

宿引の出かゝるをりや更衣

悠々

はる雨やゆり起されし飯時分

花友

転寝の癖となりけりほとゝぎす

、

眼ざむるや椿として落る音

素月

はる雨やゆり起されし飯時分

花友

かつとした笑ひ声なり雨の花

可推

黄鳥や棚の茶台をおろす時

木二

瀧の音も細うばかりの茂りかな

竹林

転寝の癖となりけりほとゝぎす

、

菜の花や幾里こえて日は高し

渚月

涼風や新道つけし切通し

和来

初雪にちからそへるか海の青

、

菜の花やはいればくらき簀家

苔路

餌を蒔て小鳥とまれと鉢の梅

棟辰

家にあるものをはるゝ山ざくら

棠巢

暖やつかひとうなる庭箒

奇石

風暮てます〜月の朧かな

雅笑

馬かりてさほごに乗らぬ霞かな

梅年

肥前

肥後

但馬

豊前

八十二翁

木父

肥前

肥後

但馬

豊前

八十二翁

木父

蔵建てしばらく暗しけふの月	花向	青甫	寝る丈の小家なれ共梅長者	杜鷺
掃て行跡にこぼる、桜かな	桑龜	野玉	気のすんで寝ぬ夜がち也花の内	有節
朝がほの花なるほど、ながめけり	十邑	一岱	明安き夜を楽しみや旅の宿	黙池
肥前	素羅	百合	どの御所を流れぬけしぞ春の水	草陽
客かへた駕のかるさよ春のかぜ	梧井	瓶平	下枝に落て日を経る椿かな	乙雅
傾けば夜のない月ぞほと、ぎす	巴山	淇六	豆腐箱みて落付ぬ朝ざくら	梅室
牛の子の生れた家やも、の花	荷乙	空嗣	きのふよりけふ猶若し花の連	樽山
鐘つけば悠に消るや花の雲	若狭	充魚	明がらす声さだまりて花の空	道祐
青梅やころげ落たも升のうち	微箏	晴江	住なれし藁屋の上や春の月	松雨
近江	(五〇ウ)	、	軒の牛腹までぬれて五月雨	東樹
休む場も一人前なり若葉かけ	鷺洲	、	むく起も寝しなも花の掃除哉	嬰齋
何処やらか殊勝になりぬ雨の花	白雄	素行	暮るまで着る辛抱やはつ袷	淡節
加賀	大夢	我柳	黄鳥の朝日もまたず初音かな	尺木
見るさへも果報とするや花に鳥	素玉	丹嶺	はつ秋や何にも化さずとぶほたる	禾明
散た儘一日詠むるぼたん哉	雅居	五調	子の日する小松や去年の曳残り	松南
松の花ちるや檀紙の漉合せ	悠平	奥野	袖の花に思ひ付けり葉好み	枝月
藪にまだなれぬ戦ぎや今とし竹	淇亭	周防	山伏は山へ入けり木下やみ	雨翠
入相となりて明るき椿かな	林坡	素兄	そこ／＼に瀧みて過る袷かな	孤柳
窓先は真葛が原の暑哉	立芳	(五三オ)	藁屑もながれながらに春の水	松朗
一里来て問ふても午刻や春の雨	東来	洛	ぬれて来て傘の裏はふ蜚かな	和石
家づくりの音ときめくや谷の花	雨桃	来青	まだけふも無事で有けりか、り風	山丈
着ぶくれて出て草臥る花見哉	居幽	虚白	二番咲をれ葉がちなり杜若	梅仙
花堅しあたゝか雨もひと頼み	梅時	弦山	山かげに住甲斐あるやけさの雪	俔美
咲ものは咲せて霜の別れかな	宗慶	梅通	元山もみな花にいふさかりかな	麦浪
春かぜの吹出すやうや野辺の人	喜夕	芹舎	時鳥舟のまくらの落付ず	要女
鷺の住山とは見えず花の奥	歌春	芳英	ともし灯もいらす庵は花あかり	秋香
鬮とりに留主定まりて花見哉	桃雅	岱年	雨はれて水あらたなり御祓川	梅溪
滑だけ眼をついやすや雨の花	菱橋	あらし山	水無月や月夜がらす野に遊ぶ	馬秀
持て見てうけ合ふ芥子の使かな		齋堂更	雲の外けぶらぬ山やほと、ぎす	柳鶴
		飄齋	勞れ鶉やえものじろりとみて眠る	始風
				(五五ウ)

漣にゆれながらや菱の花

松吟

暈近き月の光りやはつ蛙

芦光

葉がくれに一日露の牡丹哉

成祇

夜の程のよりどころさだかなら

ぬも、心をせめてやまざらん、などさぐり

得ざらんやは、と覚束なくも杖をひくの

はじめ、祖翁の廟前に誓ひ侍る

したひ行道一すぢや雲かすみ

若竹や雲ふりわけの一そよぎ

寒い風吹てもとける氷かな

ふるしきは解ねどさとの粽かな

竹子も末の十日の名残かな

藁を打隣うらやむ花の主

長閑さや海はぬめらの汐時合

青むぎの葉もつみまじる若菜哉

何がなしうけとつておく初荷かな

おく雲も花にはみえず嵐山

ふえたとて見せるや庵のふきのたう

屋根ばかり淡雪つんで東山

手ですくふ水に一ひら花の塵

若水にはや来る空の明りかな

はじめからをしまぬ声や時鳥

蠅ばかり達者な日なり雲の峰

此花に旅人のみぞよし野山

例宗鑑法師

月に似て満かけのなき団かな

空ははれても暑き草の戸

鱈売声の聞えに人とめて

鑑定自慢いつも問ちがふ

こつそりと春の来て居る年の内

白

湊かゝりの舟の煤はく

古

手にはたく吸殻飛で火の気なし

起

(五七ウ)

まだ眠さうな昼の寝過し

古

釣しのお風に動けば蚊の鳴て

起

(五九ウ)

するほど欠る古わたりの墨

白

御墓まで水提て行桶をかし

起

(五八ウ)

持せ草履に足のはいらぬ

白

紅葉より見るに赤き唐がらし

起

(五八ウ)

日かげもあるに月の澄きる

古

石炭のけぶりを立て須磨の秋

起

(五八ウ)

いの字も書かで和歌をよむ姫

白

降日には我ものなる庭の花

起

(五八ウ)

あぶらぬ餅のかたき寒食

古

鶯かへの咄しに鶯の見度なり

起

(五八ウ)

無理にかされて邪魔な傘

白

城番の通れくとしからる、

起

(五八ウ)

風に芥の一面にちる

古

菜をあらふほどもながれぬ川の水

起

(五八ウ)

家数のなくて寒き神子村

白

身腹をもやまでよい兎のある婆さま

起

(五八ウ)

そこらの人に聞すさ、やき

古

小昼茶を入たる春の雫たり

起

(五八ウ)

五里は見はらす山の絶頂

白

をりくは月より上も雲の行

起

(五七ウ)

すだれおろせば猶ひかる露

古

夥し西瓜の皮に蟻の道

起

(五九ウ)

乞食でおくはをしい前髪

白

日の岡を越る車の荷をすけて

起

(五九ウ)

噂はすれど見えぬ初花

古

精進に旅籠頼めば新茶かな

起

(五九ウ)

売て居て傍にも多きさいたづま

古

陽炎ほどにもやす釜下

起

(五九ウ)

川ざらへ河辺の畠踏あれて

古

火をうつ音の気みじかきなり

起

(五九ウ)

昼過の空に月ある秋日和

古

掃て退く間に萩の盈る、

起

(五九ウ)

年老て裕きたれど肌寒み

古

医者もたいこに這入込内

起

(六〇ウ)

垣まみをびつくりさせて笑はる、

古

ほたえ廻してまはる御千度

起

(六〇ウ)

木下闇雨の雫の落やまず

古

月に涼しきつきあげの窓

起

(六〇ウ)

身の小言ひひながらにも不養生

古

さつま木綿の足らぬ江戸づみ

起

(六〇ウ)

朔日のからず賑はし日の出前

古

藪入やめて芝居みに行

起

(六〇ウ)

花の枝かざりに敷し鉢肴

古

春はくる、に寒き木曾道

起

(六〇ウ)

手に合ぬ子の拭はせぬ顔の墨

古

天赦日とて神酒を備る

起

(六〇ウ)

櫛の店へ出すより売るなり

古

拳の鷹を吹まくるかぜ

起

(六〇ウ)

野送りの野中に氷る経の声

古

よける間またず通る糞担桶

起

(六〇ウ)

むら雲の出ても日直る日ぐせにて

古

かたみの朽木のこる落柿舎

起

(六一ウ)

身をかろう持も願ひの一つなり

古

樹

起

(六一ウ)

秋まだ汗にぬる、寝筵

起

あつさにも少しゆとりの出来かゝり

雅

地藏会の念仏仕舞へば登る月

樹

辛崎まつり山越に行

起

人なき所でにぎり飯くふ

室

露をちらして水提て来る

起

聞なれぬ鳥の啼の愛想也

雅

傘の入るほどにも降らず晴もせず

起

置かへに廻る富山の薬うり

樹

障子も赤く染る日の入

起

煮らる、やうに動く蛙子

齋

あちら直せばこちら雨もる

起

呑くひといへばとりく人のより

雅

花遅く麦のみじかき古志郡

室

墨色に紛失物はみてくれず

樹

遊行の札を受ける最中

起

遠のく音の霞む杖音

起

日永の鐘のたらくと鳴

起

浪の上みだれわたりにわたる雁

雅

土佐

咲花にすゑた床几のあき間なき

樹

柳をちらす風の小寒し

起

水鳥の散して立や雪の花

老山

瀧のしぶきのかゝる青ぬた

起

眼ざはりのなくて月にはよい二階

雅

山城

ころげ出て相人にならず竹婦人

九起

きざむを待てつめる菓籠

起

黄鳥のやさしや雨の小ぬれなき 秋田人 燕畔

青田の嗅を吹つける窓

乙雅

馬糞搔手早く掃除して通り

起

明かゝる夜や鳴千鳥立千鳥 里玉

もの不自由汁が煮れば酒尽て

起

銭かねは入れねど葬の立派なる

雅

世なみよき青田や月にみて歩行 イセ人 蘭庭

殿の御立の拍子木がなる

雅

脱ておく間につぶさる、笠

起

陸奥

秋のうちはや霜おりるけさの月

起

利たうへ花の香のそふからし和

雅

山吹のながれや庵のつかひ水

片眼縫ふても賜はするどき

雅

をしみながらも翌日は出代る

起

よきほどに降して行や花の雨

蔵の裾こぼてた土に草のはな

起

白萩や一隅しばし暮かぬる

嬰齊

春深きさまや雨夜の松柏

すきな蓑にむせる病ひ後

雅

里をはなれて月早き家

梅室

永日をた、んでもどる扇かな

人情を尽せど妾いやしくて

起

斧の音響くは築を崩すらん

九起

くらがりの嘶しや団つかふ音

なみだも見せず梓きゝゐる

雅

こそく喰に腹のふくる、

起

播磨

便所へも曲突へも通ふ斤鷗

起

春さきは旅の調度を光らせて

室

鯛やひと筋ほそき水の音

十ばかりほど霰ばらつく

雅

雲雀のこらげ揚る朝空

室

肥後

関切手皺になつたを咎められ

起

枸杞の菜五加木の汁の十五日

起

卑下したるさまや葉陰の赤椿

熱海荷の来ぬ魚のひつぱく

雅

京のはなしに娘こがる、

齋

樵て来た木にも芽をふく弥生哉

留主の戸を心易さに明て入り

起

船の窓顔さし出して水かゝみ

室

【校異】愛知県大本は、ここ迄了。

何所もかしこも咲揃ふ花

雅

月もうすらぐほどのいさり火

起

冷つきの真昼も退ず花の中

長い日にながう出である春の月

起

年により七夕ごろにはつあらし

齋

蝶とぶや湧出る水の耳ざはり

巢をとられたる蜂のさまよふ

雅

のら薺の薪にとりつく

起

寝ころんで桜みて居る小舟哉

川一つむかふは古き遊女町

、

行ぬけの寺にまします弁才天

齋

さえ切た流れに月の光りかな

仇ぐち過てうれかねる柴

、

行ぬけの寺にまします弁才天

齋

梅花

京東洞院仏光寺上ル  
御摺物細工所  
菊屋平兵衛

上野

蘇るこゝろさくらの若葉かな

、

髪ゆふた跡はき出して昼寝哉

可申

蓬萊の夜影庵にあまりけり

琴堂

花の宿か□枕はなかりけり

柳下

春の日の□りくらし□うら山し

梅下

畑打や追ふほど鶴に咎もなし

柳雨

明星を鳴消すきじの高音哉

芝丸

咲花にうかれ立たるこゝろ哉

慶鳥

おもふ事足りけり花に薄月夜

熊月

秋の蝶扇にのせて舞せけり

兎木

黄鳥に押るゝ宇治の瀬音哉

立志

起々や朝がほ咲てはりのつく

、

うめ持ぬ家や朝寝の二三軒

鶴歩

ひつそりと師走も仕舞山家哉

飛木

闇の夜も香は只おかず梅の花

秋琴

柚が家のけぶりも添ふて初がすみ

鼠梁

落合□□に□し五月川

若雅

才子や□水垢を親として

寿楽

春ながら春日山に新葉のみえければ

、

是でこそ千とせの御代ぞ若葉山

鶯琴

丹波市ばせを翁塚にて

、

草臥を忘れて眠し藤の下

、

若葉でも言分はなし龍田川

、

春の水はや遊ばせず水車

九起

拍子よふ出会ふて聞やほとゝぎす

千龍

是切で跡なき雁の名残哉

千鳥

雲かゝる山はすくなき弥生かな

成之

降空をかゝえて花の盛りかな

春釣

朝顔や花に静まるあらし山

耕雨

日のさせば雀も鳴や雪の軒

半月

長閑さに詠めあたるや昼の月

保右

かげろふに動くやうなり沖の鳥

梅月

田の青むほどづゝ水はへりにけり

左右

散雪を相手に霞はじめけり

舞雪

あらためて三日月出るやうめの上

可陽

大風や鳩のあらしに尾の足らぬ

芦通

菊生て愛想にならず鉢かな

松琴

夕ぐれの曇はなれて花明り

星琴

猪がきを潜つて出たる清水哉

隣蛙

草が皆じつとしてある夏野かな

春来

魂だなや居りのわろき備へもの

芦川

立合ぬ戸にはらくと落葉哉

一守

猫の来ておさえて見るや落つばき

東来

癖のなき日和となつて青あらし

鉄牛

梅雨ばれに富士もみゆるや佐渡の山

周斉

みじか夜や灯かげのもるゝかゝり船

晋山

鯛の鳴や泊りの近うなる

無外

杜宇松に月ある夜なりけり

清友

地震にあやふき命を助かりて

信濃

邪魔になる家はつぶれて春の月

月外

邪魔になる家はつぶれて春の月

月外

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

(七〇ウ)

底本 九大本  
校異 白鹿本

花供養

(原題簽・表紙)  
(表紙見返し)

年々の此供養たるや四方の士夫芭蕉堂に集会し  
祖翁懐旧の姿をあらはし  
追慕の情をうつして  
花下に詠吟をさ、げ、聊  
みこゝろをなぐさめ、偏に正風の盛なるを仰ぎ、因に桜木にのぼせ普く諸州に弘通し  
千歳不朽にこの集會の  
行れむ事を広く  
にされむ、とのとぢふみならんかし。

平安丘花園 印

嘉永元年戊申三月十二日花供養俳諧

白雲は松の上なり花ざかり  
留主行とゞく庵の炉塞  
ふえて来る笥の水に夏待て  
犬の啞へた雪踏みつける  
休む間は巻上である駕のたれ

聴洋 九起 来青 百古 乙雅 (一オ)

焚火をさせぬ町の張札

始風

照月の凄うなるまで澄わたり

松雨

鳴からしたる虫の声く

侘美

莫してまた植かへる菊のはな

道祐

風呂も立たに客のもどらぬ

百仙

西うけはまだ暮のこる窓明り

秋香

櫃かたむけてかする飯米

重泰

打寄て端午を祝ふ刀鍛冶

此外

ちよつと往て来た帷子の皺

松南

神いのりしてもとにかく縁遠く

尺木

毎日あがる二階こはがる

拾五

三日月に雲もかゝらず行時雨

杜鷲

そろく鴨のおろす猿沢

東樹

湯豆腐におされて売ぬ塩肴

梅雅

遊び仕事に松葉かゝせる

要女

春の風音ほど寒うなかりけり

淡節

知る人多き御忌の往来

執筆

下略

嘉永二年己酉三月十二日花供養俳諧

散花もさすがに踏ず十二日

千干

き、茶供へにもどる長旅

九起

乙鳥の嬉しと這入窓明て

杜鷲

瓶につき込はや染の糸

侘美

市だちのすんだとみゆる人通り

道祐

湖うちこえて稲の香がする

風光

小一時松陰くらき居待月

来青

囉ふ藁火の露に消けり

百古

両側に煮売屋並ぶ町はづれ

乙雅

餌竿ひかえて口笛をふく

桃五

玉川と思ひの外のにごり水

始風

出たらめにいふ啞はつみなき

水哉

涼しきにつ過せし酒の酔

尺木

檀家気がねに寺の儉約

鳥岬

預りた簀も序に干てやり

野鶴

湯屋へゆかねば退ぬ魚の香

吾仏

ゝてある店も明たき月明り

有節

濯はじめて塵も掃せず

伍員

船綱を秋の手すきになふて置

蒼雪

瑜伽へあげる額をみせけり

英父

暮るまで空は雲雀の声ありて

石堂

からしのき、をほめる青あえ

湖雲

凶子くゝの明家もふさぐ春の末

柳涯

雪路直しの廻る高声

里翠

いたわりて重荷は付ぬ戻り馬

祭魚

誰もいやがる入相のかね

琴亭

気をつまる時は出て行橋の上

百仙

阿蘇のけぶりの立のぼりけり

重泰

木がらしがやめば飛かふ鳶鴉

委水

大根洗ふて軒へとり込

茶岡

しほらしうなりし娘の後かけ

此外

肘かさ雨にぬる、片袖

雨翠

草ぐるめつかみ入たる籠の虫

松南

月さす原に遠き水音

石外

どの村も世並のよさに角力あり

文翠

柿商売を寝転でする

湖月

ほかくどけぶる糠火にむせかへり

杜蓼

地つきのすんで蔵の足代

桃下

雲板を叩けば起る泊り客

九蒼

(序一ウ)

(序一オ)

(一ウ)

(二オ)

(二ウ)

(四ウ)

(三オ)

(三ウ)

(四オ)

引ずるほどに髭の長さよ

持扇瀧のしぶきに一しめり

日かげになりし若葉きらつく

よき首尾と呼入らるゝ局口

薬飲さる顔しかめけり

寒の入月はやくも山の上

鯨の納屋の戸じまりもなし

引はへた注連はうつかり潜られず

留守居もやはり鳥かまひ居る

花の陰作法もあれどゆるやかに

筆納めても暮ぬ日永さ

下略

武蔵

人のよく種さへ心よき日かな

町筋やむかしにかへる松の内

しる人としらぬ人ある余寒かな

鶉の篝きえて雨ふる戸口かな

杖とめて眼がね出しけり初桜

立ならば柳はいはず月と梅

石畑の寒さしれとや石露の花

昼過や恵方参りも気の静

蓬生や斯うまでは野も枯ぬ色

散時にちれとて花に鳴蚊かな

とりためし籠にひらきて露の臺

水にかけ移るもしらず猫の恋

つれてたつ雀はそれ揚雲雀

つかれてや羽もたゝまず雨の蝶

足あともなき砂原や落し角

みそさゝる声ふり立て居ずなりぬ

雲萍

東樹

松雨

如籟

榻二

淡節

要女

秋香

閑令

梅室

執筆

一具

由誓

逸測

為山

得蕪

卓郎

伯遠

祖郷

岳陰

茶静

万古

南枝

古山

普陽

西馬

溪斎

一具

一具

(五ウ)

春の山里はものまく最中かな  
近くにもあるを野へ出て若なつみ  
人のちるあとやけしきもかはる花  
初空や霜を照らして澄わたる

外からも来てはげみけり森の蟬  
よい風や夏書の墨のかをるほど  
咲ぐせの付てことしもかへり花  
身づくらひして夜に入や池の鴛

顔をうつ風一吹や遠しぐれ  
おりたほどのぼるや秋の山つゞき  
闇に入光りしばしや春の水  
此闇にたつた一つやきりくす

持て出た枕もせぬや梅に鳥  
鶉の藪にばさつく余寒かな  
百景を尽して晴つ不二の霧  
中空をはなれて高し初鶉

明た夜のしばらく残るさくら哉  
年々に見ぢからも有桜かな  
遠山の雪に続てさくらかな  
日ごと日の影さす中に初日影

我父髭茂奥州へ杖を曳し跡に花の咲出ければ  
聞せたしき、たしみたし雨の花  
御降やさゝる、なれば長柄傘

竹下駄の跡飛くゝに雪間哉  
実のならぬ花に艶もつつ、じ哉  
かけ橋もある夜はこえて猫の恋  
事足た思ひを濡ん花の雨

山ざくら手間もかゝらず咲にけり  
はきかへる草履のぬくし臙月

夷則

静池

其雀

礼久

鳥吟

枝玉

遅流

柴遊

石声

荷少

大莫

三和

松什

見外

清良

髭茂

桃仙

月人

邦彦

しげり

(六オ)

上野

立志

芝丸

熊月

柳下

梅下

琴堂

潮月

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

(七ウ)

尻に腹もすきけり下り坂  
見直しに出れば月夜の桜かな  
座くづれのして奥の有花みかな  
けんのんな処も歩行花見哉

見残した桜を夢にみたりけり  
風ふけばかせも花なる弥生かな  
花盗む人見とゞけて笑ひけり  
鬪にしてのこす花見の留主居哉

心ある寝言や花の旅もどり  
辞世  
せつかれて飛乗舟やほとゝぎす  
亡父かつみ世にあるとき農事の藁に

妙なるを思ふて  
手向にもなるかつかねし茶せん草  
洛東祇園街

人踏でほこりにしたり春の雪  
雨跡の旭を抱くぼたにかな  
蚊の声に暮るゝや鐘の一つく  
日ぐらしや日のかげこぼす釣葱

ふり分て時雨て行や峰の雲  
陸奥  
ゆたかさや雪の上より初日の出  
跡先のなき野分なり橋の上

根づよくて供の手も添ふ小松かな  
底にある木の葉かゞやく水かな  
から風に声のさびるや鉢叩  
三日月に臙ふくみぬ遠淵崎

梅がゝに乾き果けり潦  
酒家へは遠し山家の春の雨  
黄鳥の枝踏かへる日の出かな

可申

かつみ

一桂

保人

逸柳

井翠

巨扇

柳加

花然

三都雄

宛木

、

、

、

、

、

、

、

、

、

(八ウ)

秀芳

鼠月

木公

英泉

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

(九ウ)

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

春雨のはれぬかけふも糊細工

埋山

綾瀬にて

朝がほや裏は戸ざせぬ家もある

、

引あげる四ツ手の中や花吹雪

一旭

追分や清水の有て人だかり

梅之

黄鳥や昼も静な浜屋敷

松橋

長閑になりて違ふ日の入

祖郷

弦はらでいたゞくのみぞ弓始

汶水

雨雲もなく過けり花七日

竹真

柏着た童もまじる鞆に

一具

山に添ふ雲さへ薄き二月かな

二葉

盗まれし猫の帰らずとしの暮

和友

紙緒草履のかるき踏出し

為山

人のみる月をうしろに網代守

鶴二

盃の上にも浮や夏の雲

湖月

川べりのけじめかたづく月の比

見外

三日月を野にみて通る小春かな

御風

青鷺の声の下行あらし哉

希石

兔おさへる茸山の鼠

卓郎

雨風の音は空行枯野かな

周斎

傘の音心よやはるの雨

松岨

○

、

白箸にうけて嬉しき初日かな

晋山

蜘蛛の巣にかゝる哀れや秋の蝶

月扇

寝所から直に舞出る雲雀かな

而先

袖へ来る蝶まで花のかほりかな

梅窓

野の末や小家三つ四つ梅の花

士峰

水汲の手をつかねたる柳かな

不及

鷺立てますく青し夏の山

思道

ふり分て見せけり水と白魚と

一止

ものかげのなくてやひくし朧月

北尹

た、み込扇に残るあつさかな

一溪

鳴やまぬ鐘にもとまるとんぼ哉

江三

若草に足を休めて居たりけり

里山

もまれても直に伸たる柳かな

、

松前

遠くから声を澄してはつ鴨

一帆

朝くの雲鳴へらす雲雀哉

可厚

出ぬうちにあかるき山や夏の月

五角

日ざかりに成て風ある座しき哉

、

軒に来る鳥も正月ごゝろかな

斗明

おもしろき雫となるや春の雪

喜声

出てみれば降て居なり月の雨

、

畑うちやかゝえて休む膝がしら

交友

超たれば夜は明にけり時鳥

、

蓬萊に雪もつみたきけしき哉

素峰

出代のしみくぬれる小雨かな

小鯤

梅が、や右も左も竹の中

北古

是ほどの木にもとまらずほとゝぎす

、

はつ雪やまだ手はなれぬ小柴垣

其流

早稲の香をはこぼせ来るや初嵐

古山

松の下掃て月見の留守居哉

、

松かぜにさそはれて出る田植かな

史虬

塵落す朝が乙鳥の別れ哉

為言

笠二つかけて落葉の舎りかな

、

むし鳴や馬にもいふ夜のみち

嵐台

灯をけした顔にさはるや秋の風

左琴

春心雨にも深く成にけり

己有

蓬萊やむさと動かぬ飴やう

其水

越後

常盤木の落ばや何の音もなし

、

春風に反りかへりけり山折敷

耕雪

鮎汁やしのび喰にも連ほしき

左琴

五位一つ花火の跡を鳴にけり

、

大空にさはるものなし初霞

亡人拾華

ぬくもりのさめぬやうなり初松魚

応泉

豆打や明りのはしる青豊

、

日一ぱい欲にはつまぬ若かな

里鶴

寝た家をのけものにして涼み哉

乍人

御降の汲込水にまじりけり

一旭

人先に起てうれしや今朝の春

由以女

伸す手で用のたりけり冬籠

双泉

白菊やあたりを払ふ夜のけしき

、

元日の行義崩さぬ眠りかな

椿呂

摘だ手で扱へあかず若菜かな

寿泉

其処こゝに尾花は枯て小笹原

、

濡れ色を大事にさるや初茄子

二丘

本意なさや出来た紙衣を置置

月鴻

、

、

宵からの心配りや齋粥

一養

暑いとて涼しとて行納涼かな

弘々

(一一オ)

出羽

(一一ウ)

(一一ウ)

(一一ウ)

(一一ウ)

(一一オ)

(一一オ)

(一一オ)

(一一オ)

(一一ウ)

(一一ウ)

ほちくと雪の雫や飾炭

五煙

たちわびて草にめとるや朝の蝶

清水

信濃

日は高う登る影あり春の雪

其泉

翌日もみる花に寝をしむ一人哉

春室

路菫

海面はいざよふひまも光りけり

玉里

越中

子邁

英父

笹ならず風さへなくて月朧

五雲

真実の花の中なる月夜哉

有方

播磨

焚付る柴木の上やちるさくら

好静

山吹や一重はけつくちりがたく

里風

古谷

夏近き風の運びや和歌の浦

竹司

蝶々の影むつまじき野面哉

西厓

北梅

舞ふだけがあはれなりけり秋の蝶

雪夫

まだ咲ぬ花の匂へる麓かな

正齋

霞村

川越て鴻のみて居る時雨かな

雲月

桃さくや陰も寒さのはなれ際

里北

吾雲

凧のさわぎ尽して止にけり

幸水

万歳や舞ぬ先から袖に風

東雄

唐花

雲だちの春に成たる光かな

和夕

黄鳥の藪をはなれて初音哉

都盤

原泉

初雪や枯ては居れど折ぬ芦

春洲

はく塵もなくて日暮る、若葉哉

逸江

聴洋

朝ばれや桜の下に鳴すゞめ

孤舟

更たれどわたしもとめず盆の月

能登

、

水仙の日南も寒し塀の内

、

いざよひの闇にむしるや軒の草

鳳兮

、

春の日や聞て眠たき鳩の声

露跡

島守の舟に出でて霞けり

笑囃

、

常盤木に鳴や雪吹のむら雀

、

暮る門花の土産に人だかり

常積

春郊

瀧音の隔て高し夏木立

至尹

押水にあふた跡なき芒かな

東嶠

吟雪

漣の岸にならぶる落葉哉

、

初雪や眼にひきよせる原の松

大夢

一簣

薪までみな磯くさし春の雨

鳳尾

陽炎や夜雨もおかぬ橋の反

玉礎

梅洞

松むしや竹の下ふく小夜嵐

、

咲よりも散に明るき桜かな

梅巖

仙羽

夜のうちには餌ばみ済しや揚雲雀

茶山

見残した桜に翌日の待れけり

南翠

寿山

浜通るうちや凧吹通し

九室

遠雷に散て落けり春の雁

棋樵

青水

春風や一つ二つのあきだわら

季山

五月雨におどろかれけり朝の月

晴江

鴉雛

東風の道付てみゆるや海の上

里作

夜ざくらやなくばと思ふ焚明り

我柳

耕雨

糸遊や大勢で引奉加鐘

五具

葉を敷てすはるもあるや畑の瓜

木圭

、

葉ざくらや一坂こゆる牛車

偉文

野の梅にふれ来る風の匂ひ哉

丹嶺

石見

掃さして散をみて居る桜哉

花朝

この余寒梅にはりきみ見えにけり

活園

霞松

降やめば木の間の奥の霞かな

友徳

飛弾

、

淋しみのみえて賑し春の雪

越彦

この余寒梅にはりきみ見えにけり

、

あと戸ひく心もつかず春の月

素年

この余寒梅にはりきみ見えにけり

、

淡雪やひと木はあれと思ふ庭

梅逸

この余寒梅にはりきみ見えにけり

、

花舫

花の山近しとばかりおもひけり	夜あらしを持こたゆるや草の露	木居	松風は落て雨ふる夜長かな	谷水
寝不足のあるはづでなし花盛	みじか夜や軒のはやかかゝり舟	我独	蝶くによき程なれや酔心	南明
吹す多て波も立せず春の海	聞よりは外にみつける蛙かな	霞觴	涼しさやみへかくれする水の月	秀山
蓬萊の外にもなき座しきかな	きしる戸の音して梅に星一つ	写山	黄鳥や寒さはなる、釜の音	春翁
一めんに解出す雪や草の色	黄鳥やほこりの登る窓明り	松堂	長閑さや茶より菓の吸ごゝろ	契
吹なびく柳抱へて朝の門	蝶くやひとりもせまき草の道	董子女 (二三ウ)	雨ばれのけいきに落す田水哉	恍醉
備前	日永しとおもふはねむきはじめ哉	一仙	蝶くや影にうかれて溝づたひ	瞻峨
莫の火きれいにいけて萩見哉	まだ山を越ぬ笈やきじの声	椿斎	外を吹風をこはがる巨燵哉	芦吹 (二五ウ)
香合のふるみも有て炭の上	これほどの花はみぬのに落椿	文水	夜がらすの一声鳴て寒サかな	唯水
走り行籠の雫や初松魚	二日にも声うるはしくあけ鴉	長瓠	うらゝかな日や黄鳥を空にみる	一扇
飼猫のけさからみえぬ時雨哉	有丈の力はみせぬ柳かな	梅風	七種や神も在ます摘どころ	ふさ女
時鳥鳴や夜明けも寒からず	見えもせぬ松の音聞春の風	葵園	黄鳥の程よく鳴てかくれけり	雲崖
夜の雲しばらく退ず初がらす	飲まではよはし小松の引ちから	柳坡 (二四ウ)	子もつれて船おし出す霞かな	其雪
みるうちに時計聞ゆる牡丹かな	明かゝる灯かげも持て福寿草	己千	黄鳥に名をうる藪の小家哉	雲岱
備中	暑日や置かへてみる植木鉢	其風	かけ鯛や日ごろにうとき猫の鼻	溪園
先一人礼者をうけて今年かな	雲はれる風のちからや夏の月	龜亭	梅に月寒い中にも出て居たし	閑雲 (二六ウ)
川の瀬もよどむ匂ひや花盛	帰る雁聞ぬ夜がちに成にけり	龜雄	鞆やさもやごとなき笑ひ声	長門
入るものも残らず売れて年の市	嬉しさに覚えぬ花の草履喰	紀慶	門掃て近うなりけり夏の山	文朝
塵ほどの雲も眼立や秋の月	移り香のする心地なり青すだれ	瓢石	高らかに真空を鳴や初がらす	柳鞋改
骨をらぬ我手くやみて夏書哉	稚子が一人留主して門の梅	指月	暮かねる日にほつとする花見哉	九山
寝にもどる鳥も静やゆきのくれ	梅折て扇遣ふや朝げしき	鼓水 (二四ウ)	塔までは姿もみせて揚雲雀	咲花
水仙や風にしぶときはのゆるぎ	白挽の手はづ打出すきぬた哉	自笑	一渡しおくれて雪の夜道哉	磨山
落葉はくばかりや庵の汗仕事	たしかなる人のみて来て初ざくら	如仙	雪ぐもり地を這ふ鐘の曇かな	土佐
備後	溝川の行ばなくなるかれ野かな	五溪	朝寒や覗けばうごく籠の魚	伊予
見て歩行つもりはないに桃の花	うれしさや寝ぬ眼も覚て初鴉	鶴眠	一ぢから入し声なりはつ鴉	佳笑
とろくど干潟に出るや春の水	折られたる風情をかくす柳かな	霞松	馬下りてしばし佇む霞かな	鳥丁
安芸	持て出た箒の淋し花の中	鶴渚		左笠
網干て朝寝して居る霞かな	青柳に足るや車の水しぶき	芳姿 (二五ウ)		里耕
星寒しさやかに梅の遠明り		芳水		青巴
月の出て襖にゆるる柳かな				

朝寒や垣根の外に鶏の声

冬の月水にすはらぬけしき哉

梅白し月も二日の初あかり

浮上る魚のさとさや水ぬるむ

朧夜のゆるむひゞきや垣根川

讚岐

雲分て登た甲斐やはつ桜

うの花や朝風寒き馬の上

樹の鳥の寝た儘居るや朝霞

月落て男ばかりや涼み台

咲初る日に散もする椿かな

阿波

降よりも散雪くらき町家かな

けふまでは散らじと花のさかり哉

明月の冥加や露のあまる草

少し日の伸足咲や冬至梅

寝心は秋を隣の雨夜かな

凧の中から出たり不二筑波

鶴の舞ふ松にみえけり初がすみ

淡路

松立て若やく門の風かな

太箸を握るも力はじめかな

夜の明る音もしさうや花の上

海づらに曇をかけて雉子の声

元日や水なき川も橋配り

小窓さへまだ明にくし春の月

青柳に冷たき庵の畳かな

雉子なくや夜の明かゝる裏の山

船からも立や湊の初がすみ

昇る日につれてかほるや梅の花

茶一

定山 (二七オ)

花仙

其嵐

宗雪

梅林

雪松

梅旭

霞岬

楓居 (二七ウ)

楓居

万像

石堂

五風

李隣

月桂

丹丘 (二八オ)

松堂

樵雨

楓所

南園

江村

化龍

雲峰 (二八ウ)

竹斎

一水

藍岳

芦十

鳥羽玉のしるべ也けり梅の花

因幡

門松の有た辺りや董さく

来合して蒼ほどける牡丹かな

出雲

豊さのみえてもえたつ爆竹かな

伯耆

草花や夜水運びし桶のあと

但馬

隣までもらす色香のぼたにかな

何一つさはらで広し沖の月

あき果て居るや日永の渡し守

咲までは花を育てや雨と風

元日もはや最う午時の時計哉

百合の花照付られて匂ひけり

流るゝは松葉ばかりや春の水

丹波

火の出来てひと先居はる桜哉

散やみて暮るゝやもとの花に雲

ゆつくりと花出払ふや鐘の声

朝の風花唯くの戦ぎかな

花に来て寝る鳥うらむ戻り哉

簀戸明て手のうち呉る枯野哉

陰中に臂はる声や初松魚

若水と書てまである手桶かな

松に風花に月ある今宵かな

松風は田に吹落て春の月

売歩行柴のほひや初ざくら

豊前

露に実の入とて風のなき夜かな

才蟻

蕪月

南嶺 (二九オ)

秀然

乙美

夜舒

桂秋

起山

慶民 (二九ウ)

輅雪

忠雄

其頼

九華

大年

竹坡

蓬雨 (三〇オ)

雲帯

南涯

其通

湖舟

栗磨

呉秀

桂眉 (三〇ウ)

雪戸

夕月や三笠をあとにかへる雁

追咲にせりこぼさるゝ桜かな

蝙蝠や鰯が軒を出つ入つ

咲と聞ば人の気も散桜かな

鴿の鳴て見出すや初ざくら

明残る月の産しか杜若

底までもゆかしき花の小川かな

花に織筵は花に追れけり

汲て出す洪茶匂ふや山ざくら

長閑さやぬりさしてある蔵の壁

ちらさじと梅折ちからをしみけり

蜘蛛の囀の一筋つよし初あらし

出すませば心のゆるむさくらかな

懐手して海苔とりのさし図かな

夕暮のかくれ処や川柳

今鳴た黄鳥みえぬ木の間かな

打橋に来重りけり花戻り

遠退てみれば風ある焼野哉

花のかげ色めく水の寒かな

水多き中になづまず雉子の声

あとにひく日の暮やうや春の海

鳴蛙くろみのとれし月夜かな

散といふけしきはみえて山桜

名月やおもはぬ方に茶の匂ひ

気やすげな梅の青みや散桜

池水のゆつたりとなる四月かな

百姓の世渡り安し花の陰

ちる桜人は長生する中に

瀬の音の遠くなりけり蚊屋一重

片里も幾日時めくさくらかな 長州人在小倉

蘭明

清高

杏仙

曉雨

可良

戸東 (三一オ)

可明

洗耳

龜山

柳止

静古

龜陸

波声

蛙声 (三一ウ)

对輅

其岳

可由

砂墨

芳村

黙居

梧堂

棠巢 (三一オ)

可推

、

木父

桑龜

雪棧

十邑

照山

一布 (三一ウ)

有明や花と曇りにはさまれて	南平	夜は水の音して寂し花の宿	菊舎	川こしたしるしに結ぶ柳かな	梅志
豊後		芹そ、ぐ濁り蜘蛛手に流れけり	桃里 (三四ウ)	生壁のかはく日和や木の芽吹	芝采
山茶花や草にこぼれて美はしき	文鶯	薄雲のかけつはづしつ山桜	松屋	散花の障子にうつる月夜かな	、
青空に吹はなされし時雨かな	蟻白	水の音灯しに闇く余寒哉	春月	余の草は摘にちいさき若かな	春圃 (三六ウ)
水鳥に驚かされて小松ばら	榎月	古年の帯紐解て梅の鳥	孤松	旅なれた人の袂や唐がらし	、
海に入水筋細き深雪かな	古流	こぼれるの外に用なし萩の花	芝石	万歳に犬の吠つく山家かな	其笑
今起た雀の声や雪の垣	敬夫	鶯も腹にちからの高音かな	霞城	蓬萊や麓の米の青光り	、
松葉焚門の匂ひや初時雨	春谷 (三三オ)		宇逸	梅に出て桜にもどれ伊勢参り	兎路
是を先初げしき也月と梅	雪村	岩穴にたり込音や春の水	斗丈 (三五オ)	淋しさの添ふて行けり鶉の篝	、
はつ花や暦の上もまだ寒し	芦笛	笹の葉につく音妙なみぞれかな	尺歩	十分に時雨たあとの小春かな	関古
硯にも覚へて水のぬるみけり	一之	足跡もしをりとなるや初桜	乙国	最合井の端やいくらも飾り繩	公某
葉になりて影のみ頼む桜かな	秋蔦	手にさはるまでは水の若かな	如笑	元日や梅よりしらむ窓明り	信覚
貝よせの風間に高し鶴の声	一人	余所に寝て戻りか、れば梅の月	勢起女	はら／＼と松葉こぼして鴝の声	九起 (三七ウ)
折ば散桜風ある風情かな	一蜂	日埃りの中に咲けり冬の梅	角二	降きる雨に入のこる月	方井
七草の揃はぬ春の寒かな	花村	田に出れば広がりやすし春の水	泉砂	摺たてる朶に繩なふ場所もなし	起
雪白き山を出ながら春の月	古桜 (三三ウ)	遠退けば曇の添ふや江の柳	竹交	引あけておく門の潜り戸	井
海道へ出てけた、まし蝶一つ	石友	竹椽の冷たき宵や花の宿	不三 (三五ウ)	連の衆の先へ行る、長咄し	起
近道の有さうでなき柳かな	樸齋	莫断尼の食後や合歡の花	飛木	日はあたりても解かねる凍	井
人たちて柱につくや秋の蠅	季蘭	結ばれた濁りも来るや春の水	其雪	掃初は蛤壳の塵ばかり	起 (三七ウ)
日南から廻りて行や若な摘	生月	はげしくも降らでつもりぬ春の雪	池白	子守仕ながら一人羽子つく	井
おもふより物の事足る花見哉	三岳	田舎めく町の出口や梅柳	梅月	午時までも寝静まりゐる柴屋町	起
踏ばつたちからにこけて雪の路	如白	鶯や喰さす飯に日のあたる	飛赫	可愛げのない犬を追出す	井
日のくる、までうかれけり花に鳥	五柳	足元の泡にかくる、小鮎かな	起白	底板の又ぬけ落し簇箱	起
寒菊やあるに甲斐なき垣一重	、 (三四オ)	寝付かずに鷗の立や朧月	五雪	いたゞいておく盆の施し	井
花咲ば皆齋なり畑廻り	月池	今朝の秋葉もある竹の筏かな	木齋 (三六オ)	晴切ていざよふ山の月あかり	起
室の梅客の揃ふて出しにけり	菊人	種蒔や道らしくする嫩次手	方井	一走りゆく毛見の先触	井
子細なく更て仕舞や朧月	夫木	すり寄た膝にも屠蘇の匂ひけり	石羊	下戸にしていつも居りしに茶碗酒	起 (三八オ)
撰捨る葉はなき籠の若なかな	無心	花でさへ見処によるや船の上	玉雪	暖かければ帯のしまらぬ	井
時雨るや灯しの花の帰り咲	古桐	みる外の事はおもはず福寿草	竹蓼	花ぐもり時尋たり問れたり	起
涼しさや葛吹かへす風の色	一芝	明がたの花に置けり根なし雲			

畔のかわきに麦の節だつ

井

筑後

脱捨てた草鞋も雪にうづみけり

吐雲

暮がたの腹から淋し春の雨

青年

いつの間に出たぞ明戸に入乙鳥

鹿木

初水手洗ふ波に崩れけり

有夫

隣には何を笑ふぞはるの宵

二流

猫抱て門に立けり秋の暮

桃有

杜若みる間に一つ咲にけり

二川改  
楓價

秋風や海にもつかぬ雲の脚

赤鱗

開地も古郷なみのきぬたかな

木屑

草むらや野分の筋のみえ渡る

一草

すゑらるゝ膳に朝寒忘れけり

松代女 (三九オ)

捨鉢や是も梅みの人ならず

梅里

常にさへ樂しきものを笑山

成篋

酔てみる花に一重はなかりけり

其春

菜の花や松の一本に眼のもどる

芦村

いとまなふ吹るゝ門の柳かな

蕉雲

眼ざめよきかげうつりけり初手水

金山改  
春実

みじか夜や何して歩行橋の音

東湖

花の香に行当りけりあとの人

梅舎 (三九ウ)

折もをし人にみせたき山桜

松仙

朝に月残りて露のけしき哉

知隣

捨てある花とりみれば毛虫かな

幽谷

花の木や三枝に鳩の一羽づゝ

梅可

稲妻のちとづゝ、出所かはりけり

九起

輝ばかりまだみえぬ月

梅可

門柳をのがそよぎに散そめて

起

(四〇オ)

荒ものだけは舟へすてけり

可

鶏も子犬も逃る筈先

起

まる九十日雪のない冬

可

立並ぶ松早匂ふ除夜の宵

起

御城こみあふ詰衆下る衆

可

鼻かむも挨拶の入る膝どなり

起

よみ歌そへて小袖いたゞく

可

虫の声戦ふやうな須磨の寺

起

木のなき空も露のしぐるゝ

可

有明の真上に残るあきになり

起

居りあきのせぬすり針の茶屋

可

かゝへ帯すだれかゝげる飯のひも

起

ぬしの噂にいかう気をもむ

可

揃へたる蓬の上に雛の花

起

よい猷もの小鮎白魚

可

肥前

(四一オ)

眼のはやき鶏の見向や落椿

小狭也

春風や錢まで売に来る温泉町

代々丸

赤らむや初日の前の雲くばり

容紫

陽炎や音のして出る池の魚

花潮

花のかげ水に移りて空に鳥

榻斎

春雨や鳴ずにも居ぬ藪の鳥

松巨

あたゝかになるや紙衣につく埃

鶴芝 (四一ウ)

雁の去ぬ朝や田水に風のふく

孤石

今年歳旦男五人孫九人隠宅に寿をのぶ

蓬菜に並んでせまき庵かな

七十八輪

朝風の納りてあるやなぎかな

春月

うたゝ寝に喰れたあとの蚊遣りかな

素静

山移りするや雨間のほとゝぎす

蔓之

遣り水や火かげちらつく釣行灯

帰雲

春雨や人待かねて居る渡し

亀洞

梅ごしにさし向ひけり月と顔

其葉

つくねんと鳥のとまるや冬木立

子羊

打水や座敷くへ廻るかせ

如水

海苔かきや一浪ひけば一歩行

一恵

まだ起ぬ門を通るや初松魚

几一

花ざかり潮の来る間を待渡し

之同

俯向て雨こぼしけり穂長麦

悠々

松の音若葉の風に劣りけり

寸長

一構して一株のぼたにかな

史敬

初音から雨の添けりほとゝぎす

驢童

なくさんで翌日に延しつ更衣

二石

小松生ふ中や雉子の声ばかり

子栄

【校異】白鹿本、作者名を「千栄」とする。

葉をすこし出してゆゝしき桜哉

右稻

しばらくは煙もたゝず今朝の雪

起蝶

身うごきもならず時雨の渡海船

起蝶

黄鳥や日のさす溪へ廻る声

筍露

岡の雉子砂ふり立て行過る

梅宇

裏道もつゞく彼岸の通りかな

南兮

川ありと見へて一筋野の螢

荷乙

蝶の舞下や手軽き鍬遣ひ

巴山

今聞た道の遠さや木下闇

石圃

曲りめに来て渦まぐや春の水

鷗夢

涼しさのゆきもどりする柱哉

霞戸女

寝た楽を言く出るや蚊屋の外

登和女 (四三ウ)

黄鳥にとり失ふな糸の口

蘭雪

春雨やまだにくからぬいろりばた

巴水

鶯や日も出ぬ先に啼止る

涼松

山茶花の一重に、たる日和かな	隙風	水かへて煮たてる釜や春の雨	洞石	肥後	千干
後れたも分らずなりぬ田の青み	素羅	足元に風の渦まくさくらかな	霞樵改 起月	炎天に雫ふるふや鷺の足	雫溪
谷間や昼のくらすさを鳴水鶏	卓露	深山にはまだ雪みるに梅の花	蘇水	庵一つ鳥のさまなり五月雨	雪茶
夜昼の境はみせて五月雨	松年	花に月ありても庵の灯かな	柳士	浅い形川幅にありはるの水	九起
桃林に眠りては馬に鞭をくれず畦を譲	(四四オ)	花に宿かりて気安き寝起哉	沙角	声も長閑に輪をかける鶯	鬼白
道を行くも偏に仁徳によればなり		暮残るけしきもみえて花と水	竹丸	木の芽漬茶店くくに口明て	雪茶
谷筋や見上る花は老木がち	竹月	白露や膝にさす日のあた、かき	醉茶	からかさをもつ鬮を引けり	起
まだ花に曇はつかず朝の風	竹古	稲妻や松にか、れば露の散	淡水	旅もどり向ひがてらの月の道	起
花雪吹真向に下す筏かな	柳霞	針ほどの草もあまさじ秋の露	市仙	焔硝匂ふかぜの下冷	起
ことさらに散ものもなし春の風	琥山	裏道も通りてみたし木槿垣	舍猿	壁土のこぼれに埋る秋海棠	起
不意に客来て掃袖のさくらかな	楽之	照月にあしらひのよき芒かな	梅月	裏門の明く鞠の稽古日	起
散どまる日もなき峰のさくらかな	寒松	より次第よりて間狭き踊かな	吐烟	約束の処にたがはず咳ばらひ	起
昼ならば算へぬものをかへる雁	桃雲	草に月やどるも露のちから哉	卓路	雪になるやら身振のする	起
乙鳥の化粧処をかよひけり	(四四ウ)	朝露のおもみにたる、木の葉かな	嘯風	魚市の半過から値を張て	起
朔日を子の淋しがる二月かな	和風	万歳の袖なりかつぐ渡しかな	露園	啞の手じなに子供おじよる	起
重さうに雫たもちてちるさくら	稲波	むら雲の上にも声ありねり雲雀	(四六ウ)	馬糞かく音に吹そふ秋の風	起
梨子の花咲や崩れし垣直し	象外	流石にも待て青田のあらし哉	梅代女	明てもしばし光ある月	起
暮る間をゆりやんで居る柳かな	湖船	はやす手に火花飛散齋かな	白眉	淀祭末社くくの供御もすみ	起
水鷲の中に静や朝の花	素扇	蟬鳴や鳥には声も立させず	守鶏	逃る街の得てな水練	起
雉子鳴や胸にこたへる小松原	堆月	秋の暮机の上に入日かな	宇曉	人おろく花もおろく散中に	起
野に出れば足もとからの薺かな	聴水	初がらす水汲うちに又一羽	馬樞	余の草のけて伸る蒲公英	起
花の陰酒なども売る小家かな	(四五オ)	さわくと竹の宿りや渡り鳥	傘枝	料理やの表かざりや鉢の梅	起
我打た畑見添へて夕ざくら	雨玉	花の香を此暁や唯ひとり	花薬	ちよつぽりと清水の残る汐干哉	起
茸かへた軒の雪や別れ霜	桃翠	満月の入すましたる夜長かな	正焉	梅をるやみしらぬ人に貰はる、	起
立されば暮のさだまるさくらかな	鉄山	笠敷て背中撫さす尾花かな	梅居	火の種もなき処借りて初桜	起
元日は男ばかりの往来かな	如柳	夜もすがら蟬聞や盆の月	松涛	梅のかげさすや社の手水鉢	起
朧夜や気儘歩行の村の人	隴山	長夜也撞捨の鐘聞て寝る	千風	まだ暮ぬうちから戸ざす余寒哉	起
雑木山斧入初てかすみけり	且溪	船頭の久しがるなる散柳	石雅		起
降うち乾のつくや春の雪	露生	苔の花藪には入ば朝ご、ろ	蝸臺		起
	巫山		龍叟		起
	(四五ウ)				起

日の筋を雉子の走るや砂の上

真直に行水出来て春の川

暁がたの空に雲なき余寒哉

引かけてしるや小松の根のちから

見留けぬ陽炎につく眠気かな

杖笠の握り心や初ざくら

陽炎や汐のもどりの砂の上

秋立や露のながるゝ牛の角

名月に鉄遣ふや庭の松

秋風に分別かはる旅寝かな

短夜に月ばかりは満にけり

蚊遣り火に茶も沸立ぬ腹かげん

笠おけば枕のほしき暑かな

夏草や何処に流るゝ水の音

早苗とる丈広がるや雲のかげ

ぬれ馬のもどりばな也ほとゝぎす

大隅

どの山の筈か雉子は鼻の先

手水して早向へけり今朝の春

押ゆれのするや咲ほど咲た梅

地に腹をすりて小高き乙鳥かな

風暮た船や苦ふくおぼる月

鴨一羽うけてぬるむや池の水

箒目のあとや一ひらちる桜

古としの雪の時に初日かな

松原を出ぬけて花の月夜哉

ふうわりと月のさすなり門柳

雪雲の透から春のたつ日かな

押明る戸の軽くし今朝の春

霞から出て竿なりに帰る雁

春洞

其桂

浮塵

志月

月舟

子遊

片石

蘭室

山來

桑榎

九野

阜也

笹磨

一松

眠鶴

梅士

嵐翠

五老

也六

可也

巖竹

阜響

春朗

耕雲

九草

矣哉

雪人

雪橋

梅林

花となす慰み畑の京菜かな

水汲に来て誉あふや朝の梅

鳥雲に入るや風たる朝の梅

声で身を曳て何処まで揚雲雀

鴉だに鳴ぬも涼しあらし山

蒲の穂やもやいかけたる舟の縄

裸火は井戸のあたりや初鴉

かざす手に鶯の音のこぼれけり

暑日や片よりもせず蟻の道

鐘聞てしばし夜のある鶉哉

明やすき夜や浪音の引ぬうち

雲の峰浅草寺の鐘が鳴る

夜になれば柳風あり更衣

茶の花や日のさし廻る一重垣

日向

皆あけて正月入る雨戸かな

眼にあまる雪や心も深うなる

潜て行雪は苦にせず山の雪

山かげのさす間昼寝や田草取

其納屋で年もする気かみそさゝる

山を出る雲の早さや冬の海

覗いてもすぐにうけとる御慶哉

暮かねる日を待かねて春の月

【校異】白鹿本、作者名を「茶表」とする。

稲妻のうしろ押する小橋かな

陽炎や水に流るゝ木葉にも

こわくゝに歩行あふせし氷かな

橋銭もをしまず通る柳かな

木のうちからそれだけみせて帰り花

帯める拍子に羽子を翦しけり

二外

関市

几桂

古人

竹哉

柳爽

和流

季風

滄川

見更

柳居

文渚

万笑

松霏

西洞

双鳥

五川

駝岳

月雄

尚故

和声

厚薄

茶来

楓扨

梅人

仲衡

圭史

巴石

明考

枯はて、月も定まる芒かな

潤ひのこぼれさうなり赤椿

明度に光りそへけり雨の月

近々〱とみゆる山家やけふの月

若草や奈良に思はず長遊

帰るまでさゝ鳴居るや一処

暖な風にも花の雪吹かな

空は風ある羽ぶりなり朝雲雀

松植てけふは暮けり冬籠

さかやきのしをりになるや更衣

鍛冶の火もさつぱり消て麦の秋

藪入をのせてみえけり薪舟

植し手を洗はぬにはや竹に鳥

あと先に風のちからや時鳥

日和ほど色こく咲ぬかきつばた

鶯の行やはげしき水の音

橋までは汐の登らず行々子

まれにみる花さへ白き寒かな

椽のすみにも冬のおき柴

豆腐やも来ぬ不自由なる留主守て

聞たび音の違ふ若水

新畑にはや広々〱と月のさし

ひと取づゝにすもふもめけり

盃の塵に浮たる瓢だね

庭樹伐せて井筒しかへる

室町の三十日なれども静さよ

海山こえて嫁の相だん

たしなみにはじめて蓑吸てみる

芸で取たる扶持は動かぬ

正葩

一峰

鶯歩

雲峰

今純

素木

遅牛

桃筵

可昇

草廷

久女

蚊齋

野鳥

青圃

亀友

里鳥

花霖

双鳥

九起

、

、

鳥

、

、

起

、

鳥

起

鳥

起

(五三〇)

月涼しみがき立たる空の色	起								
蚊の居ぬぶんも徳な川筋	烏								
仕事跡掃かたづけば水打て	起								
呉服うるだけ違ふもの言ひ	烏								(五五オ)
花の時一日遊ぶ隙もなき	起								
霞の退ぬ須磨のかいわい	烏								
乾きめのほこくぬくき出水跡	、								
下座菰敷て御門主をまつ	起								
果報さは主筋の名を譲らる、	烏								
もう藍壺に埋火の入る	起								
小鳥まで少うなりし風つゞき	烏								(五五ウ)
歩行ながらに海士が髪ゆふ	起								
垣ごしにわやくはいへど役屋敷	烏								
日のあたる丈ごもく湯気たつ	起								
閑伽桶に葵一もと持そへて	烏								
香にむせるほどよい茶飲せる	起								
是きりの雨とはみえる月の雲	烏								
ことしは長う帷子ですむ	起								
鳴つくせかまいにならぬきりぐす	、								(五六オ)
目がねもなしに婆々が文かく	烏								
神棚の灯昼まで消もせず	、								
空うけあふて花見すゝめる	起								
広沢へ何処も持よるたね俵	、								
雑魚を育つる春のしたゝり	烏								
かぎす手に入目をよけて初桜	鼎左								(五六ウ)
三日月やしばらくみゆる沖の鴨	其山								
鶉遣ひのふる顔せはしみだれ髪	素屋								
川わたる牛や螢は橋の上	松隣								
聞し朝人も来ていふほとゝぎす	太乙								
蜘蛛の子や風も通さぬ木の茂り	庵女								
順々に蒼ひかへてさくつばき	鼎湖								
田には雨待空ながら夏の月	米老								
水ぬるむ車の下や鯉の飛	如慶								(五七オ)
大内のかゝり見歩行霞かな	松笠								
打水やむしり残した草の色	柳守								
いねあげて行や松葉の搔はじめ	都春								
水誉て居れば出さるゝ新茶哉	藤涯								
よき空や時雨をりく休む度	可大								
羽子ついて来たか帯まで砂まふれ	雨祿								
宿とるや千鳥も鳴て浪の音	養瓜								(五七ウ)
静りて初日待けり松の鳥	惠雨								
初霜や日の出るまでの夜のゆとり	鶴渚								
足むけて人も寝させず軒の花	蝸庵								
藪入の行儀に恥る妹かな	雅琴								
立しほや草の螢に樹の雫	砺山								
ついそこに人木がくれて夏げしき	蕙逸								(五八オ)
なくてよき茨の残るやけ野かな	麦村								
川音の聞へて寝入る蚊帳哉	可陽								
舞鶯のみへかくれする二月かな	松琴								
入替り人の立よる牡丹かな	一寛								
月の出の早う届くや今年竹	江波								
果もなき花野に狭し通り道	文光								
木や草は匂ひてあれど余寒かな	其湖								
鳩啼て一寸晴るや梅雨の空	雲北								(五八ウ)
人の梅誉て行けり梅提て	右白								
紙鳶に糸海の上まで伸しけり	美水								
方々の鐘聞わける夜寒哉	丸小								
満て来る汐に曇るや春の月	一宝								
腹冷す鳥の下りけり苔の花	隣蛙								
駒鳥啼や日影の早き谷の家	一守								
一本で宮一ぱいの茂りかな	松蔭								
咲花に中く赤き鳥居かな	東雄								(五九オ)
雪をれもひるまぬ梅のつぼみかな	栢石								
ふらこの騒を覗く男かな	蛇鱗								
粽まくほどになりけり姉いもと	微笛								
卯の花やほどなく帰る朝の留主	而后								
乙鳥の朝日に遊ぶ苗田かな	一清								
時鳥待瀬も過ぬ軒のあめ	蓬陽								(五九ウ)
塵ほども雲なき空や野分吹	春潮								
春の月かりにもかへす浪はなし	阜山								
はひ古りて水なき処も杜若	立処								
声ほどに草も動かずきりぐす	一川								
風ばかり松にもどるや時鳥	九五								(六〇オ)
田のそよぐ音もこもるや籠枕	有権								
霜満て草に風なき月夜かな	竹溪								
まだ田ともならぬ新地や草の花	直木								
青空や苗代水もすみし朝	古鏡								
昼顔や二つと見えぬ花の数	稻海								

撰津

駕かきの乗人撰まぬ枯野かな

遊歴

孤杉 (六〇ウ)

一かけを残り多かる競馬かな  
銭なげていやしくしたり苔清水  
間のぬける鉢の好みや初松魚

茶岡 野鶴 百古 (六二ウ)

したくと垣這ふ水や露の臺  
若水や足元かろき星あかり  
伸足らぬ花も交りて杜若

尺木 此外 委水 蒼雪

曙と朝の間の柳かな

抱儀

美くしう年は暮けり山の家  
世の外の音や芭蕉の夜の雨  
落かけてからが椿のさかり哉

森齋 定本 東井 梅廬 近江

夢覚せくと花のちる日かな  
柴の戸に散も風情や山ざくら  
崩れても流石嵩ある牡丹かな

若雅 (六四ウ)

立かけた竿もみなれて冬木立

玄子

裸身で骨をる甲斐や綿の花

梅廬

杜若西日にまぶし塔のかげ  
柿の葉のてり込上や三日の月

松南

道すがら加減して来て明の梅

碩水

夜の明るちからに芥子の開きけり  
預りて来て気遣ひな桜かな

虚栗 清流 (六三ウ)

みなまでは青まぬ苔や初ざくら  
明くれや柳みる間のもの忘れ

東樹 芦光

山に山うちかさなりし茂りかな

桃五

二つ三つ山を見こして花朧  
山ざくら陰も日南もなかりけり

水谷 兼三 舞雪 節外

霞まれて居るかしきりに眠うなる  
黒みたつ摩耶の高根の茂りかな

祭魚 杜蓼 倍美 淡節 (六五ウ)

人みればいつか裕にうつりけり

荷了

黄鳥や初音を告に簀と笠  
葉桜は若葉の中の若ばかな

舞雪

春風や顔しかめ行草履取  
みじか夜や灰にさし込焚残り

枝月

喰ながら給仕もするや花のかげ

少哉

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり  
日の入て低うなりけり花葶

明良

皆咲て散らふともせず梅の花

念々 (六一オ)

臂しりは苔に青むや山ざくら

来青

茶もにたきほど平地あり山ざくら  
あざやかに出て空あさし夏の月

風光 (六五ウ)

浪に入る帆にあらはれて夕乙鳥

吾仏

【校異】白鹿本、中七「苞に青むや」とする。

梅笠

日によれし若葉も伸て夏の月  
かぎりある日は忘れねど花の中

秀何

おくれ来て扇を遣ふ花見かな

田禾

降つゞく雨に臆せず行々子

大隅

五月雨や重げに下がる壁の鳶  
来ると寝て起さるゝのも花見かな

木容

水音もつれて身にそふ扇かな

素行

伊勢

宵鈴や我が軒も京名所  
日の落て浅黄になるや花の雲

如籟

春雨や鳧もひるまぬ加茂の水

茹草

葉桜は若葉の中の若ばかな

舞雪

春風や顔しかめ行草履取

淡節 (六五ウ)

あなどつた老の買けり初松魚

東帰

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

春ちかしかけ葉はづした窓明り

立器

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

芳英

見るほどの月夜となりて梅の花

両江

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

明良

出歩行て千鳥も聞や春の月

佳峰 (六一ウ)

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

若水や欲にも汲ず一手桶

木鷲

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

明良

裸木のぬれて明たつ霞かな

鷺眠

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

蚊屋やめた其夜手近し萩の声

米帚

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

横たはる日あしの下の柳かな

由渕

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

諂らはでひとり涼しやおれが宿

一居

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

常に行家も茶を出す袷かな

杉岱

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

先ばかり出て吹れけり篠の雪

乙也

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

時雨のや斧疵いゆるうるしの木

波同 (六一オ)

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

雨ながらみゆる伊吹や鳴蛙

銀岱

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

黄鳥や飛草臥て鳴ゆふべ

蘇山

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

松風や朧はなる、朝の月

梅左

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

戻りにもむかふ時雨のかへし哉

天遊

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

鳥山も里ありけりな幟ふく

由岐雄

雪吹来る空おもしろの端居哉

草佳 (六三ウ)

にぎはしき里の子日や朝けぶり

梅通

輪かざりや藪の戸口もとりしまり

九蒼

洗ふほど氷はとけて芹薺

呉明

初午や内を出るのは常の風路

春朝

殊の外戻りはけわし花の山

蟻六

長く雨をのがれて遅ざくら

雲萍

蓋とれば去年の埃や硯箱

草陽

夕がほやまだよむほどの星の数

鳥羽  
如柳

一木にて山びらきかやはつ桜

嵯峨  
石外

陽炎にまかれてたつや土手の蝶

丈翠

雨乞は蛙にさせて田植かな

伏水  
岳鳳

持合の卯月景色や山と川

碑山

明星の花に消こむ谷間かな

城南  
半山

ちり込だ花も興あり送り膳

老波

傘もいらず流石に花の雨

魚鳥

橋ありて家なき岡や梅の花

加賀人在京  
北葉

金魚売声かろげなり五月晴

能登人在京  
重嶂

眼ごましに喰へるかげんや冷し瓜

天草人在京  
春城

あとにみる花数嬉し初茄子

伍員

夏祭朝日に兎の錦かな

見山

炭がまの道を付るや筏ばし

閑令

よき道で退屈の来る春日哉

勝錦

暮がたを山鳩の啼桜かな

九起

(六七ウ)

京四条寺町東へ入  
御すり物師 近江屋  
利助

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

39 嘉永三年『花供養』

底本 奈良大本  
校異 立教大本

嘉永三庚戌三月十二日花供養俳諧

花供養

(原題籤・表紙)  
(表紙見返し)

歳々に行はる、花供養は月花の伴  
侶、身を水雲にまかせ千里の杖を曳  
て晋都につどひ、あるは雁の  
便にものし、逸吟悉洛東に集て

(序一オ)

風雅のこゝろざしを祖翁の像前に  
手向、聊みこゝろをすゝしめ奉る。  
是なん池水の四方に溢れ、蛙の迹を  
慕ふ事いとかしこき恵み  
を仰ぎ、はやく桜木にうつし諸人  
の道びきを願ふ事しかり。

肥後 雪茶謹識

(序一ウ)

東山にかをれる花供養  
集は、歳くゝに帖葉の  
殖重みて、今は五畿七  
道の隅々も覆へり。伝聞  
いにしへの扶桑木と  
申むにも遙かに越え  
たれば極めて異朝  
迄も此陰の移れる事  
ちかきにあらんか

近江 凹峰 凹峰之印

【校異】凹峰の序文が立教大本には無い。

(序二ウ)

けふあすの花に壁ぬる山家哉  
酔茶

きえしかすみのにのこる茶けぶり  
九起

てふ鳥の影のはなれぬ笠脱て  
梅室

八つからすぎの鎌のおもたき  
道祐

往來の橋もかゝらずしほのさす  
来青

いくつ有ても用のなき蔵  
倍美

ほどのよき月のあるじの酒きげん  
有節

きぬたにかけた着ものてらつく  
乙国

み尽して虫も最う居ぬ菊畑  
松雨

桶をもりきる水をしみけり  
若雅

駕を出て休みの長き女中たち  
尺木

おもひはらしのぬか雨がふる  
百仙

おこたらずかどから背戸の掃さうぢ  
寄休

冬がれそめて訪ふ人もなし  
月坡

湖へ声のきえ込朝ちどり  
委水

眠がる馬を唄でいさます  
始風

くひ分て跡のたしなきわり子めし  
重泰

こゝろおほえを手のひらに書  
乙雅

足代を下りると遣ふ作事方  
野艾

拾ひにかゝる一葉ふまる、  
市月

をりくゝに曇るも月の愛想なり  
杜鶯

やはたのそらをはなれ行雁  
古曆

戸のしまりして聞に出る町だより  
成祇

乾かす莎のかぜにみな散  
杜蓼

うつ向も自由にならぬ腹もち  
柳鶺

戴て去ぬ神楽所の鈴  
伍員

暮る、まで置捨てあるとうふ箱  
乙良

川ごしはなす釣の柄まけ  
風光

おしわけて道こしらへる夏草に  
秀何

年忌の外は塚をかまはぬ  
石巻

鞘ばしり鎗の赤さびはづかしく  
卓立

よいかほばかりそろふおももの見  
此外

灯も月もりんと照つ、夜明けり  
淡節

露を受けたる蘭のかをり香  
皆一

頼まれし僧の新絹買ておき  
左外

三日路ほどの旅おもひたつ  
石外

気がるさにあたりの犬もよくなれて  
磨山

つんで山なす魚の明籠  
蒼雪

武鑑へも紋を書る、役になり  
草陽

めつきりとしのよりし足元  
枝月

かた付て去んだあとにも鉋屑  
湖雲

ねぐらをしつて静なる鳩  
湖月

余所でみた花の咄しも供養にて  
砺山

をらで備へる庭の山吹  
執筆

一順  
薩摩

幣立てわき口みする清水かな  
省三

涼かぜのながれて来るや夜の川  
梅左

有たとて藪から呼や露のたう  
一卓

みじか夜や只松かぜの朝ぼらけ  
川会

人の居ぬ間は鳥の居る柳かな  
茶烟

一枝とおもへど神の梅のはな  
為女

寝ても戸はさ、ずに有や夏の月  
東路

五月雨を焚込めしの句哉  
静泉

さとられて鳥に踏る、か、しかな  
松鶴

山におく雲よりのこる暑かな  
草眠

袂菓子くれて梅見の去れけり  
鳥秋

(二ウ)

(三オ)

(三ウ)

(四オ)

秋のてふくたぶれ足にもつれけり	第二	篠二	麦秋や旅人はまだ花ごゝろ	、	白羽	(八オ)
草の戸の闇動かすやことし竹	芦隨	、	薜や垣にあまりし花の数	、	洞石	
花すゝき一そよぎして月の散	、	、	庭うちの鶴みづくろふ小はる哉	、	旦溪	
かすむ日や眼も草臥る船の上	省齋	(四ウ)	梅香のほかには入らじ窓の内	駝岳	瀧山	
田にしたる山の腰より春の風	大隅		日に足らで月にもゆれる柳哉	卷史	如柳	
庭松を造り仕舞て年忘	柳爽		雪ながら籠につみ込若かな	明考	湖船	
卯の花や反古干のおもしろし	滄川		すれるのが音になりけり枯芒	(六ウ)	柄月	
畑うてば水もわき出る山手かな	季風		草にそふ羽ふりもみえぬとんぼ哉	野鳥	聴水	
河魚の小春はねるや瀬のあさみ	西洞		おそき日の影やはき出す筭先	正葩	山旭	(八ウ)
馬のくふもの音寒き夜明哉	和流	肥後	夜る急ぐ鳥の声ありおほる月	千干	兔月	
朝寒や有にまかせて着る羽織	山曉		おなじ名を呼れて笑ふ沙干哉	雉溪	陸扇	
山茶花やうしろへ月の一明り	見更	(五オ)	さし入るゝ汐にむつまじ春の水	一掉	文蝶	
谷くをうづまく峰の雪吹かな	文渚		はつ花やしまりのぬけし雨の跡	怒雲	素月	
しつとりと日は入せけり花の本	几植		昨日まで雪とみし野も霞けり	(七オ)	素扇	
はつ霞たつや日かげは雪の山	雪橋		焼野まで出て吹るゝや一つ鹿	千年磨	堆月	
苦茸て居るや朧の月のふね	風骨		夜るばかり鳴ものらしや春の雁	楚山	蓬海	
笹こぼす雪に音あり天はじめ	春朗		長閑さにみな土踏や鳥のあし	千地	柳霞	(九オ)
霞行野山や人の霞来る	巖竹		白くりはあるじとみえてはつ桜	花月	柳士	
鳴鳥はなけよ山家の春のゆき	梅庵		斧入るゝ木のほひ来る霞かな	鶴之	卓露	
芹ばかり匂ふや摘だ草の中	五老	(五ウ)	霞からはなるゝ舟のけぶり哉	藍生	山来	
霞まれた声で来にけり薪売	可嘯		門送りして笑ひけりおほる月	芦春	山来	
てふくにつゝいて登る峠かな	常波		青梅は無事な姿や棕櫚の音	池昔	隼也	
西あかり持て月さす桜かな	少文		春かぜのうけごゝろよし山の家	(七ウ)	天草	
闇がりや梅のあたりの咳ばらひ	耕雲		夜の内は鶏にまかせてはつがらす	千障	龍叟	
余の木にも明りのさすや花ざかり	太素		西山のふもとに草の庵を	五辰	浮葉女	
くひあきをしたか笹にも稲雀	松隣		もとめて時々の風調を観ず	雪茶	春城	(九ウ)
しつぽりと羽子草隊の寝がほ哉	也六		したひ行道みな花のかぐみ哉	竹月	蚬臺	
日	風翠	(六オ)	川跡と言く摘やつくくし	象外	宇曉	
日向	双鳥		引鶴の声手枕にとゞきけり	寒松	守鷄	
					雪斎	
					山雨	

黄鳥やぼつちり寒き木の滴

醉茶

かわかぬ泥に鶴の足あと

吐雲

秋風や貰ふてかへる水の上

柳圃

肥前

春めくや枯し柳の姿まで

右稲

(一〇オ)

しばらくの晴間に重き簑ぬぎて

照

田一ぱい水も余りてなく蛙

松翠

御降や雪の遠山雲もなし

梅宇

茶の入かへをすてる椽ばな

雲

提て行うちが楽しやはつ松魚

雪村

音のして見出せぬ水や苔の花

龜遊

笛かけの砂にそよつく宵の月

照

明る戸に雪のまばゆき初日かな

花村

我一に小鮎も飛や花の影

有隣

鳴子からく音ほのかなり

雲

見るうちに外の桜は散にけり

植洲

花みえて背中を下る子ども哉

其梅

しらぬかほさし出す花の木間かな

松堂

春の水聴たる丈の音もなし

一人

玄鳥や昔と今はかはる軒

羽扇

寝せぬ蚤かならず瘦て居にけり

斗龍

咲かはる花もかはらずかきつばた

芦笛

連えらぶうち日たつ花見かな

紫友

行春や埃り掃出す日南椽

斗龍

ちると言声出て出る牡丹かな

史測

草の花水なき川と成にけり

梧井

草萌や日南に鶴のよく眠る

一眠

一つ来て木の間を造る蜚かな

豆郷

ちりさしてさて隙の有る柳かな

素羅

(一〇ウ)

雨はれる音や夜明の揚雲雀

一眠

むつまじきばかりや雪の一家内

春谷

我背戸に事足るほどの薺哉

代々丸

門松の朝心よし神まうで

須南

着時分のそろはぬ後の袷哉

一蜂

是からはしれた寒さや梅の花

雪耕

散花の中にけぶるや山の家

当山

拾ふたる扇にいさむこゝろかな

敬夫

日の入て山から雪のつもりけり

山畝

静さの夜しめり持やけしの花

梅守

咲のこるつぼみもみえず福寿草

晴史

松風をうけた証扱や海苔の艶

春月

一眠り喰れてからの蚊遣り哉

硯露

蜂の巢の留主守置て立にけり

夫木

行逢て梅散しけり年の市

几一

草麦の中に立けり地のいきれ

塙梅

雪掃て正月にする戸ぐちかな

霞城

人伝におくれてきくや蓮の花

仙駕

掃丈の造作となりし落椿

梅可

道くは木挽にあらて山桜

嶺北

灯をけしてみるものに春立にけり

春実

(一一オ)

提てゆく菖蒲にほふや雨の中

化仙

日表に廻れど寒しはつ桜

豊前

渉し場や手籠の若な一こほれ

吐雲

しみくくと水仙白き余寒哉

葵堂

足よりもいそぐ心や花のおく

可明

朝雫たもちて椿おちにけり

楓價

美しき木ばかり焚て雑煮かな

方井

音もなき風に逐る、小てふ哉

可良

涼しさや青松かさの水にうく

二流

(一二ウ)

園の雉子地をかく音も聞えけり

宇逸

たえずたる清水の音や花ぐもり

可推

【校異】立教大本、作者名を「一流」とする。

霞川

かすむかたさして帰るや鳶からす

角二

寺に寝た一つばなしや夕すゞみ

、

鶏のかたあし立や雪の朝

遊松

わたらずにすむ橋も有枯野哉

木斎

二日月みて気につくや桐一葉

、

草の戸や莫にも来る露じめり

菊露

おこりたつ炭の火花やはつがらす

乙国

松風をつ、んで積か夜の雪

、

声ほどに姿はみえず春の鳥

有夫

をりくは笑ふ声あり冬籠

如笑

隣有事を灯でしる茂哉

木父

風の出で鮠のうち散柳かな

青年

(一二ウ)

かざし行扇にこたふ雲雀哉

せき女

羽子板の画にもめでたき初日かな

関斎

かきつばた花の持る、葉もそひぬ

照々

起くのしばらく寒し花の宿

一吼

鶏の来てはちらすや草の萌

金生

元日の音やにほひやおこり炭	樹三	傘のかげから照るや春の月	風志	陰出来て筵に涼し背戸の風	坡堂
雲はまだ寒き色なり春の月	左山 (一五ウ)	浜松に一夜は寝しやはつ乙鳥	少也	餅搗てひと安心や酔駟	其嵐
きさらぎやかわきのみゆる庭廻り	照仙	春の雪しばし咄せば地のかわく	清谷	霞まれた鍬を洗ふや川ながれ	鳥丁
雪ちらりく日暮て梅と月	己有	登る日に露もこぼさず稲の花	埋山 (二七ウ)	水音はこ、ちよけれど散さくら	青巴
門守に犬もかへりぬ秋のくれ	、	人去てほろく雨の柳哉	淡水	梅香や二足三あし歩行がち	、
苗代やわづかな塵もとり上る	一帆	すこやかと人に言れて小松曳	英泉	とんぼうやかわき切たる去年の音	、
陽炎にかくる、ほどの住居かな	素峰	麓には黄鳥聞て閑子どり	春室	朝戸出や海すみ切て青嵐	鯉友
椽先のはやうつりよき扇かな	三千丸	はる風の吹行松のうねり哉	越雪	鳴下りるけしきはみえぬ雲雀哉	、
此処からは杖もゆるさぬ桜哉	一旭 (一六オ)	静さにかねも聞ゆる柳哉	孤舟	水音は水底にありかね霞	二鳩
陸奥		茶の花や咲ほこりたる枝もなし	省耕	竹植て鳥に親しき住居哉	、
見盛りの過ぐ花にして人の山	子彦子	かり夜具によき絹の香や花の宿	ちから (二八オ)	田へかける水先はしる水鶏かな	佳笑
徒弟まで聴てもどりぬ山ざくら	子鶯	あれほどが岸のゆとりや梅柳	著我	秋立や暮行窓の西あかり	、
存在も心おきなしはなの宿	子直	陽炎の中を曳する手綱かな	如水	誰ぞもの呉る、やうなり年の暮	阿波
枝ぶりにかげ日南なき柳哉	北椿	萱原のかやの絶間を梅の花	季山	甲斐がねはまだ雪白し梅の花	万像 (二〇オ)
霞まれに行とてまたす瓢かな	北行	畝かたちのこるあら野やつくくし	大経	大福や今年の色の青茶せん	松堂
音のみにみえぬ瀧あり藤の花	青雅	藪入もつれくにして朝寝かな	芝尺	瓜の香や雨なつかしき畑のてり	佳長
道とひによれば留主なり桃のはな	石賀 (一六ウ)	らふ燭の光りもそへて福寿草	子英	昨日みし儘をけさから春の山	、
嘶し馬も長閑なひとつかな	其文	地けぶりの立そふ朝の霞哉	五具	あぶなきも業なり笹の蝸牛	淡路
颯々のかぜに青めりはるの山	交簫	まだ朝の膳も過ぬに梅見哉	里作 (二八ウ)	戸を立て居れば内まで霞けり	樵雨
永日の一日降りし小雨かな	舟巨	たね俵鳥はしらずにとまりけり	五烟	雨だれはやまずつもるや春の雪	南園
筑波ねのくもりもはれて風	鶴路	藪べりや箒あてれば萌る草	玉里	落鮎や水音ふとる俄あめ	長門
のしつけて桜もち行禿哉	瓦鏡	今捨て茶がらもみゆる野梅哉	秀月	小一丁もどる間の時雨かな	文朝 (二〇ウ)
華千本さくを一本のさくら哉	寛兆	七草や見事に分て打よせる	露仙	まだ水の寒きけしきや苗代田	左逸
雇はれた供のはぐる、花見かな	文阿	思ふ事忘る、空や鳳巾	素行	門松に勢ひつきし伏屋哉	梅月
生垣に木通花さく野寺かな	常丸 (一七オ)	明がたを海人のき、しる千鳥哉	、	朝ぐもり鳴はらしたる雉子かな	里朝
近道は垣結ふてあり梅の花	処溪公	日ざかりや鳥も鳴ず人も来ず	木聖	沫雪や松にのこりて雫する	月川
真白な裕きるなり山の坊	夢齋	雪車造る柚が家にも紅葉かな	、	月かげに風まへふりの尾花かな	古杉
瓦ふくあし場の高し秋の風	桃溪	伊予	(一九オ)		花遊
打水やちからのとく処まで	石樵	塵塚や鶏に追る、昼の虫	鶯居		雪朝 (二二オ)

足跡のちからみゆるや大根ひき

白燕

武蔵

潮月

雨漏の止で木実の降夜かな

桐雨

打水の雫光るや竹の月

竹二

気をぬきに障子明れば梅に月

市月

(二三オ)

常盤木の間も照るや花七日

峰月

ちつとづ、はや勢出す柳哉

梅調

雪とちる花や簀きて筏さし

遅流

(二三オ)

雫する松におきたし夏の月

許風

麦まきや莫する間の通り雨

翫之

けさの鶏百轉りのはじめかな

得蕪

(二三オ)

明くれの世話しさおかし花ざかり

石外

川音の時雨止みけり明がらす

梅山

薜や何の時ともわかぬかね

萬古

(二三オ)

旭にそふて窓へさしけり花明り

星々

梅ちりて林の寒き月夜哉

幽阿

庭うちの寒きところに椿哉

一具

(二三オ)

静さの余りを花のくもり哉

秀芳

沖の鳥あらはにみえて春寒し

松昌

それ丈に月も長閑し梅若な

祖郷

(二三オ)

七草やなにがなくともせり薺

子邁

火をかりて跡をつくろふ蚊遣り哉

磨山

不断みぬ木に花咲て閑子どり

西馬

(二三ウ)

春の色先と、のふて山わらふ

里風

周防

七草や欲につまぬに日のくる、

春翁

来た時の雨又引て帰る雁

卓良

(二三ウ)

鴛とまでみねど番ひよ池の鳥

都盤

田ばたの瘦るほど照る紅葉かな

芳水

立わかる雲と霞や山かづら

為山

(二三ウ)

笠の紐結び直すや稲のなみ

仙至

明ほのや雉子なく山の松くろし

月丸

明る夜はいつもあれども秋のかぜ

見外

(二三ウ)

昼がほや踏れし勤も此さかり

蓼牙

梅をりに麦踏で行丁稚哉

其葉

はつ月にしばしからむや人の門

惟草

(二三ウ)

花に眼の暮て松かぜ聞えけり

野艾

雉子なくや月の光りのまだ消す

霞島

余の草も有て摘よきすみれかな

沢雉

(二三オ)

有明て井筒に澄ぬ月と梅

鳳兮

歛とれば眠りのついて畑打

花光

七草のそろひて嬉し屋敷うち

吐月

(二四オ)

静さを尽して出たり春の月

常積

川土手に遊ぶ子どもや土筆

露光

掃よせし落葉に照や朝の月

良賞

(二四オ)

はや起て初雪ちらすすゝめ哉

九五

母一人養父入ひとり青豊

閑雲

適にきく黄鳥寒き山家かな

几曇

(二四オ)

水上は寒いほどなる若葉かな

大夢

森ははや青み切たにかゝり風

祥風

黄鳥や薪つみかへる窓の先

友甫

(二四オ)

眠たさに出て起しけり百合の花

雪杖

石見

みる眼みな紅葉となりぬ廻り道

青池

輪かざりや釘さへ有ばかけておく

かつみ

(二四ウ)

花の上はなれて月の光かな

素坡

昼までは松のみ見えて初桜

其風

去年の弥生、祖翁の神霊を勧請して

立志

(二四ウ)

籠提た人の往来や野の雲雀

一朝

月の出て手間どる松のけしき哉

花芳

薄らげば松となりけり野の霞

兎木

(二四ウ)

磯なみの絶て音なし五月雨

壺中

腹のへるやうな音する雪解哉

六水

門させばなほきこえけり萩の声

熊月

(二四ウ)

有丈の羽をひろげたり雀の子

出羽

柳から吹出すかぜや魚の飛

重山

星一つ飛ぬ夜明や花明り

芝丸

(二四ウ)

着たてから鱈によごす袷哉

蓬陽

出雲

ひつそりと月の出入や夏木立

秀然

朝寒やありくのこる山の月

柳下

(二四ウ)

尾張

雪にふす竹にかげさす初日かな

安夜女

花に入日のちらくとしたりけり

梅下

(二四ウ)

着たてから鱈によごす袷哉

蓬陽

因幡

日に三度おなじもの喰時雨哉

南嶺

花に入日のちらくとしたりけり

梅下

(二四ウ)

着たてから鱈によごす袷哉

蓬陽

辻堂にめぐるながれや杜若

伊勢

而后

暮かけて一明りするさくら哉

圭良

丹波

老ぬれど日半おくれずころもがへ

其通

造さくのとゝかぬ家や青すだれ

梅笠

御降や耳にとまれば晴てゐる

聴洋

落やみも咲やみもせぬ椿哉

湖静

更かねる夜を急ぎけり月の雲

、

釣瓶縄ふればそよぐや花すみれ

吟雪

かねの音もきくやほんのり花明り

松月

かへるかど啼ばおもふや春の雁

山友

黄鳥のさびしうしたり花の中

桃雨

眼一ぱい雪の山みて初子日

植眉

ちと内が透て出たればおそぎくら

齋花

明て行雲の真下や風の澄

青水

八月に成すましけり小ぬか雨

慶武

近江

神路山にて

笠みゆるばかりの出来や田草とり

植波

しんくとしてたり桜の底光り

鴉雛

つくろふたやう子もなくて初鳥

夜舒

籠に居た蜚よわらず飛でゆく

一忠

隈なくてとめ処なし月の舟

梅室

窓明りして間の有はつ日哉

雅笑

折た枝花見もどりの明りかな

巨松

穂にも出ずに風をれの声

九起

舟流す棹のゆるみやほとぎす

梅居

花に寝て木枕いたき山家哉

乙良

亭ざしき秋より先は戸をしめて

甘水

降ぬ日も雨にとなへし五月かな

花川

馬もたぬ里や木草の茂る土手

砺山

古きひき茶を点てもてなす

甘水

東雲や霞止行浪がしら

送夢

蚊の声に歎から落る雫かな

凹峰

股立の腰に結えし吹矢鳥

起

人ひとり立けり窓のおぼる月

萩里

雪空や声かる、まで啼雀

蟻友

木葉ひとつもおかぬ岩はな

水

かきよせて陽炎消る松葉かな

鬼外

摂津

若狭

はんなりと紐の染りや春の風

松笠

罪のなき鴉の声や花ざかり

九起

常盤木はまだくろまぬにはつ桜

柏石

散花をつ、む運びか山の雲

其山

明しらみからしれる永日

甘水

驚てよけ行魚や花の影

杏園

花のかけさして玉ちる筏かな

林曹

どの宿もわらび畑葉の立出にて

梅室

明月にまけてきえけり持仏の灯

楓橋

付て来て袖ひく鹿や朝桜

鼎左

水みて居れば皆がはなひる

起

宿はまだとらねど花のあらし山

微箭

歎遣ふ一人長閑し山の腹

松隣

登る月しげき笹葉をもる光り

水

稲妻や落る木葉の裏がへる

寄休

五月雨やしばらくづ、のかせぎ雲

藤涯

弓のかけして音を啼ぬ鹿

室

黄鳥にこゝろ澄すや川手水

竹晴

播磨

大和

白露や更にし色のこゝろもち

北窠

十六夜のかげや枕をしながら

室

黄鳥もはなし飼なり別ざしき

風阿

呼に往たやうに人来る桜かな

古谷

竹椽や足の下から風かをる

柏葉

二三尺雀もそふてあげ雲雀

鳥谷

遠のけば風のみえけり青柳

北梅

心して鐘もつくなり花供養

半叟

若水や是をはじめの皇国ぶり

碩水

月に露夜も嬉しいか飛蟲

甘水

椽先に長う有る也梅の花

幾女

二三日丸寝つゝけてはつ裕

抱儀

歎とんと打や向ふに揚雲雀

拾翠

ゆく年や家鴨は常の戻りぶり

北峯

七草や起ねばならぬおと拍子

可大

うき草も花支度あり杜若

知骨

沢瀉やつかれし鶯の背遣ひ

備中

昼ならば斯は立れず橋涼み

桃五

伐るけしを吹てみにけり口の風

愿泉

(二八ウ)

松塙

雨ぐされ蒼にもある木槿かな

帷子のほひ朝夕かはりけり

露ふかし秋は夜から来初るか

明きらぬ空から下る雲雀哉

夜みゆる山もかくれて花ぐもり

おし水におされた垣や蝸牛

声さゆる黄鳥来たり暮ざかひ

一在所うしろに置いて柳かな

照をしむ日のあしらひや花の空

はたけまで京は美し桃の花

道はかのゆかぬや蝶のちら付て

塵とりに注連もかけたし三ヶ日

掃先へ逃ては蝶の眠りけり

沖は帆のはたらきぬるし夕霞

詠め居た樹をすかさされて時鳥

何気なう掃た垣ねや露のたう

つぎたして左右もみるや花のおく

降雨もけしき添ふたる紅葉かな

傘も立ておく花の留主居哉

一人出て一人は入やかど涼み

鈴虫をはなして置ぬ池の鳥

風もなく花散初るゆふべかな

夕がらす華表に一つ時雨けり

眼草臥するや春日のよしの山

初がらすなくや明るき東うけ

野仏に背中のぬくし咲つゝじ

五月雨や小休みらしき夜の晴間

入し日のさめぬ明りやはるの海

少哉

著石

古曆

東帰

乙也

野鶴

茶岡

石堂

五風

柳江

春鷗

梅舎

半山

老波

慈弓

麗水

来青

道祐

始風

松雨

伍員

若雅

尺木

岱美

百仙

重泰

梅室

成祇

朝風に空をさだめて初ざくら

青梅に匂ひのあれや五月やみ

西にみる時は冷るや盆の月

日のさずにゆるみのみえず山の雪

黄鳥や昼も気の澄む加茂の山

着心を人にうつすやはつ裕

尻すゑて我ものがほや山の花

青空や露のすぐれし朝の花

駕立て伐てもらひし桔梗かな

雲がくれするよしもなし星の恋

油断せぬかほで出て来る袷哉

盃に座なみ崩るゝさくら哉

はつ鶏や削りそへたる花がつを

青空や何処から吹てかをる風

わたぬいて貰ふや直に着て戻る

松風の車古うなる時雨かな

青梅や袂に入て山こゆる

初花の一木で足るや江のおもて

稲妻に前打合すはし居哉

風の日をこぼるゝ花の光りかな

啼立て風にちりけり行々子

散ば咲さかり久しやけしばたけ

ちる花に行灯廻すや客のあと

稲妻のおしつけもせず草の丈

朝早う起て昼寝や花ぐもり

花のなき寺にとまりし寒かな

掃ぞめや雪の飛石あらはるゝ

咲た時をしまれておけ山桜

船へゆく雪踏の音や明のはる

よみさしの手紙もて来て夕すゞみ

里馨

、

、

、

芝由

、

撫葉

貞我

樗山

此外

蒼雪

委水

枝月

東樹

秀何

杜鷲

岱年

有節

梅通

草陽

芳英

黙池

乙雅

淡節

月坡

杜蓼

也然

石外

閑令

勝錦

一人来て喰もの眼だつはな見哉

さみだれや秣の下のふた葉草

清水がわけば鏡とりおく

丘こゆるついでく石炭ほりて

猿とあひあふ簀の小さき

暮の月野分をよける陰もなく

庭にきぬたをのぞむわび人

みそついたにほひ残りて秋暑し

曆をあてにおもひたつ市

小笠くむ娘も恋をしならふて

反古のやうな文のとり遣り

窓すこし明れば一間白雪吹

猫と世をさる嵯峨の空院

畑までよそほひたてる山つゞき

ながれどまりのあさ沢の月

虫送る祢宜のえぼしの鳥に似て

敷た孤着て雨凌ぐなり

すき腹に冥加過たる花だんご

お茶屋掃除もはるは毎日

実生せし木も常盤なる卯月哉

はたけやしなふ夏向の雨

ちか道を来かゝる人に手をふりて

市へひくやら皆はだか馬

有明に露の塵はく門もなし

稲に追れて袷まだ着ぬ

はつものゝかた身はほしき江鮭

余所のまつりに休む鍛人まち

つれ合の子をめづらう膝の上

九起

雪杖

九起

梅室

月坡

起

杖

起

室

起

杖

起

室

起

杖

起

坡

室

杖

起

淡節

始風

九起

節

起

風

起

節

起

風

たちまちのぼすさら湯断る  
履なれた草鞋大事に椽のすみ  
かゆにもたらぬ冬の托鉢  
椎の木に五日六日の月さえて  
あぶら灸もさせぬ鞍ずれ  
勘定にかみ入のぞく小出し金  
御堂を拝む嗽するなり  
眠たさも花に忘るゝ朝ごゝろ  
野にはや遊ぶ内の玄鳥

起 風 節 起 風 節 起 風 節

(三八オ)

(三八ウ)

京東洞院仏光寺上ル  
御摺物細工所  
菊屋平兵衛

(裏表紙見返し)

(裏表紙)

## 九起の時代 俳号索引

### 凡例

- 一 本索引は、本冊に収める作者を俳号から検索するものである。なお、刊記の人名はとらない。
- 一 俳号は音読みを原則とし、漢音を優先する。ただし、習慣によったものがある。
  - かな、変体仮名を含むもの、「磨」を含むものは訓読みとする。また、次のものは特に習慣によって読む。
  - 阿鳥（あとり） 五八九（ごはく） 千船（ちふね） 十代丸（とよまる） 中彦（なかひこ） 茂権（もついで）
  - 米友（よねとも） 代々丸（よよまる）
- 一 音訓のどちらか一方しかない字、国字については、それに従う。
- 一 配列は五十音順、現代仮名遣いによる。
- 一 別号、別表記のあるものは、代表する表記に加えて（ ）にも記し、傍線等を付し、所在に対応する。なお、別号は捨て見出しを付けるが、別号のみで出句しない場合は捨て見出しを付けない。
  - なお、次のような俳号併記の場合は、二重傍線で示す。
  - ・拉鬼改一簣 ↓ 天十四85ウ
- 一 俳号等の「坊」「女」「亭」「齋」は省くことがある。
- 一 同一人の所の相違は、傍線等で区別し、所在に対応する。
- 一 本文にある肩書、所書きは可能な限り「 」に記す。旧国名を付すが、山城は「京」「南山城」、武蔵は「江戸」「武蔵」、摂津は「摂津」「浪花」、陸奥は「松前」「箱館」を含み、肥後は「天草」を含み、阿波は「阿淡」を含むものとする。また、「行脚」「遊客」などのみで住所未詳の場合は、所を記さない。
- 一 天保十二・十三年の「加治木」は「薩摩」とするが、本稿では大隅に入れた。
- 一 連句における重複分は取らない。その他、同頁に複数ある場合も、同様とする。
- 一 「作者不知」「執筆」は取らない。
- 一 俳号の所在は、次のように略記する。なお、同一年に複数の出所がある場合は、二つ目以降の年を省いて列記する。また、丁数を併記したものについては、実数丁による。
  - 天保十二年序文表 ↓ 保十二序オ
  - 弘化元年二丁裏 ↓ 弘一2ウ
  - 嘉永元・二年二〇丁表 ↓ 嘉一20オ

あ

愛象〔阿波徳島〕 天十四74ウ  
愛像〔愛象〕〔信濃〕 天十二40才  
天十三30ウ

阿菊〔播磨今市〕 天十四85才

あき帆〔秋帆〕〔越後水原〕 天十四34ウ

35才 天十三30才

蛙水〔山城洛〕 天十二54ウ

蛙吹〔肥前唐津〕 弘二60ウ

蛙声〔豊前〕 嘉一31ウ

蛙跡〔伊勢〕 天十二50才

蛙夕〔播磨龍野〕 天十四86ウ

蛙亭〔陸奥〕 天十三24ウ

阿鳥↓吾白/五八九

庵女〔摂津〕 弘四43才 嘉一57才

安夜女〔出雲〕 嘉三23才

い

惟一〔三河岡崎〕 弘二33ウ

以一〔豊後日田〕 弘二43才 弘三61才

以逸〔越後〕 弘四34才

夷菊〔陸奥二本松〕 天十二4ウ

天十三24ウ 天十四23ウ

渭橋〔出羽秋田〕 天十三27才

幾女〔備前〕 嘉一22才 嘉三30ウ

為蛙〔下総押崎〕 天十三24才

為言〔佐渡〕 嘉一15ウ

矣哉〔大隅加治木〕 弘一18才 弘二48ウ

弘三47才 弘四18ウ 嘉一51才

為三良〔大和鷲家口 少年〕 弘二45才

為山〔武蔵江戸〕 弘一24才 弘二6才

弘三50ウ 弘四31ウ 嘉一6才

嘉三24才

為山〔陸奥松前〕 嘉一12ウ

依山〔越中〕 弘三23ウ

夷舟〔筑前福岡〕 天十四57才

委水〔山城洛〕 弘二64才 嘉一4ウ

64ウ 嘉三2才 35才

意翠〔肥後川尻〕 弘二61ウ

異声〔豊後芝崎〕 弘一17ウ

維扇〔山城〕 天十四2才

惟草〔武蔵江戸〕 天十二25ウ

天十三22才 天十四4ウ 12才

弘一23才 嘉三24才

惟草〔能登〕 天十四30才

夷則〔武蔵江戸〕 弘二6才 嘉一7才

一雨〔越後〕 弘三25ウ

一英〔武蔵石原〕 天十四92才

一花〔山城洛〕 弘一47ウ 弘二64才

一花〔越後〕 弘四33ウ

一雅〔山城〕 天十二48ウ

一雅〔紀伊〕 天十三11ウ

一雅〔陸奥津軽〕 天十四26ウ

一牛〔佐渡〕 弘三27才

一具〔武蔵江戸〕 天十二24ウ

天十三22ウ 天十四21才 弘一22ウ

弘二5才 弘三50才 弘四31ウ

嘉一6才 12ウ 嘉三23ウ

一丈〔豊後日田〕 天十二18才

天十三62ウ 弘一16才 弘三39才

一人〔豊後〕 嘉一33ウ 嘉三14才

一洞〔備前〕 弘三5ウ

一蕪〔但馬荒川〕 弘二17才

一甫〔陸奥箱館〕 弘一28ウ

一眠〔筑後〕 嘉三12ウ

一毛〔越後長岡〕 弘一8ウ 弘二22才

以中〔陸奥津軽〕 天十四26ウ

一幽〔伊勢津〕 弘二32才 弘三11ウ

一葉〔豊後日田〕 天十二18ウ

天十三62ウ 天十四46ウ 弘二43才

弘三60才

一葉〔丹波園部〕 天十三34才

天十四55才

一葉〔陸奥松前〕 弘四13ウ

一養〔出羽〕 弘四32ウ 嘉一14才

一楽〔因幡〕 弘三32才

一六〔山城洛〕 天十二57ウ

一流〔薩摩都城〕 天十四39才 弘二69才

逸測〔武蔵江戸〕 天十二25才

天十三21才 天十四12才 弘二6才

弘三49ウ 嘉一6才

一化〔近江〕 天十二48才 天十三57ウ

乙雅〔山城洛〕 天十四5ウ 17ウ

弘二1ウ 62才 弘三2才 64ウ

67ウ 弘四1ウ 54才 62才

嘉一1才 3才 65才 嘉三2才

35ウ

乙雅〔出雲松江〕 弘一36才

一寛〔近江〕 嘉一58ウ

逸寄〔武蔵熊谷〕 天十四91才

一器〔筑前〕 弘三34ウ 弘四17才

一亀〔佐渡〕 弘三27ウ

一箕〔拉鬼〕〔播磨赤穂〕 天十四85ウ

弘二36才 弘三5才 弘四26才

嘉一20ウ

一久〔武蔵久下〕 天十四91才

一居〔近江八幡〕 天十三55ウ

天十四93才

一居〔遊歴〕 嘉一62才

一橋〔但馬村岡〕 弘一34才 弘二16ウ

弘三29ウ 弘四40才

一旭〔摂津浪花〕 天十三51ウ

一旭〔陸奥松前〕 弘二8ウ 弘三56才

弘四9ウ 12才 嘉一12才 12ウ

嘉三16才

一兄〔越前敦賀〕 天十三27才 弘二38才

一恵〔肥前平戸〕 弘二28才 弘三41ウ

弘四36ウ 嘉一42ウ

一敬〔紀伊湯浅〕 弘二44ウ

一桂〔上野〕 嘉一9才

一溪〔伊勢〕 弘三12才

一溪〔佐渡〕 弘三27才 嘉一15才

一虎〔伊勢関〕 天十二43才

一好〔武蔵小園〕 天十三59才

逸江〔越中高丘〕 弘二21ウ 弘三23ウ

弘四27ウ 嘉一18ウ

一吼〔筑前〕 嘉三13ウ

乙国〔筑前博多〕 弘二60才 嘉一35ウ  
 嘉三1ウ 13ウ  
 一簀〔陸奥〕 弘三52才  
 一紫〔近江〕 天十三56才  
 一止〔陸奥仙台〕 弘一27ウ 弘二11才  
 弘三53才 54才 嘉一11才  
 一枝〔陸奥〕 弘三51ウ  
 一芝〔豊後〕 嘉一34ウ  
 一之〔豊後〕 嘉一33ウ  
 一守〔近江〕 弘三15才 弘四68ウ  
 嘉一59才  
 一秀〔武蔵久下〕 天十四91才  
 逸舟〔陸奥舟岡〕 天十四24ウ  
 一嘯〔近江日野〕 天十三57才  
 天十四95才 弘一32ウ  
 一樵〔但馬栗山〕 弘二16ウ 弘三30才  
 一松〔尾張高井〕 弘一31才 弘二33才  
 弘三48ウ  
 一松〔肥後〕 嘉一50ウ  
 一勝〔大和鷲家口〕 弘二45ウ  
 乙人〔出雲〕 天十二53才 天十三16才  
 一翠〔筑前福岡〕 天十二44才  
 天十三10才 天十四58ウ  
 一翠〔山城普賢寺〕 天十四98才  
 弘一43才  
 一睡〔伊勢〕 弘三12ウ  
 一水〔淡路〕 嘉一29才  
 一雛〔播磨〕 弘四25才  
 一清〔尾張名古屋〕 天十三33才  
 天十四90才 弘一30ウ 弘二32ウ

弘三48才 嘉一59ウ  
 一成〔下総〕 天十三24才  
 一成〔越前府中〕 天十四100才 弘一9ウ  
 乙声〔近江〕 天十三55ウ  
 乙成〔筑前〕 弘三35才  
 一仙〔陸奥郡山〕 天十二4才  
 天十三25ウ 天十四26才 弘一27才  
 弘二11才 弘三51才 53才 55ウ  
 一仙〔安芸〕 嘉一24才  
 一川〔能登〕 弘四30ウ 嘉一60才  
 嘉三26才  
 一扇〔周防〕 嘉一26才  
 一且〔陸奥〕 嘉一10才  
 一草〔日向高岡〕 天十四40才 弘四35ウ  
 一草〔筑後〕 嘉一39才  
 一双〔越後亀田〕 弘二24才  
 一筑〔筑前〕 弘四17ウ  
 一村〔豊後〕 天十二18才  
 一堆〔日向釈〕 天十二16ウ  
 天十三61才  
 一岱〔加賀〕 弘三19ウ 弘四52才  
 一卓〔薩摩都城〕 天十四38ウ 弘二29才  
 嘉三4才  
 一掉〔肥後〕 弘四4ウ 6ウ 嘉三7才  
 一旦〔陸奥二本松〕 天十三24ウ  
 天十四44才 弘二11ウ 弘三51才  
 52才  
 一忠〔近江〕 嘉三27ウ  
 一猪〔相模十日市〕 天十四37ウ  
 一朝〔越前〕 嘉三26ウ

一蝶〔近江〕 弘三15才  
 一亭〔備中笠岡〕 弘一38才  
 一庭〔日向〕 弘三45ウ  
 一得〔陸奥仙台大河原〕 天十四24ウ  
 一得〔薩摩都城〕 弘二69才 弘三47ウ  
 一入〔陸奥松前〕 弘四12才  
 逸百〔山城八幡〕 弘一57ウ  
 一拍子↓青蝦  
 一帆〔陸奥松前〕 弘一28才 弘二8ウ  
 弘三56才 弘四8ウ 9ウ  
 嘉一11ウ 嘉三16才  
 一帆〔山城淀〕 弘一43才  
 乙美〔田中〕〔伯耆今津女〕 天十三37才  
 天十四74ウ 弘一35才 弘二序1ウ  
 26才 弘三33才 嘉一29ウ  
 一瓢〔備中〕 天十二15才  
 一瓢〔若狭〕 天十三27ウ  
 一瓢〔備前岡山〕 天十四83才  
 一瓢〔筑前〕 弘四17ウ  
 一斧〔山城洛〕 天十四4ウ 99才  
 弘一47才 弘三1ウ 64才  
 一早〔薩摩都ノ城〕 弘一15ウ  
 一布〔豊前長州人在小倉〕 嘉一32ウ  
 一風〔日向〕 天十三60ウ  
 一風〔薩摩都城〕 天十四38ウ 弘二69才  
 一兵〔陸奥松前〕 弘四13ウ  
 一步〔筑前博多〕 天十四59ウ 63ウ  
 一鳳〔播磨〕 天十二7才  
 一方〔山城〕 天十二49才  
 一峰〔筑前〕 天十二28才

一峰〔日向飢肥〕 弘二15ウ 弘三45才  
 弘四36才 嘉一53ウ  
 一峰〔豊後日田〕 弘二43才 弘三61才  
 嘉一33ウ 嘉三14ウ  
 一芳〔加賀〕 弘三18才  
 一宝〔近江〕 嘉一59才  
 乙丸〔撰津〕 天十三52ウ  
 乙也〔近江大津ノ遊歴〕 弘二3ウ  
 31ウ 嘉一62才 嘉三32ウ  
 乙雄〔武蔵東都〕 天十三21ウ  
 乙雄〔越中魚津〕 弘一5ウ 弘二21ウ  
 逸柳〔上野〕 嘉一9才  
 乙良〔越後水原〕 天十二36才  
 天十三30才 天十四14ウ 34ウ  
 弘一8ウ 弘二68ウ 弘三26ウ  
 弘四34才  
 乙良〔陸奥〕 弘三54ウ  
 乙良〔近江〕 嘉三2ウ 27ウ  
 稻磨〔播磨日延〕 天十四87才  
 夷白〔丹後宮津〕 天十三35才  
 天十四55ウ  
 為風〔播磨曾根〕 天十三15才  
 天十四86ウ 弘一38ウ  
 偉文〔越後〕 嘉一17ウ  
 いよ女〔武蔵久下〕 天十四91才  
 いはほ〔近江彦根〕 天十三58才

う

宇逸〔筑前福岡〕 天十二28才

天十三53才 天十四2才 13ウ

58才 弘一20才 弘二36ウ

弘三34才 弘四16ウ 嘉一35才

嘉三13ウ

烏乙〔近江伊庭〕 天十三55ウ

宇曉〔肥後天草〕 嘉一47才 嘉三10才

雨玉〔肥後〕 嘉一45ウ

雨琴〔筑前飯塚〕 天十四58ウ

雨月〔筑前福岡〕 天十二28才

天十四57才

雨香〔阿波徳島〕 天十三3才 13ウ

天十四8才 51才 100才

雨江〔山城洛〕 弘一46ウ 弘二64ウ

弘三64ウ

雨篁〔尾張名古屋〕 天十四90才

宇甲〔筑前福岡〕 天十二44才

天十三10才 天十四58ウ

宇弘〔越後見付〕 天十四36才

烏岬〔伊予松山〕 弘二41ウ 弘三10才

烏岬〔山城洛〕 嘉一3ウ 66才

雨哭〔筑前福岡〕 天十四58ウ

鵜石〔肥後二ノ丸〕 弘二13才 弘三42ウ

67才

羽石〔大和鷲家口〕 弘二45ウ

烏谷〔武蔵東都客中〕 天十三23才

烏谷〔山城洛〕 天十四100才 弘一3才

43ウ

烏谷〔遊歴〕 嘉三32才

雨谷〔山城〕 弘三1ウ 64ウ

潮〔豊前〕 天十三7才

烏秋〔薩摩都城〕 天十四38ウ 嘉三4ウ

雨笑〔筑前〕 天十二44才 天十三10才

羽人〔出羽〕 天十三26ウ

羽人〔丹波水上牛河内黒井〕 天十四55才

弘一34才 弘二18ウ 弘三28才

羽人〔陸奥〕 弘三54ウ

雨翠〔山城洛〕 天十二2才 58ウ

天十三1ウ 67才 天十四1才

16ウ 弘一1ウ 43ウ 弘二1ウ

62才 弘四2才 55才 嘉一4ウ

65ウ

禹水〔肥前〕 天十二27才

雨声〔陸奥箱館〕 弘一28ウ

宇夕〔阿波〕 弘三8才

雨夕〔尾張〕 弘三48才

烏雪〔肥後隈本〕 弘一13ウ

雨洗〔石見矢上〕 弘一22ウ

羽扇〔肥前〕 嘉三10ウ

葎川〔筑後久留米〕 弘二37才

雨竹〔但馬和田〕 天十二51ウ

天十三35ウ 天十四55ウ

宇兆〔日向赤江川〕 天十三60ウ

弘二16才

烏丁〔伊予〕 弘三9ウ 弘四20ウ  
嘉一27才 嘉三19ウ

烏都雄〔近江〕 天十四4才 10才

禹鼎〔上野碓氷〕 弘二8才 弘三57ウ

宇桃〔越後〕 天十三29才

烏島〔能登鶴飼〕 天十二38才

天十三38ウ 弘一6才 弘三21ウ

雨桃〔加賀〕 弘四51ウ

塙梅〔筑後〕 嘉三13才

有木〔越後新潟〕 天十二35ウ

天十三29才 天十四36才 弘一8才

弘二22ウ 弘三25ウ

烏明〔越前府中〕 弘一9ウ

有明雄〔越中滑川〕 天十四33才

弘二59才

雨遊〔肥後隈本〕 弘一13才

宇翼〔紀伊〕 天十二39ウ

宇翼〔武蔵東都客中〕 天十三23才

烏卵〔山城洛〕 天十二57ウ

宇栗〔宇栗〕〔伊勢四疋田〕 天十二9才

天十三31才 天十四13ウ

雨律〔摂津堺府〕 嘉一57ウ

雨笠〔肥前大村〕 天十三60才

天十四66ウ 70才 弘一10ウ

雨柳〔肥前〕 天十二27ウ

雨柳↓如笑

雨凌〔筑後〕 天十二9ウ

羽林〔備中笠岡〕 天十四78ウ

蘊海〔周防〕 天十三17ウ

雲厓〔出雲大社〕 天十四88才 弘二27才

弘三34才  
雲崖〔周防〕 嘉一26才

雲涯〔出羽〕 弘四32ウ

雲岳〔伊予〕 天十三60才

雲休〔出雲〕 天十三36才

雲休〔但馬〕 弘三31才

雲月〔豊後日田〕 天十二18ウ 弘一16ウ

雲月〔越後〕 嘉一16ウ

耘乾〔雲軒〕〔近江八幡〕 天十二47ウ

天十四93才

運女〔陸奥南部山〕 天十四28ウ

弘三52ウ

雲樵〔播磨美囊〕 天十二7才

天十四85才

雲深〔伊勢関〕 弘一30ウ

雲僊〔伊勢関〕 弘二32才

雲帶〔丹波亀山〕 天十三33ウ

天十四2才 13才 54才 弘四41才

嘉一30ウ

雲対〔近江〕 天十三55ウ

雲岱〔周防〕 嘉一26才

運汀〔近江〕 天十二47才

雲汀〔日向高岡〕 天十四40ウ 弘三44ウ

弘四35ウ

雲萍〔山城洛〕 天十四6才 18ウ

弘一2ウ 45ウ 弘二3才 63才

弘三64才 嘉一5才 66ウ

雲峰〔肥前平戸〕 天十四69才

雲峰〔淡路〕 嘉一28ウ

雲峰〔日向〕 嘉一53ウ

雲北〔近江〕 嘉一58ウ  
雲路〔近江〕 天十二40才

え

盈科〔越中高丘〕 弘二21才  
 英峨〔越前府中〕 天十四89才 弘一9ウ  
 弘三16ウ  
 栄梅〔但馬〕 弘四40ウ  
 永久〔武蔵〕 天十三21才  
 英居〔撰津浪花〕 天十二46才  
 天十三51才  
 英月〔紀伊若山〕 弘二44才  
 永壺〔武蔵〕 弘三50ウ  
 嬰斎〔遠江〕 天十三32才  
 嬰斎〔齊〕〔山城洛〕 弘四2才 54ウ  
 64ウ  
 詠之〔出羽〕 弘四32ウ  
 映水〔播磨龍野〕 天十四86才  
 英雪〔山城〕 天十四18才  
 英泉〔陸奥杉田〕 天十二4才  
 天十三24ウ 天十四15才 24才  
 弘一27才 弘二11ウ 弘三51才  
 53ウ 弘四24ウ 嘉一10才  
 嘉三18才  
 曳尾〔越後糸魚川〕 天十二35ウ  
 天十四34才 弘一9才 弘二23才  
 英父丸〔武蔵江戸〕 天十二25ウ  
 天十三21ウ 天十四12才 弘二5才  
 英父〔信濃〕 嘉一4才 20才  
 英布〔筑後〕 天十三16ウ  
 映門〔伊予小松〕 天十二39才

天十三39才 天十四8ウ 11ウ  
 73才 弘一39ウ 弘二41才  
 弘三9才 弘四19ウ  
 易遊〔肥後〕 弘四6ウ  
 越月〔肥後二ノ丸〕 弘一15才  
 越彦〔越後〕 弘四34才 嘉一17ウ  
 越雪〔越後〕 嘉三18才  
 越鳥〔武蔵〕 弘一25才  
 垣外〔筑前〕 弘三35才 弘四17ウ  
 猿子〔備前岡山〕 天十四81ウ  
 筵史〔安芸〕 天十三12才  
 円二〔長門〕 天十三5ウ 天十四72ウ  
 弘一36ウ  
 延寿〔陸奥箱館〕 弘二28ウ  
 測水〔陸奥〕 嘉一10ウ  
 困鳥〔伊勢〕 天十三62才  
 延年〔山城洛〕 弘二47才  
 円方〔豊後〕 弘三40才  
 塩屋〔讃岐安戸〕 天十四74才

お

鶯阿〔陸奥〕 弘二10ウ  
 応化〔越後北山〕 弘二23才 弘三26ウ  
 弘四34ウ  
 往我〔筑前福岡〕 天十二28才  
 天十四56ウ  
 鶯居〔伊予〕 天十三39ウ  
 嘉三19ウ  
 王居〔出雲平田〕 弘二27才

鶯琴〔山城洛〕 弘三65才 弘四2ウ  
 56ウ 70ウ  
 鶯呼〔加賀津幡〕 弘一8才 弘二39才  
 鶯語〔山城淀／伏見〕 天十二48ウ  
 天十三54ウ 天十四2ウ 98ウ  
 弘一2ウ 43才 弘三62才  
 桜哉〔撰津浪花〕 天十四97才  
 鶯士〔肥後二ノ丸〕 弘一15ウ 弘二13ウ  
 鶯晨〔豊前森山〕 弘二42才  
 応泉〔越後亀田〕 天十二36才  
 天十三28ウ 天十四33才 弘一8才  
 弘二24才 弘三26ウ 55才  
 弘四34才 嘉一15ウ  
 鶯前〔因幡〕 弘三32ウ  
 鷗池〔淡路島〕 天十二29才 天十三3ウ  
 14才 天十四75ウ 弘四18才  
 応知〔尾張名古屋〕 天十四90才  
 鶯朝〔筑後〕 天十三16ウ  
 凹峰〔近江多賀〕 天十四93才 弘一32ウ  
 弘二30ウ 弘三13ウ 弘四42才  
 嘉三序2ウ 27ウ  
 鷗夢〔肥前〕 天十二26ウ  
 天十四68ウ 嘉一43ウ  
 応門〔薩摩鹿兒島〕 天十三5ウ  
 天十四39才  
 奥野〔越後葛塚〕 弘一41ウ 弘二22ウ  
 弘三25ウ 弘四53才  
 桜里〔因幡〕 弘三32才  
 大戸磨〔日向本庄〕 弘二16才  
 鬼丸〔山城洛〕 天十二56ウ

か

温然〔越中〕 弘四27ウ  
 海庵〔讃岐丸亀〕 天十四74才  
 皆一 嘉三3才  
 海外〔近江〕 天十四10ウ  
 皆好〔越後高田〕 弘二22ウ  
 海市〔相模鎌倉〕 天十二36ウ  
 懐之〔陸奥〕 天十三26才  
 荷乙〔肥前〕 弘四50ウ 嘉一43ウ  
 回風〔淡路〕 天十二28ウ  
 魁甫〔信濃鶯巢〕 天十四37ウ 弘一30才  
 弘三56ウ  
 外面〔若狭〕 弘三15ウ  
 桧笠↓鳥吟  
 かうち〔山城洛〕 天十二32ウ 41ウ  
 58ウ 天十三3才 68才  
 天十四99ウ  
 花栄↓五葉  
 霞筵〔山城〕 天十三68才  
 可燕〔出雲〕 天十三16才  
 霞遠〔豊後日田〕 弘二43ウ  
 花翁〔備前八浜〕 弘二25才  
 臥鷗〔伊予柏〕 天十三60才 弘二41ウ  
 弘三10才  
 霞外〔筑前〕 天十三64才  
 霞外〔撰津浪花〕 天十四96ウ  
 荷岳〔紀伊〕 天十二48ウ 天十三11ウ

か、し〔遠江金指〕 天十二43才

天十三32才 天十四15ウ 38才

雅居〔加賀〕 弘三20ウ 弘四51才

霞眺〔能登〕 天十三38才

我竟〔尾張〕 天十二51才

瓦鏡〔陸奥〕 嘉三17才

雅琴〔伊勢〕 弘三11ウ 弘四41ウ

嘉一58才

瓦金〔筑前博多〕 弘二60才

岳陰〔武蔵〕 嘉一6ウ

鶴居〔安芸広島〕 天十四76才

鶴芝〔肥前〕 嘉一41ウ

鶴之〔肥後〕 嘉三7ウ

角二〔筑前博多〕 天十四58才 64才

64ウ 弘一57才 嘉一35ウ

嘉三13ウ

鶴二〔出羽〕 嘉一14ウ

学時〔播磨〕 天十二7才

鶴渚〔周防〕 嘉一25才

鶴渚〔伊勢〕 嘉一58才

鶴寸 天十四4才

鶴石〔伊勢〕 天十二8ウ

鶴扇〔肥後〕 弘四38才

鶴叟〔尾張〕 弘三1ウ 48才

鶴頂〔淡路〕 天十二29才

鶴尾〔肥後隈本〕 弘一13ウ

鶴眉〔播磨今市〕 弘二35ウ

鶴歩〔豊後高田芝崎〕 天十三63ウ  
天十四46才 弘一17ウ 弘四70才

岳鳳〔山城伏見〕 天十二34ウ

天十三55才 弘一2才 43才

弘二62才 弘三3ウ 62才

弘四45ウ 嘉一67才

鶴眠〔周防〕 嘉一25才

鶴鳴〔摂津〕 弘四42ウ

鶴邑〔能登〕 天十二1ウ 38才

鶴路〔陸奥〕 嘉三17才

貉炉〔拾炉〕〔陸奥松前〕 天十四26ウ

弘二9ウ 弘四14才 嘉一13才

鶴朗〔出雲〕 天十二17ウ

佳景〔能登〕 天十二37ウ

花兄〔播磨龍野〕 天十四86才

花溪〔越後〕 天十三29才

花溪〔近江〕 天十四7才 10ウ

加計〔加賀〕 弘三18才

葭莖〔近江〕 弘三13ウ

榎月〔豊後日田〕 天十二18ウ

天十三63才 天十四46ウ 弘二43才

弘三60才 嘉一33才

荷月〔能登高島〕 弘二40ウ 弘三22才

和月〔近江日野〕 天十二50ウ

禾月〔陸奥〕 弘三54才

花月〔肥後〕 嘉三7ウ

峨月〔讃岐白鳥〕 天十四74ウ 弘二41ウ

禾軒〔淡路机浦〕 天十四75ウ

花言〔安芸〕 天十三12才

可候〔越中〕 天十三28才

可考〔加賀〕 天十三37ウ  
可考〔肥前大村〕 弘一10ウ  
花吼〔肥前平戸〕 天十四69才

可厚〔陸奥松前〕 弘二9才 弘三56才

弘四9才 10才 嘉一13才

花好〔出雲平田〕 弘二27才

花好〔能登〕 弘三22才

和好〔陸奥〕 弘四23ウ

佳交〔大和〕 弘四27才

華興〔筑前〕 弘三35ウ

花向〔豊前〕 弘三38才 弘四50才

霞岬〔讃岐〕 嘉一27ウ

花光〔周防〕 嘉三22才

禾郷〔肥前行脚〕 天十四70才

画考〔日向本庄〕 天十四40ウ

佳山〔越後〕 天十三29ウ

霞山〔陸奥〕 天十三53ウ

和十〔筑後本郷〕 天十四49才 弘一21才

弘二37ウ

何述〔備中庭瀬〕 天十四80才

可春〔越中魚津〕 天十三28才

天十四33才 弘一5才

歌春〔加賀〕 弘四52才

柯女〔備中宮内〕 天十四79ウ

花勝〔山城洛〕 天十二2才 56ウ

嘉笙〔伊勢〕 天十二8ウ

花笑〔越前〕 天十二19ウ

化昇〔土佐高知〕 天十二39才

天十三39才 弘二42才 弘三10才

嘉一26ウ

佳笑〔伊予樋口〕 天十三39ウ 弘一39ウ  
弘三9ウ 弘四20ウ 嘉一27才  
嘉三20才

可松〔近江八幡〕 天十三55ウ

天十四11才 弘一33才 48ウ

弘二30才 弘三13才

荷少〔武蔵江戸〕 弘四31ウ 嘉一7ウ

嘉三23ウ

可笑〔越前三国〕 弘一9ウ 弘二38才

弘三17才

可笑〔筑前〕 弘三34ウ 弘四17才

可嘯〔大隅加治木〕 弘一18才 弘二48ウ

弘三46ウ 嘉三6才

霞樵〔起月〕〔肥後二ノ丸〕 弘二13才

弘三43才 67才 嘉一46才

可樵〔大和下市〕 弘二46ウ 弘四26ウ

霞松〔石見〕 嘉一21ウ

霞松〔周防〕 嘉一25才

霞觴〔安芸〕 嘉一23ウ

可昇〔日向〕 嘉一53ウ

霞城〔豊後玖珠/平川〕 天十二19才

天十三40ウ 天十四45ウ 弘一17才

弘二42ウ 弘三38才 弘四43ウ

花丈〔丹後〕 弘三29才

雅笑〔但馬〕 弘三31才 弘四48才

嘉三31才

我笑〔加賀〕 弘三17才

可振〔可振〕〔周防〕 天十四50才

弘一37ウ 弘二26ウ

可申〔陸奥〕 天十三53ウ 天十四27ウ

可申〔かつみ〕〔上野碓氷〕 弘二8才  
 弘三57才 弘四69才 嘉一9才  
 嘉三24才  
 可慎〔出羽〕 弘四32才  
 花薬〔肥後 天草〕 嘉一47才  
 花水〔加賀〕 天十二34ウ  
 花水〔相模十日市〕 天十四37ウ  
 霞翠〔肥前〕 天十三7ウ  
 可推〔豊前小倉〕 天十三49ウ  
 天十四15ウ 47ウ 弘一19ウ  
 弘二42才 弘三37ウ 弘四49ウ  
 嘉一32ウ 嘉三15才  
 霞睡〔筑前〕 弘三36才  
 牙睡〔播磨龍野〕 天十三15才  
 天十四86才 弘三5才 嘉三28ウ  
 賀水〔加賀〕 弘三19才  
 鴉雛〔播磨〕 弘三5才 弘四25ウ  
 嘉一21才 嘉三29才  
 可省〔肥前〕 天十三12ウ  
 可政〔陸奥〕 弘二9才  
 可成〔艶雪〕〔筑前飯塚〕 天十四58ウ  
 可正〔陸奥 松前〕 弘二9ウ 弘四13才  
 15才  
 花静〔肥後隈本〕 弘一13ウ  
 花精〔越中高丘〕 弘二21才 弘三23ウ  
 和声〔日向本庄〕 天十三9ウ 41才  
 天十四40ウ 41才 弘二16才  
 嘉一52ウ  
 画声〔讃岐丸龜〕 天十二39ウ  
 天十三18才 天十四73ウ 弘一40才

弘二41ウ 弘三8ウ  
 歌夕〔能登〕 弘三22才  
 和石〔山城洛〕 弘三65才 弘四1ウ  
 55才  
 和夕〔越後〕 弘三25ウ 弘四34ウ  
 嘉一16ウ  
 臥石〔大和上市〕 弘二46才  
 臥石〔加賀〕 弘三18才  
 瓦跡〔筑前博多〕 弘二60才  
 可雪〔山城城南〕 天十四98ウ  
 花屑〔近江八幡〕 天十三64ウ  
 天十四93才 弘一33才  
 花雪〔尾張〕 天十三33才  
 花雪〔能登飯田〕 天十四29才  
 嘉扇〔伊予松山〕 天十二39ウ  
 天十三53才  
 霞仙〔山城洛〕 天十二59才 弘二45ウ  
 花染〔武蔵小園〕 天十三59才  
 可仙〔陸奥一ノ関〕 天十四25才  
 花仙〔山城〕 天十四1ウ  
 花仙〔伊予〕 弘三9ウ 嘉一27ウ  
 花罌〔山城〕 天十四15ウ  
 瓜仙〔安芸広島〕 天十四76ウ  
 化仙〔筑後〕 嘉三13才  
 可染〔筑前〕 弘四17才  
 花川〔加賀〕 弘三20才  
 花川〔但馬〕 弘三30ウ 弘四48才  
 嘉三31才  
 花泉〔越後〕 弘三26才  
 霞川〔筑後〕 嘉三11ウ

花然〔上野〕 嘉一9才  
 鷺川〔出雲松江〕 天十三16才 弘一36才  
 鷺川〔石見〕 嘉一22才  
 霞村〔水音室〕〔播磨今市〕 天十二5ウ  
 天十三15才 天十四序4ウ 85才  
 弘一38ウ 弘二35才 弘三5才  
 嘉一20才  
 茄村〔備前〕 天十二16才  
 花村〔豊後有田〕 天十四46ウ  
 弘一16才 弘三40才 嘉一33ウ  
 嘉三14才  
 可大〔山城洛／遊歴／摂津〕  
 天十二10才 20才 55ウ  
 天十三23才 天十四51ウ  
 弘二64ウ 弘三61ウ 嘉一57ウ  
 嘉三32ウ  
 画竹〔嵐外〕〔出雲大社〕 弘一35ウ  
 弘二26ウ 弘三33ウ 弘四43才  
 可調〔備中宮内〕 天十四79ウ  
 可調〔山城城南〕 天十四98ウ  
 花朝〔越後森下〕 天十四33ウ 弘一8才  
 弘二23才 弘三26ウ 弘四33ウ  
 嘉一17ウ  
 花兆〔周防〕 天十四50才  
 花鳥〔近江八幡〕 天十三65才  
 天十四93才  
 佳長〔阿波〕 嘉三20ウ  
 花潮〔肥前〕 嘉一41ウ  
 我蝶〔武蔵〕 天十三59才  
 可推〔豊前小倉〕 天十二19ウ

活園〔飛驒〕 嘉一19ウ  
 葛花〔大和上市〕 弘二46才 弘三59才  
 葛山〔伊予〕 天十三39ウ  
 葛山〔若狭松泉〕 弘二19ウ  
 葛覃〔石見〕 天十二54才  
 かつみ〔上野碓氷〕 嘉一9ウ  
 霞汀〔備前岡山〕 天十四83ウ  
 霞汀〔伊勢四日市〕 天十四92ウ  
 夏庭〔越前〕 弘三16ウ  
 花弟〔能登〕 天十四29ウ 弘一6ウ  
 花亭〔越中〕 弘三23才  
 霞島〔播磨〕 天十二6才  
 霞島〔周防〕 嘉三22才  
 可陶〔大和上市〕 弘二46ウ  
 榎堂〔相模十日市〕 天十四37ウ  
 霞堂〔越中放生津〕 天十四32ウ  
 弘二20才  
 禾堂〔肥前大村〕 天十三7ウ  
 天十四67ウ 弘一10才 弘四46ウ  
 可道〔加賀大聖寺〕 弘二39ウ 弘三17才  
 夏桐〔越後〕 天十三30才  
 我堂〔豊後〕 弘三60ウ  
 可得〔陸奥箱館〕 天十四27ウ  
 我独〔安芸〕 嘉一23ウ  
 霞戸女〔肥前〕 嘉一43ウ  
 可南〔肥後〕 弘四38才  
 かね女〔越中〕 天十三28才  
 兼女〔陸奥〕 弘二11才 弘三54才  
 佳年〔加賀〕 天十三37才  
 可納〔山城洛〕 天十三67ウ

天十四99才

賀白〔武蔵熊谷〕 弘一25ウ

佳瓢〔信濃〕 弘一30才

和風〔筑前福岡〕 天十四56ウ

和風〔越中〕 弘三24才

和風〔肥後〕 弘四22才 嘉一45才

花仏〔土佐〕 弘三10才

可芟〔肥前〕 天十三12ウ

荷文〔出雲大社〕 天十四88才

佳峰〔撰津／遊歴〕 弘三58才 嘉一61ウ

佳鳳〔若狭〕 弘三15ウ

花芳〔石見〕 嘉三22ウ

花舫〔石見〕 嘉一21ウ

禾木〔武蔵〕 天十二24ウ 天十三22才

花下〔豊後日田〕 天十四46ウ

榎下〔豊後日田〕 弘二15才 弘三40才

可卜〔陸奥松前〕 弘四13ウ 15才

禾明〔山城洛〕 天十二2ウ 57才

天十三2才 68ウ 70ウ

天十四3才 18ウ 弘一1ウ 45才

弘二2才 62ウ 弘三63ウ

弘四3ウ 54ウ

可明〔山城洛〕 天十三1ウ 68ウ

天十四99ウ

可明〔豊前〕 弘四49才 嘉一31ウ

嘉三15才

和鳴〔越中伏木〕 天十三28ウ

天十四7才 14才 32才 弘一5才

弘二1才 19ウ 弘三22ウ

弘四28才 28ウ

和鳴〔近江〕 天十三56才

花明〔美作〕 弘四67才

可也〔大隅〕 嘉一51才

佳友〔肥後隈本〕 天十三10ウ

天十四45才 弘一12ウ

化友〔讃岐高松〕 天十四74才 弘二41ウ

化遊〔越前府中〕 弘一3才 9ウ

佳遊〔薩摩〕 天十二5才 天十三4ウ

花友〔伊勢〕 天十二7ウ 天十三61ウ

花友〔但馬荒川〕 弘二17才 弘三30才

弘四48才

花遊〔伊勢田丸〕 天十二8才

花遊〔伯耆〕 天十三36ウ

花遊〔備前岡山〕 天十四81ウ

花遊〔出雲松江〕 天十四87ウ

花遊〔日向〕 弘三46才

花遊〔長門〕 嘉三21才

花夕〔筑前福岡〕 天十四58才

和友〔豊前〕 天十三6ウ

和友〔陸奥田名部〕 天十四27才

弘二10ウ 弘四23才 嘉一11才

和友女〔安芸広島〕 天十四77才

可由〔豊前〕 弘三37才 弘四49ウ

嘉一32才 嘉三15才

可陽〔近江豊浦〕 天十三57才

天十四93才 弘一32才 弘二30才

花雷〔出雲平田〕 弘二27才

和来〔但馬〕 弘三30才 弘四48才

可楽〔伊勢〕 天十二8才 天十三62才

和楽〔因幡〕 弘三32ウ

花六〔豊後二子〕 弘二15ウ 弘三38ウ

霞柳〔讃岐大原野〕 天十二54ウ

天十四74才

可柳〔近江〕 天十四93ウ

花隴〔伊勢関〕 弘二32才 弘三12ウ

花流〔肥前〕 天十三9ウ

化龍〔淡路〕 嘉一28ウ

何笠〔加賀〕 弘三18才

卦龍〔撰津浪花〕 弘二34ウ 弘四42ウ

和流〔大隅〕 嘉一51ウ 嘉三5才

我柳〔加賀津幡〕 弘二39才 弘三序1ウ

20ウ 弘四53才 嘉一19ウ

荷涼〔撰津浪花〕 天十四96才

荷了〔山城洛／在京／遊歴〕 弘一3ウ

46才 嘉一61才

可良〔豊前〕 嘉一31才 嘉三15才

霞林〔肥前〕 天十二26ウ

花霖〔日向〕 弘三45才 弘四36才

嘉一54才 嘉三7才

夏嶺〔肥前〕 天十二26ウ

葭洲〔阿波徳島〕 天十四51ウ

閑阿〔周防〕 天十二19ウ 天十三17ウ

幹蔭〔大和内山〕 弘二47才

閑雲〔婦岫庵〕〔周防〕 天十四序5ウ

15才 50ウ 弘一37ウ 弘二26才

弘三7ウ 弘四25才 嘉一26才

嘉三22ウ

完和〔加賀〕 天十二35才

完和〔肥前〕 天十三8才

完和〔山城洛〕 天十四100才 弘一46才

弘二2才 64才

閑牛〔紀伊湯浅〕 弘二44ウ

翫玉〔安房〕 弘四21才

芋溪〔但馬西温泉〕 天十四56才

閑月〔但馬〕 弘一34ウ 弘二17ウ

閑月〔陸奥福原〕 弘二12才

閑古〔肥前長崎〕 天十四68才

喚古〔肥前長崎社〕 弘二56ウ

弘四37才

甘古〔安芸〕 嘉一23才

閑古〔筑前〕 嘉一37才

完伍〔三河〕 弘三48ウ

寒江〔播磨龍野〕 天十四86ウ

幹口〔越中福光〕 天十四98才

閑江〔長門〕 嘉三21才

含光〔備中庭瀬〕 天十四80才

閑谷〔山城洛〕 天十二40才

菅谷〔武蔵久下〕 天十四91才

慣斎〔撰津池田〕 天十三52才

閑斎〔佐渡〕 嘉三15ウ

閑山〔筑前福岡〕 天十二28才

天十四56ウ

観之〔丹波野ノ垣〕 天十三34ウ

天十四54ウ

閑芝〔筑後〕 天十二9ウ

卷史〔日向〕 嘉三6ウ

完之〔筑前〕 弘三35ウ

完尔〔越中水橋〕 弘二21ウ 弘三24才

翫之〔長門〕 嘉三21ウ

翫二〔日向高岡〕 天十四40ウ  
完車〔武蔵池上〕 天十四91ウ 弘一24才

観松〔撰津浪花〕 天十四97才

観松〔大和奈良〕 弘二47才 弘三59才

寒松〔肥後二ノ丸〕 弘二13ウ 弘三42ウ

66ウ 弘四21ウ 嘉一44ウ

嘉三8才

芋丈〔近江町家〕 天十三55ウ

天十四44ウ 弘一33才

貫丈〔若狭〕 弘三15ウ

丸小〔近江〕 嘉一59才

甘水〔峰種〕〔播磨比延〕 天十二7才

天十三15ウ 天十四7ウ 86ウ

完穂〔出雲〕 天十二17才

館水〔陸奥郡山〕 天十四26才

関市〔大隅加治木〕 弘二48才 弘三46ウ

嘉一51ウ

巖竹〔大隅〕 嘉一51才 嘉三5ウ

寛兆〔陸奥〕 嘉三17才

翫鳥〔山城洛〕 天十二55才

天十三2ウ 18ウ 69才 弘一2ウ

44ウ

閑那〔近江高野〕 天十二22才 48ウ

寛夫〔陸奥〕 弘三52才

閑嶺〔山城〕 天十四9才 19才

寛嶺〔山城洛〕 弘一2ウ 45ウ

弘二3才 63才

閑令〔山城洛〕 弘一4才 48才

弘二64ウ 弘三3ウ 66才

弘四4才 56ウ 嘉一5ウ 67ウ  
嘉三36才

き

几一〔肥前平戸〕 弘一11才 弘二28才

弘三41ウ 弘四36ウ 嘉一42ウ

嘉三11才

宜雨〔越後糸魚川〕 天十四34才

帰雲〔肥前平戸〕 弘二28才 弘三41ウ

弘四36ウ 嘉一42才

其栄〔肥前大村〕 弘一11才

喜永〔筑後本郷〕 天十四49才

帰詠〔筑後〕 天十二52才

亀測〔越前〕 天十四15才

淇園〔周防〕 天十四50ウ 弘一37ウ

弘二26ウ

楓園〔肥前〕 弘一12ウ 弘二28ウ

弘四37才

葵園〔周防〕 嘉一24才

喜偕〔能登〕 弘三21才

鬼外〔但馬〕 嘉三31ウ

其鶴〔露消〕〔山城洛〕 弘一47ウ

其岳〔豊前〕 嘉一32才

其緘〔越後〕 天十二35ウ

其閑〔近江石部〕 弘一33才

寄休〔若狭西津／古人〕 弘二19才

弘三16才 嘉三1ウ 32才

亀享〔周防小郡〕 天十四50才

其暁〔但馬香住〕 天十三36才

起旭〔伊予〕 弘四20才

菊翁〔山城洛〕 天十二1ウ 56ウ

菊舍〔豊後〕 嘉一34ウ

菊洲〔伊予〕 弘三9ウ

菊女〔周防〕 天十三17ウ 天十四50ウ

菊女〔備中庭瀬〕 天十四80才

菊人〔豊後〕 嘉一34ウ

菊窓〔備後尾道〕 天十四78才

菊圪〔山城洛〕 天十二1才 56才

天十三2才 67才

菊亭〔撰津浪花〕 天十二45ウ

菊圃〔伊予小松女〕 天十二39才

天十三39才 天十四73才

弘一39ウ 弘二41才 弘三9才

弘四19ウ

起久守〔きく守〕〔武蔵江戸〕

天十二26才 天十三22才

天十四19ウ

喜久良 ↓ 茶暁

掬露〔陸奥〕 弘四66ウ

菊露〔筑後〕 嘉三11ウ

几桂〔大隅加治木〕 天十二5才

天十三5才 天十四39ウ

弘一18ウ 弘二48ウ 弘三46ウ

弘四19才 嘉一51ウ

紀慶〔周防〕 嘉一24ウ

其桂〔肥後〕 嘉一49ウ

蟻兄〔撰津浪花〕 天十二52才

葵月〔筑後〕 天十三17才

器月〔備中岡田〕 天十二15ウ

天十四79才

其月〔出雲猪ノ目〕 天十四88ウ

喜月〔出雲〕 弘三33ウ

其湖〔近江〕 嘉一58ウ

亀口〔陸奥松前社〕 弘二8ウ 50才

51ウ

龜候 ↓ 巴石

希康〔淡路〕 天十二29ウ 天十三14ウ

天十四75ウ

其骨〔陸奥坂ノ下〕 天十四23ウ

淇斎〔石見〕 嘉一21ウ

幾山〔若狭小浜〕 天十三27ウ

天十四88ウ

季山〔越後高田〕 天十二36才

天十三30才 天十四36才

嘉一17ウ 嘉三18ウ

其山〔撰津浪花〕 天十二46才

天十三51才 天十四8ウ 11ウ

96ウ 弘一41才 弘二33ウ

弘三57ウ 嘉一57才 嘉三28才

其山〔陸奥〕 天十三26才

其山〔肥前〕 弘三42才

其山〔越後〕 弘四34ウ

姫山〔越後新潟〕 天十四36ウ

起山〔但馬〕 弘四40ウ 嘉一29ウ

龜山〔豊前〕 嘉一31ウ

巖山〔近江彦根〕 弘一32才

寄之〔武蔵鉢形〕 天十四21才

其雀〔山城洛〕 弘二1ウ 62ウ

弘三64才  
 其雀〔武威〕 嘉一7才  
 淇洲〔能登七尾〕 天十三38ウ  
 天十四29ウ 弘一7才 弘二40才  
 蟻州〔山城洛〕 天十二2ウ 56才  
 天十三2才  
 婦春〔備中有井〕 天十二15ウ  
 其春〔筑後〕 嘉一39ウ  
 宜春〔越後糸魚川〕 天十四34才  
 棋樵〔加賀鶴来〕 弘二39才 弘三18ウ  
 嘉一19才  
 喜昌〔肥前〕 天十三12ウ  
 其笑〔筑前〕 嘉一37才  
 倚松〔伊勢〕 天十二7ウ  
 祇照〔若狭〕 天十二40才 天十三28才  
 几植〔大隅〕 嘉三5ウ  
 葵翠〔土佐〕 天十三39才  
 淇水〔老岐勝本〕 天十四71ウ 弘一22才  
 弘二29才 弘三47ウ  
 既醉〔老岐〕 天十三4才  
 其水〔能登〕 天十二37ウ  
 其水〔陸奥松前〕 弘二10才 51ウ  
 弘四9才 12才 嘉一13ウ  
 其翠〔近江〕 天十三56ウ  
 己省〔肥前〕 天十四67ウ  
 己青〔越前府中〕 天十四100才 弘一3才  
 9ウ  
 其青〔肥前大村〕 天十四67才 弘一10ウ  
 其誠〔越後糸魚川〕 天十四34才  
 弘一9才

喜声〔佐渡〕 弘三27ウ 嘉一15才  
 寄井〔豊後〕 天十二18才 天十三62ウ  
 淇成〔能登〕 弘三22才  
 淇青〔紀伊湯浅〕 弘二44ウ 弘三11才  
 弘四48ウ  
 蟻正〔天和鷲家口〕 弘二45ウ  
 龜石〔越中高丘〕 弘二21才  
 奇石〔肥前〕 天十四67ウ  
 希石〔陸奥田名部〕 天十四27才  
 弘一28ウ 弘二10ウ 弘四23才  
 嘉一11才  
 其石〔日向〕 弘一19才 弘二16才  
 其夕〔山城洛〕 弘二3ウ 63ウ  
 其夕〔長門〕 ↓ 文朝  
 寄石〔肥前〕 弘四46ウ  
 喜夕〔加賀〕 弘四52才  
 豈雪〔丹波〕 天十三34ウ  
 季雪〔淡路須本〕 天十四75才  
 其雪〔筑前博多〕 天十二53ウ  
 天十三47才 49才 51才  
 天十四60才 64才 弘二37才  
 弘三34ウ 弘四39才 嘉一36才  
 其雪〔周防〕 嘉一26才  
 其仙〔出羽〕 弘二12才 弘三56ウ  
 弘四32才  
 其宣〔越中吉久〕 天十三65ウ  
 喜泉〔筑前博多〕 天十四60才  
 喜扇〔天和鷲家口〕 弘二45才  
 己千〔周防〕 嘉一24ウ  
 其泉〔越後〕 嘉一16才

其叟〔筑前福岡〕 天十四57才  
 葵足〔山城洛〕 弘一47才  
 貴存〔能登千路〕 天十四29ウ  
 喜田雄〔近江〕 天十二48才  
 岐蝶〔伊勢四日市〕 天十四92ウ  
 起蝶〔肥前〕 嘉一43才  
 吉一〔近江盲人〕 天十二47ウ  
 天十三56ウ  
 其通〔丹波笹山〕 天十四55才 弘一34才  
 弘二19才 弘三28ウ 嘉一30ウ  
 嘉三30ウ  
 橘茶〔阿波徳島〕 天十四51才  
 橘斎〔齊〕〔肥前皿山／礫山〕  
 天十四68才 弘二47ウ 弘三61才  
 弘四37才  
 橘父〔能登〕 弘三21才  
 橘甫〔伊予〕 弘四20才  
 其亭〔安芸広島〕 天十四77才  
 龜亭〔周防〕 天十四93ウ 嘉一24ウ  
 奇鼎〔能登中居〕 弘一7才  
 淇亭〔加賀〕 弘四51ウ  
 其笛〔筑前福岡〕 天十三10才  
 天十四58才  
 其桃女〔山城洛〕 天十三66才  
 天十四4ウ 99ウ  
 其堂〔筑前〕 天十二44才  
 龜洞〔越後中条〕 天十三29才 弘一8ウ  
 弘二22才  
 龜洞〔肥前〕 嘉一42才  
 葵堂〔筑後〕 嘉一13才

蟻洞〔但馬香住〕 弘一34ウ 弘二17才  
 弘三31才  
 蟻洞〔肥後〕 弘四22才  
 其得〔出羽〕 弘四33才  
 几曇〔常陸〕 嘉三24ウ  
 其年〔武威江戶〕 天十四20ウ  
 箕年〔陸奥南部〕 天十四27才  
 其梅〔肥前〕 嘉三10ウ  
 其珀〔摂津浪花〕 天十二45ウ  
 天十四96才  
 鬼白〔肥後隈本〕 天十四45ウ 弘一14才  
 弘二61ウ 弘三44才 弘四6ウ  
 46才 嘉一48才 49才  
 龜白〔周防〕 天十四50ウ  
 葵白〔老岐勝本〕 弘一22才  
 其泊〔紀伊若山〕 弘二44才  
 機白〔老岐〕 弘三47ウ  
 起白〔筑前〕 嘉一36才  
 祇白〔摂津浪花〕 天十二46ウ  
 蟻白〔豊後〕 嘉一33才  
 季風〔播磨〕 天十三15ウ 天十四87才  
 弘二35ウ  
 季風〔大隅〕 嘉一52才 嘉三5才  
 琪風〔肥前神代〕 弘一12才  
 其風〔石見〕 嘉一22才 嘉三22ウ  
 其風〔周防〕 嘉一24ウ  
 其文〔陸奥〕 嘉三17才  
 其保〔紀伊〕 弘三11才  
 其芳〔安芸広島〕 天十四77才  
 其鳳〔豊後〕 弘三39ウ

龜卜〔備中庭瀨〕 天十四80才  
 寄木〔筑前博多〕 天十三47ウ 46ウ  
   50ウ 天十四59ウ 63ウ 弘三35ウ  
 巖北〔豊後〕 嘉三15才  
 龜遊〔出羽〕 天十三27才  
 龜遊〔周防小郡〕 天十四50才  
 龜遊〔安芸〕 嘉一23ウ  
 龜遊〔肥前〕 嘉三10ウ  
 葵園〔讃岐大原野〕 天十四74才  
 其友〔安芸竹原〕 天十四77ウ  
 其友〔上野碓氷〕 弘二8才  
 其友〔能登〕 弘三21ウ  
 其友〔出羽〕 弘四33才  
 輝雄〔武蔵中瓜〕 天十四91ウ  
 輝雄〔武蔵日南田〕 弘一24ウ  
 淇悠〔山城洛〕 天十四98ウ 弘一47ウ  
 龜由〔美作〕 弘三5ウ 弘四67才  
 龜友〔豊後〕 弘三39ウ  
 龜友〔日向〕 弘四36才 嘉一54才  
 己有〔陸奥松前〕 弘三56才 弘四8ウ  
   嘉三16才 嘉一12才  
 其猷〔阿波〕 弘四21才  
 龜雄〔周防〕 嘉一24ウ  
 磯遊〔摂津浪花〕 弘二34才  
 蟻友〔近江〕 嘉三27ウ  
 九逸〔備前岡山〕 弘二25ウ  
 玖宇〔備前〕 弘三6才  
 九測〔淡路〕 天十三39ウ  
 九花〔華〕〔丹波龜山〕 天十二序ウ 51ウ  
   天十三33ウ 天十四6才 13才

52才 54才 弘一33ウ 弘二18才  
 弘三28才 弘四41才 嘉一30才  
 九化〔能登〕 弘三21ウ  
 九菓〔但馬〕 弘四40ウ  
 丘花園〔山城〕 嘉一序1ウ  
 九起〔山城洛〕 天十二1才 10才 12才  
   30才 32ウ 40ウ 41ウ 43ウ 59ウ  
   天十三1才 18ウ 19ウ 69才 70ウ  
   天十四序2ウ 序3才 序6ウ  
   1才 6ウ 19才 30才 31才 52才  
   80ウ 100ウ 弘一序2ウ 1才 48才  
   48ウ 51才 52才 54ウ 弘二1才  
   64ウ 65才 66ウ 67ウ 弘三1才  
   66才 66ウ 67ウ 70ウ 弘四1才  
   6才 28才 57才 57ウ 59ウ 62才  
   64ウ 70ウ 嘉一1才 2ウ 37ウ  
   40才 48才 54ウ 67ウ 嘉三1才  
   29ウ 36才 36ウ 37ウ  
 九溪〔美作野村〕 弘二26才  
 休月〔肥前神代〕 弘一12才 弘三41才  
 弓月〔但馬西温泉〕 天十四56才  
   弘一34ウ 弘二17ウ 弘三29ウ  
 求古〔肥前野井〕 天十二27ウ  
 九五〔能登〕 弘四30ウ 嘉一60才  
   嘉三26才  
 九江〔出雲松江〕 天十四87ウ 弘一35才  
 九交〔出羽秋田〕 弘一29才  
 九臯〔黎白〕〔備中〕 天十四79ウ  
 九虹〔伊予松山〕 天十四73ウ  
 九光〔近江和田〕 弘一33才 弘二29ウ

葦臯〔加賀〕 弘三19ウ  
 丘齋〔陸奥秋田〕 弘二61才  
 九齋〔近江大津〕 天十三57才  
   天十四3ウ 9ウ  
 九山〔長門伊佐〕 天十二5才  
   天十三6才 天十四72才  
   弘二36ウ 弘四39ウ 嘉一26ウ  
 鳩芝〔武蔵竹沢〕 天十三59ウ  
 九室〔越後〕 嘉一17才  
 丘州〔豊後〕 天十二18ウ 天十三62ウ  
 朽青〔丹後宮津〕 天十三34ウ  
 九蒼〔山城洛〕 弘一3才 47才  
   弘三4才 66才 弘四3才  
   嘉一5才 66ウ  
 九草〔大隅〕 嘉一51才  
 九怡〔備前岡山〕 弘二25ウ 弘四39ウ  
 九陌〔備中笠岡〕 弘一38才 弘二24ウ  
   弘三7才 嘉一22ウ  
 九峰〔備中鴨潟〕 天十四78ウ  
 九野〔肥後〕 嘉一50才  
 牛遊〔遠江〕 天十三32才  
 九余〔越後〕 弘二22ウ 弘三26才  
 鳩里〔山城八幡〕 弘一57ウ  
 魚一〔大和鷲家口〕 弘二45ウ  
 其葉〔近江日野〕 弘二58ウ  
 其葉〔肥前〕 嘉一42ウ  
 其葉〔周防〕 嘉三22才  
 暁雨〔豊前〕 嘉一31才  
 暁鳥〔尾張高井〕 弘一31才 弘二33才  
   弘三48ウ

暁雲〔備中庭瀨〕 天十四80才  
 杏園〔若狭〕 嘉三31ウ  
 杏齋〔山城〕 天十四8ウ 19才  
 暁山〔美濃清須〕 天十四44才  
 京女〔大和鷲家口〕 弘二45ウ  
 杏仙〔豊前〕 嘉一31才  
 暁村〔備後〕 嘉一23才  
 暁梅〔淡路榎並〕 天十二29才  
   天十四76才  
 巨測〔越中杉本〕 天十四98才  
 其翼〔下野宇都宮〕 天十四37才  
 玉映〔近江草津〕 弘二30ウ 弘三13ウ  
 曲於〔播磨魚崎〕 天十四85才  
 旭下〔近江〕 天十三58ウ 天十四10ウ  
   弘二29ウ  
 玉彦〔丹後〕 天十三34ウ  
 玉香〔武蔵〕 天十四92才 弘一25才  
 玉好〔山城長池〕 弘二61ウ  
 玉骨〔豊後横灘〕 弘一17才  
 玉山〔近江大塚〕 弘二30ウ  
 旭子〔伊勢関〕 弘一30ウ 46ウ  
   弘二32才 弘三12ウ 弘四41ウ  
 旭子〔伊予〕 弘四20才  
 玉脂〔近江草津〕 天十二47ウ  
   天十三56ウ 69ウ 天十四7ウ  
   10ウ 弘二31才  
 玉枝〔能登〕 天十二37才  
 玉芝〔近江〕 天十二48才  
 玉芝〔武蔵榎戸〕 天十四90ウ  
 玉芝〔備前〕 嘉一22才

玉舟〔伊賀〕 弘三11ウ  
 玉潤〔近江彦根〕 天十三58才 弘一31ウ  
 曲抄〔筑前〕 天十二44ウ  
 旭水〔肥前大村〕 天十三8才  
 天十四67才 弘一10ウ  
 旭水〔肥後〕 弘二13ウ 弘三43ウ  
 玉水〔近江〕 弘三14才  
 玉蘆〔但馬〕 弘四47ウ  
 玉雪〔筑前〕 嘉一36ウ  
 玉川〔長門伊佐〕 天十四72才  
 旭草〔越中放生津〕 弘一5才  
 玉苔〔出雲〕 天十三16才  
 玉岱〔越後水原〕 天十三30才  
 玉碇〔加賀〕 弘三19才 嘉一19才  
 玉堂〔撰津浪花〕 天十四97才  
 玉梅〔淡路〕 天十二29才 天十三40才  
 曲阜〔撰津伊丹〕 天十二45才  
 天十三52才 天十四95ウ 弘一41ウ  
 弘二35才 弘三58ウ  
 玉甫〔肥前長崎〕 弘二28ウ  
 玉木〔越中放生津〕 弘一5才 弘二20ウ  
 玉雄〔能登七尾〕 天十二38ウ  
 玉里〔越後〕 嘉一16才 嘉三19才  
 玉令〔陸奥〕 弘四24才  
 許三〔陸奥〕 天十三26才  
 巨洲〔虎游〕〔撰津浪花〕 天十二46才  
 虚舟〔筑前〕 天十四2ウ 13ウ  
 巨松〔近江〕 嘉三27ウ  
 巨扇〔上野〕 嘉一9才  
 虚窓〔陸奥二本松〕 天十四24才

弘一27才 弘二11ウ  
 魚鳥〔山城綴喜普賢寺〕 天十三54ウ  
 天十四51ウ 弘一43才 弘二61ウ  
 弘四45ウ 嘉一67才  
 魚道〔丹後〕 天十三35ウ 天十四4ウ  
 13才 55ウ  
 虚白〔近江土山/山城洛〕 天十二47才  
 天十三58ウ 天十四6ウ 11才  
 弘一2ウ 31ウ 弘二29ウ  
 弘三65ウ 弘四3ウ 53ウ 57ウ  
 拳帆〔若狭〕 弘三15ウ  
 居風〔尾張〕 弘三48才  
 許風〔上野〕 嘉三25才  
 御風〔出羽秋田〕 弘二12才 弘四32才  
 嘉一14ウ  
 居幽〔加賀〕 弘四51ウ  
 倨遊〔伊勢〕 弘四41ウ  
 魚栗〔淡路須本〕 天十四75才  
 虚栗〔近江〕 弘三14ウ 弘四42才  
 嘉一63才  
 去柳〔丹後〕 天十三35才  
 其頼〔但馬和田〕 天十三35ウ  
 天十四56才 嘉一30才  
 喜楽〔近江仁正馬淵〕 天十三55ウ  
 天十四9才 11才 弘一33才  
 龜楽〔長門伊佐〕 天十四72才  
 喜良久〔武蔵金川〕 弘二7ウ  
 其楽〔近江石部〕 弘二30ウ  
 其楽〔佐渡〕 弘三27才  
 貴楽〔近江〕 弘三14ウ

規楽〔因幡〕 弘三32才  
 季蘭〔豊後日田〕 天十二18才  
 天十三63才 天十四46ウ  
 弘一16ウ 弘二14ウ 弘三40ウ  
 嘉一34才  
 其嵐〔伊予下柏〕 天十二39ウ  
 弘一57ウ 弘二41ウ 弘三10才  
 弘四20ウ 嘉一27ウ 嘉三19ウ  
 器六〔出雲〕 天十三16才  
 淇六〔加賀金沢〕 弘二59才 弘三19ウ  
 弘四52ウ  
 龜陸〔豊前〕 弘三37才 嘉一31ウ  
 蟻六〔山城洛〕 嘉一66ウ  
 葵笠〔伊予松山〕 天十二53ウ 弘二41才  
 其流〔丹波園部〕 天十四55才  
 其流〔大隅加治木〕 弘一18才  
 其流〔日向〕 弘三45ウ 弘四36才  
 其流〔陸奥松前〕 嘉一13ウ  
 奇柳〔豊後〕 弘三39ウ  
 寄柳〔肥前〕 弘四47才  
 其瓏〔撰津浪花〕 天十二45ウ  
 天十三52才  
 義流〔加賀〕 天十三37ウ  
 龜齡〔加賀〕 弘三19才  
 淇洌〔能登〕 弘三59ウ  
 吟桜〔丹後〕 弘三29才  
 琴和〔陸奥仙台大原〕 天十四24ウ  
 吟霞〔出羽最上〕 天十四28ウ  
 吟霞〔陸奥〕 弘三54ウ  
 琴月〔肥後二ノ丸〕 弘三43才 67才

金谷〔福田賢〕〔肥前大村藩/在京〕  
 天十四序6ウ 67ウ  
 錦谷〔豊後〕 弘二15才 弘三38ウ  
 金葉〔山城洛〕 天十二54ウ  
 葦芝〔備前岡山〕 天十四83才  
 葦子女〔安芸〕 嘉一23ウ  
 芹舎〔山城洛〕 天十二1才 56才  
 天十四1才 99ウ 弘三63才  
 弘四3ウ 53ウ 嘉一65ウ  
 芹洲〔大和上市〕 弘二46才  
 琴松〔伊勢〕 天十二8才 天十三61ウ  
 葦丈〔近江〕 天十二47ウ 天十三56ウ  
 69ウ  
 錦丈〔紀伊湯淺〕 弘二44ウ  
 琴水〔伊勢勝田/時雨丘〕 天十二7ウ  
 天十三61ウ  
 錦水〔近江〕 天十三58才  
 金生〔佐渡〕 嘉三15ウ  
 錦雪〔肥後〕 弘一15才  
 吟雪〔播磨〕 嘉一20ウ 嘉三29才  
 銀岱〔遊歴〕 嘉一62ウ  
 琴亭〔山城洛〕 嘉一4才 64ウ  
 琴堂〔上野碓氷〕 弘二8ウ 弘三57才  
 弘四69才 嘉一8ウ  
 金葩〔大和〕 天十四95才  
 琴風〔撰津〕 天十三52ウ  
 金磨〔長門下関〕 天十四72ウ  
 槿里〔加賀〕 弘三18ウ  
 琴柳女〔能登〕 天十三38ウ  
 金令〔武蔵江戸〕 弘一23才 弘二4ウ

謹路〔肥後隈本〕 天十三10ウ  
 天十四45才 弘一14才  
 權路〔肥前山田〕 天十二27ウ

く

空嗣〔加賀〕 弘四52ウ  
 国女〔陸奥松前〕 弘二9ウ  
 栗磨〔丹波〕 嘉一30ウ  
 裙山〔筑前〕 弘三35ウ  
 薫枝〔長門〕 天十三5ウ 天十四72ウ  
 薫秋〔摂津兵庫〕 天十三52ウ  
 薫坊〔加賀〕 弘二39才  
 薫坊〔近江〕 弘二2ウ 58才

け

契〔周防〕 嘉一25ウ  
 蕙逸〔近江大津〕 天十二50ウ  
 天十四9才 11才 弘二31才  
 弘三14才 嘉一58才  
 慶烏〔上野〕 弘二8才 弘三57ウ  
 弘四69ウ  
 惠雨〔伊勢〕 嘉一58才  
 敬英〔出雲〕 天十三16ウ  
 溪園〔周防〕 嘉一26才  
 溪鶯〔加賀〕 弘三17ウ  
 景丸〔丹後宮津〕 天十三35ウ  
 天十四55ウ  
 形義〔武蔵熊谷〕 天十四91才 弘一25ウ

桂々〔越中高丘〕 弘二21才 弘三23ウ  
 弘四27ウ

桂五〔越後三日市〕 天十二36才

溪斎〔武蔵江戸〕 天十四20才

弘一23ウ 弘二6才 嘉一7才

圭索〔豊前〕 天十三6ウ

鶏山〔伊勢〕 弘三12才

桂司〔越後〕 弘三25ウ

慶之〔肥前〕 弘三41ウ 弘四36ウ

圭史〔日向〕 嘉一53才

螢車〔越中高丘〕 弘一5ウ

惠珠〔武蔵本牧〕 弘二7ウ 弘三49ウ

桂秋〔但馬土山／上山〕 弘一34ウ

弘二17ウ 弘三31才 弘四40才

嘉一29ウ

桂洲〔伊勢〕 天十二9才 天十三31ウ

軽舟〔山城淀〕 弘一43才 弘三62才

圭処〔加賀〕 弘三17ウ

桂女〔肥前〕 天十三13才

蕙吹〔周防〕 天十四50才

計中〔備前岡山〕 天十四82ウ

蕙潮〔筑前〕 弘四39才

溪梅〔山城洛〕 天十四3ウ 17ウ

弘一44ウ

桂眉〔丹波額田〕 天十二51ウ

天十三34才 天十四54ウ

弘一34才 弘二18ウ 弘三28才

弘四41才 嘉一30ウ

敬夫〔豊後〕 弘三38ウ 弘四19才

嘉一33才 嘉三14ウ

慶武〔但馬〕 嘉三31才

敬風〔長門下関〕 天十三61才

景風〔但馬〕 弘三31ウ

慶民〔但馬〕 嘉一30才

計明↓斗明

惠力〔能登〕 天十二37ウ

圭良〔播磨〕 嘉三29才

芸郎〔能登〕 弘三21才

月下〔紀伊〕 弘二44ウ 弘三11才

月外〔信濃〕 弘四69才

月丸〔周防〕 嘉三22才

月弓〔豊前中津〕 天十二19ウ

月橋〔出雲〕 弘三34才

月桂〔山城洛〕 弘一47ウ

月桂〔陸奥福岡〕 弘二10ウ 弘三52ウ

弘四23ウ

月桂〔阿波〕 嘉一28才

穴賢〔伊勢津〕 弘二32才 弘三12才

月呼〔備前岡山〕 天十四83才

月岡〔伊勢関〕 天十二43才 天十四93才

弘一30ウ 弘二32才 弘三12ウ

月鴻〔近江大津〕 弘一57才

月鴻〔越後亀田〕 弘二23ウ 弘三26ウ

嘉一16才

月舟〔山城〕 天十四1ウ 16才

月舟〔能登〕 弘三21才

月舟〔肥後〕 嘉一50才

月春〔但馬豊岡〕 弘二17才 弘三30ウ

月嘯〔能登若山〕 天十二37ウ 弘一6才

月嘯〔出羽秋田〕 弘一29才

月樵〔伊勢〕 天十三61ウ

月樵〔丹波亀山〕 天十四6才 13才

54才 弘一33ウ 弘二1ウ 18ウ

月昇〔安芸広島〕 天十四76ウ

月笑〔武蔵〕 天十四92才 弘一25ウ

月人〔武蔵〕 弘三50才 弘四31才

嘉一8才

月人〔伊予〕 弘四19ウ

月井 弘三3才

月泉〔播磨高砂〕 天十四8ウ 85ウ

月泉〔出雲〕 弘三33ウ

月扇〔陸奥〕 弘二10ウ 弘三52ウ

弘四23ウ 嘉一11才

月川〔長門〕 嘉三21才

月窓〔淡路入田〕 天十四75ウ

月太〔武蔵〕 弘三49才

月池〔豊後〕 嘉一34ウ

月底〔尾張名古屋〕 弘二32ウ

月波〔近江大野〕 天十二50ウ

月坡〔近江土山〕 天十四3ウ 弘一31ウ

弘三15才

月坡〔山城洛〕 嘉三1ウ 36才 36ウ

月平〔筑前〕 天十二28才 弘一20才

弘二60才

月鳳〔摂津浪花〕 天十四97ウ

月雄〔日向延岡／富高〕 天十三60ウ

天十四40才 弘一19才 弘二15ウ

弘三44ウ 嘉一52ウ

月雄〔武蔵〕 弘二7才 弘三49ウ

幻我〔肥前平戸早岐〕 天十三8ウ

天十四69ウ 70才

見外〔武蔵江戸〕 弘一23才 弘二5ウ

嘉一7ウ 12ウ 嘉三24才

見更〔大隅〕 嘉一52才 嘉三5才

兼三〔近江〕 嘉一63ウ

見山〔山城〕 嘉一67ウ

弦山〔山城洛〕 弘四53ウ

玄子〔武蔵江戸／遊歴〕 弘二6ウ

弘三61ウ 嘉一61才

幻芝〔武蔵／下総〕 天十二26才

天十三24才

原人〔長門下関〕 天十四72ウ

硯水〔遊歴〕 弘三61ウ

幻栖〔近江〕 天十三57才

言雪〔播磨龍野〕 天十四86才

愿泉〔原泉〕〔播磨志野部〕 天十二6才

天十三15才 天十四85才

弘一38ウ 弘二35才 弘三4ウ

懸瓢〔肥後二ノ丸〕 弘一14ウ

建美〔相模十日市〕 天十四37ウ

玄里〔筑前博多〕 天十四60才 64才

見立〔陸奥津軽〕 天十四26ウ

見龍〔山城洛〕 天十二55才

蜺洲〔加賀大聖寺〕 弘二39ウ 弘三17才

硯露〔筑後〕 嘉三13才

乙

梧庵〔播磨〕 天十二7才

伍員〔山城洛〕 天十二2ウ 56ウ

弘一4才 47ウ 弘二1ウ 62才

弘三3ウ 66才 嘉一3ウ 67ウ

嘉三2ウ 34才

公羽〔安芸広島〕 天十三11ウ

天十四77才

紅雨〔安芸広島〕 天十四76ウ

香雨〔備中岡田〕 天十二15ウ

天十三40才 天十四79才 弘一38ウ

弘三7才

孝鳥〔武蔵馬見塚〕 弘一24ウ

耕雨〔美作野村〕 弘一35才 弘二26才

弘三5ウ 弘四67ウ 嘉一21才

耕雨〔丹後〕 弘三29才

黄雲〔丹後〕 弘三29ウ

耕雲〔大隅〕 弘四19才 嘉一51才

嘉三6才

向栄〔阿波徳島〕 天十四51才

紅園〔山城〕 天十三55才

高拳〔駿河府中〕 天十四38ウ

皎月〔近江彦根〕 弘一32才

恒月〔伊勢〕 弘三12才

高彦〔越後高田〕 天十三29ウ 弘二22ウ

郷彦〔肥前大村〕 弘一10才

岡虎〔陸奥箱館〕 弘一28ウ

弘々〔越後〕 嘉一16才

桓谷〔山城醍醐〕 天十二40才

江三〔陸奥仙台大河原〕 天十三25ウ

天十四24ウ 弘一27ウ 弘二11才

弘三54才 弘四23才 嘉一11才

耕山〔陸奥松前社〕 天十四26ウ

弘一27ウ 弘二9才 49才

江山〔筑前〕 天十四56ウ 弘二60才

弘三34ウ 弘四17才

江山〔陸奥〕 弘三53才

弘二23ウ

好次〔山城洛〕 天十二58才

降舎〔加賀〕 天十三38才

黄州〔播磨〕 天十二6ウ

黄州〔淡路〕 天十二30才

鴨洲〔越中〕 弘四27ウ

綱女〔陸奥松前〕 弘二9ウ

敲松〔伊勢〕 天十二8ウ

紅蕉〔淡路〕 天十二29ウ

孔昭〔孔照〕〔淡路〕 天十三14才

天十四75才

公水〔越後糸魚川〕 天十四34才

脛睡〔筑前〕 天十四56ウ 弘一20才

弘二60才

交水〔備前岡山〕 天十四82ウ

幸水〔越後中条／二日市〕 天十二36才

天十三28ウ 天十四33ウ 弘一8ウ

弘二22才 弘三25ウ 嘉一16ウ

好醉〔周防〕 弘一37ウ 弘二26ウ

耕水〔摂津浪花〕 弘二34才

恍醉〔周防〕 嘉一25ウ

康哉〔肥前〕 弘四37才

好静〔越後〕 嘉一16才

香雪〔丹波〕 天十三33ウ

耕雪〔丹波保津〕 天十四55才 弘一33ウ

弘二18ウ

耕雪〔陸奥松前〕 弘四9才 10才

嘉一13ウ

行川〔筑前福岡〕 天十四57才

江村〔淡路〕 嘉一28ウ

孝沢〔武蔵石原〕 天十四91ウ

甲長〔備前岡山〕 天十四83ウ

甲年〔出雲〕 弘三33ウ

江波〔近江〕 嘉一58ウ

郊馬〔伊予高部〕 天十二39才

天十三39ウ 天十四73才

紅梅〔筑前武丸〕 弘一20ウ

厚薄〔日向本庄〕 天十三9ウ

天十四14ウ 40ウ 弘一19才

弘四36ウ 嘉一52ウ

皎風〔丹波成松〕 天十四54ウ

公某〔筑前〕 弘三36ウ 弘四38ウ

嘉一37才

公木〔備前岡山〕 天十四82ウ

光明〔能登〕 弘三21ウ

耕友〔陸奥松前〕 弘一28才

交友〔陸奥松前〕 弘二9才 弘三56才

弘四9才 10才 嘉一13才

幸雄〔摂津浪花〕 弘二34ウ 弘三58才

黄令〔山城洛〕 天十二58才

虹朗〔大和信貴山〕 弘二47才

湖雲 弘四3才 嘉一4才 嘉三3ウ  
 五雲〔越後〕 嘉一16才  
 吾雲〔播磨〕 嘉一20才  
 五嬰〔肥後隈本〕 弘二70才  
 五櫻〔肥後〕 弘四5才  
 吾測〔豊後〕 天十三63ウ  
 五煙〔烟〕〔越後〕 嘉一16才 嘉三19才  
 古桜〔豊後〕 嘉一33ウ  
 五駭〔肥後隈本〕 弘二70ウ  
 孤角〔上野碓氷〕 天十四37才 弘一26ウ  
 弘二7ウ  
 古岳〔大和〕 弘四27才  
 五鶴〔豊後日田〕 天十二18ウ 弘一16ウ  
 午角〔肥後〕 弘四66ウ  
 五角〔佐渡〕 嘉一15才  
 五岳〔遠江天ノ宮〕 天十三32ウ  
 五岳〔陸奥仙台〕 弘一27ウ  
 呉嶽 弘三3才  
 古眼〔越前丸岡〕 天十二19才  
 五騏〔肥後〕 弘四5ウ  
 五魏〔肥後隈本〕 弘二70ウ 弘四5ウ  
 7才  
 湖虬〔出雲〕 天十三36才  
 古鏡〔河内津田〕 天十二49才  
 天十三54才 天十四95才 弘三59才  
 弘四45ウ 嘉一60ウ  
 五恭〔肥後隈本〕 弘二70ウ  
 五橋〔豊後〕 弘三39ウ  
 狐玉〔伊勢〕 天十二8才 天十三62才  
 五具〔越後〕 弘四34ウ 嘉一17ウ

嘉三18ウ  
 谷蛙〔薩摩都城〕 天十四39才  
 谷水〔周防〕 嘉一25ウ  
 克亭〔加賀金沢〕 弘一7ウ  
 谷也〔安芸広島〕 天十二53才  
 天十三11ウ  
 谷朗〔上野〕 弘三57才  
 古径〔安芸〕 嘉一23ウ  
 古溪↓北梅  
 五諫〔撰津浪花〕 天十二52才  
 五景〔豊後〕 天十三63才  
 五溪〔周防櫛浜〕 天十三17ウ  
 天十四50才 弘一37才 弘二26ウ  
 弘三7ウ 嘉一25才  
 古蔵〔播磨〕 天十四86ウ  
 湖月 天十二4才  
 湖月〔陸奥〕 弘四2ウ 23才 嘉一5才  
 11才 嘉三3ウ  
 顧言〔陸奥松前〕 弘四13ウ  
 古好〔山城八幡〕 弘一57ウ  
 湖光〔陸奥田名部〕 天十四27才  
 呉公〔山城洛〕 天十四99ウ  
 呉江〔豊後〕 弘三40ウ  
 古谷〔播磨比延〕 天十二6ウ  
 天十三15ウ 天十四1ウ 14才  
 87才 弘一39才 弘二35ウ  
 弘三4ウ 弘四25ウ 嘉一20才  
 嘉三28ウ  
 孤杉〔河内〕 弘四45ウ 嘉一60ウ  
 古杉〔長門〕 嘉三21才

孤山〔半化堂〕〔備前岡山〕 天十三64才  
 天十四序2ウ 7ウ 12ウ 81ウ  
 弘一37ウ 弘二25ウ 弘三6ウ  
 孤山〔備中〕 嘉一22ウ  
 孤山〔越中魚津〕 弘一5ウ  
 古山〔佐渡〕 弘三27ウ 嘉一15才  
 古山〔武蔵〕 嘉一6ウ  
 琥山〔肥後二ノ丸〕 弘二12ウ 嘉一44ウ  
 梧山〔筑前〕 天十四57ウ  
 吾雀〔山城洛〕 天十二2ウ 41ウ 58ウ  
 天十三67ウ 弘三2ウ 65才  
 五株〔武蔵江戸〕 天十二25ウ  
 天十四20才 弘二5才  
 湖舟〔安芸広島〕 天十四77才  
 湖舟〔丹波〕 弘三28ウ 嘉一30ウ  
 孤舟〔越後〕 嘉一16ウ 嘉三18才  
 顧什〔阿波徳島〕 天十四51才  
 呉秀〔丹波成松〕 天十二51ウ  
 天十三34才 天十四54ウ 弘一33ウ  
 弘二18ウ 66才 弘三28才  
 嘉一30ウ  
 孤松〔豊後平川〕 弘一17才 弘二42ウ  
 弘三38ウ 弘四43ウ 嘉一35才  
 虎丈〔大和上市〕 弘二46ウ 弘三59ウ  
 呉城〔武蔵江戸〕 弘一23ウ 弘二6才  
 五辰〔肥後隈本〕 天十三53才 弘二70才  
 弘四5ウ 6才 嘉三8才  
 古翠〔陸奥〕 弘三54ウ  
 鼓水〔周防〕 嘉一24ウ  
 吾水〔老岐対馬藩〕 弘一21ウ

湖静〔丹波〕 嘉三30ウ  
 梧井〔肥前神代〕 天十二26ウ  
 天十四68ウ 弘一12才 弘三41才  
 弘四50ウ 嘉三10ウ  
 梧井〔加賀〕 弘三18才  
 湖石〔肥後〕 弘四22ウ  
 孤石〔肥前〕 嘉一42才  
 五跡〔出雲大社〕 天十四88才  
 梧石〔武蔵我野〕 天十三59才  
 護石〔肥後〕 弘四22才  
 五雪〔筑前博多〕 天十二54才  
 天十三47才 47ウ 49才  
 天十四60才 63ウ 弘一20才  
 弘二37才 弘三35ウ 弘四39才  
 嘉一36才  
 古川〔但馬大屋〕 天十三35ウ  
 壺仙〔播磨龍野〕 天十四86才  
 湖船〔肥後〕 嘉一45才 嘉三8ウ  
 五川〔日向〕 弘三45ウ 嘉一52ウ  
 五全〔越後高田〕 弘二22ウ  
 五桑〔肥前〕 弘四46ウ  
 五倉〔肥後〕 弘四5ウ  
 湖村〔近江高島〕 天十四44ウ  
 五泰〔肥後〕 弘四5ウ  
 呉竹〔筑前博多〕 天十二54才  
 天十三50ウ 天十四60才 64才  
 弘一20ウ 弘二37才 弘三35才  
 壺中〔越前〕 嘉三26ウ  
 午中〔安芸広島〕 天十四77才  
 午潮〔筑前福岡〕 天十四57才

呉潮〔長門下関〕 天十四72ウ

五調〔越後〕 弘四53才

五椎 ↓ 有椎

呼亭〔加賀〕 弘三17才

五笛〔豊後日田〕 天十二18ウ

天十三62ウ 弘一16才 弘二15才

弘三39ウ

壺天〔武蔵江戸〕 弘一24才

五渡〔武蔵目沼〕 天十三23ウ

天十四12才 21才

湖東〔出羽〕 弘四32ウ

古桐〔豊後平川〕 天十四46才 弘一17才

弘二42ウ 弘三38ウ 弘四43ウ

嘉一34ウ

戸東〔豊前〕 嘉一31才

五東〔肥後隈本〕 弘二70ウ 弘四5才

7才

五堂〔但馬香住〕 弘二17才

悟道〔丹波氷上〕 弘二18ウ

固年〔肥前〕 弘四46ウ

天十三34才 天十四54ウ

呉梅〔丹波額田〕 天十二51ウ

天十三34才 天十四54ウ

五梅〔山城洛〕 弘一46才

戸柏〔豊後〕 弘四19ウ

吾白〔阿鳥〕〔出雲〕 天十二53才

五八九〔阿鳥〕〔武蔵熊谷〕 天十三23才

天十四92才 弘一26才 弘二7ウ

五柏〔肥後隈本〕 弘二70ウ 弘四5才

7才

湖帆〔出雲松江〕 天十四88才

五鐺〔肥後隈本〕 弘二70ウ 弘四5才

語氷〔能登所ノ口〕 天十二38ウ

天十三38才

湖風〔陸奥松前社〕 弘二52才

孤楓〔紀伊若山〕 弘二44才 弘三11才

呉風〔備前岡山〕 天十四82ウ

五風〔近江日野〕 天十二50ウ

五風〔阿波〕 弘三8才 嘉一28才

嘉三33才

護物〔武蔵〕 天十二26才

吾仏〔遊歴〕 嘉一3ウ 61ウ

胡文〔越中高丘〕 弘二21才

古鳳〔土佐高知〕 弘二42才 弘三10才

湖鳳〔陸奥松前〕 弘二10才

呼卯〔遠江各租〕 天十三43才 天十四38才

護芳〔山城城南〕 天十四98ウ

孤明〔肥前大村〕 天十四67才 弘一10ウ

呉明〔山城洛〕 弘一1ウ 47才 51才

弘三1ウ 66才 弘四3ウ 嘉一66ウ

五明〔筑後〕 天十二9ウ

後明〔陸奥松前〕 弘一28才

虎遊〔筑前〕 天十二44才

古由〔肥前平戸早岐〕 天十三8ウ

天十四69ウ 弘一56ウ 弘二28才

弘三42才 弘四47ウ

古遊〔摂津浪花〕 天十四97ウ

古遊〔越中放生津〕 弘二20ウ 弘三24ウ

五遊〔周防〕 天十三17ウ

梧葉〔越後水原〕 弘一8ウ

五葉〔花菜〕〔伊勢〕 天十二7ウ

天十三61ウ

五羊〔肥後隈本〕 弘二70ウ 弘四5才

古来〔播磨〕 天十四8才 14才

吾来〔越後亀田〕 弘二24才 弘三26ウ

孤立〔陸奥津軽〕 天十四26才

孤柳〔山城洛〕 天十二1ウ 32才 58ウ

天十三3ウ 67才 天十四5ウ

18才 弘一2才 44ウ 弘二2ウ

63才 弘四2才 55才

古流〔豊後〕 嘉一33才 嘉三14ウ

呉柳〔安芸竹原〕 天十四77ウ

五柳〔豊後日田〕 天十二19才

天十三63才 天十四47才 弘一17才

弘二14才 弘三40ウ 嘉一34才

五柳〔越中戸出〕 弘二21ウ 弘三23才

伍柳〔播磨北条〕 天十二7才

天十三15ウ 天十四86ウ 弘一39才

弘二35ウ

五陵〔陸奥〕 天十三25ウ 弘三51ウ

55才

古林〔但馬森山〕 弘二17ウ 弘三30ウ

弘四48才

五嶺〔備中笠岡〕 天十四78ウ

古曆〔遊歴〕 嘉三2才 32ウ

五朗〔近江長浜〕 天十二52ウ

天十四94ウ

五老〔大隅〕 嘉一50ウ 嘉三5ウ

紺山〔陸奥松前〕 天十三26ウ

今純〔日向〕 嘉一53ウ

さ

裁霞〔淡路〕 天十二29才

薺花〔伊勢〕 嘉三27才

西厓〔越中〕 弘三24ウ 弘四29才

嘉一18才

才蟻〔淡路〕 弘三10ウ 弘四18才

嘉一29才

祭魚〔山城洛〕 天十四99才 弘一2才

44才 弘二3才 63才 弘三62ウ

弘四56才 嘉一4才 65才

哉月〔栽月〕〔肥後二ノ丸〕 天十三11才

弘二13ウ 弘三43ウ 弘四22ウ

簗月〔備中岡田〕 天十四79才

最之〔播磨〕 天十二6才 天十三14ウ

西枝〔山城〕 天十二49才

采真〔因幡〕 弘三31ウ

在竹〔武蔵〕 弘三49才

西畴〔越後水原〕 天十三30才

天十四34ウ 35才 弘一8ウ

弘二68ウ 弘三26ウ 弘四34才

西畴〔因幡〕 弘三33才

西畴〔陸奥〕 弘三55才

左逸〔柳蛙〕〔長門伊佐〕 天十二4ウ

天十三6才 45ウ 天十四72才

嘉一26ウ 嘉三21才

西川〔豊後〕 弘四43ウ

荇堂〔山城〕 弘三62ウ

西洞〔大隅〕 嘉一52才 嘉三5才

西坡〔大和〕 弘四26ウ

西馬〔上野〕 弘一26才

西馬〔武蔵〕 嘉一6ウ 嘉三23ウ

才甫〔越前敦賀〕 天十三64才

西畝〔越中〕 弘三22ウ

西溟〔因幡〕 弘三32ウ

西洋〔加賀〕 天十二35才

沙鷗〔尾張名古屋〕 天十二51才

左外 嘉三3才

沙角〔砂角〕〔肥後二ノ丸〕 天十三11才

天十四45ウ 弘一15ウ 弘二14才

弘三44才 67才 弘四23才

嘉一46才

左琴〔陸奥〕 弘三54ウ

左琴〔佐渡〕 嘉一15ウ

作山〔加賀〕 天十二35才

砂月〔讃岐高松〕 天十四74ウ

砂彦〔豊後〕 弘二14ウ 弘三39才

笹磨〔笹麻呂〕〔肥後〕 弘二13ウ

弘三43ウ 弘四38ウ 嘉一50ウ

左山〔佐渡〕 嘉三15ウ

左雀〔肥後二ノ丸〕 天十三11才

天十四45ウ 弘一14ウ 弘二12ウ

弘三42ウ 67才

乍人〔越後〕 嘉一15ウ

紗翠〔筑前〕 弘四17ウ

左跡〔筑前武丸〕 天十四59才 弘三36ウ

砂丁〔筑前〕 天十三63ウ

里女〔筑前武丸〕 弘一21才

素年〔越後〕 嘉一17ウ

左白〔山城洛〕 天十二59才

左白〔加賀〕 天十四89ウ

沙勿〔出雲〕 天十三36才

砂墨〔豊前〕 天十三7才 嘉一32才

沙明〔肥前〕 弘一11才

狭野女〔出雲大社〕 弘二27才

左右〔武蔵金川〕 弘二7ウ

左右〔丹後〕 弘四67ウ

左来〔越前敦賀〕 天十三27才

左栗〔河内〕 天十二49ウ 天十三54才

左笠〔伊予〕 弘三9ウ 嘉一27才

左路〔筑前武丸〕 弘一20ウ

左和義〔左和儀〕〔但馬村岡〕

天十二51ウ 天十四55ウ

弘一34才 弘二16ウ 弘三29ウ

弘四40才

山雨〔肥後天草〕 嘉三10才

三和〔武蔵〕 嘉一7ウ

山外〔武蔵江戸〕 天十二25才 弘一23ウ

弘二5才

三岳〔豊後日田〕 天十四46ウ 弘一16ウ

弘二14才 弘三40ウ 嘉一34才

山曉〔大隅〕 嘉三5才

山旭〔肥後〕 嘉三8ウ

山溪〔大和〕 弘三59才

山月〔肥前アイヅ〕 天十二27才

山彦〔但馬〕 弘四40ウ

三嵩〔山城〕 天十四5ウ 18才

三考〔下野寺井〕 弘一26才

山公〔武蔵〕 天十三21才

杉郷〔大和鷲家口〕 弘二45才

三志〔筑前飯塚〕 天十四58ウ

三枝〔但馬宮内〕 弘一35才

三枝〔加賀〕 弘三19ウ

三扈〔日向〕 弘三45ウ

傘枝〔肥後天草〕 嘉一47才

三笑〔播磨〕 弘四25ウ

山丈〔山城〕 天十四7才 18ウ

弘四2ウ 55才

三雛〔播磨〕 嘉三29才

三草〔武蔵江戸〕 弘一23ウ 弘二6ウ

山草〔大和上市〕 弘二46才

杉昏〔遊歴〕 嘉一62才

山沢〔越中戸出〕 弘二21ウ 弘三23才

三知〔出羽秋田〕 弘一29才

三朝〔越後長岡〕 天十二2才 35ウ

天十三30ウ

三朝〔陸奥仙台〕 天十四24ウ 弘二11才

弘三53才

三蝶〔備中〕 天十四80才

山鳥〔肥後〕 弘四46才

三島〔肥前〕 天十二27ウ

三瓢〔山城洛〕 弘一44ウ

三甫〔越後田海〕 天十四34ウ

山畝〔肥前礪山〕 弘二47ウ 弘四37才

嘉三11才

三芳〔越後〕 天十三29ウ

山雄〔陸奥白川〕 天十四24才

山友〔肥前平戸〕 天十三9才

天十四69才

山友〔伊勢〕 嘉三27才

三余〔撰津浪花〕 天十四97ウ

三余〔肥前〕 弘三42才

山来〔肥後〕 弘四37ウ 嘉一50才

嘉三9ウ

山里〔山城〕 天十三67ウ

三栗〔筑後〕 天十三17才

三鱗〔安芸〕 天十三12才

杉廬〔武蔵金川〕 弘二7才

し

此一〔山城〕 天十四2ウ 17才

至尹〔越後〕 嘉一17才

市隠〔播磨赤穂〕 天十四85ウ

枝雲〔陸奥松前〕 弘三55ウ

子栄〔肥前長崎〕 天十三12ウ

天十四68才 弘一11ウ 弘三41才

嘉一43才

芝英〔陸奥浅香〕 天十三25ウ

天十四25ウ

子英〔越後〕 嘉三18ウ

支園〔豊後日田〕 天十二18才

天十四46才

支測〔豊後日田〕 弘一16才 弘二15才

紫筵〔撰津浪花〕 天十四97才

史測〔豊後〕 弘三39才 嘉三14ウ

子鶯〔陸奥〕 嘉三16ウ

志猿〔因幡〕 弘三三1ウ  
 志外〔山城〕 天十四17ウ  
 史外〔薩摩鹿兒島〕 天十四39才  
 此外〔山城洛〕 嘉一1ウ 4ウ 64ウ  
 嘉三3才 35才  
 市外〔播磨〕 弘四25才  
 二外〔大隅加治木〕 天十三4ウ  
 天十四39ウ 弘二48ウ 弘三47才  
 弘四19才 嘉一51ウ  
 二鶴〔近江〕 弘三14才  
 芝岩〔肥前〕 天十三12ウ  
 芝丸〔上野横壁〕 弘一26ウ 弘二8才  
 弘三57ウ 弘四69ウ 嘉一8ウ  
 嘉三25才  
 直木〔讃岐〕 嘉一60ウ  
 史虬〔陸奥松前〕 嘉一13ウ  
 二鳩〔伊予〕 嘉三20才  
 慈弓〔山城城南和束〕 天十三54ウ  
 天十四98ウ 弘一43才 弘四57才  
 嘉三33ウ  
 二丘〔出羽榛山〕 天十三26ウ  
 天十四15才 29才 弘一29才  
 弘二12ウ 弘四33才 嘉一14才  
 二丘〔越中〕 弘三23才  
 二丘〔陸奥〕 弘三54才  
 二九〔陸奥〕 天十三25才 弘四24才  
 此魚〔陸奥松前〕 天十四26ウ  
 子亭〔丹波福知山〕 弘一33ウ  
 志玉〔石見川本〕 天十四49ウ  
 枝玉〔武蔵〕 嘉一7才

紫金〔撰津伊丹〕 天十二44ウ  
 紫琴女〔越後亀田〕 弘二23ウ  
 紫空〔土佐〕 天十二38ウ 天十三39才  
 士桂〔肥前長崎〕 弘二28ウ  
 史敬〔肥前〕 弘三42才 嘉一43才  
 紫蛭〔豊前小倉〕 天十三6才  
 天十四48才  
 枝月〔山城洛〕 天十二55ウ 天十三68ウ  
 天十四2ウ 16ウ 弘一44ウ  
 弘三3ウ 64ウ 弘四1ウ 55才  
 紫月〔近江〕 天十二48才  
 嘉一65ウ 嘉三3ウ 35才  
 市月〔武蔵〕 嘉三2才 23才  
 志月〔肥後〕 嘉一49ウ  
 指月〔周防〕 嘉一24ウ  
 芝月女〔肥前〕 弘四47才  
 志計里〔陸奥仙台河原〕 天十四24ウ  
 しげり〔武蔵〕 嘉一8才  
 士言〔筑後指出〕 天十二15才  
 天十三17才  
 子彦子〔陸奥〕 嘉三16ウ  
 市考〔陸奥松前〕 弘二9才  
 糸江〔肥前諫早〕 弘一11ウ  
 糸口〔肥前諫早〕 弘二47ウ  
 志厚〔撰津須磨〕 天十二45才  
 枝考〔肥前〕 弘四37才  
 志郷〔肥前〕 天十三13才  
 而后〔尾張名古屋〕 天十二51才  
 天十三32ウ 天十四90才  
 弘一30ウ 弘二32ウ 弘三48才

弘四44才 45才 嘉一59ウ  
 嘉三27才  
 二高〔武蔵〕 弘一25才  
 時合〔備前岡山〕 天十四81ウ  
 此山〔山城洛〕 天十二57才 天十三68才  
 紫山〔肥後二ノ丸〕 弘一15才 弘二13ウ  
 二山〔越中放生津〕 天十四32ウ  
 時習〔肥前諫早〕 弘一11ウ  
 紫笋〔筑前〕 天十二28ウ  
 子昌〔淡路〕 天十四75ウ  
 二笑〔近江豊浦〕 弘二30才  
 自笑〔周防〕 嘉一25才  
 時人〔撰津浪花〕 天十四97才  
 止水〔豊後〕 弘三60ウ  
 芝醉〔肥後〕 弘四38才  
 思静〔武蔵〕 天十四91ウ 弘一25才  
 芝生〔越中〕 弘三22ウ  
 芝石〔豊後〕 弘二42ウ 弘四43ウ  
 嘉一35才  
 紫石〔筑前〕 天十二28ウ  
 紫尺〔出雲〕 弘三33ウ  
 芝尺〔越後〕 嘉三18ウ  
 二石〔肥前長崎〕 天十三13才  
 天十四67ウ 弘一11ウ 弘三41才  
 嘉一43才  
 士節〔肥前〕 天十三12ウ  
 子遷〔伊勢〕 天十二50才 弘三11ウ  
 此扇〔武蔵〕 天十三21ウ  
 之扇〔備前岡山〕 天十四83才  
 市仙〔肥後天草〕 嘉一46ウ

而先〔陸奥松前〕 天十三26ウ  
 天十四26ウ 弘一27ウ 弘二8ウ  
 49才 弘三55ウ 弘四9才 9ウ  
 嘉一13才  
 耳洗〔播磨〕 天十二7才 天十三15才  
 耳洗〔讃岐〕 天十四15才  
 児川〔陸奥〕 弘三51ウ 弘四23ウ  
 嘉一10ウ  
 二泉〔丹波〕 弘三28才  
 子送〔越中放生津〕 天十三65才  
 四眺〔肥後〕 弘四38ウ  
 二蝶〔伊予〕 弘四20才  
 子直〔陸奥〕 嘉三16ウ  
 子椿〔陸奥津軽〕 天十四26才  
 実和〔周防〕 天十二19ウ  
 檉洲〔老岐勝本〕 天十三4才  
 天十四71ウ 弘一22才 弘二29才  
 弘三47ウ  
 執中〔武蔵金川〕 弘二7ウ  
 子亭〔美濃〕 天十二36ウ  
 市軒〔筑後〕 天十三17才  
 思道〔佐渡大崎〕 弘一42才 弘三27才  
 嘉一14ウ  
 柿堂〔筑後〕 天十二14ウ  
 芝堂〔伊予松山〕 天十四73ウ  
 芝洞〔安芸竹原〕 天十四77ウ  
 之同〔肥前大村〕 天十三60才  
 天十四66ウ 70才 弘一10ウ  
 嘉一42ウ  
 二道〔越前〕 天十三27才

士篤〔石見〕 嘉一21ウ  
 品女〔但馬〕 弘三30ウ  
 四風〔淡路〕 天十三13ウ  
 始風〔山城洛〕 弘四2ウ 55ウ  
 嘉一1ウ 3才 64ウ 嘉三2才  
 33ウ 37ウ  
 思文〔尾張一色〕 弘一31才  
 志文〔近江〕 弘三13ウ 弘四42才  
 雌鳳〔伊勢〕 天十三62才  
 此方〔和泉堺〕 弘二44才  
 士峰〔陸奥〕 嘉一11才  
 髭茂〔武蔵〕 嘉一8才  
 二峰〔大隅〕 弘三46才 弘四18ウ  
 志卜〔筑前福岡〕 天十四57才  
 子邁〔松清堂〕〔越中放生津 那古〕  
 天十四32ウ 弘一序2ウ 4ウ  
 弘二20ウ 54才 弘三24ウ  
 弘四1才 28ウ 29ウ 嘉一18才  
 嘉三25ウ  
 支鳴〔播磨比延〕 天十二6ウ 弘一39才  
 弘四66ウ  
 子明〔陸奥〕 弘四24才  
 史也〔片家〕〔備中笠岡〕 天十二10才  
 15才 天十三2才 18才 19ウ  
 天十四7ウ 78才 80ウ 84才 101ウ  
 弘二24ウ 弘三7才 嘉一22ウ  
 舍猿〔肥後天草〕 嘉一46ウ  
 斜丸〔筑前〕 弘四17ウ  
 車休〔加賀金沢〕 弘二38ウ  
 若英〔一湖〕〔肥後〕 嘉一45才

若雅〔山城洛〕 天十三67才 天十四1ウ  
 17才 弘一44ウ 弘三65ウ  
 弘四70才 嘉一64ウ 嘉三1ウ 34才  
 若月〔山城〕 天十三67ウ  
 若拙〔筑前赤間〕 天十四59ウ 65ウ  
 弘二36ウ 弘三36ウ 弘四38ウ  
 雀叟〔伊勢〕 天十二36ウ  
 雀巢〔肥前大村〕 天十四67才  
 雀村〔播磨高砂〕 天十四9才 85ウ  
 若馳〔備前岡山〕 天十四82才  
 箬風〔山城洛〕 天十二3ウ 55才  
 榭月〔播磨魚崎〕 天十二6才  
 天十四85才  
 舍好〔近江夏見〕 天十三56才  
 写山〔安芸広島〕 天十三12才  
 天十四77ウ 弘一37才 弘二36才  
 弘三7ウ 嘉一23ウ  
 碑山〔山城伏水〕 嘉一67才  
 舍雀〔伊勢〕 天十二8才  
 酒翠〔陸奥〕 弘四23ウ  
 若水〔筑前〕 弘三36才  
 車泉〔武蔵平戸〕 弘一24才  
 舍童〔能登〕 天十三23ウ  
 蛭巴〔出羽〕 弘四33才  
 射風〔備前八浜〕 弘二25才 弘三6才  
 弘四39ウ 嘉一22ウ  
 酒芳〔備前〕 弘三6才  
 舍用〔武蔵江戸〕 弘二59ウ  
 捨来〔播磨中尾〕 天十二6才  
 天十三14ウ 天十四86ウ

舍柳〔筑前博多〕 天十三48才 51才  
 天十四59ウ 60ウ  
 守一〔近江〕 天十二48ウ  
 守一〔播磨龍野〕 天十四86才  
 糸有〔武蔵熊谷〕 天十四91才 弘一25ウ  
 史友〔撰津浪花〕 天十二43才  
 髭雄〔大和郡山〕 天十四95才  
 紫友〔肥前〕 天十二27ウ 嘉三10ウ  
 士由〔陸奥〕 弘三53ウ  
 子遊〔肥後〕 嘉一50才  
 柴遊〔武蔵〕 嘉一7ウ  
 芝由〔山城洛〕 嘉三34ウ  
 箬永〔越後高田〕 天十三29才  
 十越〔能登〕 天十二37才  
 拾華〔陸奥松前亡人〕 嘉一13ウ  
 秀何〔山城洛〕 弘四2ウ 56才  
 嘉一66才 嘉三2ウ 35才  
 秀丸〔淡路〕 天十三13ウ  
 舟巨〔陸奥〕 嘉三17才  
 充魚〔加賀〕 弘四52ウ  
 十山〔播磨〕 弘四25才  
 秋琴〔肥後〕 弘四70ウ  
 秀溪〔出雲〕 天十二17才  
 秀月〔越後〕 嘉三19才  
 秋月〔若狭〕 弘三16才  
 秋湖〔肥後〕 弘四38才  
 拾五〔近江大津〕 天十三3ウ  
 天十四3ウ 10才 弘一4才 32ウ  
 弘二4才 31ウ 弘三4才 14ウ  
 嘉一2才

秋香〔武蔵江戸〕 天十四20ウ  
 秀香女〔山城洛〕 弘三2ウ 64ウ  
 弘四3才 55ウ 嘉一1ウ 5ウ  
 秋孝〔但馬上山〕 弘二17ウ 弘三31才  
 弘四40才  
 十交〔撰津浪花〕 天十二46ウ  
 周斎〔齊〕〔佐渡新穂〕 天十三33才  
 天十四14才 36ウ 弘一29ウ  
 弘三27才 弘四68ウ 嘉一14ウ  
 秋斎〔伊勢〕 天十二7ウ 天十三61ウ  
 秀山〔周防〕 嘉一25ウ  
 重山〔石見〕 嘉三22ウ  
 習之〔日向本庄〕 天十三9ウ 41才  
 天十四14ウ 40ウ 41才 弘一19才  
 弘二16才  
 舟子〔因幡〕 弘四24ウ  
 秋十〔淡路〕 天十二29才 天十三13ウ  
 糸遊女〔伊予〕 天十二39才  
 重嶂〔山城能登人在京〕 嘉一67才  
 州人〔日向〕 天十二52才  
 拾翠〔近江能登川〕 弘二31才  
 拾翠〔播磨〕 嘉三28ウ  
 秋翠〔武蔵〕 天十四92才 弘一25才  
 秀雪〔豊後〕 弘二43才  
 秋宣〔出雲松江〕 天十四44ウ  
 秋川〔但馬〕 弘三30ウ  
 秀然〔出雲安来〕 天十二17才  
 天十三16ウ 天十四87ウ  
 弘一36ウ 弘三33才 弘四43才  
 嘉一29ウ 嘉三23才

重泰〔山城洛〕 天十二3ウ 57才

天十三2ウ 67ウ 天十四3ウ

17ウ 弘一2ウ 45ウ 弘四3才

嘉一1ウ 4ウ 嘉三2才 34才

秋竹〔伊勢〕 天十三31才 天十四13ウ

秋蔦〔豊後日田〕 天十二18ウ

天十三62ウ 天十四46才

弘一16才 弘二14ウ 弘三39才

嘉一33ウ

秀直〔武蔵〕 天十三21才

須南〔筑後〕 嘉三12ウ

秀甫〔越中東水橋〕 天十二36ウ

天十三28ウ

秋甫〔肥前平戸〕 弘二27ウ

衆芳〔山城洛〕 天十二2ウ 58才

天十三2才 66才

秀峰〔備前岡山〕 天十四83才

秀芳〔出雲〕 弘三33ウ

秀芳〔上野〕 嘉一9ウ 嘉三25ウ

秋峰〔播磨赤穂〕 天十四85ウ 弘三5才

弘四25才

十無〔丹後〕 弘三29才

十邑〔豊前〕 弘三38才 弘四50ウ

嘉一32ウ

十葉〔近江彦根〕 天十二52ウ 弘一32才

十羅〔陸奥箱館〕 弘二28ウ

萩里〔但馬〕 弘四47ウ 嘉三31ウ

秋露〔豊後〕 弘三61才

夙也〔尾張〕 天十四6ウ  
守鷄〔肥後天草〕 嘉一47才 嘉三10才

主月〔豊後日田〕 天十四47才

守三〔陸奥〕 弘三53ウ

樹三〔佐渡〕 嘉三15ウ

寿山〔河内穂谷〕 弘二47才

寿山〔播磨〕 弘三5才 嘉一21才

朱唇〔豊後芝崎〕 弘一17ウ

朱唇〔日向〕 弘三45ウ

守拙〔備中宮内〕 天十四79ウ

寿泉〔越後〕 嘉一15ウ

樹村〔武蔵〕 天十三21ウ

守中〔因幡〕 弘三32才

寿堂〔山城洛〕 天十三3才 67才

天十四4才 弘一44ウ

寿輔〔播磨今市〕 弘二35ウ 弘三4ウ

寿楽〔山城洛〕 弘四70ウ

春翁〔周防〕 嘉一25ウ 嘉三22才

春鷗〔阿波〕 弘三8才 嘉三33才

春雅〔相模曾我〕 弘二59ウ

春蟻〔伊予〕 弘二41才 弘三9才

春牛〔安芸〕 天十三12才

春魚〔伊勢〕 弘四41ウ

春琴〔備中池田〕 天十二15ウ

春琴〔播磨赤穂〕 天十四85ウ

春釣〔美作〕 弘四67ウ

春逕〔大隅加治木〕 天十二5ウ

天十三5才 弘一18ウ 弘二48ウ

春月〔越前〕 天十二19ウ

春月〔肥前平戸早岐〕 天十三8ウ  
天十四69ウ 70才 弘一56ウ  
弘二27ウ 弘三42才 弘四37才

嘉一42才 嘉三11才

春月〔陸奥浅香〕 天十四25ウ

春月〔豊後〕 嘉一35才

巡月〔豊後〕 弘三40才

春香〔武蔵〕 天十二1才 25ウ

春香〔山城〕 天十三66才

春篁〔伊勢〕 天十二7ウ 天十三62才

春紅〔備中〕 弘三6ウ

春郊〔播磨〕 嘉一20ウ

筍孝〔伊勢〕 天十三61ウ

春谷〔豊後〕 弘二15才 弘三38ウ

弘四19才 嘉一33才 嘉三14ウ

春左〔陸奥〕 天十三26才

春斎〔越中放生津〕 天十四32ウ

春山〔安芸竹原〕 天十四77ウ

春山〔紀伊若山〕 弘二44ウ

春山〔大和鷲家口〕 弘二45才

俊山〔紀伊〕 弘三11才

春室〔越後水原〕 天十三30ウ

天十四34ウ 35才 弘一8ウ

弘二21ウ 弘三25才 弘四33ウ

嘉一18才 嘉三18才

春室〔陸奥〕 弘三55才

春実〔金山〕〔筑後〕 嘉一39ウ

嘉三11才

春樹〔備中瀬尾〕 天十四78ウ

春洲〔越後〕 弘三26才 嘉一16ウ

春渚〔加賀〕 弘三18ウ  
春章〔近江石部〕 弘二30ウ 弘三14ウ  
春升〔出雲〕 天十二53才 天十三16才

交籥〔陸奥〕 嘉三17才

春城〔肥後天草〕 嘉一67ウ 嘉三9ウ

潤松〔能登中居〕 弘一7才

春人〔摂津浪花〕 天十二46才

春整〔伊勢〕 天十二8ウ

春星〔豊後〕 弘一17ウ 弘二15ウ

弘三39才

春成〔越後〕 弘三25才

春莊〔伊勢槌柄〕 天十二9才

春堆〔備中鴨湯〕 天十四78ウ

春朝〔播磨日延〕 天十四87ウ

春朝〔山城洛〕 弘二47才 弘三65ウ

嘉一66ウ

春潮〔肥前平戸〕 天十三9才

天十四68ウ 69ウ 弘三41ウ

嘉一42才

春潮〔路江〕〔越前丸岡〕 天十二19才

天十三54才 弘一9ウ 嘉一60才

春庭〔越後白川〕 天十二36才

天十三28ウ

舜田〔備中飯倉〕 天十四79ウ

春涛〔備中尾崎〕 天十二15ウ

春洞〔肥後〕 嘉一49ウ

春坡〔豊後〕 天十三40ウ

潤夫〔越後〕 天十四34ウ

春風〔摂津浪花〕 天十四96ウ

順風〔備前八浜〕 弘二25才

春圃〔備中〕 天十二15ウ  
春圃〔筑前〕 嘉一36ウ  
春芳〔備中庭瀬〕 天十四80才

春眠〔因幡〕 弘三32才  
 隼也〔肥後〕 弘四66ウ 嘉三9ウ  
 潤葉〔但馬篠垣〕 弘二16ウ 弘三30才  
 春来〔近江〕 弘四68才  
 春里〔豊後〕 弘三60ウ  
 筍露〔肥前〕 嘉一43才  
 春朗〔播磨比延〕 天十二6ウ  
 天十三59ウ 天十四87才 弘一39才  
 春朗〔大隅加治木〕 弘二48ウ 弘三46ウ  
 弘四18ウ 嘉一51才 嘉三5ウ  
 春楼〔伊勢〕 天十二50才  
 子羊〔肥前平戸〕 弘二27ウ 弘三41ウ  
 嘉一42ウ  
 二葉〔出羽秋田〕 弘一29才 弘二12才  
 弘三56ウ 弘四33才 嘉一14才  
 松蔭〔近江〕 嘉一59才  
 松隠〔陸奥松前〕 弘三55ウ  
 松寅〔豊前〕 弘二70才  
 樵雨〔摂津浪花〕 天十四96ウ  
 樵雨〔淡路広石〕 弘一40才 弘二40ウ  
 弘三10ウ 弘四18才 嘉一28ウ  
 嘉三20ウ  
 松塙〔筑前博多〕 弘一20ウ  
 松塙〔備中〕 嘉三30ウ  
 松雨〔山城洛〕 天十三2ウ 68才  
 天十四3才 17ウ 弘一44ウ  
 弘二2ウ 62ウ 弘三3才 64才  
 弘四1才 54ウ 嘉一1ウ 5才  
 64ウ 嘉三1ウ 34才  
 笑鳥〔丹後〕 弘三29才

蕉雲〔筑後〕 嘉一39ウ  
 松園〔筑前博多〕 天十四64才 64ウ  
 菘園〔若狭小浜〕 天十二46ウ  
 天十三2ウ 27ウ 天十四89才  
 松翁〔但馬大藪〕 天十三35ウ  
 天十四56才 弘一1才 34ウ  
 弘二18才 弘三29ウ  
 松屋〔豊後平川〕 弘一17才 弘二42ウ  
 弘三38ウ 弘四43ウ 嘉一35才  
 嘯霞〔讃岐〕 天十二54ウ  
 松歌〔山城洛〕 天十二3才 43ウ 57才  
 松岬〔陸奥福岡〕 弘二10ウ 弘四23ウ  
 嘉一11才  
 松下〔若狭〕 天十二47才  
 省禾〔伊勢〕 天十三31ウ  
 咲花〔長門〕 嘉一26ウ  
 笑囃〔能登〕 嘉一18ウ  
 象外〔芦角〕〔肥後〕 嘉一45才  
 嘉三8才  
 松鶴〔薩摩都城〕 天十四38ウ 弘一15ウ  
 弘二29ウ 弘三47才 嘉三4ウ  
 常丸〔陸奥〕 嘉三17才  
 松巨〔肥前〕 嘉一41ウ  
 笑居〔若狭〕 弘三16才  
 松橋〔陸奥〕 弘三52才 弘四66才  
 嘉一10ウ  
 小狭也〔肥前〕 嘉一41ウ  
 松玉〔武蔵広瀬〕 弘一25才  
 松玉〔但馬〕 弘四40ウ  
 勝錦〔山城洛／江戸〕 天十二59才

弘一47ウ 弘二7才 弘三2才  
 66才 弘四56ウ 嘉一67ウ  
 嘉三36才  
 松琴〔近江〕 弘三14才 弘四68才  
 嘉一58ウ  
 松琴〔筑前赤間〕 天十四59才  
 松吟〔山城洛〕 弘四56才  
 松吟〔能登〕 天十二37ウ  
 松吟〔越中砺波〕 弘二21ウ 弘三24才  
 松月〔豊後〕 天十二18才 天十三63才  
 松月〔近江高島〕 天十二48才  
 天十四7才 94ウ 弘一32才  
 弘三14才  
 松月〔陸奥津軽〕 天十四26ウ  
 松月〔信濃更科〕 弘一30才  
 松月〔丹波〕 嘉三31才  
 樵月〔大和上市〕 弘二46才 弘三59才  
 蕉月〔下総〕 弘三50ウ  
 嘯虎〔薩摩〕 天十三5才  
 丈梧〔筑前〕 弘四17才  
 松香〔大隅加治木〕 天十二5ウ  
 天十三5才 天十四39ウ 弘一18才  
 省耕〔越後〕 嘉三18才  
 小鯉〔陸奥松前〕 弘三55ウ 弘四9才  
 10才 嘉一13ウ  
 尚故〔日向〕 嘉一52ウ  
 松左〔摂津浪花〕 天十二46ウ  
 昇斎〔齊〕〔越中放生津〕 天十三65ウ  
 天十四32ウ 弘一4ウ 弘二20ウ  
 弘三24ウ 弘四29才

昇斎〔近江〕 天十四9才 11才  
 少哉〔遊歴〕 嘉一61才 嘉三32ウ  
 省斎〔齊〕〔薩摩都城〕 弘二69才  
 弘三47才 嘉三4ウ  
 樵三〔筑前飯塚〕 弘一20ウ  
 省三〔路白〕〔薩摩都城〕 天十四39才  
 弘一15ウ 弘二29才 弘三47才  
 嘉三4才  
 晶山〔山城洛〕 天十四99才  
 笙山〔摂津浪花〕 弘二34ウ  
 照山〔豊前〕 嘉一32ウ  
 丞山〔肥後〕 弘四22ウ  
 松子〔讃岐丸亀〕 天十三18才  
 天十四74才 弘一40才 弘二41ウ  
 弘三8ウ  
 松室〔摂津浪花〕 天十四97才  
 松舎〔越後堀ノ内〕 天十三29才  
 天十四33ウ 弘一9才 弘二22才  
 弘三25ウ  
 松洲〔淡路松帆〕 天十三39ウ  
 天十四75ウ 弘一40ウ 弘二41才  
 松什〔武蔵江戸〕 天十二25ウ 弘二4ウ  
 嘉一7ウ  
 昭々〔近江〕 天十二48ウ  
 昭々〔筑後〕 嘉三12才  
 松昌〔長門〕 嘉三21ウ  
 松親〔武蔵〕 天十四91ウ  
 召人〔越後〕 弘四34ウ  
 松翠〔筑前〕 嘉三14才  
 丈翠〔山城嵯峨〕 天十二34ウ

天十三67才 天十四16才  
 弘一45才 弘三64ウ 弘四57才  
 嘉一4ウ 67才  
 小聖〔陸奥松前〕 弘二28才  
 照星〔伊勢〕 天十二50才  
 松声〔大隅加治木〕 天十二5才  
 天十三4ウ 天十四39ウ  
 弘一18才  
 松声〔安芸広島〕 天十四76ウ  
 梢声〔但馬〕 弘二16ウ 弘三30才  
 弘四48才  
 常積〔能登〕 弘三22才 嘉一19才  
 嘉三26才  
 升仙〔肥前〕 天十四68ウ  
 松宣 弘一3ウ  
 松仙〔筑後〕 嘉一40才  
 照仙〔佐渡〕 嘉三16才  
 嘯窓〔山城〕 天十三55才 天十四16才  
 松巢〔近江宮川〕 天十四94ウ  
 松雫〔大隅〕 嘉一52才  
 蔣池〔淡路〕 天十二29ウ 天十三14才  
 尚竹〔日向〕 天十四40ウ  
 小涛〔武蔵奈良〕 弘一24ウ  
 松涛〔伊予大淵〕 天十三53才  
 松涛〔肥後天草〕 嘉一47ウ  
 簫涛〔越前福井〕 天十二19才  
 笑道〔筑後〕 天十二9ウ  
 松堂〔安芸〕 嘉一23ウ  
 松堂〔阿波〕 嘉一28ウ 嘉三20ウ  
 松堂〔筑後〕 嘉三12ウ

松南〔山城洛〕 弘三2ウ 64ウ 68才  
 弘四4才 55才 嘉一2才 4ウ  
 65才  
 松年〔備中松山〕 天十三40才  
 天十四79才  
 松年〔肥後〕 弘三43才 嘉一44才  
 松波〔加賀金沢〕 弘一7ウ 弘二38ウ  
 松波〔肥後隈本〕 弘一13ウ 弘三44ウ  
 嘉一49ウ  
 常波〔大隅〕 嘉三6才  
 松柏〔近江〕 天十三65才  
 昇八〔能登〕 天十二37才  
 松眉〔河内〕 天十四95ウ  
 樵風〔播磨〕 天十二7才  
 昌風〔伊勢〕 天十三31ウ  
 松風〔豊前小倉〕 天十三7才  
 天十四47才 弘一19ウ  
 祥風〔周防〕 嘉三22ウ  
 嘯風〔肥後天草〕 嘉一46ウ  
 少文〔大隅〕 嘉三6才  
 省甫〔近江〕 天十三3ウ 天十四4ウ  
 10才  
 松歩〔播磨〕 天十三14ウ  
 松甫〔越中〕 天十三65ウ  
 蕉夢〔丹波〕 弘三27ウ  
 少也〔陸奥〕 弘三51才 弘四23ウ  
 嘉一10ウ 嘉三17ウ  
 常也 天十四8ウ  
 柝雄〔近江〕 天十三64ウ  
 松雄〔豊後〕 天十三63ウ 天十四46才

笑預〔若狭〕 弘三15ウ  
 松蘿〔山城〕 天十四4才 18ウ  
 梢蘿〔山城洛〕 弘二63才  
 松籟〔山城洛〕 弘一46ウ  
 少鸞女〔伊予〕 弘三9才  
 松笠〔摂津浪花〕 天十三51ウ  
 天十四96才 弘一41才 弘二2才  
 34才 弘三58才 嘉一57ウ  
 嘉三28才  
 松隣〔摂津浪花〕 天十三52才  
 弘二34才 弘三58才 弘四42ウ  
 嘉一57才 嘉三28才  
 松隣〔大隅〕 嘉三6才  
 松露〔丹波亀山〕 天十二51ウ  
 天十三34才 天十四2才 13才  
 54才 弘一33ウ 弘二18才  
 弘三28才 弘四41才  
 松朗〔山城洛〕 弘三65才 弘四1ウ  
 55才  
 恕雲〔肥後隈本〕 弘一13才 弘四5ウ  
 如猿〔山城〕 天十二49才  
 如快〔豊後〕 弘三40才  
 如白〔豊後日田〕 天十二19才  
 天十四47才 弘一16ウ 弘二14才  
 弘三40ウ 嘉一34才  
 植洲〔豊後〕 嘉三14才  
 蜀水〔佐渡〕 天十三33才  
 植波〔近江〕 嘉三27ウ  
 植眉〔丹波〕 嘉三31才  
 如慶〔摂津〕 弘三58才 嘉一57才

処溪公〔陸奥〕 嘉三17ウ  
 渚月〔肥前大村〕 天十三60才  
 天十四67才 弘一11才 弘四46才  
 如考〔陸奥南部山〕 天十四28ウ  
 弘三52ウ  
 如薺〔越中滑川〕 天十四33才  
 曙山〔肥前唐津〕 弘二60ウ  
 如山〔加賀金沢〕 弘一7ウ  
 如々庵〔豊後西山〕 天十三63ウ  
 如松〔陸奥南部山〕 天十四28ウ  
 弘三52ウ  
 如笑〔雨柳〕〔筑前博多〕 天十四57ウ  
 64才 64ウ 弘一57才 嘉一35ウ  
 嘉三13ウ  
 如水〔陸奥安積〕〔笹川〕 天十二43ウ  
 天十三53ウ 天十四25ウ  
 弘二12才  
 如水〔山城〕 天十四16才  
 如水〔陸奥箱館〕 天十四27ウ  
 如水〔備後尾道〕 天十四78才  
 如水〔肥前〕 嘉一42ウ  
 如水〔越後〕 嘉三18ウ  
 如醉〔越前〕 弘二38才 弘三16ウ  
 如静〔越中〕 弘三22ウ  
 如積〔越前敦賀〕 天十二19才  
 天十三27才 弘二37ウ 弘三16ウ  
 如仙〔周防〕 嘉一25才  
 助宣〔武蔵江戸〕 弘二5ウ  
 茹草〔遊歴〕 嘉一61ウ  
 如竹〔筑前〕 天十三10才

如竹〔陸奥松前〕 弘四十四才  
 杼薦〔出雲猪ノ目〕 天十四八八才  
 如朝〔淡路榎並〕 天十二二九才  
 天十三三九ウ 天十四七六才  
 如的〔豊後〕 天十三六三才  
 初道〔筑前武丸〕 弘一四二ウ 弘三三六才  
 如梅〔近江〕 天十四九四才  
 如風〔武蔵江戸〕 天十四七ウ 20才  
 弘二六才  
 如鳳〔陸奥〕 天十三五三ウ 天十四二七ウ  
 如邦〔備中庭瀬〕 天十四七九ウ  
 如毛〔備前岡山〕 天十三四〇ウ  
 天十四八二才  
 如頼〔若狭／山城〕 天十二四七才  
 天十三六九才  
 如籟〔山城洛〕 嘉一五才 66才  
 如萊〔陸奥津軽〕 天十三二六ウ  
 天十四二六才 弘一二九才 弘二一〇ウ  
 如雷〔大和増口〕 弘二四六ウ  
 徐来〔播磨〕 天十二二六ウ  
 処楽〔肥後隈本〕 天十三一〇ウ  
 天十四四五才 弘一十二ウ 弘四五才  
 6ウ  
 所楽〔越中伏木〕 天十三六五ウ  
 天十四三二才  
 如楽〔陸奥南部山〕 天十四二八ウ  
 弘三三二ウ  
 初六〔能登穴水〕 天十二三八才  
 初六〔肥前〕 天十三三八才  
 初六〔山城洛〕 天十四八才 100才

弘一四六才  
 初六〔筑前〕 天十四六五ウ  
 如流〔伊勢〕 天十二二八ウ  
 如柳〔山城鳥羽〕 天十二四九ウ  
 天十三三二才 55才 天十四四ウ  
 16才 弘一四五才 弘三六二才  
 嘉一六六ウ  
 如柳〔能登〕 天十四二九ウ 弘一六ウ  
 如柳〔肥後二ノ丸〕 弘一五才 弘二一三才  
 弘三三三ウ 弘四二二才 嘉一四五ウ  
 嘉三三ウ  
 如柳〔老岐勝本〕 弘二二二才  
 如蓮〔如連〕〔山城〕 天十四五ウ 18才  
 芝菜〔筑前〕 嘉一三六ウ  
 自来〔山城〕 天十四四才 18才  
 自来〔河内〕 天十四九五ウ  
 二楽〔加賀金沢〕 天十四八九ウ  
 似略〔但馬殿村〕 弘二一七ウ  
 二流〔一流か〕〔筑後〕 弘四三五ウ  
 嘉一三九才 嘉三一一ウ  
 紫鱗〔豊前小倉〕 天十三六才  
 天十四四七才 弘一九才 弘二六九ウ  
 弘三三七才  
 紫嶺〔日向〕 弘三四五ウ  
 心阿〔陸奥〕 弘三五四才  
 信覚〔筑前〕 嘉一三七才  
 真弓〔越中放生津〕 天十三六五ウ  
 弘一五才  
 進牛〔日向〕 弘四三六才  
 真哉〔美作〕 天十二三六ウ

真哉〔佐渡小木湊〕 天十三三三才  
 天十四三六ウ 弘一二九ウ  
 慎斎〔石見〕 嘉一三一ウ  
 森斎〔阿淡〕 嘉一六三才  
 晋山〔佐渡新穂〕 弘一二九ウ 弘三二七才  
 弘四六八ウ 嘉一四ウ  
 申志〔薩摩〕 天十三三ウ  
 晨支〔武蔵江戸〕 天十二二五才  
 天十三二一才 天十四一三才  
 真樹〔陸奥福島〕 弘二六一才  
 晋水〔備前岡山〕 天十二一六才  
 天十三四〇ウ 天十四二才 12ウ 82ウ  
 深水〔出雲松江〕 天十四八七ウ  
 尋尺〔山城洛〕 天十二四〇ウ 58ウ  
 心拙〔備中宮内〕 天十四七九ウ 弘一三八ウ  
 弘二二四ウ  
 辰風〔出雲松江〕 天十四八七ウ  
 仁宝〔武蔵江戸〕 弘二六ウ

す

真哉〔尾張下津〕 弘一三三才 弘二三三才  
 炊酌〔能登鶴飼〕 弘二四〇才  
 水哉 嘉一三ウ  
 翠斎〔伊勢〕 天十二二八才  
 水月〔若狭〕 弘三三六才  
 水月〔播磨龍野〕 天十四八六才  
 翠玉〔大隅〕 弘三三七才  
 翠桂〔若狭〕 天十三二七ウ  
 翠雨〔陸奥松前〕 弘二一〇才 52才  
 水玉〔大隅〕 弘三三七才  
 翠雲〔豊後日田〕 天十二一八才  
 天十四四七才  
 正焉〔肥後天草〕 天十四五一ウ 弘二二八才  
 弘三六一才 弘四三三ウ 嘉一四七才  
 青蝦〔一拍子〕〔山城洛〕 天十二三三才 59才  
 生化〔能登鶴飼〕 天十二二四才 38才  
 天十三三三ウ 天十四七才 12ウ  
 29才 31才 弘一六才 弘二四〇才  
 弘三二一ウ

せ

弘三三八才  
 醉茶〔肥後天草〕 嘉一四六才 嘉三一才  
 10才  
 吹笛〔因幡〕 弘三三二ウ  
 翠圃〔筑前〕 弘三七〇ウ  
 翠葉〔摂津浪花〕 天十二四六才  
 天十三五一才  
 須磨女〔筑前〕 天十四五九才  
 寸松〔肥前五島〕 弘二四七ウ  
 寸松〔大和〕 弘四二七才  
 寸長〔肥前大村〕 天十四六六ウ 嘉一四二ウ  
 寸斗〔近江田川〕 天十三五六才  
 天十四九三ウ 弘二三〇ウ  
 寸馬〔筑前福岡〕 天十四五七ウ  
 寸龍〔肥前平戸〕 天十三九才  
 天十四六九才 70才

せ

青阿〔肥前鎮西客中〕 天十三三八才  
 青雨〔尾張五鬘〕 弘二二三才  
 勢雲〔豊後日田〕 天十二一八才  
 天十四四七才

井峨〔伊予井尻／樋口〕 天十二39才  
 天十四73才 弘一39ウ  
 精雅〔陸奥若松〕 天十四25ウ  
 菁莪〔越後高田〕 天十四36才 弘二22ウ  
 青鷲〔武蔵行田〕 天十四90ウ  
 青雅〔陸奥〕 嘉三16ウ  
 星介〔周防〕 天十二20才  
 星介〔淡路〕 天十二53ウ 天十三14ウ  
 晴涯〔越中〕 弘三23才  
 青鶴〔近江大塚〕 弘二30ウ  
 世岐〔近江〕 天十二47ウ 天十四6才  
 10才  
 成篁〔筑後〕 弘四35才 嘉一39ウ  
 成祇↓成祇  
 星琴〔近江〕 弘三14才 弘四68才  
 正吟〔近江〕 弘三15才  
 生月〔豊後日田〕 弘一16ウ 弘二14ウ  
 嘉一34才  
 井月女↓堆月  
 静湖〔肥前大村〕 天十四66ウ  
 青湖〔越後〕 弘三25ウ 弘四33ウ  
 静古〔豊前〕 嘉一31ウ  
 井梧〔駿河〕 天十三32ウ  
 晴江〔加賀金沢〕 弘一7ウ 弘二59ウ  
 弘三20才 弘四52ウ 嘉一19ウ  
 清高〔豊前小倉〕 弘二69ウ 弘三37ウ  
 弘四49才 嘉一31才  
 清谷〔陸奥〕 嘉三17ウ  
 井左〔撰津浪花〕 天十三52才 弘二34才  
 井左〔肥後隈本〕 弘一13ウ

勢斎〔齊〕〔越中水杉〕 弘二20才  
 弘三22ウ  
 正斎〔越中〕 嘉一18ウ  
 青祇〔山城〕 天十二49才 天十三54ウ  
 青芝〔備前岡山〕 天十四82才  
 井資〔撰津浪花〕 天十四11ウ  
 井柴〔撰津浪花〕 弘二34才  
 成祇〔成祇〕〔山城洛〕 弘三3才 64才  
 弘四56才 嘉三2ウ 34ウ  
 成之〔美作〕 弘三5ウ 弘四67才  
 晴史〔豊後〕 嘉三14ウ  
 清之〔大和〕 弘四27才  
 晴雀〔日向高岡〕 天十四40ウ  
 清女〔撰津〕 弘三58ウ  
 静章〔越中〕 弘四27ウ  
 井水〔下総〕 天十三24才  
 静水〔肥後隈本〕 弘一13ウ  
 生水〔伊勢イケベ〕 天十三31才  
 井翠〔上野〕 嘉一9才  
 清水〔越後〕 弘四33ウ 嘉一18才  
 青水〔播磨〕 弘三5才 弘四25ウ  
 嘉一21才 嘉三29才  
 青々〔陸奥松前〕 弘二27ウ 弘二10才  
 52才  
 井政〔伊予〕 弘四20才  
 星々〔上野〕 嘉三25ウ  
 静泉〔薩摩〕 嘉三4ウ  
 清素〔陸奥白河〕 天十三38ウ  
 青臧〔能登〕 天十三38ウ

青池〔石見浅利〕 天十二54才  
 天十三17才 天十四49ウ  
 弘一22ウ 嘉三22ウ  
 静池〔武蔵〕 嘉一7才  
 井竹女〔撰津浪花〕 天十三51才  
 天十四96ウ  
 静年〔遠江〕 天十三32才  
 青年〔筑後〕 天十二14ウ 嘉一38ウ  
 嘉三11ウ  
 青巴〔丹波成松〕 天十二51ウ  
 天十三34才 天十四54ウ 弘二18ウ  
 青巴〔伊予〕 弘四20ウ 嘉一27才  
 嘉三19ウ  
 正坡〔武蔵鴻巣〕 天十四90ウ  
 正葩〔日向赤江〕 天十二16ウ  
 天十三61才 天十四14ウ 39ウ  
 43才 弘一19才 弘二16才  
 弘三45才 弘四35ウ 嘉一53才  
 嘉三7才  
 青白〔尾張〕 天十二51才 天十三33才  
 静夫〔陸奥須賀川〕 弘二11ウ  
 正甫〔近江小幡〕 天十四15ウ 94才  
 誠甫〔但馬関宮〕 弘二17ウ  
 青圃〔日向〕 嘉一54才  
 青甫〔加賀〕 弘四52才  
 清茂〔丹後〕 天十三35才  
 井眠〔撰津浪花〕 天十三51ウ  
 清民〔陸奥〕 弘三53才  
 青也〔老岐勝本〕 弘一22才 弘三47ウ

政雄〔山城洛〕 天十二2才 56ウ  
 天十三1ウ 68才 天十四5才  
 17ウ  
 清友〔佐渡〕 弘四68ウ  
 静遊〔大隅〕 弘四18ウ  
 青藍〔豊後日田〕 弘二43才 弘三60ウ  
 井里〔越中〕 弘三24才  
 井流〔上野碓氷〕 弘二8才 弘三57ウ  
 井柳〔撰津浪花〕 弘二34才  
 清流〔近江〕 嘉一63才  
 勢良〔山城洛〕 天十四99才  
 清良〔武蔵〕 嘉一7ウ  
 青和〔武蔵江戸〕 天十四21才  
 弘二6ウ 弘三50ウ  
 世外〔紀伊若山〕 弘一40ウ 弘二44才  
 弘三11才  
 碩宇〔越後〕 弘四33ウ  
 石燕〔但馬西温泉〕 弘一34ウ  
 石賀〔陸奥〕 嘉三16ウ  
 石雅〔肥後天草〕 嘉一47ウ  
 石外〔筑前福岡〕 天十二44ウ  
 天十四58才 弘二36ウ  
 石外〔武蔵〕 天十三23才  
 石外〔山城嵯峨〕 弘一46才 弘三63才  
 弘四56ウ 嘉一4ウ 66ウ  
 嘉三3才 36才  
 石外〔上野〕 嘉三25才  
 石狂〔肥前〕 天十三13ウ  
 赤彦〔肥前大村〕 天十四67才  
 石斎〔伊勢内宮〕 天十三31才

石菜〔三河岡崎〕 弘一31ウ  
 碩志〔備中総社〕 天十四78ウ  
 勢起女〔せき女〕〔筑前〕 嘉一35ウ  
 嘉三13ウ

石樵〔陸奥〕 嘉三17ウ  
 赤城〔陸奥一ノ関〕 天十四25才  
 碩水〔山城洛/遊歴〕 弘二64ウ

嘉一61才 嘉三32才

石声〔三河〕 弘三48ウ

石声〔武蔵〕 嘉一7ウ

石禪〔近江〕 天十二52ウ

石禪〔加賀金沢〕 天十三37ウ

天十四89ウ 弘一7ウ

石嗽〔近江〕 天十三56ウ 69ウ

石鼎〔伊勢川崎〕 天十二9才

天十三31ウ 弘二31ウ 弘四2ウ

石亭〔越後〕 弘二2才 22才 弘三26才

石稻〔肥前島原〕 天十四68才

石堂〔阿波/遊歴〕 弘三8ウ 弘四21才

嘉一4才 28才 嘉三33才

尺歩〔筑前〕 弘三34ウ 弘四16ウ

嘉一35ウ

石圃〔肥前〕 嘉一43ウ

尺木〔山城洛〕 弘一3才 48才

弘二3才 63才 弘三2才 65才

弘四1ウ 54ウ 嘉一2才 3ウ

64ウ 嘉三1ウ 34才

石雄〔近江草津〕 天十三56ウ 69ウ

天十四94ウ 弘二30ウ

石友〔豊後〕 弘四19ウ 嘉一34才

石羊〔筑前〕 嘉一36ウ  
 赤鱗〔筑後久留米〕 天十二1才 14ウ  
 天十三16ウ 天十四49才

弘一21ウ 嘉一39才

石恋〔但馬西温泉〕 天十四56才

石露〔豊後〕 弘二42ウ

節羽〔近江〕 天十三58才

雪塙〔備後〕 嘉一23才

雪映 天十四9才

雪英〔播磨高砂〕 天十四85ウ

雪屋〔山城城南〕 天十三54ウ

天十四98才

雪荷〔安芸広島〕 天十四77才

石火〔肥後〕 弘四22才

節外〔近江高島〕 天十二47ウ

天十四94ウ 弘一32才 弘二31才

57ウ 弘三13ウ 弘四42才

嘉一63ウ

石卷 嘉三2ウ

雪魚〔摂津〕 天十三59ウ

雪橋〔薩摩〕 天十二5ウ

雪橋〔大隅〕 弘四18ウ 嘉一51ウ

嘉三5ウ

雪彦〔越後西海〕 天十四34ウ

雪江〔越後西海〕 天十四34ウ

雪耕〔肥前〕 弘四47才 嘉三11才

雪衡〔山城〕 弘三65ウ

雪斎〔肥後天草〕 嘉三10才

雪棧〔豊前〕 嘉一32ウ

雪山〔武蔵〕 天十三59才

雪山〔能登七尾〕 天十四29ウ

雪山〔豊後〕 弘三40ウ

節之〔播磨〕 天十二5ウ 天十三15才

雪集〔備前岡山〕 天十四83才

雪松〔讃岐〕 嘉一27ウ

雪杖〔加賀〕 嘉三26ウ 36ウ

雪人〔大隅加治木〕 天十三4ウ

天十四39才 弘一18才 弘二48才

弘三46才 弘四18ウ 嘉一51才

雪筌〔行脚〕 天十四70才

雪楚〔備前松山〕 天十四79ウ

雪村〔豊後日田〕 天十二18才

天十三62ウ 天十四15ウ 46才

弘一16才 弘二15才 弘三40才

嘉一33ウ 嘉三14才

雪茶〔肥後隈本〕 天十三10ウ

天十四45才 弘一12ウ 弘二70ウ

72ウ 弘四4ウ 6ウ 7ウ

嘉一48才 嘉三序1ウ 8才

雪中〔加賀〕 弘三20才

雪頂〔安芸広島〕 天十四15ウ 76才

弘一37才 弘二36才

雪朝〔長門〕 嘉三21才

雪汀〔安芸竹原〕 天十四77ウ

雪兔〔肥後二ノ丸〕 弘一14ウ 弘二13才

弘三43才

雪戸〔豊前〕 嘉一31才

雪堂〔下野足利〕 天十四37才

雪洞〔近江〕 弘三13ウ

雪童〔肥後〕 弘四37ウ

雪夫〔越後〕 嘉一16ウ

雪峰〔讃岐大原野〕 天十四74才

雪也〔越前〕 天十三27才

雪也〔山城綴喜喜賢寺〕 弘一42ウ

弘二61ウ

世栗〔淡路下堺〕 天十三59ウ 弘一40ウ

専阿〔山城〕 弘三63ウ

千蔭〔能登七尾〕 天十三38才 弘二40才

弘三59ウ

仙羽〔播磨〕 弘四25才 嘉一21才

千鳥〔美作〕 弘三5ウ 弘四67才

仙菓〔三河岡崎〕 天十四90ウ

瞻峨〔周防〕 天十四50ウ 嘉一25ウ

仙雅〔肥前諫早〕 弘一11ウ

仙駕〔筑後〕 弘四35才 嘉三11才

川会〔薩摩〕 嘉三4才

千干〔肥後隈本〕 天十二52才

天十三10ウ 天十四45才

弘一12ウ 弘二61才 71才

弘三66ウ 弘四4ウ 6才

嘉一2ウ 47ウ 嘉三7才

蟾居〔伊予〕 弘三9ウ

泉桂〔長門伊佐〕 天十四72才

泉砂〔筑前武丸〕 天十四59才

弘一21才 弘二36ウ 弘三36ウ

嘉一35ウ

川砂〔山城洛〕 天十二55才

船斎〔摂津浪花〕 天十二43才

洗枝〔伊勢〕 天十三62才

染思〔肥後〕 弘一13ウ 弘三44才

仙至〔越中〕 嘉三25ウ  
 染志〔肥後〕 嘉一49ウ  
 千児〔出羽〕 弘四33才  
 洗耳〔出羽〕 弘四32ウ  
 洗耳〔豊前〕 弘四49才 嘉一31ウ  
 洗車〔越中〕 弘四27ウ  
 千春〔肥後隈本〕 弘一13才  
 千嶂〔肥後隈本〕 弘一13才 弘四4ウ  
 7才 嘉三8才  
 千丈〔丹波亀山〕 天十三33ウ  
 天十四2才 13才 54才 弘四41才  
 千丈〔陸奥松前〕 弘二9ウ 52才  
 弘四13ウ 15才  
 千翠〔若狭遠敷〕 天十三53ウ  
 天十四89才  
 千遂〔若狭〕 弘三16ウ  
 染水〔肥後〕 弘四6ウ  
 儼生〔肥後〕 天十三11ウ  
 扇々〔陸奥郡山〕 天十三25ウ  
 天十四26才 弘二11才 弘三52才  
 弘四24ウ  
 菱々〔陸奥江差〕 弘一28ウ  
 仙巢〔近江勢多〕 弘一32ウ 弘二3才  
 千草〔近江〕 天十四10才  
 川苔〔出雲大社〕 天十四88才  
 泉智〔筑前武丸〕 天十四59才 弘一21才  
 千地〔肥後〕 嘉三7ウ  
 洗竹〔肥前平戸〕 天十三9才  
 天十四69才  
 千竹〔能登〕 天十三23ウ

泉長〔出羽〕 弘四32ウ  
 千椎〔若狭市場〕 弘二19ウ  
 川丁〔越後亀田〕 弘二23ウ  
 泉貞女〔大和〕 弘三59ウ  
 千奈〔肥後隈本〕 弘一13才 弘四5才  
 7才  
 仙風〔近江吉地〕 天十三56才  
 千風〔播磨〕 天十二6ウ  
 千風〔肥後天草〕 嘉一47ウ  
 泉歩〔筑前武丸〕 天十四59才 弘二20ウ  
 弘三36才  
 仙歩〔山城洛〕 天十二2ウ 57才  
 天十三2ウ 68ウ 70ウ  
 天十四3才 18ウ 弘一1ウ 45才  
 弘二3ウ 63ウ 弘三63ウ  
 仙峰〔出雲松江〕 弘一35ウ  
 前峰〔陸奥〕 天十三25才 弘三51ウ  
 先鳴〔大和上市〕 弘二47才  
 千融〔近江〕 天十二48才 天十三57ウ  
 仙遊〔但馬十戸〕 弘二17ウ 弘三30ウ  
 扇要〔武蔵江戸〕 天十四20ウ  
 洗来〔山城〕 天十四16才  
 仙梨〔筑前〕 弘三70才  
 釜吏〔武蔵江戸〕 弘四31才  
 泉里女〔陸奥〕 弘三51ウ  
 千籠〔美作〕 弘四67才  
 川籠〔肥後〕 弘四38才  
 荃涼〔山城洛〕 天十二1ウ 56才  
 天十三67才 天十四1ウ 17才  
 弘一1ウ 43ウ 弘二1才 62才

弘三1才  
 染露〔肥後隈本〕 弘一14才 弘三44才  
 嘉一49ウ  
 船路〔撰津伊丹〕 天十二45才  
 素因〔美濃清須〕 天十四44才  
 疎雨〔筑前福岡〕 天十四57才  
 草乙〔撰津浪花〕 天十四97ウ  
 草雨〔陸奥田名部〕 天十四27才  
 双鳥〔日向〕 嘉一52ウ 54ウ 嘉三6ウ  
 草悦〔出雲大社〕 弘一35ウ 弘二26ウ  
 草佳〔大隅加治木〕 天十二5ウ  
 天十四39才 弘一18ウ 弘二48才  
 弘三46才 弘四19才 嘉一63ウ  
 草蓋〔若狭〕 天十二47才 天十三28才  
 桑亀〔豊前〕 弘二70才 弘三38才  
 弘四50才 嘉一32ウ  
 叢菊〔山城城南〕 天十四98ウ  
 蒼虬〔山城洛/古人〕 天十二1才  
 55才 天十三1才 66才  
 蒼丘〔陸奥〕 弘三51ウ 弘四24才  
 草居〔阿波〕 弘四20ウ  
 草据〔陸奥箱館〕 天十四27才  
 草吟〔備前岡山〕 天十四83ウ  
 草桂〔薩摩〕 天十三5才  
 宗慶〔加賀〕 弘四51ウ  
 草月〔播磨〕 嘉一20ウ  
 蛸月〔因幡〕 弘三32ウ

桑湖〔陸奥福島〕 天十四24才 弘二11才  
 弘三52才  
 宗古〔陸奥〕 天十三25ウ 天十四25ウ  
 宗古〔遊歴〕 弘三61ウ  
 草骨〔近江勢多〕 弘一32ウ  
 宗三〔越後中条〕 天十二36才  
 天十三29才 天十四33ウ 弘二22才  
 弘四33才  
 双山〔近江〕 天十二40才  
 宗二〔陸奥会津〕 天十三26才  
 天十四25ウ  
 双樹〔肥前平戸〕 天十三9才  
 天十四69才  
 操女〔陸奥松前〕 弘二9ウ 弘四13ウ  
 桑樵〔肥後〕 弘四37ウ 嘉一50才  
 漱石〔豊後〕 天十三63ウ  
 宗雪〔伊予松山〕 弘二41才 弘三9才  
 嘉一27ウ  
 蒼雪〔山城洛〕 嘉一3ウ 64ウ  
 嘉三3才 35才  
 双泉〔越後〕 弘四34ウ 嘉一15ウ  
 滄川〔大隅〕 嘉一52才 嘉三5才  
 曹村〔越後〕 弘三25才 弘四33ウ  
 莊蝶〔備前岡山〕 天十四82才  
 草廷〔日向〕 嘉一54才  
 宗納〔因幡〕 弘三32才  
 桑坡〔備中連島〕 天十二15ウ  
 天十三40才 天十四79才 弘一38才  
 52才 53ウ 弘二24才 弘三6ウ  
 嘉一23才

叢富〔山城和東〕 天十三54才  
 桑夫〔大和丹波市〕 弘二44ウ 弘四27才  
 宗眠〔大和上市〕 弘二46ウ 弘三59ウ  
 草眠〔薩摩〕 嘉三4ウ  
 曾夢〔播磨〕 天十二5ウ  
 窓夢〔筑前博多〕 弘二60才 弘三34ウ  
 弘四16ウ  
 送夢〔但馬〕 嘉三31ウ  
 蒼蠅〔備前岡山〕 天十四82才  
 草陽〔山城洛〕 弘三63才 弘四2才  
 54才 嘉一66ウ 嘉三3ウ 35ウ  
 巢笠〔下総〕 弘一26ウ  
 草良 天十四7ウ  
 疎影〔伯耆〕 天十二16ウ 天十三36ウ  
 そへ女〔越後亀田〕 弘二24才  
 素日〔摂津浪花〕 弘一41才 弘二34ウ  
 弘三58才  
 素測〔近江日野〕 天十三57才  
 素屋〔摂津浪花〕 天十二45ウ  
 天十三51ウ 天十四11ウ 弘一41才  
 弘二33ウ 弘三57ウ 弘四42ウ  
 嘉一57才  
 素外〔備中惣社〕 天十三40才  
 天十四78ウ 弘二24ウ  
 素鶴〔筑前博多〕 天十四59ウ 62ウ  
 63ウ 64ウ  
 素鶴〔肥後〕 弘四4ウ  
 素休〔肥前平戸〕 天十四69ウ 70才  
 蘇丘〔肥後〕 弘四38ウ  
 素橋〔伊予〕 弘四19ウ

楚曉〔磯曉〕〔肥後〕 弘三44才  
 弘四38才  
 素曉〔肥前大村〕 弘一11才  
 素玉〔加賀津幡／在京〕 弘一2才  
 8才 弘二39才 弘三1才 19才  
 弘四51才  
 素琴〔山城淀〕 天十三54ウ  
 素筠〔石見川本〕 弘一22ウ  
 素君〔安芸広島〕 弘一37才  
 素兄〔周防宮市／山城〕 天十二36ウ  
 弘一37才 弘二2ウ 62ウ  
 弘四53才  
 素月〔肥前大村〕 天十三7ウ  
 天十四66ウ 弘一10才 弘四46才  
 嘉三9才  
 鼠月〔上野〕 嘉一10才  
 素吾〔加賀金沢〕 天十四89ウ  
 楚江〔武蔵成田〕 弘一24ウ  
 素行〔武蔵〕 天十二25ウ  
 素行〔加賀金沢／近江〕 弘一7ウ  
 弘二1ウ 38ウ 弘三20才  
 弘四1ウ 53才  
 素行〔遊歴〕 嘉一61ウ  
 素行〔越後〕 嘉三19才  
 素貢〔肥前〕 天十三8才  
 祖郷〔筑前〕 天十二44ウ  
 祖郷〔武蔵江戸〕 天十三22才  
 天十四19ウ 21ウ 弘一23才  
 弘二5才 弘三49ウ 嘉一6ウ  
 12ウ 嘉三23ウ

素號〔安芸〕 天十三12才  
 素山〔越前府中〕 天十四100才 弘一9才  
 蘇山〔越後大迎〕 弘二23才  
 蘇山〔遊歴〕 嘉一62ウ  
 楚山〔肥後〕 嘉三7ウ  
 曾洲〔越中〕 弘四27ウ  
 素充〔伊勢〕 天十二8ウ  
 楚蕉〔山川〕〔近江高島〕 天十三序ウ  
 3才 64ウ 天十四94ウ  
 楚讓〔近江藁園〕 天十三57ウ  
 蘇水〔肥後〕 嘉一46才  
 素静〔馬窓〕〔肥前平戸〕 弘二27ウ  
 弘三41ウ 弘四47ウ 嘉一42才  
 楚夕〔山城洛〕 天十二58才  
 素石〔遠江石岡〕 天十三32才  
 天十四38才  
 素石〔筑前〕 弘四17ウ  
 素席〔陸奥箱館〕 弘四16ウ  
 素雪〔紀伊〕 弘三11才 弘四48ウ  
 素仙〔近江〕 弘四42才  
 素仙〔佐渡〕 嘉一15ウ  
 素扇〔肥後〕 嘉一45才 嘉三9才  
 素竹〔近江田井〕 天十二52ウ 弘一57才  
 弘二30才 弘三14ウ  
 蘇澄〔伊予〕 弘四19ウ  
 蘇鉄〔加賀〕 天十三37才  
 楚南〔下総〕 天十三24才  
 素波 弘二2才  
 素坡〔越前府中〕 天十四89才 弘一9才  
 弘二38才 嘉三26ウ

素白〔山城洛〕 弘一45ウ  
 楚珀〔備前〕 弘三6才  
 粗文〔武蔵〕 天十三22才  
 素文〔加賀〕 天十二35才 天十三37才  
 素文〔陸奥〕 天十三25才 弘三51ウ  
 素峰〔山城洛〕 弘一46ウ  
 素峰〔陸奥松前〕 弘二10才 51ウ  
 弘三3ウ 56才 弘四8ウ 14才  
 嘉一11ウ 嘉三16才  
 素峰〔肥前長崎〕 弘二28ウ  
 素木〔日向飢肥〕 天十四40才  
 弘一18ウ 弘二15ウ 弘三45才  
 弘四36才 嘉一53ウ  
 素僕〔越前〕 天十二19ウ  
 素卜〔備前岡山〕 弘一3才 弘二25ウ  
 素名〔但馬温泉〕 弘二61才  
 素友〔山城淀〕 天十二49才 天十三55才  
 弘一43才 弘三62才  
 素悠〔淡路〕 天十二29才  
 素羅〔肥前島原／神代〕 天十二26ウ  
 天十四68ウ 弘一12才 弘二28才  
 弘三41才 弘四50ウ 嘉一44才  
 嘉三10ウ  
 素来〔丹波成松〕 天十二54ウ  
 天十三34才  
 素来〔上野碓氷／岩水〕 天十四37才  
 弘一26ウ 弘三57才  
 素六〔讃岐高松〕 天十三18才  
 天十四8才 74ウ  
 素六〔肥前〕 弘四47才

素綾〔肥後隈本〕 弘一13才 弘四4ウ

7才

祖量〔筑前〕 天十三10才

素涼〔播磨〕 天十四87才 弘二35ウ

素隴〔武蔵〕 天十三22才

鼠梁〔肥後〕 弘四70才

尊阿〔陸奥〕 弘三53ウ

巽池〔山城洛〕 天十三69才

た

太乙〔摂津伊丹〕 天十四95ウ 弘一41ウ

弘二35才 弘三58ウ 嘉一57才

太乙〔武蔵江戸〕 弘二6才

岱雲〔肥前長崎〕 天十二26才

天十三3ウ 13才 天十四67ウ

弘一11才

大桜〔陸奥一ノ関〕 天十四25才

太応〔出雲〕 天十二17ウ

大可〔越後亀田〕 弘二23ウ 嘉一16才

大経〔越後〕 嘉三18ウ

堆月〔井月女〕〔肥後〕 弘一14才

嘉一45才 49ウ 嘉三9才

大狐〔蝶二〕〔播磨〕 天十二6ウ

天十三59ウ 天十四87才

弘一39才 弘二35ウ

大恒〔越後〕 天十三29ウ

対山〔筑前〕 天十三64才

大松〔武蔵江戸〕 弘一23ウ

岱上〔越中高丘〕 弘二21才

太素〔肥前大村〕 天十三7ウ

天十四66ウ 弘一10才

太素〔泰蘇〕〔大隅加治木〕 弘一17ウ

弘二48才 弘三46ウ 弘四18ウ

嘉三6才

太竹〔陸奥一ノ関〕 天十四25才

太諷〔山城和束〕 天十二49ウ

天十三54才

大椿〔山城〕 天十三68才

大戸丸〔日向〕 弘三45ウ

岱年〔山城洛〕 天十二55才 天十三66ウ

天十四1ウ 16才 弘一44才

弘二4才 弘三62ウ 弘四53ウ

嘉一64才 嘉三35ウ

大年〔丹波亀山〕 天十四2才 13才

54才 弘四41才 嘉一30才

苔梅〔豊前〕 天十三6ウ

大梅〔武蔵〕 天十二25才

大莫〔山城〕 弘四2ウ 57才

大莫〔武蔵〕 嘉一7ウ

岱美〔山城洛〕 天十二2ウ 55ウ

天十三1ウ 66ウ 天十四2才

17才 弘一46ウ 弘三1ウ 65才

弘四4才 55ウ 嘉一1ウ 3才

65才 嘉三1才 34才

大富〔周防宝積〕 天十四50才

退歩〔摂津伊丹〕 天十二44ウ

太甫〔加賀〕 天十二35ウ 天十三37才

大夢〔加賀金沢〕 天十四89ウ 弘一7才

弘二39才 弘三19才 弘四51才

嘉一19才 嘉三26才

大里〔肥前〕 天十三9才

大利〔肥前平戸〕 天十四69才

太六〔備中〕 天十二15才

大鈴〔丹後〕 天十三35才

苔路〔肥前大村〕 天十四67才 弘一11才

弘四46ウ

対略〔豊前〕 弘三37才 弘四49ウ

嘉一32才

大樓〔豊後〕 弘三60ウ

奈鶴〔肥後隈本〕 弘一14才

駝岳〔日向〕 嘉一52ウ 嘉三6ウ

たか〔豊後日田〕 弘二43ウ 弘三60才

卓崖〔近江〕 天十三64ウ

棹江〔加賀〕 天十三37才

卓尔〔備中笠岡〕 天十三3才 18才

天十四78ウ 弘一38才 嘉一22ウ

卓洲〔越後〕 天十三29ウ 天十四7才

14ウ

卓丈〔加賀〕 天十二35才

卓丈〔山城洛〕 天十三4才 19ウ

天十四2ウ 17才 弘一3ウ 46ウ

卓池〔三河岡崎/遠江〕 天十二51才

天十三32才 天十四90ウ

弘一31才 弘二33ウ 弘三48ウ

沢雄〔相模〕 嘉三24才

卓立 嘉三3才

卓洌〔越後新潟〕 天十四36才

卓路〔肥後天草〕 嘉一46ウ

卓露〔肥後〕 嘉一44才 嘉三9ウ

卓郎〔朗/良〕〔武蔵江戸〕 弘二6才

弘四32才 嘉一6才 12ウ

嘉三23ウ

丈よし〔武蔵熊谷〕 弘一25ウ

他石〔備中岡田〕 天十四79才

たつ女〔遠江片瀬〕 天十三32ウ

天十四38才

達夫〔肥前〕 弘四47才

奈梅〔摂津浪花〕 天十三51ウ

たまき女〔安芸広島〕 天十四76ウ

たみ女〔陸奥須賀川〕 弘二11ウ

奈民〔越中水杉〕 弘二20才

為女〔薩摩〕 嘉三4才

多代女〔多与〕〔陸奥南部〕

天十四27才 弘三53才

太良彦〔武蔵越谷〕 弘一24才 弘二7ウ

弘三50ウ

多里女〔陸奥南部山〕 天十四28ウ

弘三52ウ

蛇鱗〔若狭〕 嘉一59ウ

多朗〔山城洛〕 天十二58才

太朗〔近江〕 弘三13才

淡雅〔肥前〕 天十二26ウ

丹丘〔阿波〕 嘉一28才

旦溪〔肥後〕 嘉一45ウ 嘉三8ウ

探斎〔伊勢四日市〕 天十四92ウ

旦斎〔尾張〕 天十二51才

旦松〔遠江〕 弘三49才 弘四32才

探水〔讃岐丸龜〕 天十三18才

天十四73ウ

淡水〔若狭西津〕 天十二46ウ

天十三27ウ 天十四89才 弘二19才

弘三16才

淡水〔撰津〕 天十三52ウ

淡水〔肥後 天草〕 嘉一46ウ

淡水〔陸奥〕 嘉三18才

淡石〔肥後〕 天十三11ウ 弘四38才

淡節〔山城 洛〕 天十四6才 19才

弘一3才 46ウ 弘二64ウ

弘三65ウ 弘四1才 54ウ

嘉一2才 5ウ 65才 嘉三3才

36才 37ウ

淡叟〔撰津 浪花〕 天十二46才

天十三52才 天十四11ウ

淡亭〔塚本〕〔備中 笠岡〕 天十二15才

天十三18才 天十四序3ウ 12ウ

7ウ 弘一38才 弘二24ウ

弘三7才 嘉一22ウ

淡流〔若狭西津〕 弘二19才

丹嶺〔加賀大聖寺〕 天十二35ウ

天十三1ウ 37ウ 天十四89ウ

弘二39ウ 弘三18才 弘四53才

嘉一19ウ 嘉三26ウ

ち

池蛙〔伊勢 二本木〕 天十二50才

池蛙〔但馬〕 弘三31ウ

千枝女〔武蔵 江戸〕 天十四20ウ

千可也女〔肥前〕 弘四47才

ちから〔越後 亀田〕 天十二52ウ

弘二23ウ 嘉三18才

遅牛〔日向 猷肥〕 天十四40才 弘一18ウ

弘二15ウ 弘三45才 嘉一53ウ

竹院〔淡路〕 天十三40才

竹雨〔肥前 長崎〕 天十四68才

竹雨〔淡路 机浦〕 天十四75ウ

竹塙〔能登 七尾〕 天十四29ウ 弘一7才

竹烟〔上野〕 天十三26ウ

竹賀〔伯耆〕 天十三36ウ

竹涯〔近江〕 天十三57ウ

竹巖〔肥後〕 天十三11才

竹丸〔肥後 二ノ丸〕 天十三11才

天十四45ウ 弘一15ウ 弘二14才

弘三44才 67ウ 弘四23才

嘉一46才

竹溪〔讃岐〕 嘉一60ウ

竹月〔肥後 二ノ丸〕 天十三11才

天十四45才 弘一14ウ 弘二12ウ

弘三1才 42ウ 66ウ 弘四6ウ

21ウ 嘉一44ウ 嘉三8才

竹古〔肥後 二ノ丸〕 天十四45才

弘一14ウ 弘二12ウ 弘三42ウ

竹交〔筑前 遊歴〕 弘三61ウ

弘四39才 嘉一35ウ

竹斎〔淡路〕 嘉一29才

竹苗〔阿波〕 弘三8ウ

竹三〔陸奥〕 弘四66才

竹山〔武蔵〕 天十三23ウ

竹扈〔石見 川本〕 天十三17才

天十四49ウ

竹枝〔越後 高田〕 天十三29ウ

竹詩〔越後 長丘〕 天十三64才

竹之〔日向〕 天十四14ウ

竹司〔越後〕 弘二22才 弘三26才

嘉一16ウ

竹二〔長門〕 嘉三21ウ

竹舎〔長門 下関〕 天十四72ウ

竹樹〔陸奥〕 天十三53ウ

竹秋〔豊後〕 弘三39才

竹丈〔能登〕 天十二37ウ

竹真〔陸奥〕 嘉一10ウ

竹人〔陸奥 一ノ関〕 天十四24ウ

竹人〔大和 十日市〕 弘二47才

竹晴〔大和〕 嘉三32才

竹哉〔虫二〕〔大隅 加治木 古人〕

天十二5ウ 天十三4ウ

天十四39ウ 弘一18ウ 弘二48ウ

弘三47才 弘四19才 嘉一51ウ

竹青〔大和 鷲家口〕 弘二45ウ

竹泉〔肥後〕 弘三44才

竹叟 天十二3ウ

竹台〔出雲 松江〕 天十四88才

竹亭〔備前 岡山〕 弘二25ウ 嘉一22才

竹徒〔豊後 日田〕 天十三62ウ

天十四46ウ 弘二43ウ

竹堂〔土佐〕 天十二38ウ 天十三39才

竹波〔筑後 久留米〕 弘二37ウ

竹坡〔但馬〕 弘四48才

竹坡〔丹波〕 嘉一30才

竹苞〔日向 赤江〕 天十二16ウ

天十三60ウ 天十四14ウ 40才

43才 弘二16才 弘三45才

弘四35ウ

竹友〔肥前 長崎〕 天十三13才

天十四68才

竹邑〔豊後〕 天十三63ウ

竹里〔遠江 片瀬〕 天十三32ウ 43才

天十四38才

竹里〔筑前 福岡〕 天十三53才

竹寥〔筑前〕 嘉一36ウ

竹輪〔佐渡〕 弘三27ウ

竹呂〔筑前 武丸〕 弘一42ウ 弘三36才

雉溪〔肥後 隈本〕 天十三53才 弘一12ウ

弘四5才 6ウ 7ウ 嘉一48才

嘉三7才

知骨〔播磨〕 嘉三28ウ

稚笑〔但馬 香住〕 弘二17才

池昔〔肥後〕 嘉三7ウ

知雪〔武蔵 江戸〕 天十四21才

遅足〔筑前〕 天十二53ウ

池苔〔肥後〕 弘四6才

知堂〔撰津 浪花〕 天十四96ウ

千年磨〔肥後〕 嘉三7ウ

池白〔出雲〕 弘三33ウ

池白〔筑前〕 天十三47才 47ウ 50ウ

天十四59ウ 63ウ 弘三35才

弘四39才 嘉一36才

千ふね〔千船〕〔長門下関〕 天十三5ウ  
 50才 天十四72ウ 弘一36ウ  
 遅明〔肥前大村〕 天十四67ウ  
 茶一〔伊予〕 嘉一27才  
 茶烟〔薩摩都城〕 天十四38ウ 弘二69才  
 嘉三4才  
 茶曉〔喜久良〕〔武蔵〕 弘三49才  
 茶岡〔三河／遊歴〕 弘三48ウ  
 嘉一4ウ 62ウ 嘉三33才  
 茶三〔陸奥坂ノ下〕 天十三26才  
 天十四23ウ 弘二23才 弘三55才  
 茶山〔越後見付〕 天十三30才  
 天十四36才 弘一9才 嘉一17才  
 茶山〔陸奥〕 弘三55才  
 茶静〔武蔵〕 天十三21ウ 嘉一6ウ  
 茶匆〔出雲松江〕 天十四87ウ 弘一35才  
 茶来〔茶表か〕〔日向〕 天十四40才  
 弘三44ウ 弘四35ウ 嘉一53才  
 茶楽〔河内〕 天十三54才  
 知宥〔加賀〕 天十三37ウ  
 仲衡〔日向〕 嘉一53才  
 虫二↓竹哉  
 忠雄〔但馬網場〕 弘二17才 弘三31ウ  
 嘉一30才  
 樗〔越前〕 弘三16ウ  
 葛雨〔近江坂本〕 天十二50ウ  
 天十三1才 56才 天十四94ウ  
 聴雨〔肥後〕 天十三10ウ 弘四37ウ  
 聴洋〔播磨〕 弘三5才 弘四26才  
 嘉一1才 20ウ 嘉三29才

重奥〔撰津〕 天十三59ウ  
 潮花〔長門〕 天十二4ウ 天十三6才  
 45ウ 50才  
 葛丸〔播磨日延〕 天十四86ウ  
 鳥吟〔松笠〕〔武蔵江戸〕 天十三21ウ  
 天十四20ウ 21ウ 弘一23ウ  
 弘二5ウ 嘉一7才  
 蝶九 天十四3ウ  
 潮月〔武蔵神奈川〕 弘一26才 弘二7才  
 弘三49才 弘四31才 嘉一8才  
 嘉三23才  
 澄月〔肥後〕 弘四22才  
 長瓠〔周防〕 嘉一24才  
 葛湖〔豊後〕 弘三60ウ  
 長哉〔陸奥郡山〕 天十三25ウ  
 天十四26才  
 晁采〔松花〕〔山城洛〕 弘一47ウ  
 弘二2ウ 62ウ  
 葛山〔筑前武丸〕 天十四59才  
 弘一21才 弘三36ウ  
 蝶二↓大瓠  
 鳥車〔肥前〕 天十二27ウ  
 葛守〔武蔵〕 天十三21ウ  
 朝水〔伯耆〕 天十二17才 天十三36ウ  
 聴水〔肥後〕 嘉一45才 嘉三8ウ  
 超然〔撰津浪花〕 天十四11ウ  
 蝶飛〔筑前博多〕 天十四60才 63ウ  
 樗屋〔播磨〕 弘四25ウ  
 著莪〔越後〕 嘉三18ウ  
 直丸〔撰津浪花〕 天十三51ウ

直史 天十三43ウ  
 直道〔撰津兵庫〕 弘一41ウ  
 樗月〔肥前〕 弘三42才  
 儲香〔淡路〕 天十四76才 弘一40ウ  
 樗山〔伊勢山田〕 天十三61才 弘一30ウ  
 樗山〔肥前大村〕 天十四67ウ  
 樗山〔山城洛〕 弘四54ウ 嘉三35才  
 著石〔遊歴〕 嘉三32ウ  
 芋川〔筑後久留米〕 天十四49才  
 弘一21ウ  
 樗太〔撰津伊丹〕 天十二44ウ  
 樗田〔筑前福岡〕 天十四57ウ  
 樗堂〔山城洛〕 天十二3ウ 57才  
 樗風〔近江〕 天十三64ウ  
 遅流〔武蔵江戸〕 天十二25ウ  
 天十三22ウ 天十四19ウ 弘二5ウ  
 弘三50才 弘四31ウ 嘉一7才  
 嘉三23ウ  
 知隣〔筑後〕 嘉一40才  
 椿歳〔筑前〕 弘三34ウ 弘四17才  
 椿斎〔周防〕 嘉一24才  
 椿水〔丹波野々垣〕 天十三34ウ  
 天十四54ウ  
 椿年〔播磨〕 天十三15才 天十四14才  
 椿呂〔陸奥松前／箱館〕 天十三26ウ  
 天十四26ウ 弘一28才 弘二9才  
 弘四16ウ 嘉一14才

つ  
 都岐雄〔伊勢四日市〕 天十二9才  
 天十三31ウ 天十四13ウ  
 つや女〔陸奥〕 天十三24ウ  
 て  
 鼎〔山城〕 天十四5ウ 18才  
 停雲〔撰津浪花〕 天十四96ウ  
 貞我〔山城洛〕 嘉三35才  
 貞丸〔備後〕 弘三7才  
 定丸〔撰津浪花〕 天十四96才  
 泥亀〔筑前〕 弘三70ウ  
 亭曉〔備中庭瀬〕 天十四80才  
 鼎湖〔越後新潟〕 天十三29ウ  
 天十四36ウ  
 鼎湖〔陸奥〕 弘三55才  
 鼎湖〔撰津〕 嘉一57才  
 鼎左〔撰津浪花〕 天十二12才 45ウ  
 天十三51才 天十四11ウ 弘一41才  
 弘二33ウ 弘三57ウ 弘四42ウ  
 嘉一56ウ 嘉三28才  
 貞哉〔山城〕 天十四4ウ 16才  
 定山〔伊予〕 嘉一27才  
 貞士〔肥前長崎〕 弘二47ウ  
 定尔〔越中水橋〕 天十四33才 弘一5才  
 貞少女〔大和鷲家口〕 弘二45才  
 丁知〔武蔵〕 天十二25才 天十三22ウ

泥中〔淡路〕 天十二29ウ 天十三14オ

泥尾〔筑前〕 天十二28ウ

泥尾〔能登飯田〕 天十四29オ 弘三21オ

汀晃〔陸奥〕 天十三24ウ

鼎峰〔近江〕 天十二28ウ

鼎峰〔紀伊高野〕 天十三11ウ 弘一56ウ

定本〔阿淡〕 嘉一63オ

丁酉〔陸奥二本松〕 天十二4ウ

泥蓮〔備前岡山〕 天十四83オ

適齋〔尾張名古屋〕 天十三33オ

弘一30ウ

鶴鳥〔山城洛〕 天十四98ウ

鉄牛〔近江〕 弘四68ウ

鉄山〔肥後二ノ丸〕 弘二13オ 弘三43オ

弘四22ウ 嘉一45ウ

傳〔肥前唐津〕 弘二60ウ

田禾〔遊歴〕 嘉一61ウ

天外〔筑前福岡〕 天十四57ウ

田崖〔肥後〕 天十三10ウ

田原〔陸奥松前〕 弘四13ウ

田水〔尾張外崎〕 弘二33オ

田水〔大和〕 弘四27オ

田翠〔武蔵石原〕 天十四92オ

田鼠〔備前岡山〕 天十四82ウ

天年〔陸奥一ノ関〕 天十四25オ

天遊〔武蔵江戸〕 天十二54オ

天十四12オ

天遊〔遊歴〕 嘉一62ウ

と

凍衣〔近江〕 弘三15オ

桐一〔伊勢山田〕 天十二50オ

天十三65オ 天十四13ウ 92ウ

弘一30オ 弘二31ウ

島寅〔近江〕 天十四5オ 10オ

桐雨〔備中〕 天十二15ウ

桐雨〔上野〕 嘉三25オ

桐塙〔備中連島〕 天十四79オ 弘一53ウ

弘二24ウ 弘三7オ 嘉一23オ

東宇〔伊勢川崎〕 天十二9オ

天十三31ウ 天十四92ウ

桃雨〔肥前大村〕 天十三7ウ

天十四67オ 弘一10ウ

桃雨〔播磨〕 嘉三29オ

東雲〔肥後二ノ丸〕 天十三11オ

天十四45ウ

桃雲〔肥後二ノ丸〕 弘一14ウ 弘二12ウ

弘四21ウ 嘉一44ウ

冬英〔越中東條郷〕 弘二20オ 弘三24オ

天十二3オ

桃園〔豊後〕 弘三40オ

桃園〔石見〕 嘉一21ウ

桃筵〔日向〕 弘三45オ 弘四36オ

嘉一53ウ

桃測〔撰津浪花〕 天十二46オ

桃下〔伯耆〕 天十三36ウ

桃下〔加賀〕 弘三17ウ

桃下 嘉一5オ

唐花〔播磨〕 嘉一20オ

東柯〔丹後宮津〕 弘二18オ 弘三29オ

桐芽〔能登正院〕 天十二38オ

天十三23ウ 天十四12ウ 29ウ

31オ 弘一2オ 弘二6ウ

東雅〔加賀大聖寺〕 弘二39ウ 弘三17ウ

桃雅〔加賀〕 弘四52オ

稻海〔河内〕 天十二49ウ 天十三54オ

天十四95オ 嘉一60ウ

藤涯〔撰津〕 弘二35オ 弘三58ウ

嘉一57ウ 嘉三28オ

東鶴〔筑後久留米〕 天十二9ウ

天十三16ウ

藤丸〔撰津浪花〕 天十四96オ

道丸〔豊後〕 弘三60オ

冬岐〔撰津三田〕 天十二45オ 弘二35オ

東帰〔遊歴〕 嘉一61ウ 嘉三32ウ

道機〔山城洛〕 弘四56ウ

東邸〔越中滑川〕 天十四3ウ 14オ

33オ 弘二59オ 弘三24オ

稻居〔三河岡崎〕 天十四90ウ

陶居〔阿波徳島〕 天十四51オ

東嶠〔能登〕 弘四30ウ 嘉一19オ

東暁〔陸奥〕 弘四24ウ 嘉一10オ

桐旭〔筑前武丸〕 弘一42ウ 弘三36オ

東玉〔武蔵久下〕 天十四91オ

東啓〔撰津浪花〕 天十二46ウ

桃溪〔陸奥〕 嘉三17ウ

桃月〔肥後隈本〕 弘一14オ

稻月〔但馬〕 弘三29ウ 弘四40オ

桃原〔山城〕 弘三64オ

桐古〔三河岡崎〕 天十四90ウ

東湖〔筑後猪ノ口〕 天十四49ウ

弘一21オ 弘二37ウ 弘三36ウ

嘉一39ウ

東湖〔豊後〕 弘三60オ

桃五〔越後〕 天十四8ウ 14ウ

桃五〔山城洛〕 弘一46オ 弘二64オ

桃五〔遊歴〕 弘三2オ 61ウ 嘉一3オ

61オ 嘉三32ウ

桃郷〔武蔵金川〕 弘二7オ

豆郷〔豊後〕 嘉三14ウ

桃谷〔近江八幡〕 天十四11オ 弘一33オ

48ウ 弘二30オ 弘三13オ

桃谷〔但馬〕 弘三30オ

陶斎〔紀伊〕 天十二54オ

等才〔安芸〕 天十四76ウ

榻斎〔肥前〕 嘉一41ウ

桃山〔肥後二ノ丸〕 弘三43ウ 67オ

當山〔筑後〕 嘉三12ウ

桃室〔撰津浪花〕 天十二52オ

天十三51ウ 天十四3オ 11ウ

弘三58ウ

桃室〔越中四日市〕 天十四98オ

東樹〔山城洛〕 弘四1ウ 54ウ 60オ

嘉一2オ 5オ 65オ 嘉三35オ

榻二 嘉一5ウ

董秋〔撰津武庫〕 天十二45オ

董秋〔撰津兵庫〕 天十四95ウ 弘一41ウ

稻州〔陸奥〕 弘三54ウ  
 東升〔越前府中〕 天十四89才 弘二3才 38才  
 東升〔山城洛〕 弘一1才 48才 51才 53ウ  
 東水〔筑後〕 天十二14ウ  
 桃翠〔肥後〕 嘉一45ウ  
 東井〔阿淡〕 嘉一63才  
 洞石〔肥後二ノ丸〕 弘三43才 67才 弘四22才 嘉一46才 嘉三8ウ  
 榻雪〔陸奥松前〕 弘四9ウ  
 唐扇〔加賀〕 弘三19ウ  
 桃仙〔武蔵〕 弘三50才 弘四31才 嘉一8才  
 東蒼〔近江〕 天十三57才  
 棠巢〔筒梅〕〔豊前〕 弘三37ウ 弘四50才 嘉一32才  
 稻尊〔因幡〕 弘三32才  
 東岱〔越中放生津〕 天十四32ウ 弘一4ウ  
 洞天〔武蔵〕 天十二25才  
 陶々〔肥前平戸僧〕 天十三8ウ 天十四68ウ 70才  
 東塘〔摂津浪花〕 天十四97才  
 茗々〔陸奥松前〕 弘二9ウ  
 陶年〔近江〕 天十四5才 10才  
 稻波〔能登松波〕 天十二37才 天十四12ウ 29才 弘一6才 弘三21ウ  
 稻波〔肥後〕 弘四22才 嘉一45才

東波〔肥後二ノ丸〕 弘一15才 弘二13ウ 弘三43ウ 67才  
 桃斐〔大和〕 弘四27才  
 道平〔播磨〕 天十二6才  
 韜甫〔伊勢川崎〕 天十二9才 天十三31ウ  
 道僕〔山城洛〕 天十二3才 59才 天十四8才 18ウ  
 東溟〔出雲〕 天十二34ウ  
 東溟〔因幡〕 弘三32ウ  
 東雄〔越中放生津〕 天十四32ウ 弘一5才 弘二20ウ 54才 弘三24ウ 弘四29才 29ウ 嘉一18ウ  
 東雄〔近江日野〕 弘一32ウ 弘二30才 嘉一59才  
 桃有〔筑後〕 嘉一39才  
 道祐〔山城洛〕 弘三65ウ 弘四1ウ 54ウ 嘉一1ウ 3才 64才 嘉三1才 33ウ  
 東来〔加賀〕 弘四51ウ  
 東来〔近江〕 弘四68ウ  
 稲里〔伊勢ハヤミ〕 天十三31才  
 桃里〔越後中条〕 天十四33ウ  
 桃里〔豊後〕 嘉一34ウ  
 冬李〔武蔵江戸〕 弘二5才  
 東里〔陸奥〕 弘三53ウ  
 桃林〔陸奥松前〕 弘二27ウ 弘二9才  
 撞路〔肥前〕 天十三40ウ  
 稲露〔摂津浪花〕 天十四96才

藤露〔伊勢〕 弘三12ウ  
 東路〔薩摩〕 嘉三4才  
 怒雲〔肥後〕 嘉三7才  
 杜英〔武蔵江袋〕 弘一24ウ  
 兔園〔豊前〕 天十三6ウ 弘四49才 吐雲〔筑後〕 天十四49ウ 弘一21ウ 弘二37ウ 弘三36ウ 弘四35才 嘉一38ウ 嘉三11ウ 12才  
 吐煙〔肥後天草〕 嘉一46ウ  
 斗和〔加賀〕 弘二39ウ 弘三17ウ  
 登和女〔肥前〕 嘉一43ウ  
 都豆女〔大和鷲家口〕 弘二45才  
 斗及〔陸奥一ノ関〕 天十四25才  
 途牛〔山城洛〕 天十三66才  
 兔玉〔筑前博多〕 天十三47才 47ウ 50ウ 天十四59ウ 61ウ 64才 弘二37才  
 得雅〔阿波〕 弘一40才  
 獨水〔日向〕 弘一19才  
 篤之〔日向赤江〕 天十三60ウ 天十四40才  
 篤之〔伊勢山田〕 弘一30才 弘二31ウ  
 篤二〔薩摩〕 嘉三4ウ  
 禿人〔陸奥本宮〕 天十三25才  
 得蕪〔武蔵江戸〕 天十二24ウ 天十三23才 天十四19ウ  
 弘二5ウ 弘三49ウ 嘉一6才 嘉三23ウ  
 篤明〔山城洛〕 天十二2ウ 57才 天十三2ウ 68ウ 71才

天十四7ウ 18ウ 弘一1ウ 45才 弘二3ウ 63ウ 弘三63ウ 弘四3ウ 56ウ  
 兔月〔山城洛〕 天十二55才 天十四99才  
 兔月〔若狭小浜〕 天十四88ウ  
 兔月〔肥後〕 嘉三9才  
 杜月〔近江〕 天十三58才  
 吐月〔常陸〕 嘉三24才  
 兔山〔豊前〕 弘四49才  
 都山〔越中〕 弘三23才  
 杜鷲〔山城洛〕 天十二1ウ 55ウ 天十三2ウ 66ウ 天十四3才 16ウ 弘一1ウ 44才 弘二3才 63才 弘三62ウ 弘四4才 54才 嘉一2才 2ウ 64才 嘉二2才 35ウ  
 都春〔摂津柱本〕 天十二45才 天十三52才 天十四95ウ 弘二34ウ 弘三58才 嘉一57ウ 斗丈〔筑前福岡〕 天十二28ウ 天十三53才 天十四58才 弘一20才 弘二36ウ 弘三34才 嘉一35才  
 兔水〔豊後日田〕 天十三63才 弘二14才  
 兔水〔備中庭瀬〕 天十四80才  
 吐翠〔丹後宮津〕 天十三34ウ 天十四55ウ  
 兔石〔越中〕 弘三23ウ  
 吐雪〔筑前〕 天十三47才 47ウ 50才  
 都泉〔武蔵平村〕 天十三59才

斗南〔陸奥坂の下〕 天十三26才

天十四23ウ 弘三55才

都盤〔越中〕 嘉一18ウ 嘉三25ウ

奴風〔肥後〕 弘四22ウ

鷲歩〔日向〕 嘉一53ウ

兎木〔上野〕 弘二8才 弘三57才

弘四69ウ 嘉一8ウ 嘉三24ウ

登美女〔伊予松山〕 天十二39才

斗明〔計明〕〔陸奥松前〕 弘一28才

弘二8ウ 弘三56才 弘四9ウ

10才 嘉一13才

杜有〔武蔵江戸〕 弘一23才 弘二4ウ

十代丸〔山城洛〕 天十二2才

天十三4才 弘一45ウ

斗龍〔筑後〕 嘉三12ウ

都柳〔山城洛〕 天十四99ウ

杜蓼〔山城洛〕 天十二3才 55才

天十四1ウ 9ウ 弘一3ウ 44才

弘三2才 63才 嘉一5才 65才

嘉三2ウ 36才

吐涼女〔筑後〕 弘四66ウ

兎路〔筑前〕 嘉一37才

斗六〔武蔵鉢形〕 天十二54才

天十三59才 天十四21才

呑池〔山城〕 天十三55才

呑白〔筑前〕 弘四17ウ

貪樂〔但馬〕 弘四40ウ

な

なを女〔越後亀田〕 弘二24才

奈加彦〔中彦〕〔肥前平戸〕 天十四69才

弘二27ウ

な、子女〔信濃松本〕 天十四37ウ

南園〔淡路榎並〕 弘一40ウ 弘三10ウ

弘四18才 嘉一28ウ 嘉三20ウ

南翁〔天和〕 弘四26才

南瓜〔武蔵中爪〕 天十四91ウ 弘一25ウ

南峨〔天和〕 弘四26ウ

南海〔大和三輪〕 天十四95才

南涯〔伊勢龜山〕 天十二43才

南涯〔伊勢津〕 天十二50才

南涯〔丹波龜山〕 天十三33ウ

天十四54才 嘉一30ウ

南鶴〔陸奥松前〕 弘一28才 弘二9才

南岳〔大和五条〕 弘二46ウ 弘四26才

南居〔陸奥一ノ関〕 天十四25才

南兄〔伊予松山〕 天十四73ウ

南兮〔肥前〕 天十二27才 嘉一43ウ

南溪〔山城洛〕 天十二56才 天十三1ウ

66ウ 天十四1ウ 16ウ

南湖〔梅里〕〔撰津浪花〕 天十四96才

弘二34ウ

南向〔出雲松江〕 弘一36才

南交〔筑前〕 弘三70才

南谷〔出雲松江〕 天十三16才 弘一36才

南枝〔武蔵江戸〕 天十三22才

天十四21才 弘二5ウ 嘉一6ウ

南翠〔加賀〕 弘三19才 嘉一19才

南礎〔筑前博多〕 弘一20才

南嶮〔大和〕 弘四26ウ

南他〔尾張名古屋〕 天十四90才

南楠〔播磨宇佐崎〕 天十四85ウ

南徳〔山城洛〕 天十四4才 99才

南々〔武蔵鉢形〕 天十三23ウ

天十四21才

南平〔豊前〕 嘉一33才

南保〔大和〕 弘四26ウ

南明〔大和〕 弘四26才

南明〔周防〕 嘉一25ウ

南雄〔近江〕 天十三56ウ

南幽〔陸奥〕 弘三54才

南遊〔大和〕 弘四26才

南陽〔播磨魚崎〕 天十四85才 弘一38ウ

南嶺〔因幡〕 天十三36才 天十四10ウ

弘三33才 弘四24ウ 嘉一29才

嘉三23才

南嶺〔大和〕 弘四26ウ

に

乳虎〔備前岡山〕 天十四82ウ

入山〔陸奥〕 弘三52才 弘四24ウ

如是〔安房〕 弘四21才

任阿〔陸奥〕 弘三54才

ね

念々〔陸奥箱館在松前〕〔遊歴〕

弘四9ウ 14才 16ウ 嘉一61才

は

梅庵〔大隅〕 嘉三5ウ

梅逸〔越後〕 天十四34ウ 嘉一18才

梅逸〔出雲鷺浜〕 弘一35ウ 弘二27才

弘四43才

梅塙〔肥前〕 天十三13才

梅宇〔肥前島原〕 弘一12才 弘四36ウ

嘉一43ウ 嘉三10ウ

梅映〔肥後〕 弘四37ウ

梅翁〔紀伊〕 弘三11才

梅屋〔山城洛〕 天十二57ウ

梅乙〔周防〕 天十四50才

梅價〔山城洛〕 天十二3才 55ウ

天十三3才 66ウ

梅可〔筑後田籠〕 弘二43ウ 弘四35ウ

嘉一40才 嘉三13才

梅花〔美作〕 弘四67才

梅下〔上野〕 弘四69ウ 嘉一8ウ

嘉三25才

梅雅〔美濃〕 天十二36ウ 嘉一2才

梅賀〔日向〕 天十三60ウ

梅丸〔山城洛〕 天十三66才

梅丸〔武蔵江戸〕 天十四4才 12才

梅巖〔加賀〕 弘三19才 嘉一19才  
梅巖〔伊勢津〕 天十二8ウ 天十三61才  
天十四92ウ

梅居〔越後〕 天十三29ウ  
梅居〔近江〕 天十三64ウ

梅居〔筑前武丸〕 弘一42才 弘三36才

梅居〔肥後 天草〕 嘉一47ウ

梅居〔但馬〕 嘉三31才

梅曲〔淡路伊賀野〕 弘一40ウ

梅旭〔讃岐〕 嘉一27ウ

梅琴〔丹波〕 天十三33ウ

梅逕〔加賀〕 天十三38才

梅溪〔陸奥 田名部〕 天十四27才

梅溪〔山城洛〕 弘四2才 55ウ

梅月〔筑前〕 天十三10才 嘉一36才

梅月〔長門伊佐〕 天十四72才 嘉三21才

梅月〔豊後日田〕 弘二15才 弘三40ウ

梅月〔若狭〕 弘三16才

梅月〔丹後〕 弘三28ウ 弘四67ウ

梅月〔肥後 天草〕 嘉一46ウ

梅忼〔出雲雲鷲〕 天十四88ウ

梅後〔肥前豊後竹田在大村〕

天十四67ウ

梅香〔陸奥一ノ関〕 天十四25才

梅香〔武蔵広瀬〕 天十四91ウ

弘一25才

梅香〔筑前〕 弘三70ウ

梅光〔肥前〕 天十二27才

梅光〔豊後〕 弘三60ウ

梅左〔摂津浪花〕 天十二52才

梅左〔肥前〕 天十三8才 天十四68ウ  
梅左〔薩摩都城〕 天十四38ウ 弘二69才  
弘三47ウ 嘉三4才

梅左〔肥後隈本ノ行脚〕 弘二71才  
72ウ

梅左〔遊歴〕 弘三61ウ 嘉一62ウ

貝山〔加賀〕 弘三17ウ

梅山〔長門〕 嘉三21ウ

梅市〔薩摩〕 天十二5才

梅枝〔山城洛〕 天十二56ウ

梅枝〔近江豊浦〕 弘二30才

梅士〔樺土〕〔淡路〕 天十三14才  
天十四75ウ

梅士〔肥後〕 弘四37ウ 嘉一50ウ

梅士〔豊前〕 弘四49ウ

梅志〔筑前〕 天十三64才 嘉一36ウ

梅之〔出羽秋田〕 弘一29才 弘四32ウ  
嘉一14才

梅史〔能登〕 弘三21才

梅四 弘三2ウ

梅子女〔豊前小倉〕 天十三6ウ

梅時〔加賀金沢〕 弘二59才 弘三20才  
弘四51ウ

梅室〔山城洛ノ加賀〕 天十二35ウ 59ウ  
天十三1才 18ウ 19ウ 69才 70ウ  
天十四1才 9ウ 弘一1才 4才

48才 55才 弘二1才 62才 65才

66才 弘三4才 62ウ 弘四1才

54才 64ウ 嘉一5ウ 64才

嘉三1才 29ウ 30才 34才 36ウ  
梅日〔長門吉則〕 天十三6才

梅舍〔筑後〕 嘉一39才

梅舍〔阿波〕 嘉三33才

梅守〔阿波徳島〕 天十四51才

梅守〔筑後〕 嘉三13才

梅寿〔肥前平戸〕 天十四69才 弘二27ウ  
弘三42才

配十〔出雲〕 天十三16才

梅州〔洲〕〔陸奥〕 天十三25才

弘三51ウ 弘四24才

棟晨〔但馬〕 弘三31才 弘四48才

梅塵〔河内星田〕 弘二47才

梅人〔日向〕 嘉一53才

梅睡〔播磨日延〕 天十四87才

梅井〔陸奥二本松〕 天十二4ウ  
天十三24ウ 天十四23ウ

弘一27才 弘二11ウ 弘三51才  
嘉一10才

梅西〔伊勢山田〕 天十四92ウ 弘一30才

梅青〔豊後〕 弘三60ウ

梅石〔山城洛〕 天十二3ウ 43才  
天十三3ウ 67才 天十四5ウ

17才 弘二2ウ 62ウ 弘三63才  
弘四56才

買雪〔越中高丘〕 天十二36ウ 弘一5ウ

梅仙〔山城洛〕 弘三2ウ 65才

弘四2ウ 55才

梅素〔越中野尻〕 天十四98才

梅窓〔備中惣社〕 天十二16才

梅窓〔播磨龍野〕 天十四86ウ  
梅窓〔樺窓〕〔宍岐勝本〕 弘一22才  
弘三47ウ

梅窓〔佐渡〕 嘉一14ウ

梅村〔越後堀ノ内〕 天十三64才  
天十四33ウ 弘三26才

梅太〔日向〕 天十三9ウ

梅雫〔陸奥一ノ関〕 天十四24ウ

梅代女〔肥後 天草〕 嘉一47才

梅茶〔越後森下〕 弘一8才

梅朝〔筑前飯塚〕 天十四58ウ

梅鳥〔若狭〕 弘三16才

梅調〔長門〕 弘四39ウ 嘉三21ウ

梅通〔山城洛〕 天十二1ウ 56才  
天十三2才 66ウ 天十四1才

16ウ 弘一43ウ 弘二2才 62ウ  
弘三63才 弘四3ウ 53ウ  
嘉一65ウ 嘉三35ウ

梅亭〔淡路須本〕 天十四75才

梅堤〔若狭小浜〕 天十四89才

梅堂〔加賀〕 弘三18ウ

梅堂〔肥後〕 弘四38才

梅洞〔播磨〕 嘉一21才

梅年〔筑後〕 弘三37ウ

梅年〔豊前〕 弘四50才

梅南〔山城鳥羽〕 天十二49ウ  
天十三55才 天十四4才 16才

梅父〔近江太田〕 天十三57ウ

梅風〔周防〕 嘉一24才

梅歩〔肥前〕 弘四47才

梅甫〔但馬〕 弘三30才  
 梅民〔山城〕 天十四9才 19才  
 梅夢〔若狭〕 弘三15ウ  
 梅門〔撰津浪花〕 天十二46ウ  
 梅遊〔越中〕 天十三65才  
 倍有〔出雲松江〕 弘一36才  
 梅雄〔撰津原田〕 弘二34ウ  
 梅有〔信濃高島〕 弘二58ウ  
 梅融〔山城洛〕 弘二64才  
 梅葉〔但馬〕 弘四47ウ  
 梅里↓南湖  
 梅里〔筑後〕 嘉一39ウ  
 梅笠〔武蔵江戸〕 弘一23ウ 弘二5ウ  
 6ウ  
 梅笠〔伊勢〕 嘉一63ウ 嘉三27才  
 梅柳〔豊後日田〕 天十二18ウ  
 天十三63才 天十四46ウ 弘一16ウ  
 梅料〔豊後〕 弘三39才  
 梅林〔丹波〕 天十三33ウ  
 梅林〔讃岐〕 弘四21才 嘉一27ウ  
 梅林〔肥後〕 弘四37ウ  
 梅林〔大隅〕 嘉一51ウ  
 梅隣〔丹波野々垣〕 天十四54ウ  
 梅嶺〔加賀鶴来〕 弘二39才 弘三18ウ  
 梅鈴〔紀伊若山〕 弘二44才  
 梅廬〔淡路下堺〕 天十二28ウ  
 天十三13ウ 天十四8ウ 76才  
 弘一40ウ 嘉一63才  
 梅路〔出雲〕 弘三33ウ  
 梅朗〔日向〕 天十二16ウ 天十三60ウ

弘三44ウ  
 巴玉〔備前岡山〕 天十三40ウ  
 馬糧〔肥後天草〕 嘉一47才  
 白鳥〔備中大井〕 天十四44ウ  
 白羽〔安芸広島〕 天十三12才  
 天十四77ウ 弘二36才 弘三7ウ  
 白羽〔肥後〕 弘四6才 嘉三8才  
 白雲月〔但馬丸味〕 天十三35ウ  
 天十四56才  
 麦映〔筑後〕 天十二9ウ 天十三16ウ  
 柏園〔播磨〕 天十三15才  
 伯遠〔武蔵江戸〕 天十三22ウ  
 天十四20才 弘一23才 弘二4ウ  
 弘三49ウ 弘四31ウ 嘉一6才  
 白燕〔丹波黒井〕 天十四55才  
 白燕〔丹波〕 弘三2ウ 28才  
 白燕〔長門〕 嘉三21ウ  
 白鷗〔撰津浪花〕 天十二45ウ  
 白禾〔肥前〕 天十三60才  
 百花〔佐渡小木湊〕 天十四36ウ  
 弘一29ウ  
 白牛〔越前府中〕 天十四100才 弘一9才  
 百鷄〔丹後〕 天十三35才  
 白乎〔越後糸魚川〕 天十四34才  
 百古〔周防/洛/遊歴〕 弘三2才  
 7ウ 弘四2才 57才 57ウ  
 嘉一1才 3才 62ウ 嘉三32ウ  
 百壺〔阿波〕 弘四20ウ  
 尊湖〔豊後日田〕 弘二43才  
 百合〔長門下関〕 天十三5ウ

天十四72ウ  
 百合〔加賀〕 弘四52才  
 百糸〔能登蛸島〕 弘一6才  
 百之〔丹後〕 天十三35才  
 白二〔加賀〕 天十二35才  
 麦紫〔肥前大村〕 天十三7ウ  
 天十四67才 弘一10才 弘四46ウ  
 白雀女〔撰津浪花〕 天十四97ウ  
 弘三58ウ 弘四42ウ  
 白樹〔加賀〕 天十二35ウ  
 白醉〔備中〕 天十四79ウ  
 柏翠〔山城嵯峨〕 弘三64ウ 弘四56ウ  
 白成〔近江〕 弘四42才  
 栢石〔栢石〕〔若狭讃州人在若州〕  
 嘉一59ウ 嘉三31ウ  
 白扇〔武蔵江戸〕 天十四20ウ  
 白仙〔筑前福岡〕 天十四56ウ  
 百仙〔山城洛〕 天十二3才 58ウ  
 天十三3才 67ウ 天十四3ウ  
 17ウ 弘一3ウ 47才 弘三3才  
 64才 嘉一1ウ 4才 65ウ  
 嘉三1ウ 34才  
 麦村〔近江高島〕 天十三58才  
 天十四94ウ 弘二31才 弘三13才  
 嘉一58ウ  
 柏堂〔淡路広石〕 弘二40ウ 弘三10ウ  
 弘四18才  
 白眉〔肥後天草〕 嘉一47才  
 柏峰〔武蔵石原〕 天十四91ウ  
 伯也〔播磨高砂〕 天十三15ウ

天十四3ウ 14才 85ウ  
 白雄〔近江高島〕 天十二52ウ  
 天十三64ウ 天十四44ウ  
 弘一32才 弘二58ウ 弘三3ウ  
 弘四51才  
 白幽〔近江〕 弘三14ウ  
 柏葉〔備前岡山〕 天十四81ウ 弘三5ウ  
 嘉一22才 嘉三30才  
 白里〔越後〕 天十四34才  
 麦里〔備前岡山〕 天十四83才  
 麦路〔肥前〕 弘四46ウ  
 白狼〔肥前〕 天十二27才  
 麦浪〔山城洛〕 天十二3ウ 59才  
 天十三67ウ 天十四98ウ  
 弘一47ウ 弘三65ウ 弘四3才  
 55ウ  
 馬堀〔薩摩鹿児島〕 天十三5才  
 波月〔武蔵〕 天十三22ウ  
 馬原〔近江〕 天十四7才 10ウ  
 巴江〔山城洛〕 弘一2ウ 45ウ  
 弘二2ウ 63才  
 巴山〔肥前〕 天十二27才 天十三27ウ  
 弘三41ウ 弘四50ウ 嘉一43ウ  
 馬秀〔山城洛〕 弘四3ウ 55ウ  
 波常〔若狭西津〕 弘二19才 弘三16才  
 巴水〔紀伊〕 弘四48ウ  
 巴水〔肥前〕 嘉一44才  
 巴勢〔紀伊〕 弘四48ウ  
 波声〔豊前〕 嘉一31ウ  
 芭青 天十四7才

巴石〔龜候〕〔日向／在大村〕  
 天十三8才 天十四40才 嘉一53才  
 馬雪〔山城洛〕 天十二58才  
 馬雪〔越中〕 弘三23才  
 馬窓↓素靜  
 巴竹〔備前兎島〕 弘二25才  
 巴鳥〔肥前〕 天十三9才  
 馬朝〔山城洛〕 天十二2才 57才  
 天十三1才 68才 天十四99才  
 馬丁〔肥後隈本〕 弘一14才 弘三44才  
 弘四7才 嘉一49才  
 波同〔武蔵江戸〕 天十四21才  
 波同〔山城在京／遊歴〕 弘四2才  
 57才 嘉一62才  
 坡堂〔伊予〕 弘三9才 弘四20才  
 嘉三19才  
 馬得〔出雲田義〕 天十二17才  
 天十三16才 天十四88才  
 馬年〔越中〕 弘三23才  
 馬仏〔備前岡山〕 天十四83才 弘二25才  
 弘三6才  
 波文〔三河岡崎〕 弘二33才  
 馬勇〔撰津浪花〕 天十二43才  
 巴蘭〔山城洛〕 天十二42才 弘一45才  
 巴菱〔伊勢〕 弘三12才  
 馬良〔丹後宮津〕 天十三35才  
 天十四4才 17才 弘一2才  
 46才 弘二18才  
 馬六〔薩摩〕 天十二5才  
 凡和〔出雲大社〕 天十二53才

天十四88才 弘一35才 弘二27才  
 弘三33才 弘四43才  
 伴橋 弘二2才  
 万頃〔武蔵江戸〕 弘一5才  
 半月〔丹後田辺〕 弘二18才 弘三29才  
 弘四67才  
 万古〔武蔵江戸目沼〕 天十四20才  
 21才 弘二6才 嘉一6才  
 嘉三23才  
 晚耕〔能登〕 天十二37才  
 半谷〔淡路〕 天十二29才 天十三14才  
 天十四8才  
 半山〔山城綴喜普賢寺〕 天十二49才  
 天十三54才 天十四5才 15才  
 弘一42才 弘二61才 弘三62才  
 弘四45才 嘉一67才 嘉三33才  
 半山〔丹波保津〕 天十四55才  
 万枝〔備前岡山〕 天十四82才  
 繁女〔大和鷺家口〕 弘二45才  
 万笑〔大隅〕 嘉一52才  
 万丈〔山城洛〕 天十三69才 天十四3才  
 18才  
 万井〔伊予松山〕 天十四73才  
 班雪〔斑雪〕〔肥後二ノ丸〕 弘二13才  
 弘三43才  
 半窓〔伊予〕 弘四20才  
 半叟〔備前〕 嘉三30才  
 万像〔阿波徳島〕 天十四74才 弘一40才  
 嘉一28才 嘉三20才  
 万台〔出雲松江〕 弘一35才

凡池〔山城淀〕 天十二49才 天十三55才  
 班竹〔撰津浪花〕 天十二46才  
 凡鳥〔肥前〕 天十二26才 天十四68才  
 弘三41才  
 万那〔陸奥仙台〕 天十四25才 弘一27才  
 半白〔越中福野〕 天十四98才  
 繁茂〔武蔵江戸〕 弘二59才 弘三50才  
 弘四31才  
 半遊〔越中高丘〕 弘二21才 弘三23才  
 凡来〔山城洛〕 弘二3才 63才  
 万籟〔山城洛／古人〕 天十二55才  
 天十三3才 66才  
 万里〔豊後〕 弘二43才 弘三60才  
 半両〔陸奥〕 天十三53才 天十四27才  
 弘四24才  
 万良〔丹後〕 弘三28才  
 半路〔豊後日田〕 弘二14才

ひ

飛赫〔筑前〕 嘉一36才  
 微角〔若狭西津〕 弘二19才  
 美鶴〔若狭〕 天十三27才  
 飛鳩〔備前岡山〕 天十四82才  
 尾魚〔伊予在〕 天十二39才  
 美言〔石見川本〕 弘一22才  
 美哉〔薩摩〕 天十三4才  
 久女〔日向〕 嘉一54才  
 眉山〔肥前大村〕 天十三7才  
 美水〔近江〕 嘉一59才

美井〔能登〕 天十二37才  
 飛雪〔筑前〕 天十二53才  
 美宗〔備前〕 嘉一22才  
 鼻端〔陸奥二本松〕 天十四24才  
 必山〔撰津浪花〕 天十二45才  
 必山〔山城洛〕 弘一2才 64才  
 筆山〔肥後二ノ丸〕 弘一15才  
 筆子〔肥後二ノ丸〕 天十三11才  
 ひとへ女〔安芸広島〕 天十四76才  
 美濃子〔陸奥〕 弘三54才  
 飛木〔筑前博多〕 天十二54才  
 天十三46才 47才 48才 49才 49才  
 51才 天十四13才 60才 60才 61才  
 62才 63才 弘一20才 36才  
 弘二37才 弘三35才 弘四39才  
 飛木〔肥後〕 弘四70才  
 美明〔豊前〕 天十三6才  
 尾蠅〔肥前神代〕 天十四68才 弘一12才  
 弘三41才  
 微笛〔若狭小浜／山城〕 天十四88才  
 弘三1才 65才 弘四3才 50才  
 嘉一59才 嘉三31才  
 瓢亞〔豊前小倉〕 弘一19才 弘二69才  
 弘三37才  
 瓢翁〔備前岡山〕 天十四3才 12才  
 82才  
 水狐〔武蔵江戸〕 天十三21才  
 天十四19才  
 水壺〔武蔵江戸〕 弘四31才

水谷〔武蔵江戸〕 天十二25ウ

天十三22ウ 天十四20才

水谷〔近江〕 弘三13才 嘉一63ウ

飄齋〔齋堂〕〔山城洛〕 弘四54才

嘉一64才

倭二〔播磨〕 天十二6才

瓢石〔越前敦賀〕 天十四2ウ 15才

弘一9ウ 弘二38才

瓢石〔周防〕 嘉一24ウ

瓢仙〔備中岡田〕 弘一38ウ

標梅〔但馬西温泉〕 天十四56才

弘一34ウ 弘二61才 弘三29ウ

飄浮〔大隅加治木〕 弘一18ウ

飛龍〔美作〕 弘四43才

飛梁〔漁村〕〔近江〕 天十二48才

天十三57ウ

瓶平〔加賀〕 弘四52ウ

敏雄〔肥前〕 天十二27ウ

心

不一庵〔伊勢平木／永野〕 天十二8ウ

天十三31才 天十四92ウ

不逸〔武蔵石原〕 天十四92才

風阿〔山城洛／遊歴〕 天十三68才

弘一46才 弘二64才 嘉三32才

風阿〔周防〕 天十四51才

楓雨〔播磨龍野〕 天十四86才

楓影〔伯耆〕 天十二17才 天十三36ウ

楓下〔近江信楽〕 天十二47才

天十三58ウ 天十四6ウ 11才

弘一31ウ 弘二29ウ

風和〔淡路〕 天十三13ウ

風和〔加賀金沢〕 弘二38ウ

風外〔武蔵江戸〕 天十二25才

天十三21才 天十四19ウ

弘一24才 弘二5ウ 弘三50才

風外〔備後尾道〕 天十四78才

楓関〔下野芦野〕 天十二53才

天十三38ウ 天十四37才

楓関〔陸奥〕 弘三53ウ

楓價〔二川〕〔筑後〕 嘉一39才

嘉三11ウ

楓居〔讃岐〕 嘉一28才

楓橋〔若狭〕 嘉三31ウ

風玉〔因幡〕 弘三32ウ

調月〔豊後日田〕 弘二14才 弘三40才

風虎〔長門下関〕 天十三5ウ

天十四73才

風虎〔筑前〕 弘三36才

楓江〔撰津有馬〕 天十三52ウ

風光〔山城洛〕 天十三1ウ 69才

天十四6才 17ウ 弘一3ウ 44才

弘二4才 63ウ 弘三1ウ 63ウ

嘉一3才 65ウ 嘉三2ウ

風骨〔大隅〕 嘉三5ウ

富子〔淡路松帆〕 天十三14ウ

天十四75ウ

風志〔陸奥三春〕 天十四15才 25ウ

弘一27才 弘二12才 弘三52才

弘四66才 嘉三17ウ

楓扈〔日向高岡〕 天十四40ウ 嘉一53才

風舎〔越後新潟〕 天十四36ウ

楓所〔楓処〕〔淡路石〕 天十四76才

弘一40才 弘二40ウ 弘三10ウ

弘四18才 嘉一28ウ

風処〔丹波笹山〕 天十四13才 弘一34才

風雪〔近江矢守〕 天十三56才

楓亭〔撰津浪花〕 天十四97ウ

風笠〔石見因原〕 弘一22ウ

不泳〔備中岡田〕 天十四79才

不及〔土佐〕 天十二38ウ 天十三39才

不及〔肥前諫早〕 弘一11ウ

不及〔肥後〕 弘四22ウ

不及〔陸奥松前〕 嘉一13才

阜響〔大隅加治木〕 天十四39才

弘一18才 弘二48才 弘三46ウ

嘉一51才

不兮〔武蔵広瀬〕 弘一25ウ

蕪月〔因幡〕 弘三31ウ 弘四24ウ

嘉一29才

不言〔越中富山〕 天十三28才

布国〔備前西大寺〕 天十二16才

天十三40才 天十四83ウ 84才

布石〔阿波〕 弘四20ウ

ふさ女〔周防〕 嘉一26才

不三〔筑前〕 弘三35ウ 弘四39才

嘉一35ウ

布山〔越中富山〕 天十三2ウ 28才

天十四14才 32才

阜山〔常陸〕 嘉一60才 嘉三24ウ

巫山〔肥後〕 嘉一45ウ

蕪山〔能登松波〕 天十二37才

撫山〔安芸竹原〕 天十四77ウ

不二雄〔近江信楽〕 天十三58ウ

天十四10ウ 弘二29ウ

不二門〔河内〕 天十二49ウ 天十三54才

天十四95ウ

負笑〔但馬〕 天十三36才

撫松〔出羽〕 天十三27才

浮塵〔肥後〕 嘉一49ウ

芙水〔陸奥松前〕 弘二9ウ

芙水〔豊前〕 弘四49ウ

布雛〔播磨〕 弘四25ウ

富勢〔山城洛〕 天十二57才 弘一44才

不醒〔山城洛〕 天十三68ウ 天十四99ウ

不席〔山城洛〕 天十二57ウ

舞雪〔近江高島〕 天十二52ウ

天十三58才 天十四44ウ 弘一32才

弘二31才 弘三13ウ 弘四68才

嘉一63ウ

不染〔山城洛〕 天十二1ウ 56才

天十四6才 16ウ 弘一43ウ

釜泉〔伊勢〕 天十二8才

普泉〔能登鶴飼〕 天十二37ウ

富草〔淡路須本〕 天十二29ウ

天十三14才 天十四75才

不爭〔撰津浪花〕 天十二46才

扶桑〔備後尾道〕 天十四78才

蕪帚〔石見〕 天十三17才

仏丸〔佐渡〕 弘三27ウ  
 不白〔筑前福岡〕 天十二44才  
   天十三10才 天十四58才  
 不白〔豊前小倉〕 天十三6ウ  
 燕畔〔出羽秋田／山城〕 弘三56ウ  
   弘四66才  
 不分〔武蔵石原〕 天十四92才  
 夫木〔豊後〕 嘉一34ウ 嘉三14ウ  
 阜也〔肥後〕 嘉一50才  
 不有〔但馬〕 天十三35ウ  
 阜雄〔陸奥〕 天十三26才  
 浮葉〔備前八浜〕 弘二25才  
 浮葉女〔肥後天草〕 嘉三9ウ  
 普陽〔武蔵〕 嘉一6ウ  
 芙蓉〔山城〕 弘三65ウ  
 撫葉〔山城洛〕 嘉三34ウ  
 武陵〔播磨〕 天十三15ウ  
 文阿〔陸奥〕 嘉三17才  
 聞可〔山城洛〕 天十二59才 天十四99ウ  
 蚊和〔越中滑川〕 天十三28ウ  
 文雅〔出雲松江〕 弘一36才  
 聞鶯〔豊後日田〕 弘二43ウ 弘三61才  
 文鶯〔豊後〕 嘉一33才  
 文外〔伊勢〕 天十四13ウ  
 文亀〔出雲〕 天十二17ウ  
 文月〔筑後山本〕 天十二15才  
   天十三17才 天十四49才  
   弘一21才 弘二37ウ  
 文月〔豊後日田〕 天十四47才  
 文候〔甲斐〕 天十三26ウ

文光〔近江〕 嘉一58ウ  
 文山〔近江〕 弘三13ウ  
 蚊齋〔日向〕 嘉一54才  
 文秋〔越中〕 弘三22ウ  
 文十〔筑前福岡〕 天十二28才  
   天十四56ウ  
 文渚〔大隅〕 嘉一52才 嘉三5ウ  
 文松〔近江追分〕 天十二50ウ  
 文松〔日向〕 天十三9ウ  
 文丈〔能登〕 天十三38才  
 文水〔越中〕 天十三65ウ  
 文水〔日向〕 弘三46才  
 文水〔周防〕 嘉一24才  
 汶水〔出羽〕 弘三56ウ 嘉一14才  
   嘉三26ウ  
 文石〔伊勢日永〕 天十二50ウ  
 文朝〔其夕〕〔長門伊佐〕 天十二4ウ  
   天十三6才 45ウ 天十四72才  
   弘一36ウ 弘二36ウ 弘三8才  
   嘉一26ウ 嘉三20ウ  
 文蝶〔肥後〕 嘉三9才  
 文濃〔能登〕 弘三60才  
 文鳳〔日向〕 弘三46才  
 文明〔武蔵〕 天十三59才  
 文毛〔能登〕 天十二37才  
 文雄〔山城洛〕 天十二2才 56ウ  
 文雄〔能登鶴飼〕 天十四3才 29才  
 文雄〔但馬〕 弘三30ウ  
 文友〔能登鶴飼〕 天十二38才 弘一6才  
   弘二40才

文来〔陸奥五戸〕 弘二10ウ  
 文龍〔越後北山〕 弘二23才  
 文留〔佐渡〕 弘三27ウ  
 文老〔筑後久留米〕 天十四49才  
 へ  
 米賀〔武蔵金川〕 弘二7才 弘三49才  
 米己〔筑前〕 嘉三13ウ  
 米却〔陸奥〕 天十三25才  
 柄月〔肥後〕 嘉三8ウ  
 米石〔遠江石丘〕 天十四38才  
 平沙〔越前敦賀〕 弘一41ウ 弘二38才  
   弘三16ウ  
 米斎〔齊〕〔山城洛〕 弘一2才 47才  
 平山〔山城洛／武蔵江戸〕  
   天十二3ウ 12ウ 22才 30才 32ウ  
   40ウ 58ウ 天十三23才  
   天十四12才 19ウ  
 米山〔摂津〕 弘三58才  
 米帛〔遊歴〕 嘉一62才  
 米虫〔越後〕 天十三29才  
 米洞〔淡路〕 弘三10ウ  
 米老〔撰津浪花〕 天十三51ウ  
   天十四96才 弘一41才 弘二34才  
   嘉一57才  
 碧山〔駿河府中〕 天十三32ウ  
   天十四44才 弘二59ウ  
 碧水〔大隅加治木〕 天十二5才  
   天十三5才 天十四39ウ

弘二48ウ 弘三46ウ  
 ノ左〔信濃更科〕 天十二50才  
   天十三30ウ 天十四37ウ  
 弘一30才 弘二58ウ 弘三56ウ  
 片石〔肥後〕 嘉一50才  
 辺竹〔備前〕 弘三6才  
 ほ  
 蓬雨〔丹波龜山〕 天十四2才 13才  
   54才 弘四41才 嘉一30ウ  
 芳英〔山城洛〕 天十二3才 56才  
   天十三2才 66ウ 天十四1才  
   16ウ 弘一1ウ 43ウ 弘二1才  
   62才 弘三63才 弘四53ウ  
   嘉一65ウ 嘉三35ウ  
 茂園〔加賀〕 弘三18ウ  
 芳屋〔大和〕 弘四26ウ  
 蓬海〔肥後〕 嘉三9才  
 豊丸〔山城洛〕 天十二32才 57ウ  
   天十三67ウ 天十四3才 弘二3ウ  
   63ウ 弘三2才 63ウ  
 保丸〔加賀〕 天十二35才  
 芳玩〔薩摩都城〕 弘二69才  
 抱儀〔武蔵江戸／遊歴〕 天十二25才  
   弘二4ウ 弘三50才 弘四31ウ  
   嘉一61才 嘉三32才  
 抱儀〔陸奥〕 弘三53ウ  
 保久亭〔越中吉久〕 天十三65ウ  
   天十四14才 33才

方居〔肥前諫早〕 弘一11ウ 弘二47ウ  
 鵬居〔尾張名古屋〕 天十四90才  
 鳳喬〔大和上市〕 弘二46才  
 鳳兮〔春藤〕〔能登正院〕 天十二38才  
 天十三23ウ 天十四序1ウ 2ウ  
 12ウ 29ウ 30才 弘一1才 6ウ  
 弘二40ウ 弘三20ウ 弘四30ウ  
 嘉一18ウ 嘉三26才  
 峰月〔上野〕 嘉三25才  
 茂月〔武蔵石原〕 天十四92才  
 豊見〔山城洛〕 弘一2ウ 45才  
 弘二3ウ 63ウ  
 保元〔武蔵成田〕 弘一24ウ  
 邦彦〔武蔵〕 嘉一8才  
 芳吾〔大和〕 弘四26ウ  
 方行〔陸奥〕 天十三53ウ  
 葆光〔武蔵原島〕 天十四91ウ 弘一25才  
 芳谷〔伊予〕 弘三9ウ  
 匏左〔豊前〕 天十三7才  
 芳三〔讃岐丸龜〕 天十四74才  
 方山〔豊後日田〕 天十四46ウ 弘一16才  
 弘二15才 弘三39ウ  
 芳姿〔周防〕 嘉一25才  
 峰舎〔加賀〕 弘三17ウ  
 峰種↓甘水  
 芳樹〔筑前福岡〕 天十二28ウ  
 天十四57ウ  
 豊収〔加賀大聖寺〕 天十三37ウ  
 弘二39ウ  
 冒人〔薩摩〕 天十二5才

鳳吹〔越後糸魚川〕 天十四34才  
 芳水〔周防〕 天十二19ウ 天十三17ウ  
 天十四15才 50ウ 弘一37才  
 弘二26才 弘三7ウ 嘉一25才  
 嘉三22才  
 宝水〔近江常浜常楽寺〕 天十四93ウ  
 弘一57才  
 方井〔筑前上座〕 天十二44才  
 天十三63ウ 天十四57ウ  
 弘三70ウ 嘉一36ウ 37ウ  
 嘉三13才  
 鳳井〔豊後〕 弘三39才  
 豊雪〔撰津浪花〕 天十四97才  
 邦泉〔陸奥二本松〕 天十二4ウ  
 天十三25才 天十四24才  
 弘一27才 弘二11ウ 弘三51才  
 芳村〔豊前小倉〕 天十三7才  
 天十四47ウ 弘一19ウ 弘三37ウ  
 弘四49ウ 嘉一32才  
 芳岱〔越後龜田〕 弘二23ウ  
 茂竹〔出雲〕 天十二17ウ  
 茂竹〔肥前大村〕 天十三60才 弘一10ウ  
 朋鳥 天十二8才  
 鳳尾〔筑前〕 弘三35才 弘四17才  
 鳳尾〔越後〕 嘉一17才  
 方芳〔陸奥笹川〕 弘二12才  
 蓬陽〔尾張〕 天十二51才 弘四45才  
 嘉一59ウ 嘉三27才  
 芳笠〔因幡〕 弘三32才  
 茂涼〔豊後〕 天十三40ウ

鳳朗〔武蔵江戸〕 天十二24ウ  
 天十三21才 天十四9才 12才  
 弘一54ウ 弘二7才  
 歩海〔石見〕 嘉一21ウ  
 甫岳〔尾張稲葉／高井〕 天十二51才  
 天十三33才 天十四90才 弘一31才  
 弘二33才 弘三48ウ  
 甫田〔肥前長崎〕 天十二26才  
 天十三61才 天十四68才 弘一11才  
 弘二28ウ 弘三41才  
 北尹〔陸奥松前〕 弘三55ウ 弘四9才  
 11ウ 嘉一13才  
 墨雨〔淡路須本〕 天十二29ウ  
 天十三14才 天十四8ウ 75才  
 北園〔加賀大聖寺〕 天十三38才  
 弘二39ウ 弘三17才  
 北賀〔武蔵江戸〕 弘二6ウ  
 卜蝸〔伊勢〕 天十三31才  
 墨河〔武蔵江戸〕 弘四31才  
 木鶯〔遊歴〕 嘉一62才  
 北魚〔陸奥松前〕 弘四14才  
 木居〔安芸〕 嘉一23ウ  
 墨居〔大和南都〕 天十四95才  
 木圭〔加賀大聖寺〕 天十三38才  
 弘二39ウ 弘三17ウ 嘉一19ウ  
 北古〔佐渡大崎〕 弘一42才 弘三27才  
 嘉一15才  
 北行〔陸奥〕 嘉三16ウ  
 木公〔上野〕 嘉一10才  
 木公女〔越後龜田〕 弘二23ウ

木谷〔大和〕 弘四27才  
 木斎〔木齊〕〔筑前博多〕 天十二53ウ  
 天十三50ウ 天十四60才 62ウ  
 64才 64ウ 弘一20ウ 弘二37才  
 弘三70ウ 嘉一36才 嘉三13ウ  
 弘三20ウ  
 北山〔加賀金沢〕 弘一7ウ 弘二39才  
 北鶺〔山城洛〕 天十三68才 天十四5ウ  
 17才 弘二64才  
 卜子〔肥前唐津〕 弘二60ウ  
 木二〔肥前大村〕 天十三7ウ  
 天十四66ウ 弘一10才 弘四46才  
 北水〔出雲猪ノ目〕 天十四88ウ  
 北水〔加賀〕 弘三17才  
 木聖〔越後〕 嘉三19才  
 木屑〔筑後〕 天十二15才 嘉一39才  
 木泉〔筑前博多〕 天十四64才  
 卜儼〔武蔵熊谷〕 天十四91才 弘一25ウ  
 陸扇〔肥後〕 嘉三9才  
 北窠〔撰津〕 嘉三28才  
 木碓〔丹波黒井〕 弘一34才  
 朴端〔讃岐高松〕 天十四74ウ  
 木兆〔豊後日田〕 弘二14ウ  
 木長〔讃岐丸龜〕 天十二39ウ  
 天十三18才 天十四73ウ 弘一39ウ  
 木長〔伊予松山〕 天十二39ウ  
 天十三53才  
 北椿〔陸奥〕 嘉三16ウ  
 卜亭〔伊勢少年〕 天十二7ウ  
 天十三62才

本亭〔豊前日田川〕 弘二69ウ  
 北洞〔北洞〕〔備前〕 弘三6才  
 弘四40才 嘉一22ウ 嘉三30ウ  
 木東〔山城洛〕 天十二56ウ  
 北年〔備前西大寺〕 天十二16才  
 天十四83ウ  
 北梅〔古溪〕〔播磨比延〕 天十二6ウ  
 天十三15ウ 天十四87才 弘一39才  
 弘二35ウ 弘三4ウ 弘四25ウ  
 嘉一20才 嘉三28ウ  
 卜梅〔摂津有馬〕 天十二45才  
 天十三52ウ  
 木父〔八十二翁〕〔豊前小倉〕 天十三7才  
 49ウ 天十四47ウ 48才 弘一19ウ  
 弘二69ウ 弘三37ウ 弘四50才  
 嘉一32ウ 嘉三15ウ  
 北眠〔陸奥松前社〕 弘二10才 51ウ  
 北雄〔摂津浪花〕 天十四97才  
 北洋〔越後見付〕 天十二36才  
 天十三30才 天十四36才  
 弘三2才 26才  
 北葉〔山城加賀人在京〕 嘉一67才  
 木容〔山城洛〕 天十四6才 18ウ  
 弘一3ウ 46ウ 弘二64ウ 嘉一66才  
 北龍〔陸奥松前社〕 弘二10才 51ウ  
 北柳〔能登〕 弘三21才  
 木朗 天十三3ウ  
 甫行〔老岐勝本〕 弘一22才  
 歩丈〔能登七尾〕 弘二40才  
 保人〔上野〕 嘉一9才

甫尺〔出雲大社〕 弘二26ウ  
 菩提〔山城〕 天十四5才 18才  
 帆中〔陸奥三春〕 天十四25ウ  
 保右〔丹後〕 弘三29才 弘四67ウ  
 圃柳〔肥前在筑前長崎〕 弘二29才  
 盆中〔摂津浪花〕 天十四97ウ  
 本道〔丹後宮津〕 天十三35才  
 天十四55ウ  
 畚麦〔伊勢〕 弘三11ウ 弘四41ウ  
 本有〔但馬〕 弘三31才  
 ま  
 埋山〔陸奥二本松〕 天十二4ウ  
 天十三24ウ 天十四23ウ 弘一27才  
 弘二11ウ 弘三51才 弘四24才  
 嘉一10ウ 嘉三17ウ  
 磨山〔長門船木〕 弘二70才 弘三8才  
 嘉一26ウ 嘉三3才 21ウ  
 満寿女〔備前岡山〕 天十四82才  
 弘一37ウ  
 万敷美〔越中高丘〕 弘一5ウ  
 万千雄〔越中高丘〕 弘一5ウ  
 末引〔近江〕 天十二48才  
 真都雄〔筑前赤間〕 天十四59才  
 末彦〔遠江〕 天十二40才  
 松替〔能登〕 天十二37才  
 松代女〔筑後〕 天十二9ウ 嘉一39才  
 蔓五〔筑後久留米〕 天十二15才  
 弘一21ウ

満之〔安芸広島〕 天十三11ウ  
 蔓之〔肥前〕 嘉一42才  
 み  
 未引〔近江〕 天十三57ウ  
 未学〔肥前〕 天十二27才  
 未学〔豊後日田〕 弘一16ウ  
 味齋〔安芸広島〕 天十四76ウ  
 未染〔筑前福岡〕 天十四57ウ  
 みた女〔越後亀田〕 弘二24才  
 三千畝〔加賀〕 弘三19ウ  
 三千丸〔陸奥箱館／松前〕 弘一28ウ  
 嘉三16才  
 三都雄〔上野〕 嘉一9才  
 三都里〔信濃松本〕 天十三30ウ  
 天十四37ウ  
 みどり〔美登り〕〔伊勢関〕 弘二32才  
 弘三12ウ  
 岑磨〔長門下関〕 天十三5ウ  
 天十四72ウ 弘一36ウ  
 美乃女〔但馬〕 弘三30ウ  
 眠鶴〔肥後〕 天十四45ウ 弘一14才  
 弘三44ウ 嘉一50ウ  
 む  
 夢屋〔丹後宮津〕 天十三34ウ  
 無外〔越中富山〕 天十四32才  
 無外〔佐渡〕 弘四68ウ

無吞〔近江瀬田〕 天十三57才  
 天十四5才 10ウ  
 夢兄〔伊勢〕 天十三31才  
 夢齊〔陸奥〕 嘉三17ウ  
 無心〔豊後〕 嘉一34ウ  
 夢笛〔伊勢〕 天十三62才  
 夢楽〔陸奥〕 弘四23ウ  
 め  
 明鶴〔山城洛〕 弘一2才 45才  
 明考〔日向飢肥〕 弘二15ウ 弘三45才  
 嘉一53才 嘉三6ウ  
 名山〔豊後日田〕 弘二14ウ 弘三39ウ  
 明之〔日向／古人〕 天十二16ウ  
 天十三61才  
 茗水〔山城洛〕 弘一48才  
 明良〔山城洛〕 天十二58才 天十四8才  
 18ウ 弘三4才 嘉一65ウ  
 も  
 黙我 天十二4才  
 黙居〔豊前小倉〕 天十三6ウ  
 天十四47ウ 弘一19ウ 弘三37ウ  
 弘四49ウ 嘉一32才  
 黙池〔山城洛〕 天十二3ウ 57ウ  
 天十四1ウ 16ウ 弘一43ウ  
 弘三3ウ 63才 弘四3才 54才  
 嘉一66才 嘉三35ウ

茂権〔讚岐〕 天十二39ウ  
間水〔武蔵犬塚〕 弘一24才

や

野屋〔因幡〕 天十二53ウ 天十四100ウ  
野艾〔能登〕 天十三23ウ 弘一6ウ  
嘉三2才 26才

野鶴〔野鳥〕〔但馬〕〔遊歴〕 弘三31ウ  
弘四40ウ 嘉一3ウ 62ウ 嘉三33才

野玉〔加賀〕 弘四52才

夜舒〔但馬金野〕 弘二16ウ 弘三30才  
弘四47ウ 嘉一29ウ 嘉三31才

野水〔筑前福岡〕 天十四57才

野翠〔伊勢〕 弘三12才

也然〔山城洛〕 嘉三36才

野巢〔下総〕 弘一26ウ

野竹〔埜竹〕〔筑前〕 天十二28ウ  
天十四57ウ 弘二60ウ 弘三35才

野鳥〔日向〕 弘三45ウ 弘四36才  
嘉一54才 嘉三7才

野鳥〔但馬〕↓野鶴

夜白〔伊勢〕 天十三65才

野半 弘三2ウ

夜有〔近江磯山〕 天十二47ウ  
天十三55ウ 天十四2ウ 93才

野雄〔伊予〕 弘三13才

野雄〔伊予〕 弘三10才

野卵〔丹波牛河内〕 天十四55才

弘三28才

也六〔大隅加治木〕 天十三4ウ  
天十四39ウ 弘一18才 弘二48才

弘三46才 弘四18ウ 嘉一50ウ  
嘉三6才

ゆ

ゆい女〔由以女〕〔陸奥箱館〕〔松前〕  
弘一28才 嘉一14才

唯水〔周防〕 嘉一26才

幽阿〔長門〕 嘉三21ウ

由測〔遊歴〕 嘉一62才

勇俄〔豊後日田〕 弘二43ウ

幽雅〔出羽〕 弘四32才

有儀〔陸奥〕 弘四24才

有橘〔尾張名古屋〕 弘二32ウ

熊月〔上野〕 弘一26ウ 弘二8才  
弘三57才 弘四69ウ 嘉一8ウ  
嘉三25才

友耕〔越後十二天〕 天十四33ウ

有交〔越中〕 弘三24才

右谷〔出雲松江〕 弘一36才

幽谷〔筑後〕 嘉一40才

友斎〔山城城南普賢寺〕 天十四51ウ  
弘一42ウ

遊之〔近江〕 天十四7才 10才

友之〔陸奥一ノ関〕 天十四24ウ

友之〔肥後隈本〕 弘一13ウ 弘四6才

勇之〔下総〕 天十三24才

遊車〔陸奥箱館〕 天十四27ウ

友樵〔阿波徳島〕 天十四51才

遊松〔筑後本郷〕 天十四49才 弘一21ウ  
弘二37ウ 弘四35才 嘉三11ウ

右城〔肥後二ノ丸〕 弘一15才

有丈〔筑後〕 弘四35才

由誓〔武蔵江戸〕 天十二24ウ  
天十三22ウ 弘二4ウ 弘三50才  
嘉一6才

友石〔山城〕 弘三63ウ

有節〔山城洛〕 天十二55ウ 天十三4才  
66ウ 天十四2ウ 16ウ 弘一44才

弘二3ウ 63ウ 弘三3才 62ウ

弘四3才 54才 嘉一3ウ 66才

嘉三1才 35ウ

友雪〔越中〕 弘三23ウ

有曹〔越中〕 弘三22ウ

有中〔因幡〕 弘三32ウ

有椎〔五椎〕〔讚岐〕 弘三8ウ  
嘉一60ウ

右稲〔肥前島原〕 天十二27才 弘一12才  
弘四36ウ 嘉一43才 嘉三10才

友徳〔越後森下〕 天十三28ウ  
天十四33ウ 弘一8才 弘二23才  
弘三26ウ 弘四33ウ 嘉一17ウ

雄巴〔加賀〕 弘三20才

右白〔近江〕 嘉一59才

有夫〔筑後〕 嘉一39才 嘉三11ウ

悠平〔加賀金沢〕 天十四89ウ 弘一7ウ  
弘二38ウ 弘四51才

友甫〔常陸〕 嘉三24ウ

有方〔越中〕 嘉一18才

遊夢〔丹波成松〕 天十三34ウ  
天十四54ウ 弘一33ウ 弘二18ウ

悠々〔肥前大村〕 天十二28才  
天十三8才 天十四66ウ 69ウ  
弘一10才 弘二28才 弘四46才  
嘉一42ウ

由陽〔長門アツ〕 天十三5ウ

有柳 弘三3ウ

有隣〔伯耆浣江〕 天十三37才  
天十四100ウ

有隣〔肥前唐津〕 弘二60ウ 嘉三10ウ

雄嶺〔武蔵江戸〕 天十三22ウ 弘二6ウ

湧瀧〔丹波保津〕 天十四55才

由岐雄〔遊歴〕 嘉一62ウ

雪麿〔陸奥津軽〕 天十四26才

よ

養瓜〔伊賀上野〕 弘一42才 弘二32ウ  
弘三11ウ 弘四48ウ 嘉一57ウ

羊我〔山城洛〕 天十四8才 99才

鷹拳〔摂津浪花〕 天十四96ウ

鷹山〔近江勢多〕 弘一33才 弘二31ウ

容紫〔肥前〕 嘉一41ウ

容尔〔摂津須磨〕 天十四95ウ

容肅〔摂津須磨〕 天十二45才

要女〔山城洛〕 弘四3才 55ウ  
嘉一2才 5ウ

陽照〔丹波成松〕 天十二54ウ  
天十三34才

楊里〔安芸広島〕 天十四77才

輿角〔山城洛〕 弘四56ウ

よしを〔よし雄〕〔肥前神代〕

天十二26ウ 弘一12才

余滴〔但馬〕 弘四40ウ

米友〔近江〕 天十四5才 10才

代々丸〔肥前〕 嘉一41ウ 嘉三11才

余力〔武蔵江戸〕 天十四20才

弘二7才

ら

雷耕〔肥前〕 弘三61才

菴山〔山城洛〕 嘉一66才

萊洲〔越中放生津〕 弘一4ウ

来章 弘二3才

来青〔山城洛〕 天十二1ウ 58ウ  
天十三1才 66才 天十四1才

9ウ 弘一1才 43ウ 弘二1才

62才 弘三1才 62ウ 弘四1才

53ウ 嘉一1才 3才 64才

嘉三1才 33ウ

来青〔播磨〕 天十二6才 天十三14ウ

萊尺〔備後尾道〕 天十四78才

来潮〔越後〕 天十三28ウ

来々〔近江大津〕 弘一32ウ

羅暁〔筑前〕 弘三70才

楽和〔越中魚津〕 天十三28才

楽季 ↓ 楽季

楽之〔肥後二ノ丸〕 弘一15才 弘二13才

弘三42ウ 67ウ 弘四21ウ

嘉一44ウ

楽道〔出雲〕 天十三36才

楽遊〔丹波亀山〕 天十三33ウ

楽季〔楽季〕〔但馬大藪〕 天十四8才

56才

蘿月〔長門萩〕 天十四15才 73才

弘一36ウ 弘二36才

蘿月〔陸奥一ノ関〕 天十四25才

蘿石〔備前岡山〕 天十二16才

天十四83ウ

蘭一〔出雲〕 天十二53才

嵐和〔豊前小倉〕 天十四47ウ

蘭雅〔肥前〕 天十二27ウ

蘭峨〔近江彦根〕 弘一31ウ 弘三15才

嵐外 ↓ 画竹

卯角〔筑後久留米〕 天十二14ウ

卯角〔伊予西条〕 天十四73才 弘一39ウ

藍岳〔淡路〕 嘉一29才

嵐牛〔遠江日坂塩井〕 天十三32才

天十四38才

嵐居〔能登鶴飼〕 弘一6才

蘭兮〔近江北ノ庄〕 天十三58才

天十四94才

蘭溪〔筑前〕 弘三34ウ 弘四17才

蘭谷〔肥後二ノ丸〕 弘二13才

嵐斎〔下野足利〕 弘一26才

蘭作〔豊後日田〕 弘二43ウ

蘭山〔信濃〕 天十三30ウ

嵐止〔播磨龍野〕 天十四86才

樂二〔出雲〕 天十二53才

蘭室〔肥後〕 嘉一50才

蘭秀〔撰津浪花〕 天十二45ウ

天十四96才

蘭渚〔但馬〕 弘四40才

嵐鐘〔下総〕 天十二26才

嵐松〔筑前赤間〕 天十四59才

蘭丈〔近江大森〕 天十三65才 弘一57才

藍水〔信濃〕 天十三30ウ

嵐翠〔大隅加治木〕 天十三5才

弘一17ウ 弘二48才 弘三46ウ

弘四18才 嘉一50ウ 嘉三6才

嵐翠〔伊勢〕 弘三12才

蘭翠〔日向〕 天十三60ウ

藍生〔肥後〕 嘉三7ウ

嵐夕〔土佐高知〕 天十二38ウ

天十三39才 弘二42才

鸞石〔阿波徳島〕 天十四51ウ 弘三8ウ

蘭雪〔肥前〕 嘉一44才

嵐台〔陸奥松前〕 弘二10才 51ウ

弘四9才 嘉一13ウ

嵐朝〔若狭〕 天十三27ウ 天十四89才

弘二19才 弘三15ウ

蘭朝〔撰津有馬〕 天十三59ウ

蘭庭〔山城伊勢人〕 弘四66才

蘭堂〔筑後〕 天十二9ウ

蘭夫〔近江〕 弘三15才

蘭圃〔加賀金沢〕 弘二59才

蘭明〔豊前〕 天十三6才 弘二69ウ

弘三37才 弘四49才 嘉一31才

嵐雄〔陸奥〕 天十三25才

蘭凌〔安芸広島〕 天十四76才

り

里英〔肥前長崎〕 弘二28ウ

李影〔伯耆〕 天十二17才 天十三36ウ

里恵女〔備前岡山〕 天十三40ウ

天十四7ウ 82才 弘一37ウ

弘二25ウ 弘三6ウ 弘四39ウ

里江女〔大和下市〕 弘二46ウ

梨園〔土佐〕 天十二38ウ

里奥〔越後菅田〕 天十四33ウ

李螻〔武蔵〕 天十三21才

里鶴〔陸奥松前〕 嘉一13ウ

里鏡〔山城洛〕 天十二55ウ

李暁〔撰津浪花〕 天十四96ウ

鯉玉〔山城〕 天十四18才

里玉〔山城〕 弘四66才

六外〔伊予松山〕 天十四73ウ 弘一57ウ

六厓〔出雲大社〕 天十四88才 弘二27才

六樹〔越後〕 弘四34才

六水〔石見〕 嘉三22ウ

陸鷹〔越前〕 天十二19才

六葉〔越中〕 弘三23才

李溪〔讃岐〕 弘四21才

里鶏〔阿波〕 弘三8ウ

籬月〔肥前長崎〕 弘二28ウ  
 李岡〔豊後日田〕 弘二14ウ 弘三39ウ  
 鯉口〔能登〕 弘三22才  
 李曠〔李曠〕〔尾張一色〕 弘一31才  
 弘三48才

里馨〔山城洛〕 嘉三34ウ  
 里耕〔伊予〕 弘三9ウ 嘉一27才  
 李郷〔越中伏木〕 天十三65ウ  
 天十四32才 弘二20才 弘三24才  
 里作〔越後〕 弘四34ウ 嘉一17ウ  
 嘉三18ウ

里山〔周防〕 天十三17ウ  
 里山〔陸奥松前〕 嘉一13才  
 李山〔近江〕 天十二48ウ  
 籬春〔肥前〕 天十三9才  
 利涉〔日向〕 天十四14ウ  
 里松〔筑前〕 弘四39才  
 里樵〔肥前〕 天十三13才

李睡〔筑前博多〕 弘一20才  
 李睡〔能登〕 弘三21ウ  
 里水〔大和鷲家口〕 弘二45ウ  
 里翠 嘉一4才  
 李井〔武蔵江袋〕 弘一24ウ  
 籬夕〔伊勢〕 天十二7ウ 天十三61ウ  
 里夕〔伊予〕 弘四20才

里扇〔山城洛〕 天十二54ウ  
 史川〔越後川口〕 弘二22才 弘三26才  
 李村〔肥前〕 天十三13才  
 裡竹〔加賀〕 天十三37ウ  
 李潮〔越後高田〕 天十四36才 弘二22ウ

李朝〔肥前平戸〕 弘二27ウ 弘三42才  
 李朝〔陸奥松前〕 弘四13ウ 14ウ  
 籬鷲〔肥前平戸〕 弘二28才  
 里鳥〔日向〕 嘉一54才  
 里朝〔長門〕 嘉三21才

立介〔加賀〕 天十二34ウ  
 立器〔遊歴〕 嘉一61ウ  
 葎戸〔出雲松江〕 弘一36才  
 栗谷〔遠江友永〕 天十三32ウ  
 天十四38才

立志〔上野水沼〕 弘一26ウ 弘二8ウ  
 弘三57才 弘四69ウ 嘉一8ウ  
 嘉三24ウ  
 立処〔能登〕 嘉一60才  
 栗人〔信濃松本〕 天十三30ウ  
 天十四37才 弘一29ウ

立石〔備前〕 弘三6才 弘四39ウ  
 立朝〔下総〕 天十三24才  
 立芳〔加賀〕 弘三19ウ 弘四51ウ  
 栗雄〔近江〕 弘四42才  
 利涛〔日向赤江〕 天十四40才  
 鯉桃〔能登〕 弘三22才

李桃〔陸奥〕 弘三54ウ  
 里桃〔大和上市〕 弘二46才 弘三59才  
 蚬臺〔肥後天草〕 嘉一47ウ 嘉三10才  
 里童〔近江〕 天十四11才  
 李道〔近江草津〕 天十二47ウ  
 天十三56ウ 69ウ

李堂〔伊勢〕 弘三12才  
 李年〔越後〕 弘三25才 弘四34才

里楓〔長門伊佐〕 天十四72才  
 里風〔越中放生津〕 天十四32ウ  
 弘一4ウ 弘二20ウ 弘三24ウ  
 弘四29才 29ウ 嘉一18才  
 嘉三25ウ

里北〔越中放生津〕 天十四33才  
 弘一4ウ 弘二20才 弘三24ウ  
 弘四29才 嘉一18ウ  
 李卜〔近江平木〕 天十三65才  
 里門〔能登〕 天十二38才

里遊〔山城洛〕 天十二59才 天十三68ウ  
 李邑〔肥前長崎〕 天十四68才  
 鯉友〔伊予〕 嘉三20才  
 柳蛙↓左逸

柳雨〔上野〕 弘四69ウ  
 柳霞〔肥後二ノ丸〕 弘一15ウ 弘二12ウ  
 弘三42ウ 66ウ 弘四21ウ  
 嘉一44ウ 嘉三9才  
 柳下〔上野〕 弘四69才 嘉一8ウ  
 嘉三25才

柳加〔上野〕 嘉一9才  
 柳芽〔美作〕 弘四67才  
 柳外〔備中連島〕 弘二24ウ 弘三7才  
 柳涯〔山城洛〕 天十四5才 17才  
 嘉一4才 66才  
 柳居〔大隅〕 嘉一52才  
 流憩 天十四5ウ

柳溪〔加賀〕 弘三18ウ  
 柳溪〔陸奥〕 嘉一10ウ  
 龍月〔山城城南〕 天十四98才

柳壺〔加賀金沢〕 天十二35才  
 天十三37才 天十四89ウ  
 弘一7才 弘二38ウ  
 留江〔近江高島〕 天十三64ウ  
 柳江〔阿波〕 嘉三33才

柳鶻〔山城洛〕 弘一3ウ 弘二2才  
 62ウ 弘三2ウ 66才 弘四2才  
 55ウ 嘉三2ウ  
 柳左〔肥前〕 弘四46ウ  
 柳簀〔武蔵江戸〕 弘二59ウ

流芝〔武蔵江戸〕 天十三23才  
 天十四19ウ 弘一23才 弘二5才  
 弘三49ウ 弘四31ウ  
 柳絲〔山城洛〕 天十二54ウ  
 柳志〔筑前福岡〕 天十四56ウ  
 柳士〔肥後二ノ丸〕 弘一14ウ 弘二13ウ  
 弘三43ウ 67ウ 弘四23才

嘉一46才 嘉三9ウ  
 龍子〔越中高丘〕 弘二21才  
 柳止〔豊前〕 弘三37才 弘四49才  
 嘉一31ウ  
 柳似〔筑前博多〕 天十四59ウ 63ウ  
 柳二〔武蔵江袋〕 弘一24ウ

柳守〔摂津〕 嘉一57ウ  
 留春〔大隅加治木〕 弘二48ウ  
 柳所〔豊後日田〕 天十四46才  
 柳水〔山城洛〕 天十四4才 99才  
 柳青〔近江〕 天十三56才  
 柳青〔大和鷲家口〕 弘二45ウ

流川〔近江矢橋〕 天十二52ウ

天十三58ウ 天十四94ウ

柳爽〔大隅〕 嘉一51ウ 嘉三5才

龍巢〔能登〕 弘三21ウ

龍叟〔肥後天草〕 嘉一47ウ 嘉三9ウ

龍窠〔伯耆〕 弘三33才

柳雫〔備前岡山〕 天十四83才

柳台〔肥前〕 弘四47才

笠亭〔遠江〕 天十三32才

柳坡〔周防〕 嘉一24才

柳帆〔筑前〕 天十三47才 47ウ 50ウ

柳斐〔近江堅田〕 天十三57ウ

天十四11才

龍尾〔出雲松江〕 天十四88才

柳風〔志岐平戸藩〕 弘一21ウ

柳圃〔摂津有馬〕 天十三52ウ

柳圃〔筑前〕 弘三35ウ 嘉三14才

流芳〔伊勢四日市〕 天十二9才

天十三31ウ 天十四13ウ

弘二32才

柳里〔但馬芝村〕 弘二16ウ

漁翁〔伊予松山〕 弘一57ウ 弘二41才

弘三9才

涼花〔武蔵〕 弘三1ウ 50ウ

良和〔出羽〕 弘四32ウ

蓼牙〔越中〕 嘉三25ウ

菱橋〔加賀〕 弘四52才

涼呼〔備前西大寺〕 天十二16才

天十三40才 天十四7ウ 83ウ

84才 弘一38才

漁交〔近江小島在金沢〕 天十二47才

天十三37ウ

亮曠〔出雲母里〕 天十二17才

天十三36才 天十四8才 87ウ

両江〔遊歴〕 嘉一61ウ

鎌江〔加賀〕 弘三20才

了枝〔東溟〕〔武蔵江戸〕 天十四20才

涼松〔肥前〕 嘉一44才

良賞〔常陸〕 嘉三24才

凉水〔淡路須本〕 天十二29ウ

天十四75才

了推〔豊前〕 天十三7才

涼川〔武蔵江戸〕 天十四20ウ

漁藻〔山城洛〕 嘉一64才

凌岱〔阿波〕 天十二39ウ

涼台〔能登〕 弘三59ウ

涼波〔肥後隈本〕 弘一13才

両美〔陸奥二本松〕 天十四44才

涼笠〔讃岐上野〕 弘二42才

里与女〔陸奥南部山〕 天十四28ウ

弘三52ウ

慮白〔豊糸〕〔筑前飯塚〕 天十四58ウ

李隣〔阿波〕 弘三8才 嘉一28才

隣蛙〔近江〕 弘四68才 嘉一59才

鱗化〔能登飯田〕 天十四29才

麟兮〔能登〕 弘三21才

麟芝〔武蔵江戸〕 天十四20ウ

林曹〔摂津浪花〕 天十二52才

天十三52才 天十四5才 11ウ

97ウ 弘一41才 弘二34ウ

弘三58ウ 嘉三28才

林藤〔能登七尾〕 天十二38ウ

天十三64才 天十四12ウ 29ウ

弘一7才 弘二40ウ 弘三22才

林坡〔加賀〕 弘三19ウ 弘四51ウ

林圃〔武蔵大塚〕 弘一24才

隣々〔陸奥郡山〕 天十三25ウ

天十四26才

る

藁上〔信濃〕 弘一29ウ

れ

黎快〔備前〕 弘二25才

令我〔越後〕 弘三25才 弘四34才

礼久〔武蔵〕 嘉一7才

砺山〔近江大津〕 天十二50ウ

天十三4才 57才 69ウ

天十四5才 9ウ 弘一32ウ

弘二1ウ 31ウ 弘三1才 14ウ

弘四42ウ 嘉一58才 嘉三3ウ

礼二〔安芸広島〕 天十三12才

天十四77才

麗水〔山城〕 嘉三33ウ

嶺雷〔摂津〕 天十三59ウ

樸齋〔豊前吉野〕 弘二70才 嘉一34才

礫川〔肥後隈本〕 天十三10ウ

天十四45才 弘一12ウ

漣山〔駿河沼津〕 弘二59ウ

連童〔越後糸魚川〕 天十四34才

簾甫〔廉甫〕〔豊後平川〕 天十四46才

弘二42ウ 弘三38才

連流〔武蔵江戸〕 弘一23才

ろ

芦引〔摂津伊丹〕 弘二35才 弘三58ウ

老山〔土佐〕 弘四65ウ

瀧山〔肥後〕 嘉三8ウ

老雀〔淡路〕 天十三60才

瀧水〔山城野村〕 天十二49才

老波〔時少庵〕〔山城綴喜普賢寺〕

天十二49ウ 天十三54ウ

天十四6才 15ウ 弘一42ウ

弘二61ウ 弘三62才 弘四序1ウ

45ウ 嘉一67才 嘉三33ウ

朗風〔山城洛〕 弘一3才 45才

弘二4才

老圃〔安芸竹原〕 天十四77ウ

露英〔陸奥郡山〕 弘二11才

芦園〔肥前〕 天十三12ウ

露園〔肥後天草〕 嘉一46ウ

芦角〔淡路須本〕 天十四75才

芦鶴〔肥後〕 弘三43才

芦岳〔近江〕 天十三58ウ 天十四10ウ

弘三14ウ

鷺橘〔出雲〕 天十二17ウ

路及〔日向赤江川〕 天十二16ウ

天十三61才 弘二16才 弘三44ウ

芦曉〔大和上市〕 弘二46才  
 路董〔信濃〕 嘉一19ウ  
 鹿月〔山城洛〕 天十二2才 57ウ  
 天十三3才  
 勒泥〔能登飯田〕 弘一6ウ 弘二40ウ  
 鹿木〔筑後〕 弘四35才 嘉一38ウ  
 呂月〔肥前〕 天十三9ウ  
 芦江〔周防〕 天十三17ウ  
 芦岬〔伊予桜井〕 天十四73才 弘二1ウ  
 芦光〔山城洛〕 弘三64才 弘四56才  
 嘉一65才  
 露光〔周防〕 弘三3才 嘉三22才  
 路江↓春湖  
 露郷〔武蔵江戸〕 天十四20才  
 芦国〔播磨小坂〕 天十四85才 弘一39才  
 弘二36才 弘三4ウ 弘四25ウ  
 芦山〔越中放生津〕 天十四32ウ  
 芦山〔豊後芝崎〕 弘一17ウ  
 芦山〔肥前唐津〕 弘二60ウ  
 芦山〔越中高丘〕 弘一5ウ  
 芦洲〔備中連島〕 天十四79才 弘二24ウ  
 嘉一23才  
 芦舟〔豊後平川〕 天十四46才 弘一17才  
 弘三38ウ 弘四43ウ  
 芦舟〔肥後隈本〕 弘一13才  
 鷺秋〔伊賀上野〕 天十四15ウ 弘一42才  
 弘二32ウ  
 鷺洲〔近江信楽〕 天十二40才  
 天十三1才 58ウ 天十四6ウ  
 10ウ 弘一序1ウ 31ウ 弘二29ウ

67ウ 弘三13才 弘四51才  
 鷺洲〔豊前香春〕 天十三7才  
 天十四47才  
 鷺洲〔肥後〕 弘四5ウ  
 魯洲〔但馬西温泉〕 天十四56才  
 露萩〔備後尾道〕 天十四78才  
 芦十〔淡路〕 天十三13ウ 嘉一29才  
 芦春〔肥後〕 弘四5ウ 嘉三7ウ  
 露樵〔肥後〕 弘四22ウ  
 鷺水〔出雲〕 天十二17ウ  
 炬睡〔筑前博多〕 天十二53ウ  
 天十三47才 47ウ 50ウ  
 天十四59ウ 63ウ 弘三35才  
 芦翠〔筑前福岡〕 天十四57才  
 露翠〔大和上市〕 弘二46ウ  
 芦吹〔周防〕 嘉一25ウ  
 芦随〔薩摩〕 嘉三4ウ  
 露生〔肥後二ノ丸〕 弘一14ウ 弘三43才  
 67ウ 弘四22ウ 嘉一45ウ  
 露跡〔越後〕 嘉一17才  
 路夕〔山城洛〕 弘二44才  
 露雪〔肥前島原〕 天十四68才  
 鷺雪〔備前岡山〕 天十四82才  
 略雪〔菟嶺〕〔但馬香住〕 弘二17才  
 弘三31才 弘四48ウ 嘉一30才  
 呂川〔淡路〕 天十三14才  
 芦川〔近江〕 弘三15才 弘四68才  
 芦船〔加賀〕 弘三18ウ  
 露川〔越後〕 弘四34ウ  
 露仙〔越後〕 嘉三19才

芦窓〔肥前〕 天十三9才  
 呂叟〔武蔵江戸〕 天十三22才 弘一23ウ  
 芦村〔筑後〕 弘四35才 嘉一39ウ  
 露台〔備前八浜〕 弘二25才  
 露大〔山城〕 弘三3才 63ウ  
 露竹〔淡路〕 天十三39ウ 天十四4ウ  
 路兆〔武蔵〕 天十二26才  
 露頂〔安芸広島〕 天十四76ウ  
 芦通〔近江〕 弘三14才 弘四68才  
 芦笛〔肥前長崎〕 弘二28ウ  
 芦笛〔豊後〕 嘉一33ウ 嘉三14才  
 魯童〔筑前飯塚〕 天十四58ウ  
 驢童〔肥前長崎〕 天十二26才 弘一11ウ  
 弘二29才 56ウ 弘四37才  
 嘉一43才  
 鷺白〔出雲坂田〕 天十二17ウ 弘一36ウ  
 路白〔日向〕 天十二16ウ  
 路白〔薩摩〕 ↓省三  
 盧白〔筑前〕 弘三35ウ  
 芦風〔備前西大寺〕 天十二16才  
 天十四83ウ 弘一38才 弘二25ウ  
 芦甫〔加賀〕 弘三19才  
 呂鳳〔能登千路〕 天十四29才 弘一6ウ  
 呂邦〔加賀〕 弘三18才  
 鷺眠〔越後大迎／遊歴〕 弘一8ウ  
 弘二23才 嘉一62才

付表一 各年本の編成 (本冊の底本による)

番	年次	標題	序文	巻頭連句			参列者	奉納発句・連句			跋文	刊行書肆	備考
				発句	脇句	延句数		丁数	※発句	連句			
39	嘉永三年	嘉永三庚戌三月十二日 花供養俳諧	肥後 雪茶 近江 凹峰	醉茶	九起	44 一順	區別せず	41	462	6	なし	菊屋平兵衛	
38	嘉永元・二年	嘉永元年戊申三月十二日 花供養俳諧 嘉永二年己酉三月十二日 花供養俳諧	平安 丘花園	聴洋 千千	九起 九起	元年22 二年50 下略	區別せず	69	827	7	なし	近江屋利助	
37	弘化四年	弘化四歳丁未三月十二日 花供養俳諧	城南 時少庵老波	子邁	九起	50 一順下略	區別せず	68	654	13	なし	菊屋平兵衛	
36	弘化三年	弘化三歳丙午三月十二日 花供養俳諧	丙午春 加州我柳	竹月	九起	50 一順下略	區別せず	72	895	4	なし	近江屋利助	
35	弘化二年	弘化二年乙巳三月十二日 花供養会	伯耆 田中乙美	和鳴	九起	50 五十韻下略	區別せず	74	780	11	なし	菊屋平兵衛	
34	弘化元年	天保一五年甲辰三月十二日 花供養会	保辰晩春 湖南信楽 鷺洲 越那古 松清堂子邁	鳳兮	九起	50 五十韻下略	區別せず	60	657	6	なし	近江屋利助	
33	天保十四年	芭蕉翁百五十回忌法筵 於洛東円山安養寺端之寮 天保癸卯春三月十二日 正式俳諧	能登正院 春藤鳳兮 備岡山 半化堂孤山 吉備笠岡 塚本淡亭 播陽 水音室霞村 防州室積 婦岫庵閑雲 大村藩 金谷福田賢	翁 翁	九起 九起	50 150	「席上手向」	108	1144	22	吉備笠岡 片家史也	菊屋平兵衛	金谷序文は 立教本のみ
32	天保十三年	なし	天保壬寅春 西湖 山川楚蕉	鷺洲	九起	50 一順	區別せず	73	845	13	なし	近江屋利助	
31	天保十二年	なし	山陰 九華	赤鱗	九起	50 一順	區別せず	61	601	11	なし	無記載	

※連句の発句を除く・延数

付表二 各年・国別奉納者数 [本冊の底本による]

計	嘉永3	嘉永1・2	弘化4	弘化3	弘化2	弘化1	天保14	天保13	天保12	地域	
434	31	42	59	76	60	32	82	44	8	陸奥・松前・箱館	
47	1	7	18	4	4	6	2	5		出羽	
7						2	3	1	1	下野	
75	14	20	10	11	11	6	2	1		上野	
6	5	1								常陸	
2			2							安房	
11				1		2		7	1	下総	
349	13	41	15	25	54	51	71	52	27	武蔵・江戸	江戸蕉門
7	1				1		4		1	相模	
1								1		甲斐	
6					2		2	2		駿河	
24			2				8	12	2	遠江	
15				4	3	2	4	1	1	三河	
60	2	3	3	10	10	9	9	7	7	尾張	
25		2	1	1	2	6	5	6	2	信濃	
1		1								飛騨	
5		1					2		2	美濃	
257	19	35	27	29	41	18	41	33	14	越後	
161	5	9	14	38	29	20	26	19	1	越中	
133	5	7	4	29	10	19	17	15	27	能登	
46	5	12	4	13		6	3	3		佐渡	
173	3	9	28	55	26	12	8	18	14	加賀	
62	3	1		7	8	16	9	10	8	越前	
54	5	3	1	16	8		8	7	6	若狭	
144	3	5	6	18	11	7	14	36	44	伊勢	
9		1	1	2	2	2	1			伊賀	松尾家墓
327	7	25	21	39	35	34	56	67	43	近江	義仲寺
670	44	65	72	70	51	94	103	76	95	山城・洛	芭蕉堂
70	1		20	8	37		4			大和	
22		3	2	1	2		5	5	4	河内	
203	7	15	7	19	24	11	46	33	41	摂津・浪花	花屋庵
1					1					和泉	
31			4	8	11	2		3	3	紀伊	
107	2	12	6	6	4	8	22	26	21	淡路	
179	14	16	17	13	12	12	47	21	27	播磨	
114	4	11	9	11	11	12	27	20	9	丹波	
35			2	11	3		5	14		丹後	
134	8	7	27	34	26	11	11	8	2	但馬	
31	1	2	3	21			2	1	1	因幡	
22		1		2	1	1	2	10	5	伯耆	
104	1	1	4	12	11	18	22	16	19	出雲	
27	5	9				5	3	3	2	石見	
19		1	10	4	2	1			1	美作	
86	4	7			15	5	41	7	7	備前	
93	1	8		8	9	8	38	7	14	備中	
9		2		1			6			備後	
57		10		2	3		30	11	1	安芸	
93	9	38	2	5	6	6	14	8	5	周防	
70	17	5	2	2	4	5	19	12	4	長門	
45	7	10	5	8		2	11	1	1	阿波・阿淡	
47		8	2	3	5	3	16	5	5	讃岐	
104	8	10	17	19	9	8	11	11	11	伊予	
20		1	1	3	3			6	6	土佐	
289	11	30	28	47	19	21	72	30	31	筑前	
110	22	23	10	2	8	8	9	10	18	筑後	
131	5	32	22	19	12	9	11	19	2	豊前	
257	15	33	12	58	44	27	24	25	19	豊後	
361	14	42	45	38	37	42	60	55	28	肥前	
365	48	79	79	35	39	50	14	20	1	肥後・天草	
143	7	32	14	24	13	8	20	17	8	日向	
45	14			5	10	3	11	2		薩摩	
149	23	28	14	16	16	15	10	15	12	大隅	
20				5	2	9	2	2		壱岐	
6704	414	766	652	898	767	654	1095	846	612	計	
	42	49	54	51	50	46	54	53	48	国数	

(注1) 行脚、雲水、遊客などの地域未詳の者は省く。  
(注2) 同年の複数句の入集は、重複して算入しない。  
(注3) 阿淡について、特定できないものは、阿波に配置した。  
(注4) 天保十二・十三年の薩摩加治木は、大隅に算入した。  
(注5) 旅中者等は配置先の所属に算入した。  
(注6) 松前の立項は弘化三年から、同じく箱館、天草、江戸、洛は弘化四年からである。また、浪速は天保十四年からである。

## 四訂『花供養』所蔵翻刻一覧

二〇二五年九月九日現在

### 凡例

一 略記号は次の通りである。

愛教大	愛知教育大学附属図書館
愛知県大	愛知県立大学附属図書館
時雨	秋田県立秋田図書館時雨庵文庫
石川歴博	石川県立歴史博物館大鋸コレクション
糸井	京都府舞鶴市郷土資料館糸井文庫
岩見	弘前市立弘前図書館岩見文庫
頼原	京都大学文学部図書館頼原文庫
燕々	岡山市立中央図書館燕々文庫
大内	佐賀大学附属図書館大内初夫文庫
大西	富山県立図書館大西紀夫文庫
河野美	今治市河野美術館
雲英	早稲田大学附属図書館雲英末雄文庫
月明	石川県立図書館月明文庫
櫻井	立命館大学アート・リサーチセンター櫻井武次郎文庫
下垣内	尾道大学附属図書館下垣内和人文庫
関口	長野県立長野図書館関口文庫
高岡図	高岡市立高岡図書館
竹冷	東京大学附属図書館竹冷文庫
中島杏	富山県立図書館中島杏文庫
白鹿	兵庫県西宮市笹部桜コレクション―白鹿記念酒造博物館寄託―
堀家	京都府城陽市歴史民俗資料館マイクロ
武蔵	武蔵野大学附属図書館旧前田利治蔵
森	大阪市立大学附属図書館森文庫

山崎	大阪公立大学中百舌鳥図書館(旧大阪府立女子大学) 山崎文庫
山田	大阪公立大学中百舌鳥図書館(旧大阪府立女子大学) 山田文庫
麗澤	麗澤大学附属図書館田中文庫
綿屋	天理大学附属天理図書館綿屋文庫

〔翻福〕 『福井県古俳書大観』七(全冊翻刻に限る)

〔翻Ⅰ〕 『花供養』翻刻集成Ⅰ

〔翻Ⅱ〕 『花供養』翻刻集成Ⅱ

〔翻Ⅲ〕 『花供養』翻刻集成Ⅲ

〔翻Ⅳ〕 『花供養』翻刻集成Ⅳ

一 所蔵は公共のものを優先する。

一 写本は原則として記さない。

### 参考文献

櫻井武次郎「花供養所蔵先リスト」(大阪俳文学研究会「会報」38号)

『国書総目録』

『古典籍総合目録』

国文学研究資料館古典籍データベース(国書データベース)

各図書館・文庫目録及びデータベース

- 年次 主催 所蔵先〔翻刻〕【備考】
- 1 天明 六 關吏 綿屋・糸井〔翻Ⅰ〕・白鹿・柿衛・国会・愛知県大  
〔翻福〕〔翻Ⅰ〕 【備考】丙午花供養(内題)
- 2 七 關吏 綿屋・愛知県大〔翻Ⅰ〕  
〔翻福〕・〔翻Ⅰ〕
- 3 寛政 元 關吏 綿屋・櫻井〔翻Ⅰ〕  
〔翻Ⅰ〕
- 4 二 關吏 月明(二部)・愛知県大〔翻Ⅰ〕・河野美・雲英・大西  
〔翻福〕・〔翻Ⅰ〕
- 5 三 關吏 綿屋・月明〔翻Ⅰ〕・芭蕉翁記念・松宇・堀家(袋付)・松本節子  
〔翻福〕・〔翻Ⅰ〕
- 6 四 關吏 月明〔翻Ⅰ〕・柿衛・奈良文庫・堀家・河野美(二冊)  
〔翻Ⅰ〕
- 7 五 關吏 綿屋・月明・白鹿〔翻Ⅰ〕・河野美・武蔵・雲英・下垣内・大西  
〔翻Ⅰ〕
- 8 六 關吏 綿屋・月明〔翻Ⅰ〕・武蔵・白鹿・蝸牛廬文庫・雲英・大西・  
堀家(袋付)・二松学舎大・竹内千代子・小林孔  
〔翻Ⅰ〕
- 9 七 關吏 綿屋・柿衛・白鹿〔翻Ⅰ〕・戸谷半之助(一茶全集)・燕々  
〔翻Ⅰ〕
- 10 八 關吏 綿屋・月明(二部)・柿衛・白鹿〔翻Ⅰ〕・武蔵・高岡因・  
愛媛県図・須賀川市図・奈良文庫・燕々・雲英・下垣内・某家  
〔翻Ⅰ〕
- 11 九 關吏 武蔵・雲英・小林孔〔翻Ⅰ〕  
〔翻Ⅰ〕 【備考】刊年無記載・あし丸序
- 12 十 關吏 月明(二部)〔翻Ⅰ〕・柿衛・燕々  
〔翻福〕・〔翻Ⅰ〕
- 13 十一 蒼虬 綿屋・白鹿〔翻Ⅱ〕・竹冷・国会・頰原・岩見(合本)・糸魚川  
市歴史・糸魚川歴史木村・大西  
〔翻福〕・〔翻Ⅱ〕
- 
- 14 享和 元 蒼虬 綿屋・柿衛・月明・武蔵・岩見(合本)・関口(二冊)・  
櫻井〔翻Ⅱ〕・小林孔(「まつり見」合綴)  
〔翻Ⅱ〕
- 15 二 蒼虬 柿衛・山崎・岩見(合本)〔翻Ⅱ〕・台湾大(ビブリア42)  
〔翻福〕・〔翻Ⅱ〕
- 16 三 蒼虬 綿屋・岩見(合本)〔翻Ⅱ〕・久留米図  
〔翻Ⅱ〕
- 17 文化 元 蒼虬 綿屋・奈良文庫・久留米図・雲英・高井悠子〔翻Ⅱ〕・大西  
〔翻福〕・〔翻Ⅱ〕
- 18 二 蒼虬 綿屋・月明〔翻Ⅱ〕・高岡因・久留米図  
〔翻Ⅱ〕
- 19 三 蒼虬 綿屋・糸井〔翻Ⅱ〕・岩見(合本)  
〔翻福〕・〔翻Ⅱ〕
- 20 四 蒼虬 月明・高岡因・奈良文庫・聖心女子大・大内・竹冷〔翻Ⅱ〕・大西  
〔翻Ⅱ〕
- 21 六 蒼虬 石川歴博〔翻Ⅱ〕・燕々・武蔵・吉田耕一(近世芸備俳諧年表)・  
蝸牛廬文庫・大西  
〔翻Ⅱ〕
- 22 九 蒼虬 綿屋・月明・糸井・白鹿・学習院大・岩見(合本)・石川歴博・  
竹内千代子〔翻Ⅱ〕  
〔翻Ⅱ〕 【備考】文化八年興行を合併
- 23 十三 蒼虬 月明・竹冷・白鹿〔翻Ⅱ〕・武蔵・愛知県大・岩見(合本)・  
学習院大・麗澤・石川歴博・大西  
〔翻Ⅱ〕 【備考】文化一一、一二年興行を合併
- 24 文政十一 蒼虬 白鹿〔翻Ⅲ〕・武蔵・時雨(二部)・玉川大・麗澤  
〔翻Ⅲ〕
- 25 天保 元 蒼虬 綿屋・月明(二部)・竹冷〔翻Ⅲ〕・白鹿・石川歴博・芭蕉翁記念・  
愛知芸大・愛知県大・大西  
〔翻Ⅲ〕
- 26 三 千崖 月明・糸井〔翻Ⅲ〕・武蔵・石川歴博・立教大・下垣内・雲英・山田・大西  
〔翻Ⅲ〕

- 27 天保 四 蒼虬 綿屋・月明・糸井(翻Ⅲ)・芭蕉翁記念・愛教大・徳島県図・燕々・下垣内・愛知芸大・九州大・麗澤・長崎県図・菅塚・白鹿(二部)・大西
- 28 五 蒼虬 月明・白鹿(二部)(翻Ⅲ)・芭蕉翁記念・山田・古宅家・神戸大・大西
- 29 十 朝陽 月明・白鹿(翻Ⅲ)・武蔵・某家(国文研マイクログ)
- 30 十一 朝陽 白鹿・立教大(袋付)(翻Ⅲ)・九州大・大内
- 31 十二 九起 立教大・山崎・櫻井(翻Ⅳ)・白鹿・愛教大・大西
- 32 十三 九起 綿屋・糸井(翻Ⅳ)・白鹿・八戸市図・八戸市図百仙洞・九州大・山田・蝸牛廬文庫・大西
- 33 十四 九起 綿屋・月明(袋付)・大阪府図・芭蕉翁記念・立教大(翻Ⅳ)・武蔵・山田・奈良文庫・燕々・中島杏・山本唯一・下垣内・正宗文庫・大西
- 34 弘化 元 九起 月明(翻Ⅳ)・武蔵・国会・下垣内・雲英・大西
- 35 二 九起 月明・白鹿・武蔵(二部)・高岡図・九州大・櫻井(翻Ⅳ)・燕々・大西
- 36 三 九起 月明・白鹿(三部)・燕々・国文研・愛知県大・九州大・大西
- 37 四 九起 芭蕉翁記念・愛知県大・京大谷村・須賀川市図矢部・大内・小林孔(翻Ⅳ)・大西
- 38 嘉永 二 九起 白鹿・立教大・九州大(翻Ⅳ)・村野(国書総目)・大西
- 39 三 九起 芭蕉翁記念・立教大・宮城県立小西文庫・奈良大(翻Ⅳ)
- 40 六 公成 月明・柿衛・芭蕉翁記念・岩見(合本)・三康・国会・立教大・青森県図工藤(二部)・燕々・須賀川市図矢部・森・下垣内・小林孔・大西
- 41 安政 元 公成 月明・石川歴博・立教大・下垣内・古宅家・櫻井・奈良大・三康・大西・竹内千代子(旧柿衛)
- 42 三 公成 白鹿・中島杏・山本唯一・櫻井(欠損有)・内山(国書総目)・三康・奈良大
- 43 四 公成 三康・内山(国書総目)・奈良大(袋付)
- 44 五 公成 月明・白鹿・芭蕉翁記念・下垣内・立教大・櫻井(欠損有)・内山(国書総目)・九州大・奈良大(袋付)・松本節子
- 45 六 公成 月明・柿衛・三康・雲英・奈良大(袋付)
- 46 万延 元 公成 綿屋・白鹿・静岡大原・櫻井(二部)・内山(国書総目)・竹内千代子(旧柿衛)
- 47 文久 元 公成 月明・白鹿・三康・※芭蕉堂・九州大・奈良大
- 48 二 公成 綿屋・芭蕉翁記念・白鹿・九州大・檜垣・櫻井・竹内千代子(旧柿衛)
- 49 三 公成 糸井・芭蕉翁記念・三康・燕々・櫻井(欠損有)
- 50 元 治 元 公成 芭蕉翁記念・三康・櫻井(欠損有)・大内・小林孔
- 51 慶応 元 公成 月明・芭蕉翁記念・須賀川市図矢部・早稲田大(俳海四〇)・櫻井・奈良大(袋付)
- 52 二 公成 綿屋・白鹿・石川歴博・芭蕉翁記念・岡山市図・龍大大宮・三康
- 53 三 公成 綿屋・月明・白鹿・芭蕉翁記念・三康・名古屋市中鶴舞中央図・東海女短大関山文庫・燕々・櫻井・東海学園名古屋哲誠
- 54 明治 三 良大 綿屋・白鹿・芭蕉翁記念・三康・櫻井・大内
- 【備考】 明治二年興行、同三年刊

付記

一 本稿は、京都俳諧研究会の成果の一部である。研究メンバーは、竹内千代子、松本節子、小林 孔、金子貴昭、赤間 亮（敬称略）。

一 科学研究費助成事業・基盤研究（C）「芭蕉顕彰俳諧の成立と展開の研究」（課題番号JP25K03879）の成果の一部である。

一 立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」 共同研究課題「花供養と近世後期京都俳諧の研究」（代表：竹内千代子）の一部である。なお、成果の一部はWEB公開中である。

<https://www.arc.ritsumeikai.jp/archive01/theater/html/hanakuyo/index.html>

表紙 芭蕉百五十回忌集『花供養』袋（天保十四年 月明文庫）  
裏表紙 芭蕉百五十回忌集『花供養』募句チラシ（糸井文庫）

『花供養』翻刻集成 IV

—— 九起の時代 天保十二年～嘉永三年 ——

発行日 令和七年十月十二日

編・著 立命館大学非講師  
竹内 千代子

印刷 株式会社 昭英社

〒600-8229

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八

電話 〇七五―三五一―八一一

芭蕉翁百五十四追善集全二冊

芭蕉句加入四寺混雜集冊呈 式金貳朱

奇仙加入 式圓貳百足

癸卯年二月迄之山出吟てふに當寅年

より彫刻いささかもあし知しむるに

洛東山双林寺 芭蕉集堂